宮城県文化財調査報告書第 83 集

東北自動車道遺跡調査報告書
VI

昭 和 57 年3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
日 本 道 路 公 団

序

本県は、豊かな自然環境に恵まれ、数多くの文化遺産が残されております。

これらの文化財は、私達の祖先が長い歴史の中で創造し育んできたものであり、これを愛護し活用するとともに、後世に伝えていくことが私達の重要な責務であると考えております。

近年、地域の開発事業が進展するのに伴い、埋蔵文化財の保護保存が重要視されてきています。

国土開発幹線自動車道建設法に基づき建設中の東北自動車道川口～青森線が、宮城県内で全線開業したのは昭和53年12月でありました。そのルートは仙台平野を南北に縦貫して全長131.9km、この自動車道建設の事業に関連した遺跡は52遺跡を数えました。

宮城県教育委員会では、日本道路公団仙台建設局の委託によって、昭和45年度から53年度まで9ヵ年間の発掘調査を実施するとともに、終了後は引続いて遺物の整理と報告書の刊行に努めてまいりました。

本報告書は、東北自動車道遺跡調査報告書の第6冊目として、菅ノ沢遺跡・原前南遺跡・勝負沢遺跡・御駒堂遺跡の4遺跡について、発掘調査の成果をとりまとめたものであります。

本書を刊行するに当たり、調査以来長い期間にわたって御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝の意を表するとともに、本書が広く社会教育や学術研究の場で役立つことを切に念願するものであります。

昭和57年3月

宮城県教育委員会

教育長　**北村　潮**

目　　次

１．菅ノ沢遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

２．原前南遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

３．勝負沢遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

４．御駒堂遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・307

例　　言

1．本書は東北自動車関係遺跡発掘調査報告書第6冊目として、４遺跡の調査成果をまとめたものである。

2．調査の主体者は、宮城県教育委員会・日本道路公団である。

3．発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、関係市町村教育委員会･調査協力員・学生補助員の方々と関係機関に協力をいただいた。

4．調査および整理に関して次の方々および機関の指導・助言・協力をいただいた。

芹沢長介氏(東北大学文学部教授)
阿子島香氏(東北大学文学部助手)
相原康二氏（岩手県教育庁文化課）
八木光則氏(盛岡市教育委員会社会教育課)
目黒吉明氏(福島県文化センター遺跡調査課)
河野喜映氏(神奈川県教育庁文化財保護課)
玉口時雄氏(東洋大学文学部)
小金井靖氏(　〃　)
滝沢亮氏(調布市教育委員会)
橋本澄朗氏(栃木県教育委員会文化課)
岩渕一夫氏（　〃　）
田熊清彦氏（　〃　）
井上唯雄氏(群馬県埋蔵文化財センター)
小川良祐氏(埼玉県立さきたま資料館)
金子真士氏(　〃　)
石岡憲雄氏　(埼玉県立歴史資料館)
梅沢太久夫氏（　〃　）
山口辰一氏　(府中市教育委員会)
小川貴司氏(八王子市郷土資料館)
明石　新氏(平塚市博物館)
後藤勝彦氏(宮城県石巻女子高等学校)
平川　南氏(東北歴史資料館)
進藤秋輝氏(宮城県多賀城跡調査研究所)
白鳥良一氏(　〃　)
木村浩二氏(仙台市教育委員会)
青沼一民氏（　〃　）
山田　稔氏
東北大学文学部考古学研究室
新宿区立中央図書館郷土資料室
学校法人　目黒学園
大和町吉岡中学校

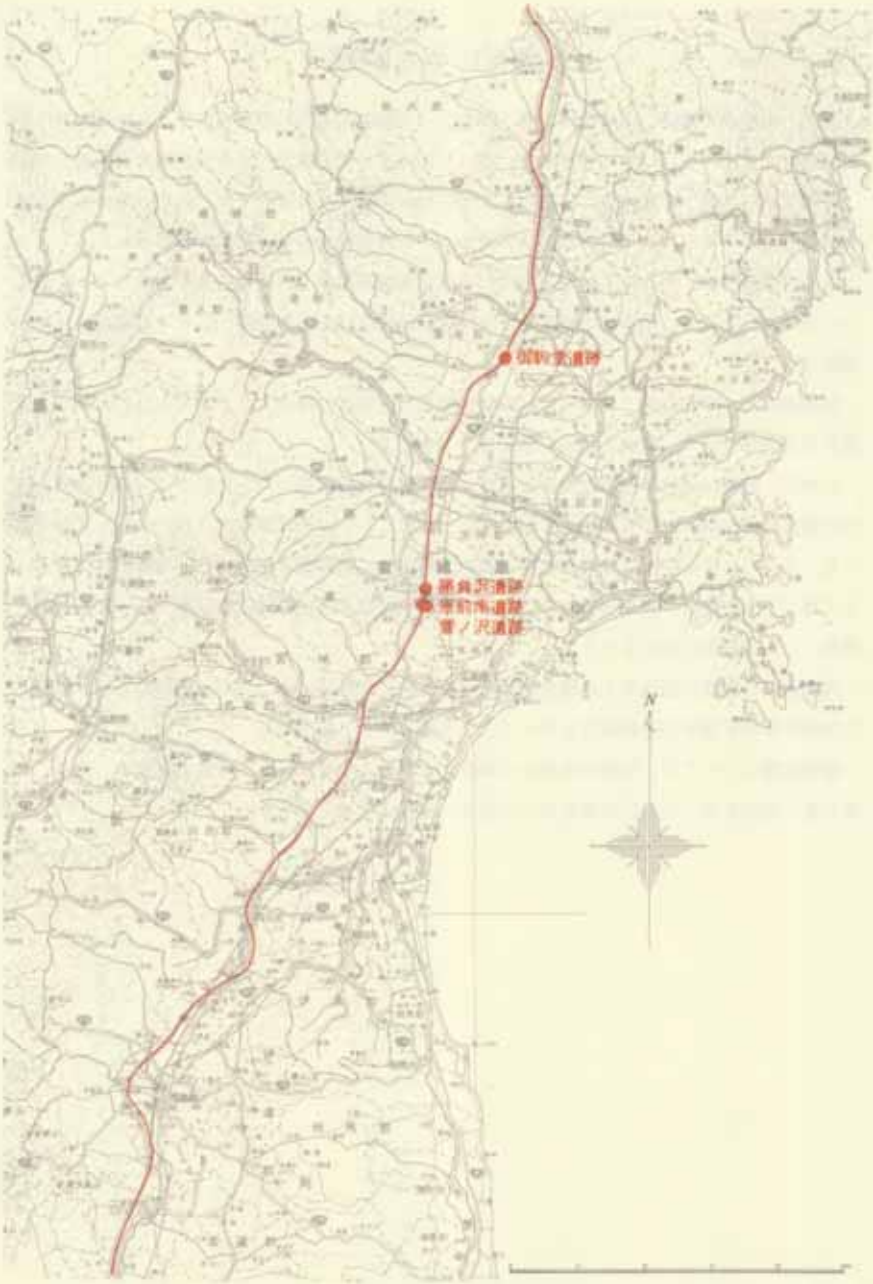
5．国土地理院発行の地形図を複製したものには、図中に図名と縮尺を記した。

6．整理・報告書の作成は、文化財保護課が担当し、各遺跡の整理・執筆は課員の検討を経て次のとおり分担して行なった。

(1) 原前南遺跡 (2) 菅ノ沢遺跡　千葉宗久
(3) 勝負沢遺跡　丹羽茂・阿部博志・小野寺祥一郎
(4) 御駒堂遺跡　小井川和夫・小川淳一

7．各遺跡の内容は、すでにその一部が現地説明会資料・調査略報等によって公表されているが、本書の内容がそれらに優先する。

8．上記遺跡の出土遺物および実測図・写真等の諸資料は、東北歴史資料館へ移管し保存・活用をはかることにしている。



東北自動車道関係遺跡位置図

調査に至る経過

東北自動車道の建設に係る遺跡に関しては、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」等にもとづき、宮城県教育委員会が調査にあたった。

自動車道の計画予定路線は、昭和42年５月に仙台市以南の発表があり、昭和44年６月から昭和45年11月までの間に、４回にわたって仙台市から岩手県境までの路線が発表された。

県教育委員会は、昭和42年に東北縦貫自動車道遺跡緊急調査対策委員会を発足させ、路線敷の分布調査を急いだ。その結果確認した遺跡は、仙台市以南で23遺跡、以北で28遺跡の合計51遺跡に達した。

発掘調査は、昭和45年２月から上記の対策委員会を中心に開始されたが、４月に入り県教育委員会が主体となり、最終の昭和53年度まで実施した。

この間、昭和49年度の古川市愛宕山遺跡（宮沢遺跡）の調査中に、公団から同遺跡周辺丘陵の土取計画が協議されて翌50年度に発掘調査したところ、古代城柵官衙遺跡であることが判明した。そのため文化庁・日本道路公団との協議を重ねて遺跡保存を検討し、路線敷は精査のうえ、施工方法や設計の変更等を行なった。この土取計画部分一帯は昭和51年７月13日、「宮沢遺跡」として史跡に指定された。

関連遺跡は調査の過程で１遺跡を追加して最終的に52遺跡となったが、昭和53年８月栗原郡志波姫町御馳堂遺跡の発掘調査をもって、全遺跡について完了した。

遺物整理については、昭和54年度から58年度までの5年間で行う計画で実施しており、本報告書に引続き第７分冊目以降を第10分冊まで刊行する予定である。

(1) 菅（すが） ノ 沢（さわ） 遺 跡

目　　次

Ⅰ．位置と環境……5
Ⅱ．調査の方法と経過……5
Ⅲ．まとめ……5

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県黒川郡富谷町穀田字菅ノ沢
遺 跡 記 号：ＡＩ（宮城県遺跡地名表登載番号：25021）
調 査 期 間：昭和47年12月5日～12月21日
調 査 面 積：600m^2
発 掘 面 積：175.5m^2
調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課　白鳥良一

Ⅰ．位置と環境

菅ノ沢遺跡は、宮城県黒川郡富谷町穀田字菅ノ沢に所在する遺跡で、富谷町役場の南約2.5㎞に位置する。

遺跡周辺の自然的・歴史的環境については「原前南遺跡」（本書所収）に記述してあるので参照されたい。

本遺跡は富谷町南部に位置する５つの小丘陵の中で、原前南遺跡と同一丘陵上にあり、丘陵西側の沢に面したせまい台地に立地している。遺跡付近の標高は約50ｍで、現状は畑地、雑木林になっている。

Ⅱ．調査の方法と経過（第１図）

本遺跡は東北自動車道建設に伴う分布調査で新たに発見されたもので、台地上の畑に平安時代の土師器の散布が認められた。

東北自動車道は本遺跡の立地する台地の西裾を通るが、遺跡が路線敷までのびている可能性があり調査を実施した。

調査は路線敷の中心杭ＳＴＡ30＋00（原点Ａ）とＳＴＡ30＋20（原点Ｂ）を基準にして3ｍ方眼のグリッドを設定した。グリッド名は第1図のとおり、アルファベットとアラビア数字を組み合わせて付した。

調査の結果、発掘区においては50～60㎝の表土の下はすぐ地山になっており、遺構・遺物は全く発見されなかった。

Ⅲ．まとめ

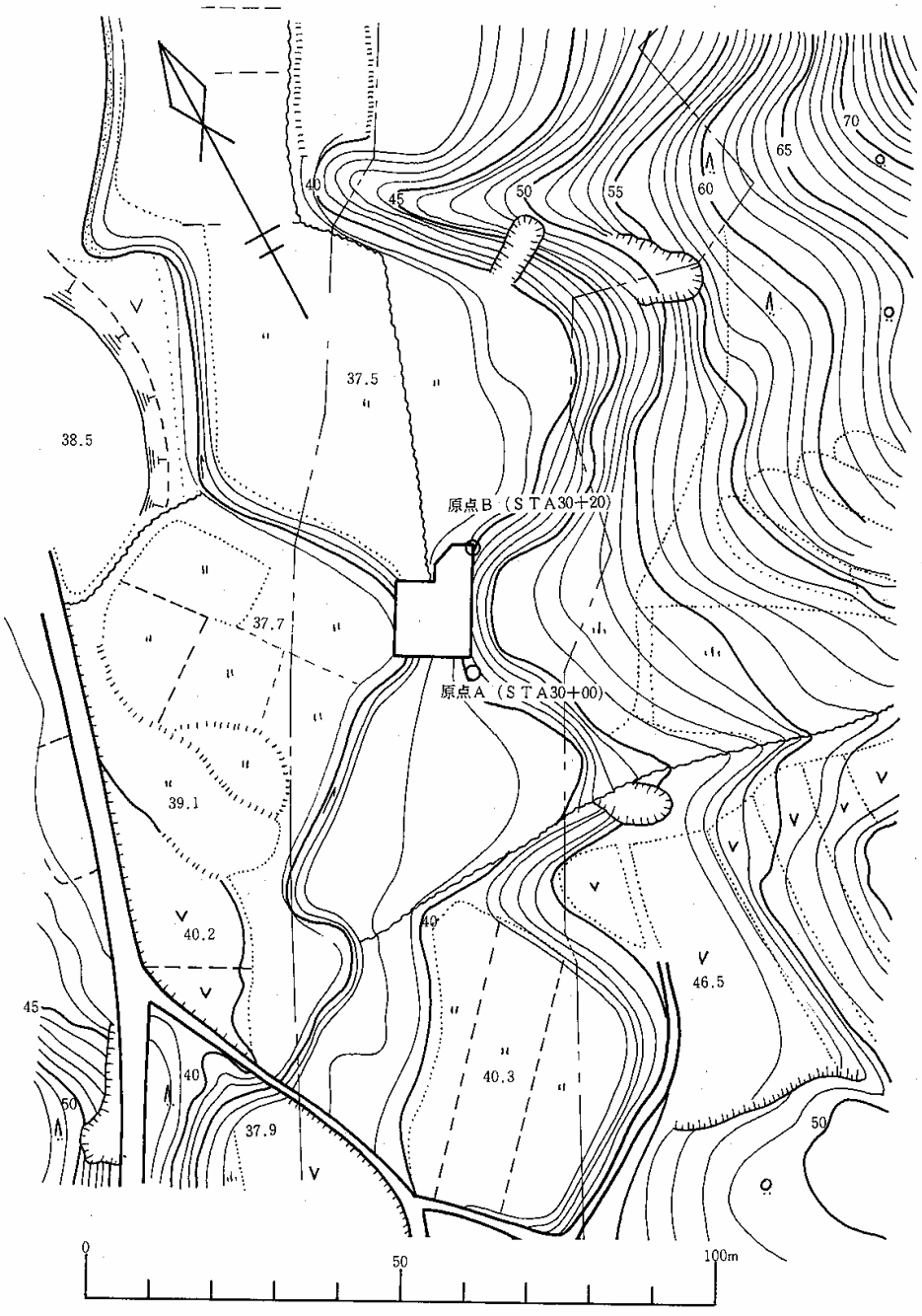
菅ノ沢遺跡は遺跡内の畑地に平安時代の土師器の散布が認められるが、今回の発掘調査区では遺構・遺物ともに発見されなかった。よって遺跡は東北自動車道路線敷まで延びていないことが確認された。なお、遺跡の中心部は台地上にあるものと推定される。

引用・参考文献

白　鳥　良　一（1973）：「菅ノ沢遺跡・東北自動車関係遺跡発掘調査略報」（白石市・仙台市～大和町地区）『宮城県文化財調査報告書』第31集

宮城県教育委員会（1980）：「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集（修正版）

宮城県教育委員会（1980）：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第47集（修正版）


70
65
60
55
50
45
40
37.5
38.5
原点B（ＳＴＡ30＋20）
37.7
原点A（ＳＴＡ30＋00）
39.1
40.2
40
46.5
45
40.3
40
50
37.9
50
0
50
100m

第１図　遺跡地形図

(2) 原前南遺跡（はらまえみなみ）

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境 9
Ⅱ．調査の方法と経過 12
Ⅲ．調査の成果 15
　１．基本層位 15
　２．発見された遺構と遺物 15
　３．遺構以外からの出土遺物 26
Ⅳ．考察 29
　出土遺物と竪穴住居跡の年代について 29
Ⅴ．まとめ 31

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県黒川郡富谷町富谷字原前南
遺 跡 記 号：ＡＧ（宮城県遺跡地名表登載番号：25020）
調 査 期 間：昭和 47 年 12 月 5 日～12 月 21 日
調 査 面 積：約 600m^2
発 掘 面 積：約 260m^2
調　査　員：宮城県教育庁文化財保護室
　　白鳥良一・加藤道男・田中則和

Ⅰ．遺跡の位置と環境

原前南遺跡は、宮城県黒川郡富谷町富谷字原前に所在する遺跡で、富谷町役場の東南東約1.5㎞に位置する。

宮城県の西部には奥羽山脈が南北に連なり、その峻峰の一つに標高約1500ｍの船形山がある。この船形山から東方に向って、陸前丘陵の一つである大松沢丘陵（北部）と富谷丘陵(南部)がのびている。富谷丘陵は西方において標高約200～500ｍの「七ッ森」と呼ばれる孤立峰が並び、大和町宮床から東側においては新第三紀の砂岩・凝灰岩からなる標高100～200ｍの定高性ある丘陵となっている。大松沢・富谷丘陵の間、吉田川およびその支流である善川・竹林川・西川等の流域には河岸平野・谷底平地が発達し、通称吉田川低地を形成している。吉田川低地の上流部には河岸段丘が発達し、下流部はかつての品井沼などの低湿地を含む低平な沖積平野となっている。

富谷町の地形をみると、大半を丘陵地(富谷丘陵)が占めており、市街地の部分は谷底平地・河岸段丘面上(低位段丘)に立地している。営谷町の大半を占める丘陵地は、東流する関川・西川により大きく北部と南部に二分される。北部は標高50～70ｍの小丘陵が東西にのび、南部は標高60～80ｍの５つの小丘陵が南北に樹枝状にのびている。

本遺跡は富谷町南部に位置する５つの小丘陵の中で、板坂から原に向かってのびる小丘陵の北端部にあたり、河岸段丘(低位段丘)面上に立地している。遺跡の標高は約30ｍであり、現状は畑地となっている。

富谷町内では現在のところ旧石器時代から中近世に至る遺跡が32ヶ所(宮城県教委:1980)確認されており、すべて丘陵地に立地している。

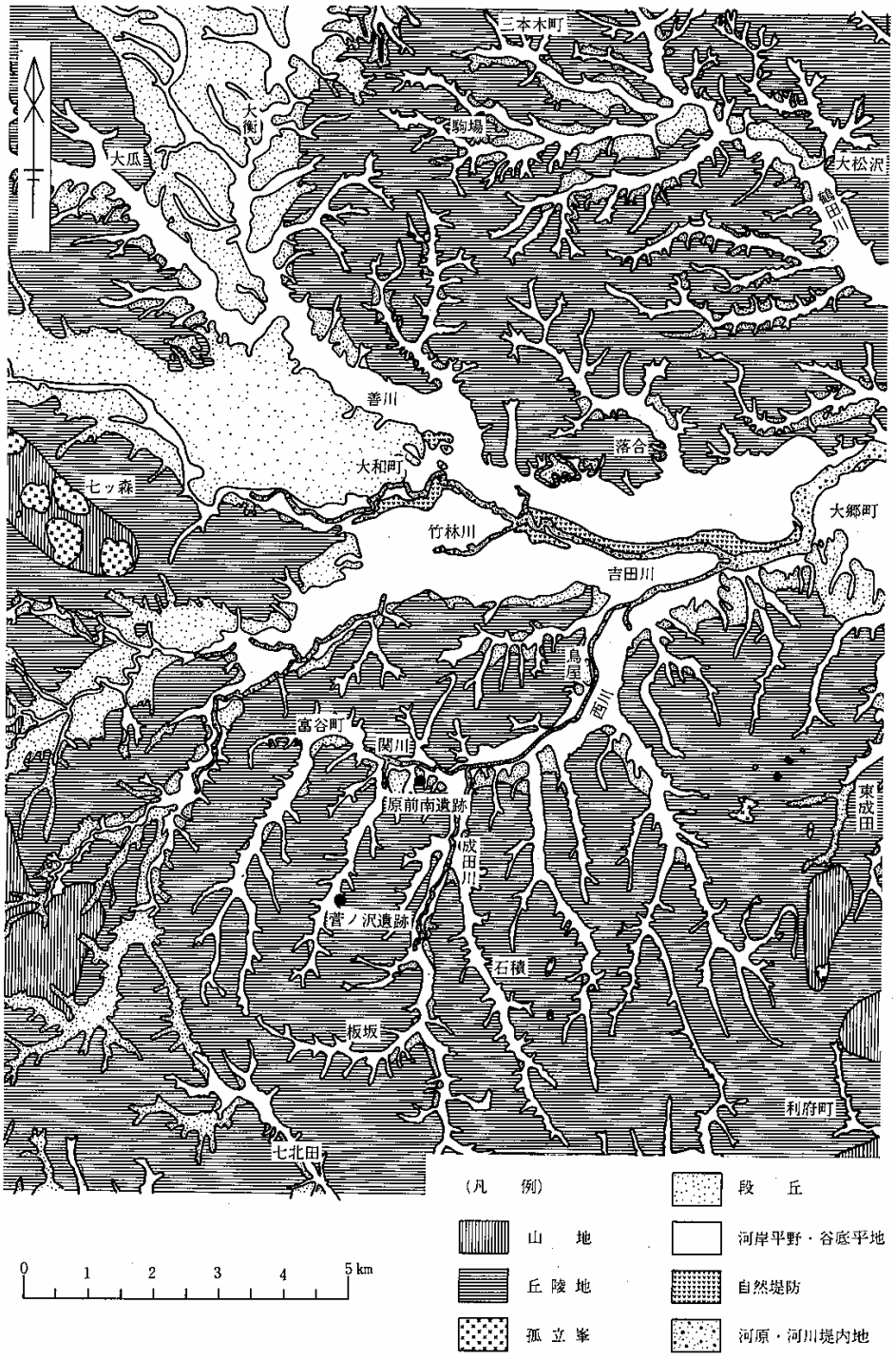
最も古い時代の遺跡は旧石器時代の平沢遺跡であり、丘陵斜面からエンドスクレイパーや石刃などの遺物が発見されている。

縄文時代の遺跡としては湯舟沢遺跡（早・前期）・大清水遺跡（早・前・中期）・上折元遺跡・日吉神社前遺跡（晩期）があり、すべて丘陵斜面に立地している。

弥生時代の遺跡は縄文時代と複合する日吉神社前遺跡のみであり、丘陵先端部に立地している。遺物としては弥生土器(天王山式)やアメリカ式石鏃が発見されている。

古墳時代の遺跡は今のところ町内では発見されていない。しかし、本遺跡の北東約3㎞の丘陵中腹に県史跡鳥屋八幡古墳(円墳)や別所横穴古墳群(ともに大和町)が立地している。

奈良・平安時代になると、菅ノ沢遺跡・源内遺跡・寺前遺跡などの遺物包含地や下桜木製鉄遺跡・上桜木製鉄遺跡の生産遺跡が丘陵斜面や丘陵麓に立地している。なお、本遺跡の北東約2.5㎞の地点にある鳥屋窯跡･鳥屋三角田南窯跡(ともに大和町)は発掘調査が実施されており、須恵器窯跡で出土遺物の時期は奈良時代に位置づけられている。



第１図　地形分類図「吉岡」(宮城県：1979)

国土地理院発行1/25,000「富谷」を複製

第２図　周辺の遺跡

中世になると、丘陵上に城館跡の増加をみる。本遺跡付近だけに限ってみても、同一の小丘陵上には熊野館跡と兵六館跡、関川をはさんだ対岸(北側)には大童館跡と奈良木城跡、成田川をはさんだ対岸(東側)には鳥屋又館跡、関川の支流をはさんだ対岸(西側)には小国館跡と鹿鼻館跡などが集中してみられる。

近世の遺跡としては、本遺跡と同一の小丘陵上、南約1kmの地点に穀田十三塚と穀田経塚(所属時期は不明)が立地している。

Ⅱ．調査の方法と経過

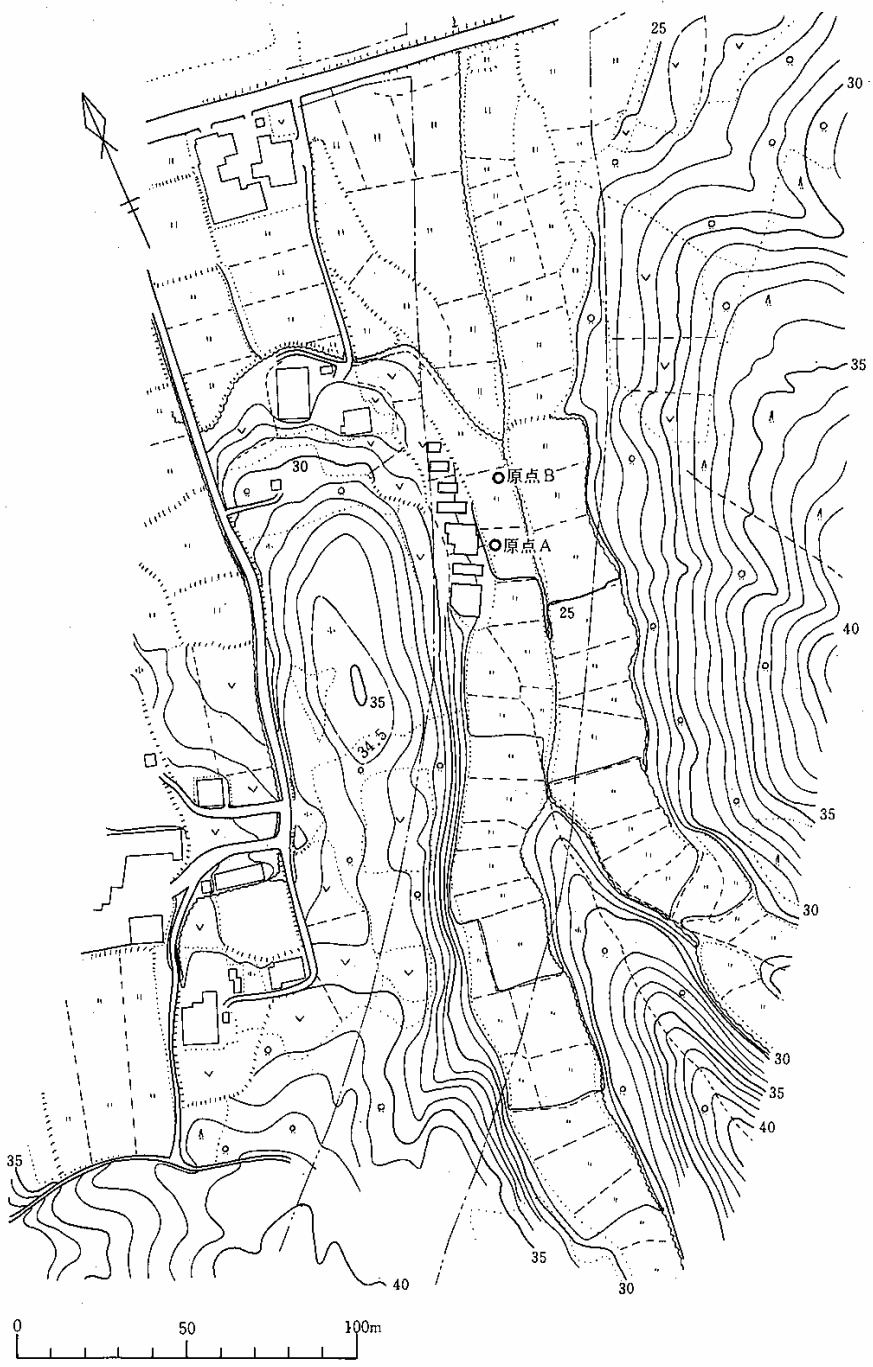
発掘調査は東北自動車道路線敷にかかる台地の東緩斜面にあたる畑地約600㎡を調査対象地区とし、約260㎡を発掘した。

調査は路線敷の中心杭ＳＴA51＋20(原点A)とＳＴA51＋40（原点Ｂ）を結ぶ直線を南北の基準線(N－27°－E)とし、それに直交する直線を東西の基準線(N－63°－W)として３m方眼グリッドを設定した。南北方向については原点Aの南側を30区、北側を31区としアラビア数字で示した。東西方向については原点Aの東側をG区、西側をH区としアルファベットで示した。この東西と南北をそれぞれ延長してグリッド名を付した。

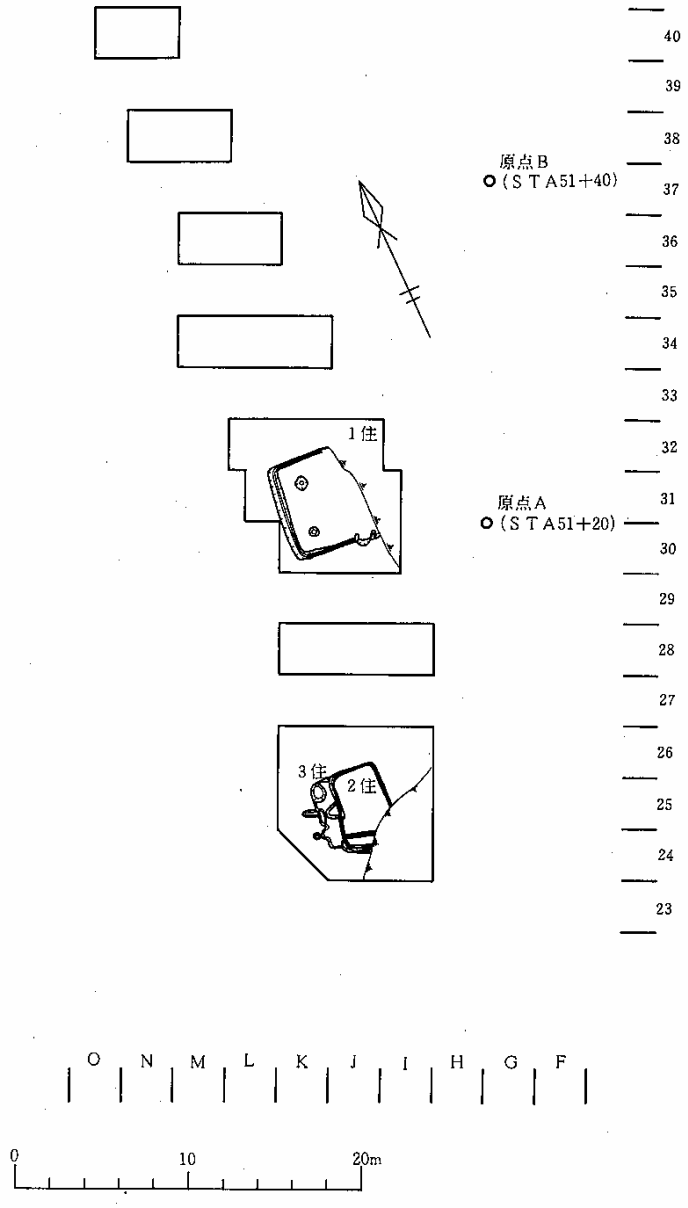
第１表　遺跡地名表

※１～24(富谷町)、25(泉市)、26～47(大和町)

番号	遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	25020	原前南遺跡	段丘	包含地・集落跡	縄文(早・前)・奈良・平安	25	19058	大沢遺跡	台地	包含地	
2	25021	菅ノ沢遺跡	〃	集落跡	平安	26	23029	鶴巣館跡	丘陵	城館	中世
3	25011	熊野館跡	丘陵上	城館	中世	27	23106	迫遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
4	25014	穀田十三塚	丘陵中腹	十三塚	近世	28	23030	観音堂小塚群	丘陵頂	小塚	
5	25015	穀田経塚	〃	経塚		29	23047	勝負沢遺跡	台地	包含地	縄文(中)・平安
6	25022	兵六館跡	丘陵上	城館	中世	30	23048	日光山遺跡	丘陵麓		中世・近世
7	25018	小国館跡	〃	〃	〃	31	23052	日光山西小塚	〃	小塚	
8	25003	鹿鼻館跡	〃	〃		32	23105	寺東遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良平安
9	25002	大童館跡	〃	〃	中世	33	23026	別所A遺跡	丘陵中腹	〃	縄文(晩)
10	25004	奈良木城跡	〃	〃		34	23034	別所横穴古墳群	〃	横穴古墳	古墳
11	25030	鳥屋又館跡	〃	〃	中世	35	23103	別所B遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
12	25024	湯舟沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(早・前)	36	23031	天神館跡	丘陵	城館	中世
13	25008	南楯城跡	丘陵上	城館	中世	37	23104	町場遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
14	25025	平沢遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器	38	23027	県史跡鳥屋八幡古墳	丘陵中腹	円墳	古墳(後)
15	25001	熊谷館跡	丘陵先端	城館	中世	39	23059	鳥屋三角田南窯跡	丘陵斜面	窯跡	奈良
16	25029	源内遺跡	丘陵斜面	包含地	平安	40	23051	鳥屋窯跡	〃	〃	奈良・平安
17	25005	小谷館跡	丘陵上	城館	中世	41	23099	清水谷A遺跡	丘陵麓	包含地	〃
18	25031	寺前遺跡	丘陵斜面	包含地	平安	42	23100	清水谷B遺跡	〃	〃	〃
19	25028	寺前下遺跡	丘陵上	〃	縄文	43	23069	佐和城跡	丘陵	城館	中世
20	25016	下桜木製鉄遺跡	丘陵麓	生産遺跡(製鉄跡)	平安	44	23101	十王沢遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
21	25017	上桜木製鉄遺跡	〃	〃	近世	45	23082	広畑遺跡	丘陵	〃	縄文・奈良・平安
22	25027	大清水遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(早・前・中)	46	23102	太田遺跡	丘陵斜面	〃	奈良・平安
23	25007	小野目館跡	丘陵上	城館	中世	47	23072	小谷城館跡	丘陵	城館	中世
24	25013	上折元遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文						



第３図　遺跡地形図



第４図　グリッド・遺構配置図

調査は昭和47年12月５日から開始した。最初に調査区全体に３mおきに設定した東西に長いトレンチ（３m×６～９m）の表土を掘り下げ、その後にケズリをかけて遺構確認作業を行なった。J-24･26区Ｋ－30・32区で遺構が検出されたため、トレンチを拡張した。その結果、Ｉ～Ｋ－24～26区では竪穴住居跡が2軒重複して、Ｊ～Ｌ－30～32区では1軒発見された。

発見された遺構については20分の1の平面図・断面図を作成した。また基本層位については24・28・30・34・40区の北壁断面図を20分の１で作成した。

発掘調査が一切終了したのは、12月21日である。

Ⅲ．調査の成果

１．基本層位

遺跡は北に突き出した段丘の北端部に位置し、低位段丘面上に立地している。東北自動車道の路線敷は河岸段丘面と沢の部分を南北に走っており、調査区は東方に緩やかに傾斜する河岸段丘面にあたっている。

調査区内においては基本的に4枚の層が確認された。

第Ⅰ層は表土・耕作土である。**「明褐色・褐色・暗褐色砂質シルト層」**で、調査区全域に分布し、厚さは20～40cmである。

第Ⅱ層は「暗褐色砂質シルト層」で、調査区全域に分布している。礫やスコリアをわずかに含んでおり、厚さは40～80cmである。

第Ⅲ層は「暗褐色粘土質シルト層」で、34区にのみ確認された。スコリアを多量に含み、かたくしまっており、厚さは20～50cmである。

第Ⅳ層は「青灰色砂質粘土層」で、水の作用を受けて酸化しており、地山漸移層と考えられる。

地山は「黄褐色砂質粘土層」であり、J～L－30～32区、Ｉ～Ｋ－24～26区の地山上面において遺構が確認されている。

遺物の出土状況については、第Ⅰ層と第Ⅱ層からは土師器・須恵器・縄文土器・石器が出土しており、第Ⅲ層以下は無遺物層である。

２．発見された遺構と遺物

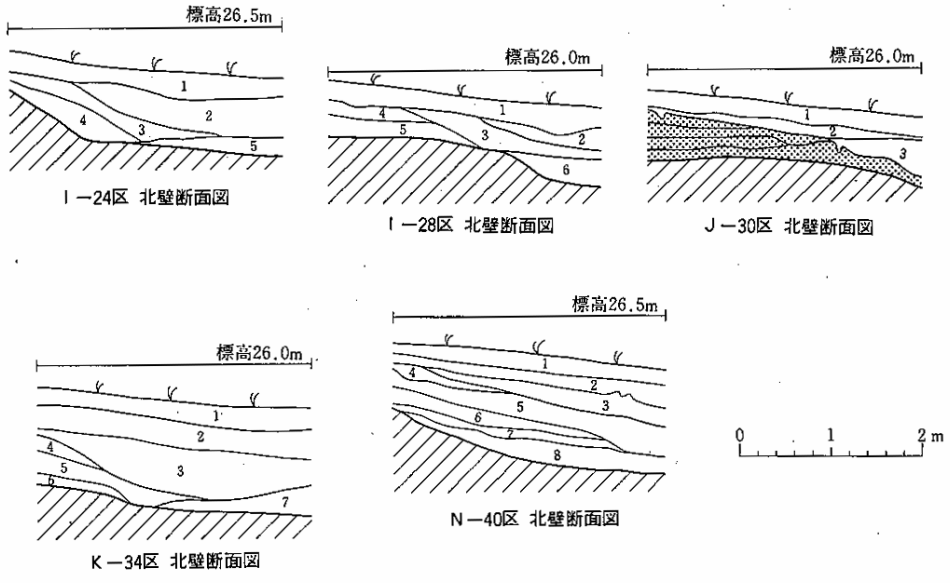
第１号住居跡　（第６図）

確認面：Ｊ～Ｌ－30～32区の地山面で確認した。

平面形・規模：東壁は削平されてすでにないが、残存する床面と壁の状況からみてコーナーが直角に近く、方形を基調とする住居跡と考えられる。規模は西辺が約5.6mあり、南辺が約4.9m、北辺が約3.6m残存している。

第２表　基本層位一覧表

層位	24区 層No	土色	土性	備考	28区 層No	土色	土性	備考	30区 層No	土色	土性	備考	34区 層No	土色	土性	備考	40区 層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色	砂質シルト	軟らかい	1	褐色	砂質シルト	しまっているが、もろい 粘性なし スコリア（1～2mm）を微量含む	1	明褐色	砂質シルト	軟らかい	1	明褐色	砂質シルト	サラサラして軟らかい	1	明褐色	砂質シルト	サラサラして軟らかい
					2	褐色	砂質シルト	しまっているが、もろい 粘性なし スコリア（1～3mm）を少量含む	2	黄褐色	砂質シルト	軟らかい					2	明褐色	砂質シルト	軟らかい 酸化鉄分を含む
																	3	褐色	砂質シルト	軟らかい 酸化鉄分を含む
																	4	暗褐色	砂質シルト	3・5層の漸移層
第Ⅱ層	2	暗褐色	砂質シルト	軟らかい 2mmの礫を少量含む	3	灰褐色	砂質シルト	かたくしまっている 粘性なし スコリア（2mm）を霜降り状に含む	3	暗褐色	砂質シルト		2	明褐色	砂質シルト	ややかたくしまっている スコリアを若干含む	5	黒褐色	砂質シルト	やや軟らかい スコリアを若干含む
	3	暗褐色	砂質シルト	軟らかい 若干粘性あり 火山性礫（1～3mm）微量含む	4	暗褐色	砂質シルト	礫を微量含む 粘性なし スコリア（2mm）を霜降り状に含む									6	褐色	砂質シルト	やや粘りがある 砂粒は粗い スコリアを含む
													3	褐色	砂質シルト	やや軟らかい 若干のスコリアを含む	7	暗褐色	砂質シルト	軟らかい 地山ブロックを含む
	4	暗褐色	砂質シルト	1・2・3層よりはかたくしまっているが、軟らかい方である	5	黒褐色	砂質シルト	かなりかたくしまっている 粘性なし スコリア（2mm）を霜降り状に含む									8	黒褐色	砂質シルト	スコリアを若干含む
第Ⅲ層													4	暗褐色	粘土質シルト	ややかたくしまっている スコリアを含む				
													5	暗褐色	粘土質シルト	ややかたくしまっている スコリアを多量に含む				
													6	黒褐色	粘土質シルト	非常にかたくしまっている スコリアを多量に含む				
第Ⅳ層	5	灰黄褐色	砂質粘土	砂を多量に含む 粘性あり 水の作用を受け、変化している	6	青灰色	砂質粘土	やや粗い砂を含む かたくしまっている 粘性なし スコリアを含む 水の作用を受け、変化している	7	青灰色	砂質粘土	軟らかい 水の作用を受け、変化している								
地山	黄褐色 砂質粘土																			



第５図　基本層位

竪穴層位：４層に大別される。第１層は黒褐色砂質シルト層であり、削平が及んでわずかに残存している。第２層は褐色砂質シルト層であり、住居全域に堆積している。第３層は明褐色粘土層であり、住居全域に堆積しているが、住居西部の一部では明褐色砂質シルト層に明褐色粘土ブロックを含んだ層となっている。第4層は灰褐色砂質シルト層であり、床面全体に堆積している。

壁：西・北・南の３壁が残存しており、地山を壁としている。北・南壁は床面から周溝を経て急角度で立ち上がっているが、西壁は比較的緩やかである。なお、残存壁高は最も保存の良好な西壁で約60㎝ある。

床面：住居跡東側は削平されているが、地山を床としており、全体的にはほぼ平坦で固くしまっている。

柱穴：床面で３個、南壁に接して2個のピットが検出された。P_3には柱痕跡が認められており、P_1とP_3はピットの大きさ・深さ・堆積土・配置(住居の四隅に比定される)などに共通性があることから、P_1・P_3は主柱穴と考えられる。またP_2・P_4・P_5についてもピットの深さ・堆積土・配置などからみて住居に関連した柱穴の可能性がある。

周溝：住居跡の東側は削平されて不明であるが、周溝は北・西・南壁沿いにめぐり、カマド燃焼部右側壁まで連続している。しかし燃焼部左側壁際で周溝は検出されなかった。周溝は断面形が「U」字形で上幅約15㎝、底面５～10㎝、床面からの深さが約８㎝あり、西壁と南壁では部分的にくい込んでいる。

カマド：南壁のやや東寄りに燃焼部が設置され、煙道部はすでに削平されていた。燃焼部両側壁には角礫が用いられており、左側壁では角礫の外面に粘土が残存している。よって燃焼部側壁は粘土と角礫によって構築されたと考えられる。燃焼部底面はわずかにくぼんでおり、奥壁はやや緩やかに約11㎝立ち上がっている。燃焼部底面・奥壁・側壁は火熱を受けて赤変しており、特に角礫はボロボロになる程焼けている。カマドの軸方向はＮ－20°－Ｅである。

貯蔵穴状ピット：検出されなかった。

出土遺物：床面・カマド・堆積土から土師器・須恵器が出土している。

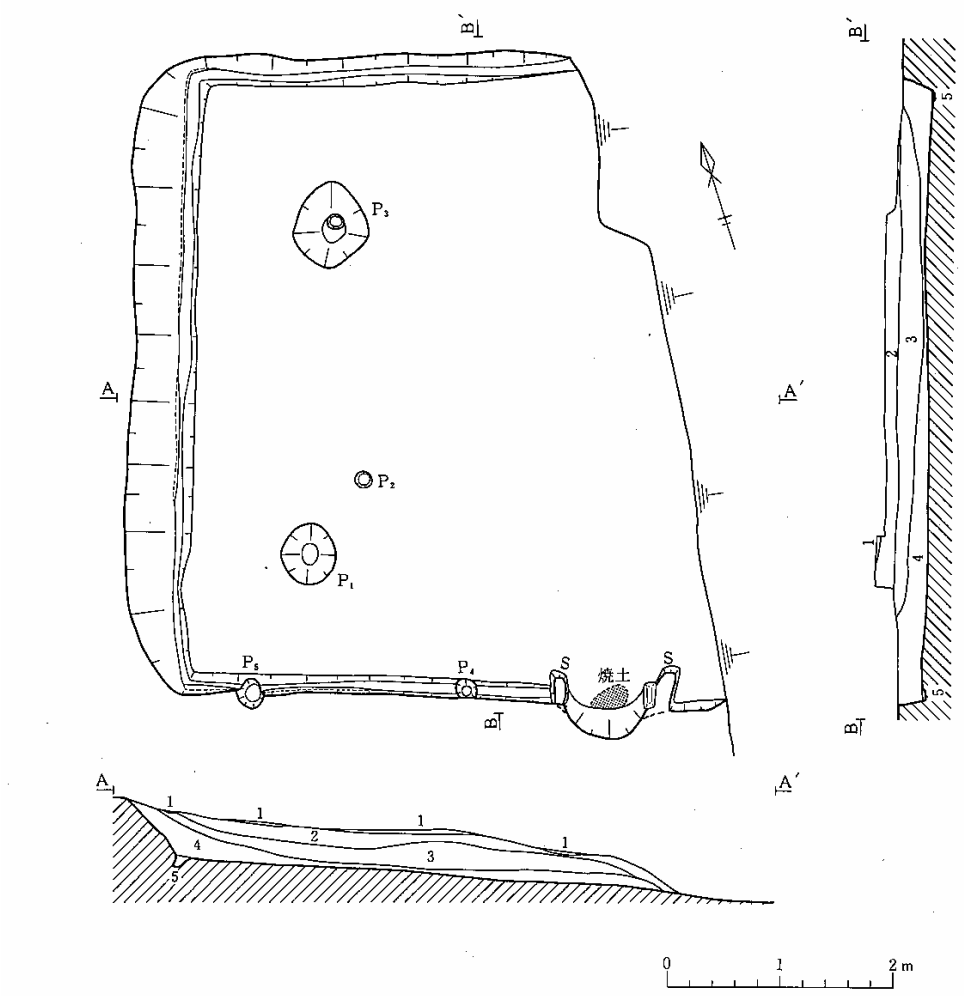
〔床面〕

土師器

甕（第７図３・４）：口縁部から体部上半にかけて残存する破片(４)と底部破片(３)があり、２点とも製作に際してロクロが使用されている。４は頸部で外反し、短い口縁部がつくり出されている。端部上端はわずかに上方にのびており、内面に段がみられる。器面調整は外面にロクロ調整、内面にナデが施されている。３は底部の切り離し技法が、回転糸切りであり、底面の周縁部にナデが施されている。

須恵器

坏(第７図６)：火熱を受けて赤変しており、底部内外面の磨滅は著しいが、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りと思われる。器形は体部から口縁部にかけてやや直線的に外傾している。器面調整は内外面にロクロ調整が施されているが、体部下端にケズリ痕が若干認められる。



Pit No	P_1	P_2	P_3(掘り方)	P_3(柱痕跡)	P_4	P_5
深さ(cm)	19~20	28~29	60~64	――	13~18	
土　色	褐　色	褐　色			褐　色	黒褐色
土　性	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	シルト
備　考	軟らかい。 掘削は緩やか。	軟らかい。 傾斜は垂直に近い。		若干粘性があるやや得れた黄色土である。	炭化物を含む。	比較的軟らかく、水を多く含んでいる。

層位	層No	土　色	土　性	備　　考
第1層	1	黒 褐 色	砂質シルト	ややかたくしまっているがもろい。 石英粒(1㎜未満)を多量に含む。
第2層	2	褐　色	砂質シルト	やや粘性がある。 砂(径約1㎜)を微量含む。
第3層	3	明 褐 色	粘　土	粘性はほとんどない。
第4層	4	灰 褐 色	砂質シルト	かたくしまっているがもろい。炭化物を多く含む。火山灰土を全面に斑点状に含む。
	5	暗灰青色	粘　土	周溝内堆積土

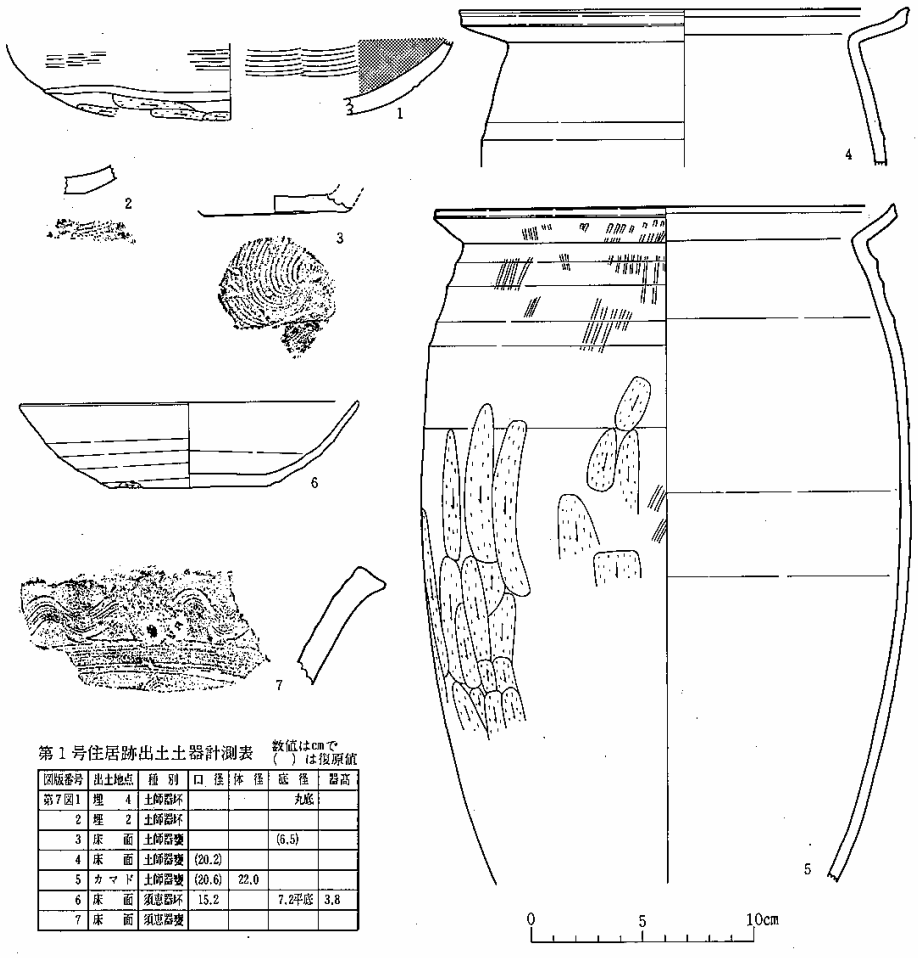
第６図　第１号住居跡

甕（第７図７）：口縁部破片である。口縁部はやや外反し、端部は平坦である。器面調整については、外面は櫛歯状工具による波状文と横位沈線文、内面はロクロ調整が施されている。

〔カマド〕

土師器

甕(第7図5)：製作に際してロクロが使用されている。器高が口径より大きく、最大径が体部にある。器形は長胴形で体部中央がややふくらみ、頸部で外反して短い口縁部がつくり出されている。端部上端はわずかに上方にのびており、内面に段が認められる。器面調整については､外面は口縁部から体部にかけてタタキしめの後ロクロ調整､体部以下はヘラケズリ、内面はロクロナデ調整が施されている。



第１号住居跡出土土器計測表　数値はcmで（　）は復原値

図版番号	出土地点	種別	口径	体径	底径	器高
第７図１	埋　4	土師器杯			丸底	
2	埋　2	土師器杯				
3	床　面	土師器甕			(6.5)	
4	床　面	土師器甕	(20.2)			
5	カマド	土師器甕	(20.6)	22.0		
6	床　面	須恵器杯	15.2		7.2平底	3.8
7	床　面	須恵器甕				

第７図　出土遺物

〔堆積土〕

土師器

坏(第７図１・２)：体部から底部にかけて残存する破片(１)と底部破片（２）がある。１は製作に際してロクロを使用せず、丸底のもので体部に段がついている。器面調整については、外面は段の上に無調整の部分が幅約１㎝の帯状に巡り、その上の部分はヘラミガキ、段から下の部分はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。２は製作に際してロクロを使用しており、底部の切り離し技法は回転糸切りである。器面調整については、外面の体部下端は手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

第２号住居跡 （第８図）

確認面：Ⅰ～Ｋ－24～26区の第３号住居跡床面下で確認された。

重複・増改築：第３号住居跡によって切られている。

平面形・規模：南東隅は削平されすでにないが、残存壁の状況から平面形は南北に長い隅丸長方形であり、規模は西辺約4.5m、北辺約3mである。また住居内面積は約11.3㎡と推定される。

堅穴層位：２層に大別される。第１層は暗褐色シルト層であり、住居跡の西側に堆積している。第２層は暗赤褐色シルト層であり、住居跡全域の床面に堆積している。

壁：北・西壁と東・南壁の一部が残存しており、地山を壁としている。北・西壁は保存が良好で残存壁高が10～16㎝あり、立ち上がりはやや急角度である。東壁は削平が及んでおり、残存壁高は２～５㎝である。

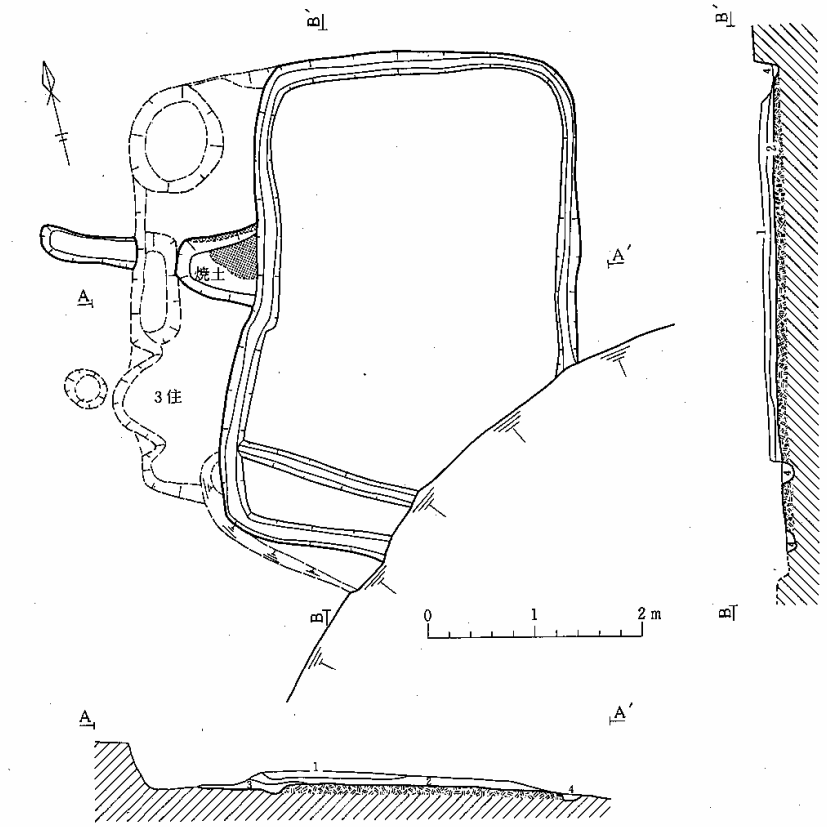
床面：黒褐色砂質シルト層(掘り方埋土)を床としており、全体的にほぼ平坦で、木炭や焼土が薄く堆積し固くしまっている。

柱穴：検出されなかった。

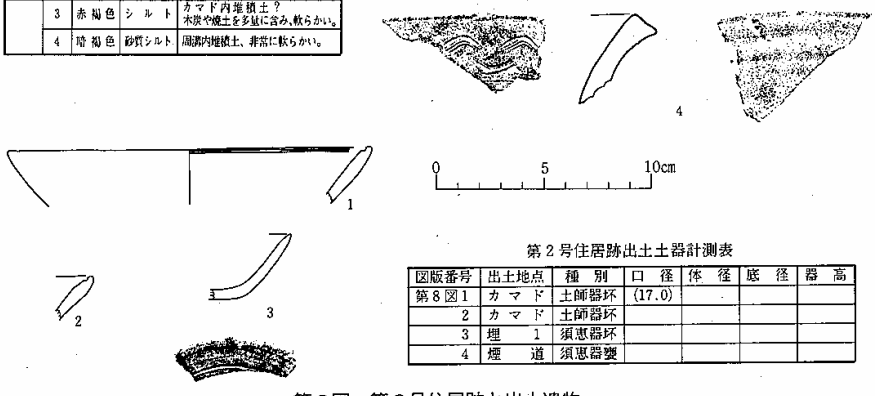
周溝：住居跡南東隅は削平されているが、周溝は壁沿いに全周している。周溝は上幅約15㎝、底面幅６～10㎝、床面からの深さは５～10㎝で、断面形は底面がほぼ平坦な「U」字形である。なお南壁沿いの周溝から30～40㎝離れて平行な溝が一条検出されており、この溝も周溝に連結している。

カマド：西壁中央からやや北寄りに設置されており、燃焼部と煙道部とから成る。燃焼部は西壁から約80㎝地山を掘り込んでつくられており、燃焼部底面と側壁は火熱を受けて赤変している。奥壁は底面からやや緩やかに約20㎝立ち上がり、煙道へ移行している。煙道は約1.3m残存しており、底面の傾斜は西方に向かって上っている。カマドの軸方向はＮ－70°－Ｗである。

貯蔵穴状ピット：検出されなかった。



層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色	シルト	スコリアを含み、やや固くしまっている。
第2層	2	暗赤褐色	シルト	木炭や焼土を含み、軟らかい。
	3	赤褐色	シルト	カマド内堆積土？ 木炭や焼土を多量に含み、軟らかい。
	4	暗褐色	砂質シルト	周溝内堆積土、非常に軟らかい。



第２号住居跡出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	口径	体径	底径	器高
第８図１	カマド	土師器坏	(17.0)			
2	カマド	土師器坏				
3	埋1	須恵器坏				
4	煙道	須恵器甕				

第８図　第２号住居跡と出土遺物

出土遺物：カマド・煙道・堆積土から土師器・須恵器が出土している。

〔カマド〕

土師器

坏(第８図１・２)：２点とも口縁部破片である。口縁部がやや直線的に外傾する器形で、内面の口縁上端部に浅い沈線が１条巡っている。器面調整は内外面に横ナデが施されている。

〔煙道〕

須恵器

甕(第８図４)：口縁部が外反し、端部は平坦である。器面調整については、外面は櫛歯状工具による不連続な波状文と横位沈線文、内面はロクロ調整が施されている。

〔堆積土〕

須恵器

坏(第８図３)：口縁部から底部にかけて残存する破片であり、やや歪んでいる。底部は回転ヘケズリによる再調整のため切り離し技法が不明である。器形は体部から口縁部にかけてやや直線的に外傾しており、体部と底部の境界は丸味をおびて明瞭ではない。器面調整については、外面は口縁部から体部までがロクロ調整、体部下端から底面にかけて回転ヘラケズリ、内面はロクロ調整が施されている。

第３号住居跡　(第９図)

確認面：Ｉ～Ｋ－24・26区の地山面で確認された。

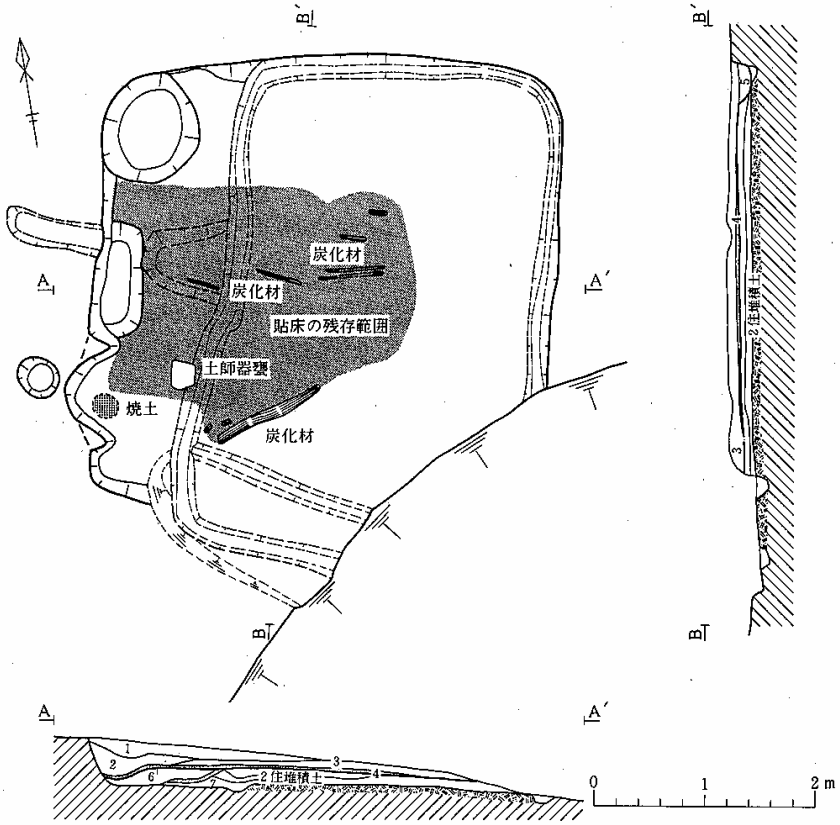
重複・増改築：第２号住居跡を切っている。

平面形・規模：削平が著しくて不明な点も多いが、残存する床面や壁の状況から、平面形は隅丸でやや不整であるが方形を基調とする住居跡と考えられる。規模は西辺が約3.7m、北辺が約４ｍで面積は約3.2㎡である。

堅穴層位：３層に大別される。第１層は明褐色砂質シルト層であり、住居跡西壁から中央部にかけて堆積している。第２層は暗褐色砂質シルト層であり、西壁際に堆積している。第３層は焼土や木炭を含む暗赤褐色シルト層であり、住居跡全域の床面に堆積している。

壁：西壁の保存が良好で地山を壁としている。西壁は床面からやや急角度で立ち上がり、残存壁高は10～30㎝ある。他の壁については第２号住居跡と一致すると考えられるが、床面まで削平が及んでいるため立ち上がりや残存壁高などは不明である。

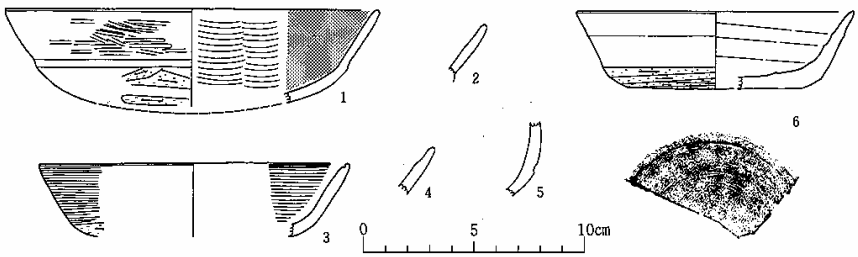
床面：第２号住居跡の堆積土第1層の上にややよごれた黄褐色ローム層を貼って床としている。床面はかたくしまっており、全体的にほぼ平坦であるが、西壁際でややくぼんでいる。貼床は東西約2.8m、南北約2.3mの範囲で残存している。



層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	明褐色	砂質シルト	スコリアを含み、非常にかたくしまっている。
第2層	2	暗褐色	砂質シルト	比較的軟らかい。
第3層	3	暗赤褐色	シルト	焼土や木炭を多量に含んでいる。
	4	黄褐色	粘土	貼床 かたくしまっている。
	5	明褐色	砂質シルト	周溝内堆積土？
	6	黒褐色	シルト	掘り方埋土。スコリアを含み、非常にかたくしまっている。
	7	黄褐色	粘土	貼床？

第3号住居跡出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	口径	体径	底径	器高
第9図1	埋 2	土師器坏	(17.0)		丸底	(4.7)
2	床面	土師器坏				
3	カマド	土師器坏				
4	貼床下ピット	土師器坏				
5	埋 2	土師器坏				
6	埋 1	須恵器坏	(12.5)		(8.0)平底	3.5



第9図　第3号住居跡と出土遺物

柱穴：検出されなかった。

周溝：住居跡西壁沿いでは検出されなかった。他の壁沿いでは削平が及んでおり、周溝は不明である。

カマド：西壁中央の南寄りに設置されている。燃焼部は西壁から約30㎝地山を掘り込んでつくられており、両側壁先端は粘土で構築されている。燃焼部底面・側壁の内側・奥壁は火熱を受けて赤変している。カマドの軸方向はN－70°－Wであり、その延長上に円形ピット(径約40㎝､深さ約30㎝)が検出されたが､カマドに関連したピットであるかどうかは不明である。

貯蔵穴状ピット：住居跡北西隅に認められた。平面形は楕円形で、長軸約１m･短軸約0.８m･床面からの深さは約20㎝である。堆積土は２層認められ、第1層は木炭を多量に含む暗褐色シルト層で、第２層は灰白色粘土層底面に２～３㎝の厚さで堆積している。

出土遺物：床面･カマド・貼床下ピット・堆積土から土師器・須恵器が出土している。

〔床面〕

土師器

坏（第９図２）：口縁部破片であり、内弯気味に外傾する器形と考えられ、器面調整は内外面にヘラミガキが渡されている。なお、体部に段と思われる痕跡が認められその部分はナデ調整が施されている。

須恵器

甕（第10図１・２）：口縁部破片（１）と頸部から体部にかけての破片（２）がある。１は口縁部が外反し、端部上端はわずかに上方にのびており、内面に段が認められる。器面調整については、外面は櫛歯状工具による波状文、内面はロクロ調整が施されている。２は頸部に口縁部を接合しておりナデ調整が施されている。器面調整については、外面は平行タタキ目、内面はアテ目(青海波文)が施されている。また、内外面に積み上げ痕跡が認められ、特に内面において顕著である。

〔カマド〕

土師器

坏(第９図３)：口縁部から底部にかけて残存する破片である。器形は口縁部が直線的に外傾し、内面の口縁上端部に浅い沈線が1条巡っている。体部から底部にかけては丸味をおびており、底部形態は平底と考えられる。器面調整は内外面に横ナデが施されている。

須恵器

甕（第10図３）：口縁部破片である。口縁部は外反し、端部はほぼ平坦である。器面調整については、外面は櫛歯状工具による波状文、内面はロクロ調整が施されている。

〔貼床下ピット〕

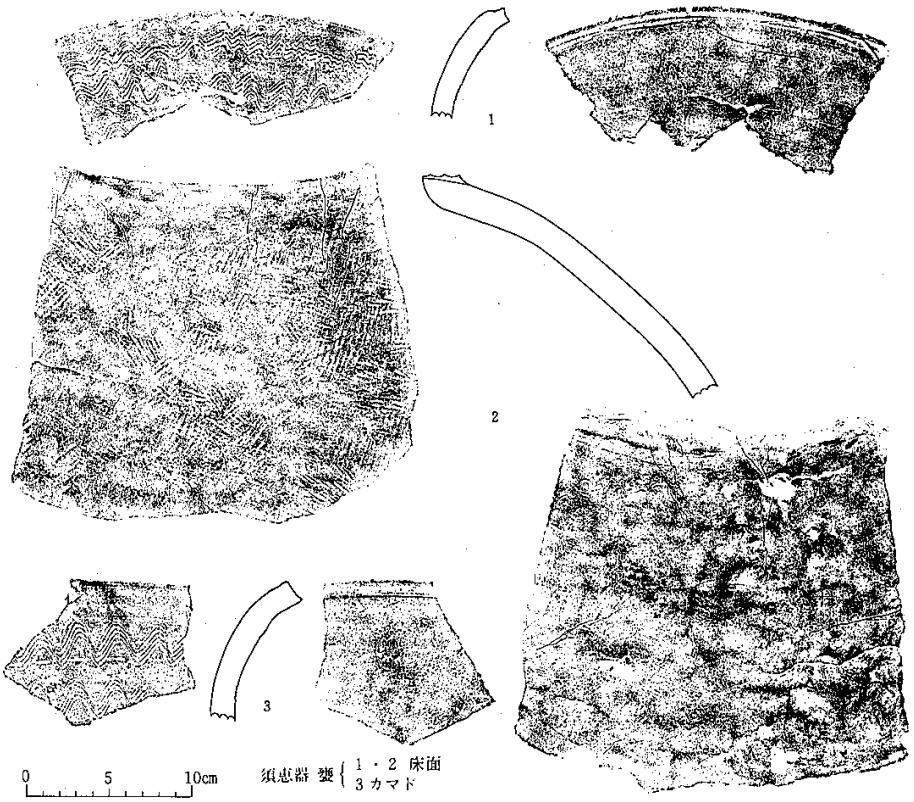
土師器

坏(第９図４)：口縁部破片であり、器形は口縁部が直線的に外傾すると考えられる。器面調整については、内外面に横ナデが施されている。

〔堆積土〕

土師器

坏(第９図１・５)：器形のほぼ明らかなもの(１)と体部破片(５)がある。１は製作に際してロクロを使用せず、丸底のもので体部中央に段が巡っており、段から口縁部に向かって内弯気味に外傾している。器面調整については、外面は口縁部から段までがヘラミガキ、段の部分はナデ、段から下の部分はヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されているが、部分的に黒色は消失している。５は火熱を受けて赤変している小破片であり、体部外面に沈線が認められる。器面調整については、外面は沈線から上の部分にヘラミガキ、沈線か



第10図　第３号住居跡出土遺物

ら下の部分にヘラケズリ、内面はヘラミガキが施されている。

須恵器

坏(第9図6)：底部切り離し技法は再調整のため不明である。器形は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、体部下端から底部にかけて丸味をおび、底部は平底である。器面調整については、外面は口縁部から体部下半にかけてロクロ調整、体部下半から底部全面に回転ヘラケズリ、内面はロクロ調整が施されている。

３．遺構以外からの出土遺物　(第 11・12 図)

遺構以外には、調査区の基本層位第Ⅰ層と第Ⅱ層から土師器・須恵器・縄文土器・石器・砥石が出土している。なお、土器については小破片であるため図示できないものは末尾に土器破片集計表(第5表)として一括した。

イ．第Ⅰ層からの出土遺物

砥石

砥石(第12図4)：柱状を呈するものと思われるが、破損しているために形態はは明らかでない。2面の研磨面が残されており、その1面に線状の擦痕が認められる。

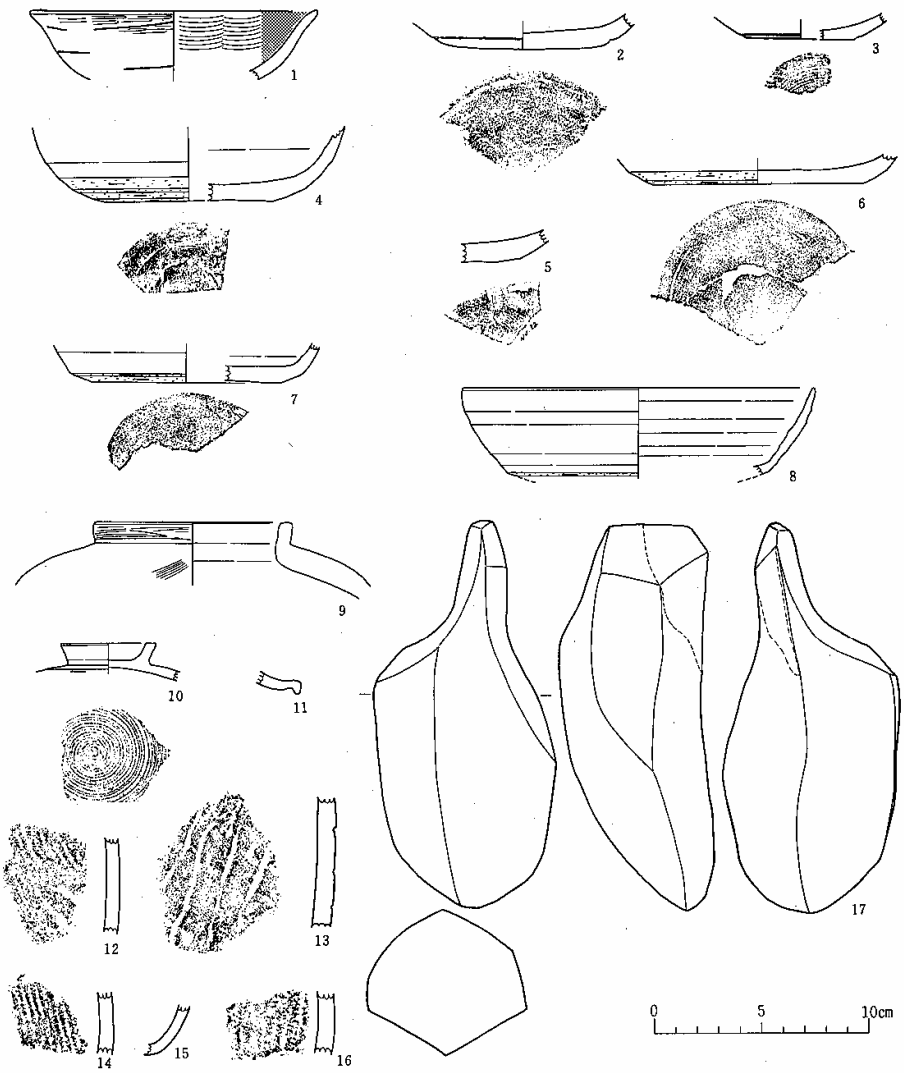
ロ．第Ⅱ層からの出土遺物

土師器

坏(第11図１・２・３)：口縁部から体部にかけて残存する破片(１)と底部破片(２・３)の３点がある。１は体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上がり、口縁部でやや外反気味となる器形である。器面調整については、外面は口縁部にミガキ、内面はヘラミガキ･黒色処理が施されている。また、外面には積み上げ痕跡が認められる。２は丸底と考えられるもので、器面調整は底部外面にケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。外面の体部と底部の境界付近には積み上げ痕跡が認められる。３は底部の切り離し技法が回転糸切りであるが、内外面の器面調整は磨滅により明らかでない。

須恵器

坏(第11図４・５・６・７・８)：体部から底部にかけて残存する破片(４～７)と口縁部から体部にかけて残存する破片(８)がある。底部の切り離し技法は４が回転ヘラ切り、５が回転糸切り、６と７は再調整のため不明であり、４点とも底部から体部にかけて丸味をもって立ち上がる器形である。器面調整については、外面の体部と内面はロクロ調整が施されているが、４は体部下半から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ、５は体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ、６と７は体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリが施されている。８は体



遺構以外からの出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	口径	体径	底径	器高	図版番号	出土地点	種別	口径	体径	底径	器高
第11図1	K－32区－6層	土師器坏	(13.4)				第11図9	I－26区－3層	須恵器蓋	リングの口径 4.4			
2	K－31区－4層	土師器坏			(7.2)丸底		10	K－34区－2層	須恵器蓋				
3	K－31区－3層	土師器坏			(5.0)平底		11	L－35区－1層	須恵器壺	(9.1)			
4	I－28区－3層	須恵器坏			(7.8)平底		12	I－28区－3層	縄文土器体部				
5	K－32区－3層	須恵器坏					13	I－28区－4層	縄文土器体部				
6	I－26区－3層	須恵器坏			(9.8)平底		14	K－28区－4層	縄文土器体部				
7	I－28区－3層	須恵器坏			(8.8)平底		15	I－28区－4層	縄文土器底部				
8	J－28区－3層	須恵器坏	(16.4)				16	I－26区－4層	縄文土器体部				

第11図　遺構以外からの出土遺物(1)

部から口縁部までやや丸味をもって立ち上がる器形であり、器面調整は外面の体部にロクロ調整、体部下端にケズリ、内面にロクロ調整が施されている。

蓋(第11図９・10)：つまみから天井部にかけて残存する破片(９)と口縁部破片(10)がある。９はつまみはリング状を呈しており、上方へやや開き、端部はほぼ平坦である。外面の天井部は回転ヘラケズリ、内面は回転刷毛目が施され、刷毛目は１cm間に７本のスジがはいっている。(註)10は口縁部が直下に屈曲している。

壷(第11図９)：短頸壷の口縁部から体部にかけて残存する破片である。製作に際しては、ロクロを使用している。器形は頸部で屈曲し、口縁部は短く直立している。内外面にナデ調整が施されている。

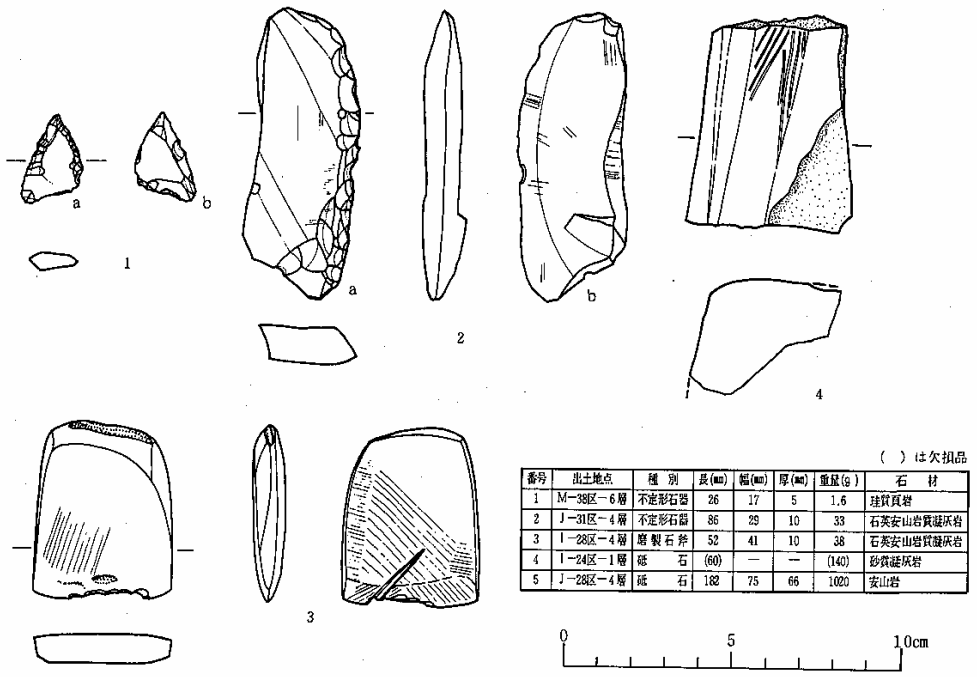
註)鳥屋窯跡出土の須恵器蓋の内面にクシ状工具を用いた調整が行なわれているものがある。このクシ状工具の目は６～７本/cmである。

第３表　縄文土器破片集計表

部位	地文	内面	基本層位第Ⅰ層		基本層位第Ⅱ層		表採	計
			K-28区 1 層	I-28区 2 層	J-28区 3 層	J-28区 4 層		
体部	RL	ナデ				4	1	5
	RL	不明			1	2		3
	不明縄文	ナデ		1		3	3	7
	不明縄文	不明				10		10
	不明	ナデ			1			1
	不明	不明	1		2	28	4	35
合計			1	1	4	47	8	61

縄文土器(第11図12～16)

縄文土器の小破片が56点出土しており、底部破片が１点(15)体部破片が４点（12・13・14・16)ある。すべて胎土に繊維を混入しており、内外面は磨滅している破片がほとんどである。



（　）は欠損品

番号	出土地点	種別	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材
1	M－38区－6層	不定形石器	26	17	5	1.6	珪質頁岩
2	J－31区－4層	不定形石器	86	29	10	33	石英安山岩質凝灰岩
3	I－28区－4層	磨製石斧	52	41	10	38	石英安山岩質凝灰岩
4	I－24区－1層	砥石	(60)	—	—	(140)	砂質凝灰岩
5	J－28区－4層	砥石	182	75	66	1020	安山岩

第12図　遺構以外からの出土遺物(２)

15は丸底を呈するもので、内外面は磨滅している。13は外面に単節縄文（ＲＬ）が施されており、内面もヘラミガキ調整されている。14は外面に単節縄文（ＬＲ）が施されており、内面は磨滅している。12は外面に羽状縄文(撚りは不明)が施されており、内面は磨滅している。13は外面に間隔の粗い撚糸文(撚りは不明)が施されており、内面は磨滅している。その他の破片については第3表に一括している。

これらの縄文土器破片は胎土に繊維を含むことから、縄文時代早期末から前期初頭のものと考えられる。

石器・砥石

不定形石器(第12図１・２)：１は尖頭部の形態をもつものである。ａ面の尖頭部周縁は入念な調整剥離が施され、ｂ面には大きな調整剥離が認められる。２はａ面の１縁辺に調整剥離を施して、刃部をつくり出している。なお材質は非常に軟らかく、両面に擦痕が認められる。

磨製石斧（第12図３）：平面形はほぼ直方形に近いもので、胴部側縁・頭部・刃部は直線的で断面形は板状である。全体的に研磨されており、製作時の研磨擦痕と考えられる痕跡が認められる。また、斧頭部は敲打痕が認められ、刃部も欠損している。

砥石(第11図17)：断面形が不整の五角形で、大部分は表面が風化して、使用痕は不明である。研磨面が若干残存しており、用途は明らかでないが、一応砥石に含めておく。

Ⅳ．考　　察

出土遺物と竪穴住居跡の年代について

出土遺物としては、土師器・須恵器・縄文土器等があるが、図示できた遺物は少なく、ほとんどが破片資料である。ここでは、縄文土器については前述してあるので除き、住居跡出土の土師器と須恵器を中心として検討し、あわせて住居跡の年代についても考察したい。

第１号住居跡：土器出土状況についてみると、床面・カマドから土師器甕と須恵器坏・甕が出土している。

土師器甕は製作に際してロクロを使用しており、表杉ノ入式に属すると考えられる(氏家:1957)。須恵器の坏や甕は破片資料で、全体的な器形は不明であるが、土師器とほぼ同じ年代のものと考えられる。

したがって、第１号住居跡の年代は床面とカマドからの出土土器の特徴によって、平安時代とみることができよう。

なお、堆積土から出土した土師器坏はロクロ不使用で、器形的には丸底、外面に段が巡るも

ので、技法上は外面の段から上がヘラミガキ、段から下はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。これらの特徴から土師器坏は国分寺下層式(氏家：1967)に属すると考えられる。この坏は１点だけにすぎず、他の土師器甕に共伴するとはみなし難く、平安時代の住居に混入したものと思われる。

第２・３号住居跡：第２号住居跡と第３号住居跡は重複しており、第３号住居跡が第２号住居跡を切っている。しかし両住居跡の出土土器には共通性があり、大きな時期差はみられないと考えられるので、ここでは一括してその所属年代を考察したい。

(第2号住居跡)土器出土状況についてみると、カマドから土師器坏、煙道から須恵器甕が出土している。

土師器坏はロクロ不使用で、口縁部が直線的に外傾し、内面の口縁上端部に浅い沈線が1条巡る。内外面には横ナデ調整が施されている。

(第３号住居跡)土器出土状況についてみると、土師器坏が床面・カマド・貼床下ピットから出土しており、須恵器甕は床面から出土している。

土師器坏は、内黒と非内黒に大別される。内黒土師器坏は口縁部が内弯気味に外傾し、体部に段がみられる器形で、内外面にヘラミガキが施されている。これは口縁部資料であるが、堆積土から出土した土師器坏[註)]に器形・技法上近似している。非内黒土師器坏は第２号住居跡の土師器坏と同じ特徴をもつものなので省略する。

註) これはロクロ不使用の坏で、器形的には内外面の体部中央に段が巡る丸底のもので、段から口縁部に向かって内弯気味に外傾している。外面の口縁部から段までがヘラミガキ、段の部分はナデ、段から下はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。また、床面出土の口縁部資料とは接合できなかったが、器形や技法等の点から同一個体と思われる。

第２・３号住居跡の出土土器の中で、第２号住居跡の煙道および第３号住居跡の床面から出土した須恵器甕は小破片で全体的な器形は不明なので、検討から除外する。内黒土師器坏は第３号住居跡から出土したものであるが、これは観音沢遺跡(加藤・阿部：1980)、日向前横穴古墳（早坂：1981）出土土器と類似している。観音沢遺跡の土師器坏Ⅱ$_1$類の所属年代は奈良時代の前半期、日向前横穴古墳の土師器坏は多賀城創建期以前に所属するとされていることから、本遺跡の内黒土師器坏は８世紀初頭～奈良時代前半に所属すると考えられる。非内黒土師器坏

第４表　竪穴住居跡一覧表

住居跡	確認面	重複	平面形	規模	壁（残存高）	床面	周溝	柱穴	カマド					貯蔵穴状ピット
									付設場所	長軸方向	燃焼部構築方法	煙道の傾斜	煙出しピット	
1 住	J～L－30～32区 地山面	無	方形？	西辺 約5.5m 南辺 約4.9m	地山（西壁で約60cm）	地山	有 ほぼ全周？	2残存	南壁の中央やや東寄り	N－20°－E	粘土と角礫			
2 住	I～K－24～26区 3住床面下	有 3住より古い	長方形	4.5m × 3m （西辺）（北辺）	地山（北・西壁で10～16cm）	掘り方埋土	有 全周		西壁の中央やや北寄り	N－70°－W	地山掘り込み			
3 住	I～K－24～26区 地山面	有 2住より新しい	方形？	西辺 約3.7m 北辺 約4m	地山（西壁で10～30cm）。	貼床			西壁の中央南より	N－70°－W	地山掘り込み＋粘土		有 ？ 径約40cm	北西隅

は第２・３号住居跡のカマドから出土したものであるが、これは関東地方の真間式に類似するもので、８世紀前半のものと推定される(本書所収御駒堂遺跡参照)。

また、第２・３号住居跡の堆積土から出土した須恵器坏は、技法的には体部下端または下半から底部全面にかけて回転ヘラケズリによる再調整が施されている。この須恵器坏は、本遺跡の北東約2.5㎞の地点にある、８世紀初頭から前半[註1)]に所属すると考えられている大和町鳥屋窯跡群三角田南地区(東北学院大考古研：1975)出土の須恵器坏に酷似しており、この窯で焼成された可能性が強い。[註2)]また、住居外の堆積土からは、リング状つまみを有する須恵器蓋が出土してあり、これも三角田南地区出土のものに非常に類似している。

以上のように、これらの土器群はいずれも８世紀前半頃のものと考えられる。したがって、第２・３号住居跡の年代は８世紀前半頃と推定される。

註１）桑原・辻氏は、「長根窯跡群Ⅲ」・1976で鳥屋窯跡群の年代を８世紀初頭から前半に位置づけている。

註２）大和町鳥屋窯跡群三角田南地区の発掘参加者である山田稔氏の御教示を得た。

Ⅴ．まとめ

１．原前南遺跡は富谷町南部に位置する５つの樹枝状小丘陵の中で、板坂から原に向かってのびる小丘陵の北端部にあたり、河岸段丘面上に立地している。

２．調査によって発見された遺構は竪穴住居跡３軒である。この住居跡の所属時期については第１号住居跡が平安時代、第２・３号住居跡は８世紀前半に属すると考えられる。そして、この第２・３号住居跡のカマドから出土した土師器坏に、関東地方の真間式に類似するものがみられた。この他の遺物としては、縄文時代早期末から前期初頭に属する縄文土器が遺構以外の堆積土から出土した。

３．住居跡の分布や地形などからみて、今回の調査区外にも住居跡の存在が予想され、遺跡の範囲は丘陵の北端部の河岸段丘面全域が考えられる。

引用・参考文献

上田薫　他　（1980）：「新羽大竹遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』17

氏家和典　（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

氏家和典　（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期の土師器の諸問題－」柏倉亮吉教授還暦記念論文集

岡田茂弘・桑原滋郎（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究紀要』Ⅰ

岡田淳子・服部敬史他（1967・1968）：「八王子中田遺跡（資料篇Ⅱ・Ⅲ）八王子市中田遺跡調査会

加藤道男・阿部博志（1980）：「観音沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第72集

桑原滋郎・辻　秀人（1976）：「長根窯跡群Ⅲ」

國平健三他　（1979）：「上浜田遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』15

小井川和夫・手塚均（1978）：「糠塚遺跡・宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）」『宮城県文化財調査報告書』第53集

小井川和夫・小川淳一（1981）：「御駒堂遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集　本書所収

駒沢大学考古学研究室（1976）：「千葉・南総中学遺跡」『先史』10

古窯跡研究会　（1976）：「陸奥国官窯跡群Ⅲ」研究報告第４冊

白鳥良一　（1973）：「原前南遺跡・東北自動車道関係遺跡発掘調査略報（白石市～仙台市～大和町地区）」『宮城県文化財調査報告書』第31集

大和町教育委員会　（1972）：「宮城県黒川郡大和町鳥屋遺跡調査報告」

東北学院大学考古学研究部：「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告」『温故』第９号

中新田町教育委員会（1975）：「城生遺跡」『中新田町文化財調査報告書』第２集

早坂春一　（1981）：「日向前横穴古墳」『宮城県文化財調査報告書』第77集

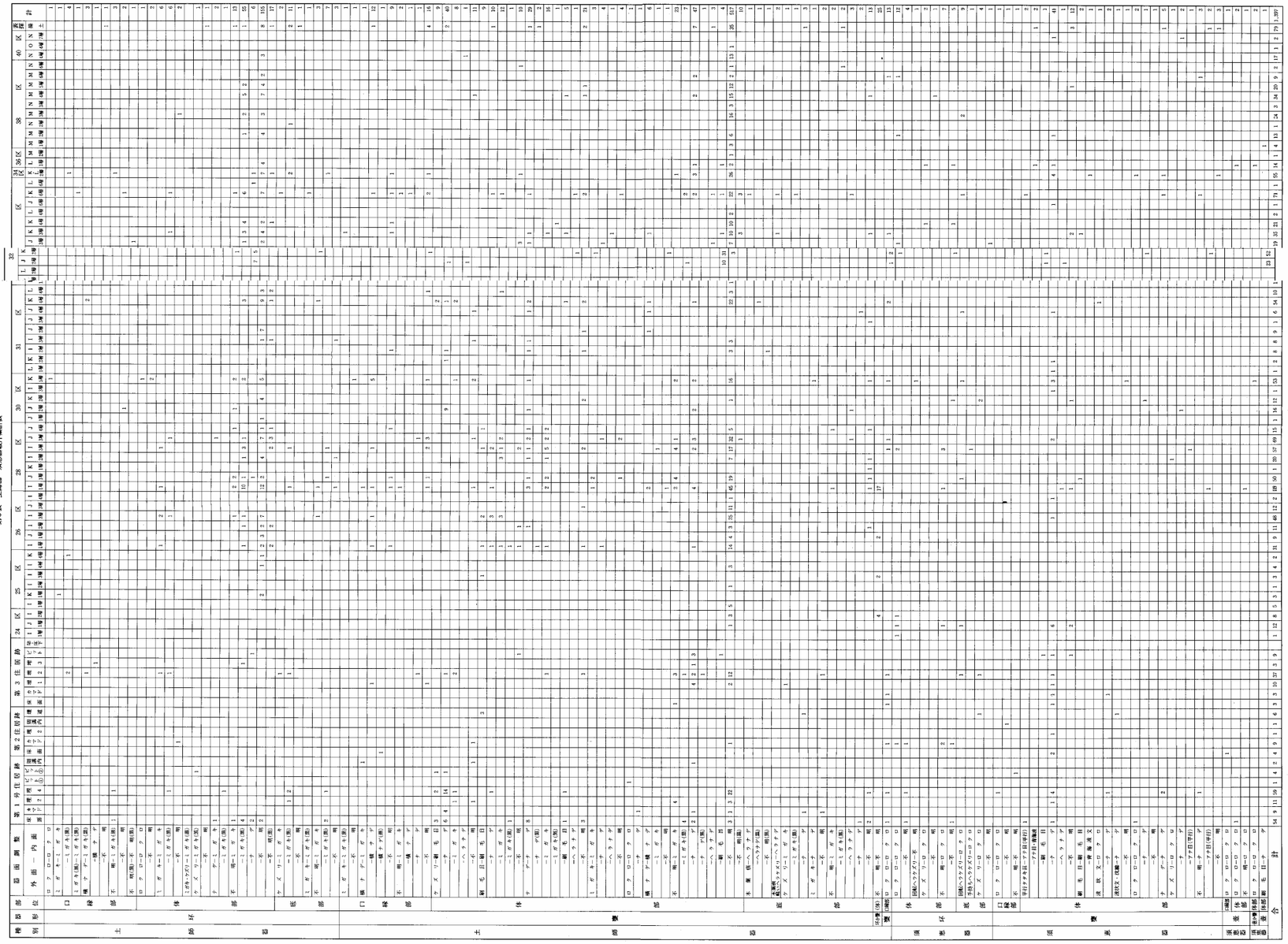
宮城県教育委員会　（1970）：「日の出山窯跡群」『宮城県文化財調査報告書』第22集

宮城県教育委員会　（1980）：「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第45集（修正版）

宮城県教育委員会　（1980）：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第47集（修正版）

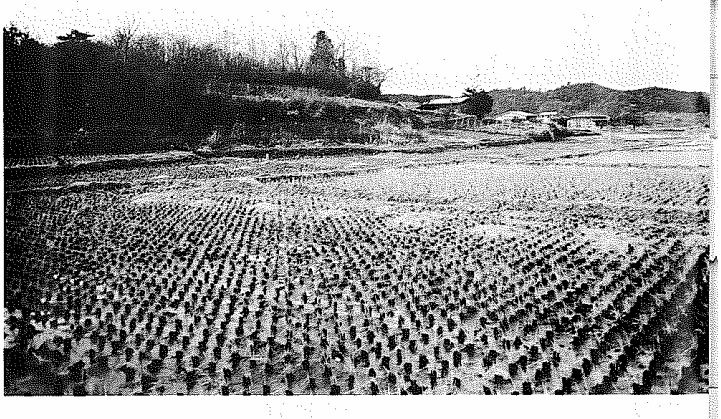
宮城県　（1979）：「土地分類基本調査　吉岡」

第5表　土師器・須恵器破片集計表



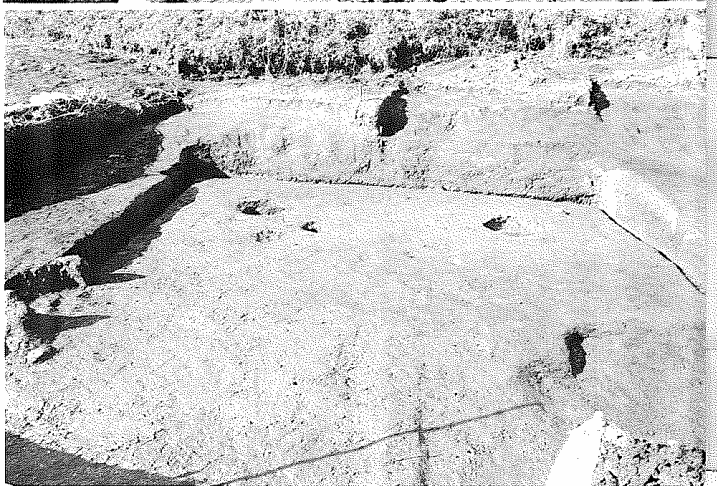
写　真　図　版

遺跡近景

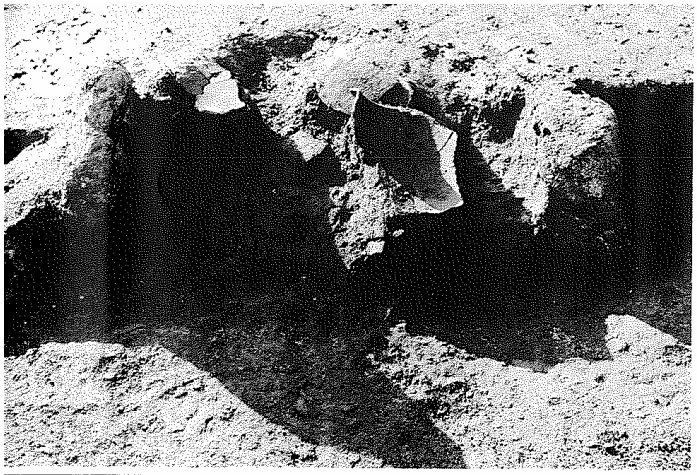


同　上

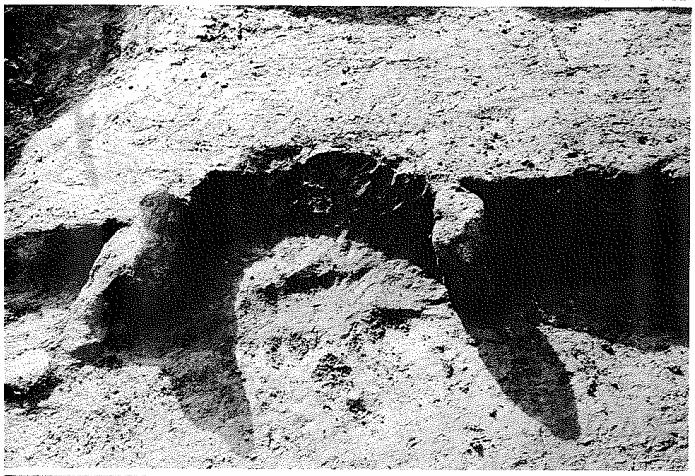
第１号住居跡



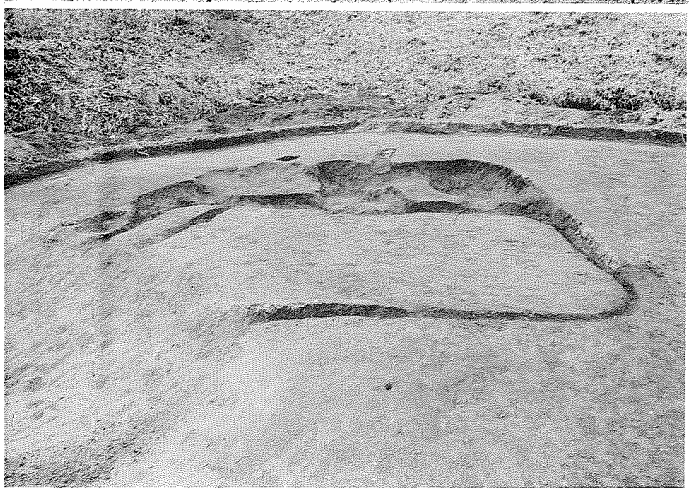
図版１



第１号住居跡
カマドと土師器 甕



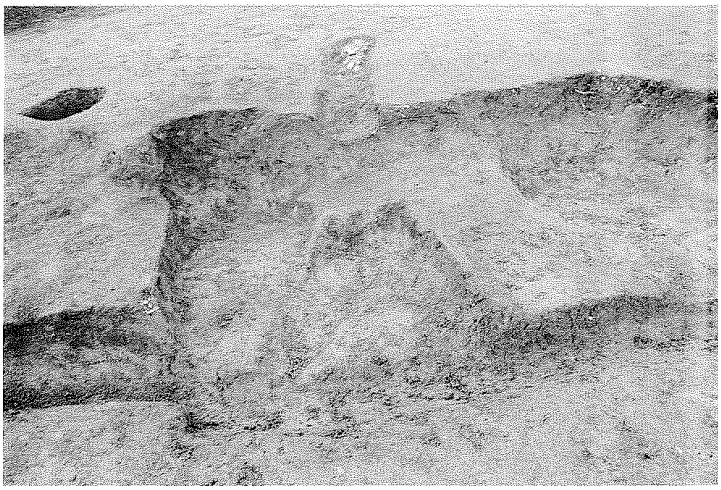
同　　上
カ マ ド



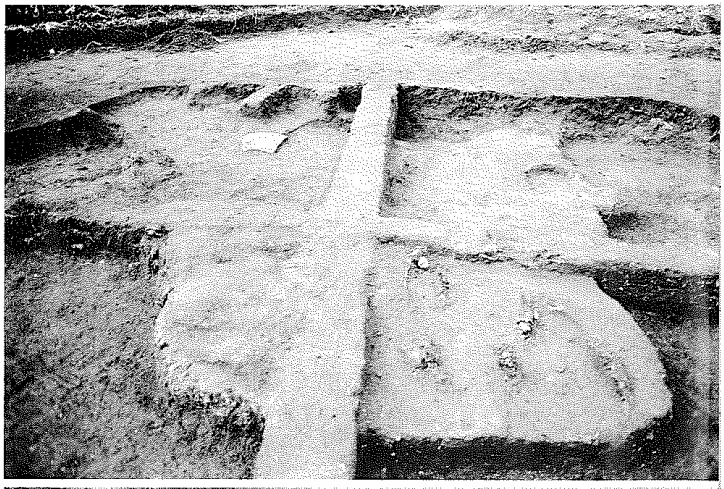
第２・３号住居跡

図版２

第２号住居跡
カ マ ド



第３号住居跡
床面の残存状況



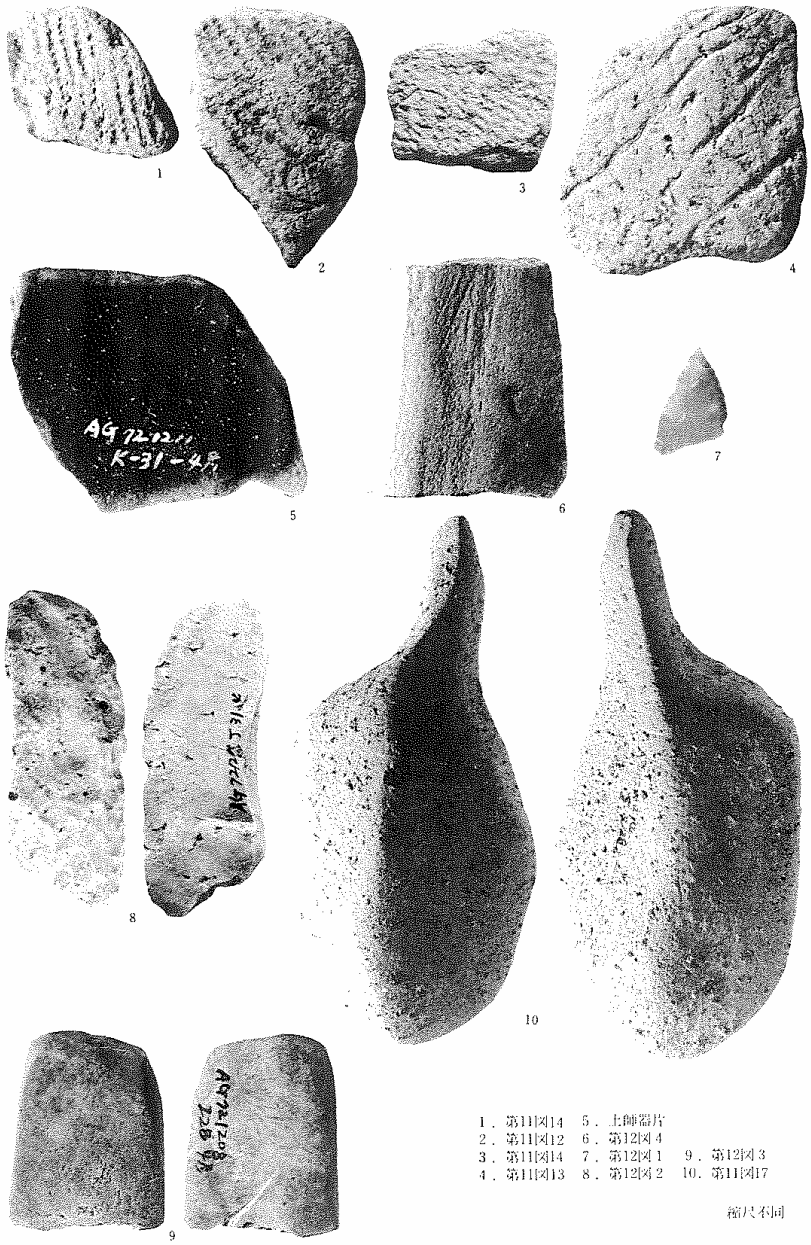
第３号住居跡
カ マ ド

図版３

1．第７図６　６．第７図１　11．第10図３
2．第９図１　７．第９図６　12．第７図７
3．第８図１　８．第７図５　13．第８図４
4．第８図２　９．第10図２　14．第11図10
5．第９図３　10．第10図１

縮尺不同

図版４　出土遺物（土師器・須恵器）



1．第11図14　5．土師器片
2．第11図12　6．第12図4
3．第11図14　7．第12図1　9．第12図3
4．第11図13　8．第12図2　10．第11図17

縮尺不同

図版５　出土遺物（縄文土器・土師器・石器・砥石）

(3) 勝負沢遺跡

目　　次

Ⅰ．位置と環境 …… 45
Ⅱ．調査の方法 …… 53
Ⅲ．調査の成果 …… 56
　基本層位とその出土土器 …… 56
　縄文時代の遺構とその出土土器 …… 128
　平安時代の遺構とその出土土器 …… 133
Ⅳ．遺物の検討 …… 135
　縄文土器 …… 135
　　第Ⅰ群土器 …… 135
　　第Ⅱ群土器 …… 148
　土製品 …… 205
　剥片石器 …… 206
　磨製石斧・打製石斧・片刃礫器・石皿・砥石 …… 236
　その他の遺物 …… 246
Ⅴ．遺構の特徴と年代 …… 248

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県黒川郡大和町鶴巣北目大崎字勝負沢
遺 跡 記 号：ＡＡ（宮城県遺跡地名表登載番号：23047）
調 査 期 間：昭和 47 年７月６日～10 月 16 日
調 査 面 積：3,000 ㎡
発 掘 面 積：950 ㎡
調　査　員：藤沼邦彦・白鳥良一・斎藤吉弘

Ⅰ．位置と環境

位置と地形環境

勝負沢遺跡は、宮城県の中央部、黒川郡大和町鶴巣北目大崎字勝負沢に所在し、大和町吉岡の中心部から南東約4kmの地点に位置している。本遺跡の所在する大和町は西は山形県、東・南・北は複雑に黒川郡・宮城郡内の市町村と隣接している。

大和町周辺の地形をみると、西側に奥羽山地が南北に走り、その東麓にはいくつかの丘陵地帯が連なっている。奥羽山地帯の中央部には船形山・泉ケ岳を中心とする船形火山地がある。この船形火山地東麓からは、いくつかの丘陵が平行して東方に延び、ゆるやかな起伏をみせている。大和町周辺では、これらの丘陵のうち、北部に加美丘陵とこれに連続する大松沢丘陵、南部に富谷丘陵とこれに連続する松島丘陵とがある。これらの丘陵間を開析しながら吉田川およびその支流(竹林川・西川・善川・鶴田川など)が東流し、流域には多くの段丘、沖積地を形成している。吉田川の上・中流域では、南岸が比較的よく段丘が発達しており、特に大郷町中村付近ではこれをみることができる。下流域では品井沼などの低湿地を含む低平な沖積地となっている。次に、吉田川の南岸・北岸の地形をみると、南岸の富谷丘陵・松島丘陵の北側斜面は比較的なだらかな傾斜をもっており、吉田川流域の段丘面へと続く。これに対して北岸の加美丘陵・大松沢丘陵の南斜面は急な傾斜となっており、対象的な地形を示している。

遺跡の位置する富谷丘陵北斜面は、吉田川やその支流(宮床川・竹林川・西川など)によって樹枝状に開析され、いくつかの丘陵群となっている。これらの丘陵の中の一つに、竹林川・西川によって開析された丘陵(標高60～100m)があり、泉市桐ケ崎付近から吉田川低地に向って延びている。この丘陵は、東端付近が東流する西川の支流によってさらに開析され、東西に長い二つの丘陵に分岐し、その間に細長い沖積地を発達させている。そして、この南側の丘陵北縁に形成された段丘上に勝負沢遺跡が立地している。その段丘の中で、勝負沢遺跡が立地している部分は、東側を勝負沢、西側を具足沢によって画された舌状の台地状をしており、背後に丘陵が続き、前面は細長い沖積地となっている。

遺跡の微地形をみると、緩やかに北側へ傾斜する舌状台地で、標高は21～28mである。またこの舌状台地は、台地平坦部と周縁の緩斜面からなり、標高約25m付近をその境としている。台地平坦部と周囲の水田面(沖積地)との比高は、１～２ｍである。遺跡の現状は水田・畑地・休耕地などである。

周辺の遺跡

吉田川やその支流域には旧石器時代から中世までの各時期の遺跡が約180ケ所確認されており（宮城県教委：1981・２）、県内でも遺跡の多い地域である。大部分の遺跡は吉田川流域の段丘・丘陵に立地し、一部沖積地にも認められる。以下、吉田川流域を中心に時代毎におもな遺跡を紹介してみる。

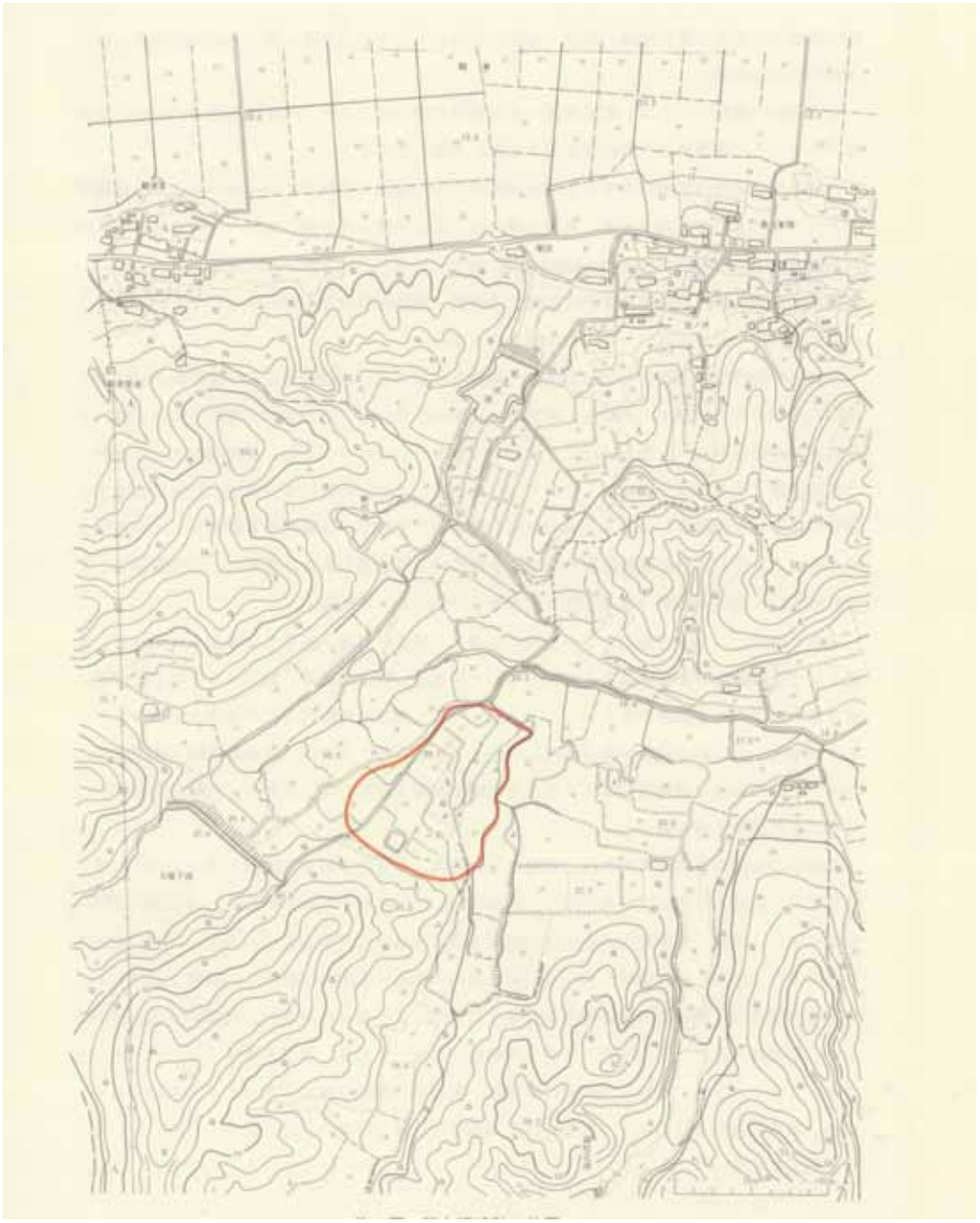
旧石器時代の遺跡は吉田川の支流である竹林川・宮床川流域の段丘上に３ケ所確認されている。長原遺跡ではナイフ形石器・石刃などが発見されている。

縄文時代になると遺跡数は約70ケ所に増加する。遺跡の大半は吉田川とその支流である善川・鶴田川の上・中流域の段丘・丘陵に集中する。

早期の遺跡としては根古遺跡がある。根古遺跡は吉田川上流の段丘上に立地し、下層の遺物包含層から貝殻腹縁文土器が出土している（高橋富雄他：1975・11）。

前期の遺跡としては石竹貝塚がある。石竹貝塚は鶴田川の支流で小迫川流域の標高35～42ｍの丘陵に立地するヤマト蜆貝からなる貝塚である。この貝塚は丘陵平坦部を取り囲むように４ケ所に点在して貝層が形成されている。遺物としては大木４～６式土器などが出土している。

中期の遺跡としては本遺跡を含め遺跡数は約19ケ所と増加する。発掘調査が行なわれた遺跡には大松沢貝塚・上深沢遺跡などがある。大松沢貝塚は鶴田川の支流で新堀川流域の標高60ｍ程の丘陵に立地するヤマト蜆貝層からなる馬蹄形の貝塚で、昭和27年に発掘調査が行なわれ、大木8ｂ式土器の一括資料が多量に出土している（加藤孝：1956・６・12）。上深沢遺跡は鶴田川が形成した舌状台地に立地し、単式炉・複式炉をもつ竪穴住居跡21軒、遺物包含層などが発見され、縄文時代中期の集落跡が明らかになった。遺物としては多量の大木９式土器・土偶・石鏃・石匙などが出土している（宮城県教委：1978・３）。このほか、中期の遺跡としては窪囲遺跡（大木８a・b式）・中見山遺跡（大木８ａ～10式）・トビ平遺跡（大木８b式）・細野遺跡（大木８ｂ～10式）・玉ケ池遺跡（大木８ａ式）・安楽院遺跡（大木８a～10式）・古屋敷遺跡（大木８ｂ～10式）・台ケ森遺跡（大木８b式）・一の坂遺跡（大木10式）・金谷遺跡（大木７～10式）奥田金沢遺跡（大木10式）などがある（高橋富雄他：1975・11）。また、この図版外の吉田川上流の丘陵に立地する嘉田神遺跡・下原田遺跡などがあり、大木８a・b式土器が出土している。このように、本遺跡周辺には縄文時代中期中葉（大木８b式）の遺跡が数多く分布しており、これらの近接した遺跡と密接なかかわりをもちながら人々の生活が営まれたと推測される。後、晩期になると中期に比べ遺跡数は少なくなる。後期の遺跡には金取遺跡・小沓掛Ｂ遺跡・石竹貝塚などがある。吉田川上流の段丘に立地する金取遺跡は昭和54年に発掘調査が行なわれ、遺物包含層が発見された（小野寺祥一郎：1980・３）。遺物としては後期前葉の土器・土製品・石製品などが出土した。晩期の遺跡には別所遺跡・古屋敷遺跡・窪囲遺跡などがある。後・晩



期の遺跡は吉田川や善川流域の段丘・丘陵に立地しているものが多いが、その性格が明らかにされたものは少ない。

弥生時代の遺跡としては、要害遺跡・深谷遺跡が知られており、弥生時代特有の石包丁が発見されている。両遺跡とも吉田川北岸の丘陵に立地している。

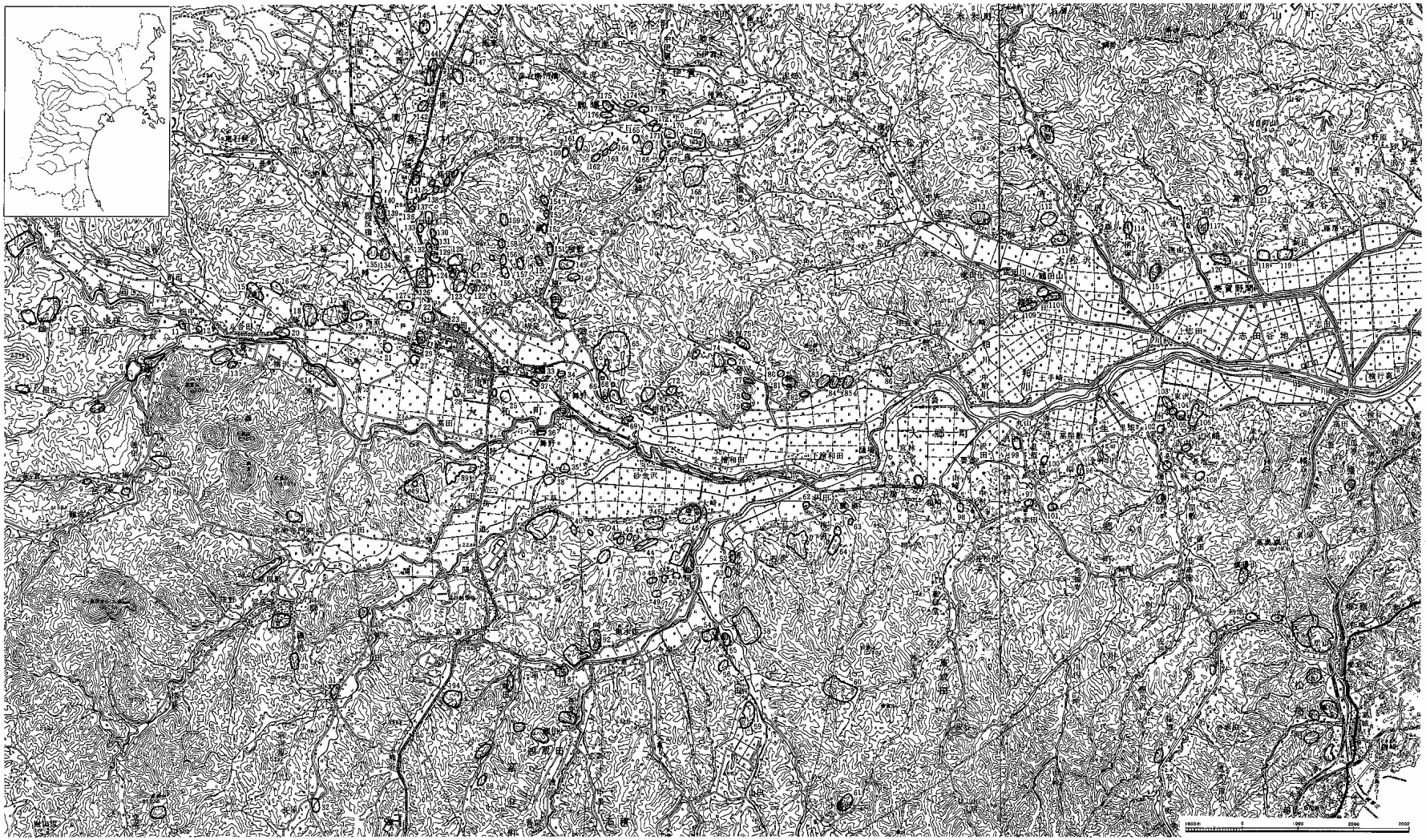
古墳時代の遺跡は吉田川の中・下流域南岸の段丘や丘陵に立地しているものが多い。発掘調査されたものとしては諏訪古墳・鳥屋八幡古墳（東北学院大考研部：1972・３）などの中・後期の高塚古墳や別所横穴古墳群(高橋富雄他:1975･11)などの終末期の横穴古墳がある。さらに、吉田川北岸の丘陵にも神明古墳や大迫横穴古墳群（鹿島台町教委:1977・３）などがある。このほか集落跡などの遺跡については不明な点が多い。

奈良･平安時代の遺跡としては集落跡･窯跡などがある。古墳時代に比べ遺跡数は増加する。遺跡の分布をみると善川・鶴田川・西川流域に集中している。その中で、善川流域では約24ケ所の遺跡が確認され、大部分は段丘・丘陵に立地しているものが多い。発掘調査された遺跡には亀岡遺跡（東北学院大考研部：1978･10）がある。これ以外では西川流域の台地に立地する原前南遺跡(本書所収)がある。この他にも包含地とされている遺跡が多数あり、その性格が明らかにされていないが集落跡がかなり含まれている可能性もある。さらに、須恵器窯として知られている鳥屋窯跡群（東北学院大考研部:1975･３）がある。

中世の遺跡としては吉田川やその支流の丘陵上に城館・経塚・塚などが確認されている。城館としては御所館(宮城県教委:1975･３)・八谷館(宮城県教委:1973･３)などの中世に属すると考えられる館跡が多く存在し、土塁･空堀･掘立柱建物跡などの遺構が検出されている。経塚としては館山経塚(藤沼邦彦:1975･３)がある。さらに、日光山遺跡(斎藤吉弘:1981･９)からは火葬施設と考えられる方形塚が発見されている。しかし、当時の集落跡についてはまだ不明な点が多い。

各時代の変遷をみると縄文時代、奈良・平安時代、中世の３時期に遺跡の集中がみられる。縄文時代の遺跡の立地している場所は、吉田川本流やその支流である善川・上・中流域の段丘・丘陵が多い。奈良・平安時代の遺跡は吉田川本流にはほとんど分布しておらず、それに対応するかのように善川･西川流域に集中し、特に善川の段丘･丘陵には数多くの遺跡が認められる。

中世の遺跡で、館跡は吉田川両岸の丘陵上に立地しているものが多い。館跡の立地条件をみると、街道筋にあり、また周囲には広い沖積地が広がっており、視界がきくなどの点があげられる。このことから、当時この周辺は軍事的・政治的に重要な地域であったことが知られる。以上、勝負沢遺跡周辺の段丘・丘陵には旧石器時代以降各時期の遺跡が教多く存在していることが明らかになった。



第２図　勝負沢遺跡と周辺の遺跡（国土地理院発行 1/5万「吉岡・松島」を複製）

第1表　周辺の遺跡Ⅰ

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	**勝負沢遺跡**	段丘	集落跡	縄文(中)・平安	45	寺東遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安
2	日水遺跡	丘陵	包含地	縄文	46	北目大崎館跡	丘陵	城館	中世
3	細野遺跡	丘陵	包含地	縄文	47	天神館跡	丘陵	城館	中世
4	古屋敷遺跡	丘陵	包含地	縄文(中晩)	48	大崎窯跡	丘陵斜面	窯跡	奈良・平安
5	根古遺跡	段丘	集落地	縄文(中～晩)	49	鳥屋窯跡	丘陵斜面	窯跡	奈良・平安
6	トビ平遺跡	丘陵	包含地	縄文	50	鳥屋八幡古墳	丘陵中腹	円墳	古墳(後)
7	王ケ池遺跡	段丘	包含地	縄文(中)・奈良・平安	51	町場遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
8	台ケ森遺跡	段丘	包含地	縄文(中)	52	清水谷A遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
9	立輪遺跡	段丘	包含地	縄文・平安	53	清水谷B遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
10	四十八滝遺跡	丘陵	包含地	縄文(中)	54	十王沢遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
11	金取遺跡	段丘	包含地	縄文(中～晩)	55	広畑遺跡	丘陵	包含地	縄文・奈良
12	仁和多利遺跡	段丘	包含地	縄文(中)	56	太田遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
13	麓遺跡	丘陵麓	包含地	縄文	57	泉館跡	丘陵	城館	中世
14	窟囲遺跡	段丘	包含地	縄文(中・晩)	58	佐和城跡	丘陵	城館	中世
15	山沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文・平安	59	小谷城館跡	丘陵	城館	中世
16	瀬戸原遺跡	丘陵	包含地	縄文	60	小屋館跡	丘陵	城館	中世
17	中峯A遺跡	丘陵	包含地	縄文	61	小鶴沢館跡	丘陵	城館	中世
18	中峯B遺跡	丘陵	包含地	縄文・平安	62	郷の目囲古墳	台地	円墳	古墳(後)
19	一の坂遺跡	丘陵	包含地	縄文(中)・平安	63	真山古墳	丘陵麓	円墳	古墳(中)
20	童子沢遺跡	自然堤防	包含地	縄文	64	八津八館跡	丘陵	城館	中世
21	南金谷遺跡	台地	包含地	縄文	65	御所館跡	丘陵	城館	中世
22	中興寺遺跡	台地	包含地	縄文(晩)	66	八谷館跡	丘陵	城館	中世
23	安楽院遺跡	台地	包含地	縄文(中・後)	67	八谷古城跡	丘陵	城館	中世
24	糸繰遺跡	台地	包含地	縄文	68	新田古墳	丘陵中腹	円墳	古墳
25	一里塚遺跡	台地	包含地	縄文	69	相川堤防遺跡	河川敷	包含地	縄文・奈良・平安
26	麓城跡	丘陵	城館	中世	70	熊野遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安
27	車遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安	71	上ノ山遺跡	丘陵	包含地	平安
28	天皇寺遺跡	台地	包含地	平安	72	塚越遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安
29	吉岡古館跡	台地	城館	中世	73	新坂囲遺跡	台地	包含地	縄文(中)
30	磯ケ沢遺跡	丘陵	包含地	旧石器	74	要害館跡	丘陵	城館	中・近世
31	小野B遺跡	丘陵端	包含地	旧石器	75	斎の前遺跡	台地	包含地	縄文(中・晩)・平安
32	長原A遺跡	谷底平野	包含地	旧石器	76	要害遺跡	丘陵麓	包含地	縄文・弥生・奈良
33	西浦田遺跡	台地	包含地	平安	77	竹沢A遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
34	古川遺跡	自然堤防	包含地	奈良・平安	78	竹沢B遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
35	上舞野A遺跡	自然堤防	包含地	縄文・奈良・平安	79	竹沢C遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
36	上舞野B遺跡	自然堤防	包含地	奈良・平安	80	黒川景氏の墓塔	丘陵頂	墳墓	中世
37	柴崎遺跡	丘陵麓	包含地	奈良	81	古館跡	丘陵	城館	中世
38	下草古城跡	自然堤防	城館	中世	82	窟薬師磨崖仏	丘陵麓	磨崖仏	中世
39	鶴巣館跡	丘陵	城館	中世	83	西館跡	丘陵	城館	中世
40	追遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安	84	中楯館跡	丘陵	城館	中世
41	日光山遺跡	丘陵麓	塚跡	中・近世	85	東館跡	丘陵	城館	中世
42	別所遺跡	丘陵中腹	包含地	縄文(晩)	86	神明囲古墳	丘陵中腹	円墳	古墳(後)
43	別所横穴古墳群	丘陵中腹	横穴古墳	古墳後期	87	原前南遺跡	丘陵麓	集落跡	奈良・平安
44	別所遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安	88	菅ノ沢遺跡	丘陵麓	包含地	平安

第2表　周辺の遺跡Ⅱ

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
89	馳取館跡	丘陵	城館	中世	133	平林遺跡	台地	包含地	縄文・奈良・平安
90	門前城跡	丘陵	城館	中世	134	亀岡遺跡	台地	集落跡	奈良・平安
91	館山経塚	丘陵頂	経塚	室町	135	亀岡古墳	台地	古墳	古墳
92	大童館跡	丘陵	城館	中世	136	栃木A遺跡	台地	包含地	縄文
93	奈良木館跡	丘陵	城館	中世	137	栃木B遺跡	台地	包含地	奈良・平安
94	南楯館跡	丘陵	城館	中世	138	栃木C遺跡	台地	包含地	縄文
95	熊野館跡	丘陵	城館	中世	139	水沓掛遺跡	台地	包含地	縄文(晩)
96	原遺跡	台地	包含地	縄文(後)	140	水沓掛B遺跡	台地	包含地	縄文(中・後)
97	遠多見遺跡	台地	包含地	縄文(中)	141	大衡中学校東遺跡	台地	包含地	縄文
98	西浦遺跡	沖積地	包含地	古墳	142	座府遺跡	台地	包含地	奈良・平安
99	山中古墳	台地	円墳	古墳(中)	143	河原A遺跡	台地	包含地	縄文・奈良・平安
100	諏訪古墳	台地	円墳	古墳(中)	144	河原B遺跡	台地	包含地	奈良・平安
101	勢見ケ森古墳	丘陵頂	古墳	古墳(後)	145	針遺跡	台地	包含地	奈良・平安
102	阿弥陀堂遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安	146	待井沢遺跡	台地	包含地	奈良・平安
103	花楯城跡	丘陵	城館	中世	147	萱刈場遺跡	台地	包含地	奈良・平安
104	大楯城跡	丘陵	城館	中世	148	大蛸遺跡	丘陵斜面	包含地	平安
105	小屋館跡	丘陵	城館	中世	149	荒屋敷遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
106	長坂山古墳	丘陵	古墳	古墳	150	中沢囲遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
107	館森古墳	丘陵頂	古墳	古墳	151	存家遺跡	丘陵麓	包含地	縄文
108	山居沢遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安	152	蔵遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
109	新横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳	153	新道遺跡	丘陵麓	包含地	縄文・奈良・平安
110	鶴田崎横穴古墳群	丘陵	横穴古墳	古墳	154	梅木遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
111	物見山館跡	丘陵	城館	中世	155	苗代沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・奈良・平安
112	築館跡	丘陵	城館	中世	156	前沢囲A遺跡	丘陵麓	包含地	縄文・平安
113	大谷館跡	丘陵	城館	中世	157	五十沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文・奈良・平安
114	大松沢貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文(中)	158	熊沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文
115	深谷遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生	159	奥田金沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(中) 奈良・平安
116	轎谷貝塚	丘陵	貝塚	縄文(前～後) 弥生・奈良～平安	160	戸口A遺跡	丘陵麓	包含地	縄文
117	石竹貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文(前～後)	161	戸口B遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
118	大迫横穴古墳群	丘陵麓	横穴古墳	古墳(後)	162	小田西南遺跡	丘陵麓	包含地	縄文
119	八ッ穴横穴古墳群	丘陵麓	横穴古墳	古墳(後)	163	小田南遺跡	丘陵麓	包含地	縄文
120	館山館跡	丘陵	城館	中世	164	小田遺跡	台地	包含地	縄文
121	一の平遺跡	谷底平野	集落地	奈良	165	中里遺跡	台地	包含地	縄文
122	要害遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安	166	駒場館跡	丘陵	城館	中世
123	松本遺跡	丘陵麓	包含地	縄文・奈良・平安	167	鎌研裏遺跡	台地	包含地	旧石器・奈良・平安
124	松本A遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安	168	猫ノ森館跡	丘陵	城館	中世
125	寺沢遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安	169	長楯館跡	丘陵	城館	中・近世
126	大衡役場前遺跡	台地	包含地	縄文・奈良・平安	170	海老沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文(中)
127	金谷遺跡	台地	包含地	縄文(中～晩)	171	上深沢遺跡	段丘	集落跡	縄文(中)
128	古城館跡	丘陵	城館	中世中世	172	上深沢東遺跡	丘陵麓	包含地	縄文
129	大衡城跡	丘陵	城館	縄文	173	坂下遺跡	台地	包含地	奈良・平安
130	八幡神社北遺跡	丘陵麓	包含地	縄文	174	下原川遺跡	丘陵麓	包含地	平安
131	八幡神社南遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文	175	上原川遺跡	台地	包含地	縄文・平安
132	八幡神社遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文	176	須牟神社裏遺跡	台地	包含地	奈良・平安

Ⅱ．調査の方法

野外調査

調査区の設定:勝負沢遺跡の立地する舌状台地の東側を東北自動車道の路線敷が南北に貫いている。調査区の設定にあたっては遺跡の地形を考慮し、さらに開田による削平からまぬがれた地区を中心として調査を行なった。

グリッド設定は東北自動車道の幅杭ＳＴA77㎞＋00ｍとＳＴA76㎞＋80ｍを選び、両者を結ぶ線を基準線とした。ＳＴA77㎞＋00ｍを原点として、これに直交する３ｍ単位の方眼を組んだ。グリッド名は東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表わし、原点の東側をＯ区、西側をＰ区、北側を36区、南側を35区とした。

はじめに、遺跡の微地形・遺構の有無などを把握するため３～４グリッドを１単位とした東西に長いトレンチを北側から南側へ３列おきに設定した。その結果、遺構・遺物包含層等が確認された地区は、さらに拡張して調査を行なうことにした。

実測図の作成：発掘調査においては必要に応じて遺構・基本層位の平面図・断面図を作成した。住居跡の平面図は平板測量による1/20図、埋設土器遺構の平面図は簡易遣り方測量による1/10図である。さらに、各々の平面図にはレベルを記入した。住居跡・基本層位の層位を示す断面図は1/20図、埋設土器遺構は1/10図である。

遺物の取り上げ：遺物は遺物カードに遺跡名、年・月・日、出土地区名、遺構名、出土層位を記入して取り上げた。一部の遺構では基本層位の層名で遺物を取り上げたもの（埋設土器遺構）もある。

その他の記録:実測図のほか記録として写真や遺跡調査日誌がある。

写真としては遺跡遠景・遺構・基本層位・遺物の出土状況などを撮影した35㎜版のモノクロとカラーリバーサルがある。

室内調査

遺構・遺跡実測図:発掘調査で作成した実測図にはグリッド配置図（1/200）、平板測量による遺構平面図（1/20）、簡易遣り方による遺構細部図（1/10）、基本層位断面図(1/20)がある。以上の実測図はグリッド配置図・住居跡・埋設土器遺構・遺構内堆積土・基本層位の順に通し番号を付した。遺構平面図は番号の若い順に、基本層位は南側から順に番号を付した。

遺物全般：本遺跡から出土した遺物には縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・土製品・剥片石器・磨製石器・礫石器などがある。遺物は平箱で約100箱程あるが、大部分が縄文土器である。これらの遺物について洗浄→記名→接合作業を行なった。

土器・陶磁器・土製品：縄文土器は出土地区、層位毎の接合作業終了後に、全体の1/4以上残存し復元可能な資料（正面図あるいは展開図の作成できるもの）と破片資料（口縁部資料、有文・無文胴部資料、底部資料）とに分類した。その後、復元可能な資料・口縁部資料・一部の有文胴部資料・底部資料についてはバインダー17による強化処理を行なった。復元可能な資料と全ての口縁部資料は実測図もしくは拓影図を作成した。また、有文胴部資料（文様単位の明らかなもの）と底部資料については遺物包含層地区に限り、破片実測図・拓影図を作成した。正面図・拓影図は1/1、展開図は1/2で作成した。実測図・拓影図を作成できたものは出土地区・層位を記入し登録番号を付した。登録番号は原則として復元可能な資料→口縁部資料→遺物包含層地区の有文胴部資料→底部資料の順Po.1、Po.2・・・・・を付して登録した。

土製品（土偶・特殊小型土器）・土師器・須恵器・陶磁器等は原則として全体の1/4以上残存しているものを図化することにしたが、特徴ある資料であればそれ以下のものであっても実測図・拓影図を作成した。実測図・拓影図を作成できた資料については土偶・特殊小型土器・土師器・須恵器・陶磁器の順に登録番号を付した。

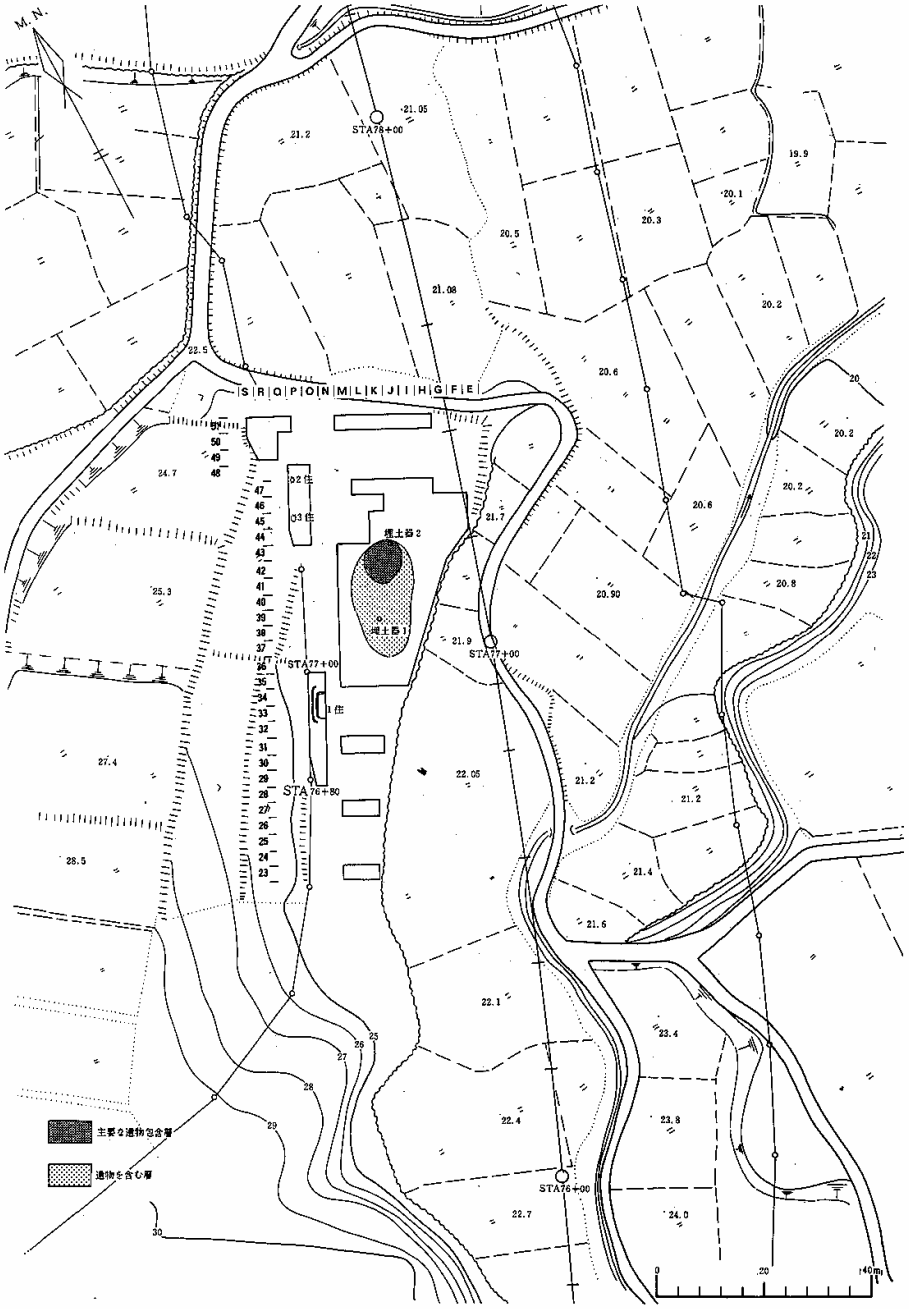
実測図・拓影図の整理：土器・陶磁器・土製品の実測図・拓影図を作成するにあたって、B_2・B_4・B_5版の用紙を使用した。B_2・B_4版の用紙は復元可能な資料・大形破片、B_5版の用紙は小形破片に使用し、図化終了後登録番号順にファイルした。特にB_2版で図化したものはファイルするのに不便なため、パンチカードを利用し、図袋の中に収納した。パンチカードの表には1/2の正面図を貼付し、出土地区・層位・登録番号を記入した。

石器の登録・観察・実測：石器は洗浄後、任意に登録番号を付し、器種、年・月・日、出土地点層位等を台帳に記入し登録した。登録を終了した石器のうち剥片方器・磨製石器・礫石器は1/1の実測図を作成した。なお、遺物の微細な観察には、オリンパス三眼鏡筒式実体顕微鏡XTRを使用した。

第３表　勝負沢遺跡出土遺物一覧

土製品	土器	縄文土器	前期初頭	口縁部：3点		
			大木７式	口縁部：4点	大木8a式	口縁部：108点
			大木8b式	復元資料：48点・口縁部：399点		
		土師器	破片資料のみ		須恵器	口縁部：2点
		陶器	胴部：1点 その他細片		磁器	底部：1点
	特殊小型土器		3点	土偶 1点	鞴の羽口	1点
石製品	剥片石器	第Ⅰ群	44点		第Ⅱ群	14点
		第Ⅲ群	42点		第Ⅳ群	4点
		その他	40点			
	磨製石斧		6点		打製石斧	4点
	礫器		1点		磨石	5点
	凹石		3点		石皿	5点
	砥石		1点			

※この他土器は、胴・底部資料が平箱60、剥片・石核が平箱3ある。


M.N.
STA78+00
STA77+00
STA76+80
STA76+00
S R Q P O N M L K J I H G F E
02住
03住
1住
堆土跡2
堆土跡1
主要な遺物包含層
遺物を含む層
0
20
40m

第３図　グリッド配置図

Ⅲ．調査の成果

基本層位とその出土土器

遺跡は舌状台地の平坦部やその周辺の緩斜面に立地している。東北自動車道の路線敷は台地東側からその東側の沢地（水田）部分を南北に縦断している。調査区内の地山面は北側、中央部では西から東へ、南側は南西から南東へ緩やかに傾斜している。さらに、東側中央部では緩やかに傾斜してきた斜面が急激に傾斜して低くなり、再び平坦になって沢地に没する。この斜面(凹地)を中心に遺物を含む層が厚く堆積していた。

層の厚さは北側平坦部では極めて薄いが、斜面になると厚くなる。表土から地山面まで基本的に5枚の層が認められた。以下、層の堆積状況･分布･遺構との関係を述べてみたい。

第Ⅰ層：暗褐色あるいは明黄褐色土層である。この層は現表土・盛土・旧表土層からなる。斜面の裾部は厚い盛土で覆われていた。出土遺物には縄文時代・古代・中世から現代に至る各時期のものが不規則な状態で発見された。いずれの遺物も小破片のものが多い。

第Ⅱ層：暗褐色土層で部分的にスコリアを含み、北側平坦部の一部を除いた発掘区全域に認められる。この層は地区によって土色が多少異なる。３～４枚の層に細分される。

北側平坦部､東南斜面上部では層は１枚で10㎝ほどの厚さがある。これ以下が地山面である。この地山面において、縄文時代の竪穴住居跡2軒、平安時代の竪穴住居跡1軒が確認された。斜面（凹地）では傾斜にそって３～４枚の層が認められ、厚い部分では80㎝ある。

出土遺物には縄文土器･石器･土師器･須恵器などがある。遺物は各層でまとまりがなく、出土状況も不規則である。

第Ⅲ層：黒褐色土層で部分的に木炭を含む。この第Ⅲ層は緩やかに傾斜してきた斜面が急激に傾斜して低くなり、再び平坦になる部分(凹地)に認められる。第Ⅲ層は以下のような特徴が認められる。

第Ⅲ層はすべて連続しているわけではない。また、黒褐色土層として同じであるが途切れる部分があり、各部分では層の特徴が必ずしも同じとは言えない。また、各々の部分では薄い単一の層であったり、層厚が大きく、複数の層に細分されることもある。第Ⅲ層以下に堆積しているという点では同じであるが、相互の関係は必ずしも明確ではない。さらに、遺物の出土状況をみるとかなりの相異がある。

以上のように第Ⅲ層の特徴を述べた。次に、第Ⅲ層の各層をＡ～Ｄと仮称し、それぞれの層の分布堆積状況を詳しく述べることにする。

Ａ層は斜面から平坦な部分に認められる。この層は狭い範囲に堆積している(第40～42－Ｊ･

K区）。

この層は一部に不規則な堆積状況がみられるほかは比較的安定している。層厚は厚い部分で20～30㎝である。縄文土器・石器が出土しているが、その量は少なく、その出土状況にまとまりは認められなかった。

B層はC層と不連続な層であるため、C層と同一層・似た層・異なる層かは区別できなかった。A層下部に堆積している点では同じである。

B層は斜面とその縁辺・斜面が再び平坦になる部分に分布している（第42－J～L区、第43－J･K区、第44－Ⅰ・Ⅰ区）。

この層は上層からの攪乱も少なく、非常に安定している。層厚は平坦になる部分がやや厚いほかは20㎝前後と一定している。層理面あるいは層中から大形の破片や復元可能な土器が多量に出土した。特に第42－J･K区、第43－K区を中心とした地区（面積20㎡）には縄文時代中期の良好な遺物包含層（大木８b式期）が形成されており、多量の縄文土器、石器がまとまって出土した。また、第43-J区のB層上面で埋設土器遺構1基が確認された。

C層は平坦な部分に認められ、その分布範囲は狭い（第41－J･L区、第40－J･K区）。

この層はほぼ水平に堆積しており、層厚は約10㎝と薄い。遺物には縄文土器･石器があるがB層と比較して遺物量が少ないが、出土状況にまとまりが認められる。

D層はB・C層の下部に堆積し、斜面の縁辺、平坦部に認められる。その分布範囲は広い（第36～39－J･K区、第40－H～K区、第41－Ⅰ～K区、第42－Ⅰ～L区）。

D層は安定した層で、１～２枚の層に細分される地区もある。層厚は20～30㎝である。遺物として縄文土器・石器がある。上層のB･C層に比べ遺物量は非常に少ない。第39－K区において、D層上面で埋設土器遺構1基を確認した。

第Ⅳ層：極暗褐色土層で部分的にスコリアを含む。この層は第Ⅲ層下部に堆積し、斜面やその周辺に分布している（第43－Ｊ・K区）。第Ⅳ層はわずかに縄文土器を含んでいる。

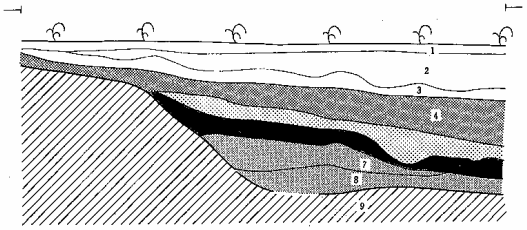
第Ⅴ層：暗褐色土層で、斜面や平坦な部分に堆積している。この層は基本的には無遺物層である。

第Ⅵ層：明黄褐色粘土層の地山である。

第４表　基本層位と遺物取り上げ層

区名 / 基本層位	第27			第31	第32	第33	第34	第35						第36				第37			第38	第39			第40				第41			
	K区	L区	M区	O区	O区	O区	O区	I区	J区	K区	L区	M区	N区	O区	J区	K区	L区	M区	J区	K区	L区	J区	J区	K区	L区	H区	I区	J区	K区	I区	J区	K区	L区
第Ⅰ層（現表土・盛土・旧表土）	1	1	1	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3
第Ⅱ層（暗褐色土層）	2 3	2 3	3						3 4 5						3 4	3 4	3 4		3 4 5	3 4 5	3 4 5	3 4 5	3 4 5	3 4 5	3 4 5	4 5 6	4 5 6	4 5	4 5	4 5	4 5	4 5	4 5
第Ⅲ層（黒褐色土層） A_1																													6	6		
第Ⅲ層（黒褐色土層） A_2																												6	6			
第Ⅲ層（黒褐色土層） B_1																																
第Ⅲ層（黒褐色土層） B_2																																
第Ⅲ層（黒褐色土層） C_1																													7	7		
第Ⅲ層（黒褐色土層） C_2																												6	6			7
※1は遺物を多量に含む層 2は遺物を少量含むかまったく含まない層 D_1																													8	8 9		
※1は遺物を多量に含む層 2は遺物を少量含むかまったく含まない層 D_2	4 5	4 5	4 5												5	5			6	6		6	6	6		7	7	7	7	6			8 9
第Ⅳ層（極暗褐色土層）																													8	8	10	10
第Ⅴ層（暗褐色土層）	6	6	6 7												6 7 8	6 7 8 9			7 8 9 10 11	7 8		7 8 9 10	8 9 10	7 8 9 10	7 8 9 10	8 9 10 11 12 13	8 9	8 9	8 9				
第Ⅵ層（地山）	8	8	8	3	3	3	3	6	6	6	6	6	6	6	10	10	10	10	12	12	12	11	11	11	11	14	14	14	14	11	11	11	11

区名 / 基本層位	第42				第43					第44					第45			第47					第48		第51							
	I区	J区	K区	L区	H区	I区	J区	K区	L区	H区	I区	J区	K区	L区	P区	K区	Q区	H区	I区	J区	K区	P区	Q区	P区	Q区	H区	I区	J区	K区	L区	M区		
第Ⅰ層（現表土・盛土・旧表土）	1	1 2 3	1 2	1	2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 3	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2	1 2	1 4 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1	1	
第Ⅱ層（暗褐色土層）	3 6 4 5	3 4 5	3 A 3 B 4 5	4 5	4	4	4	4	4	3 4 5	3 4 5	3 4	3 4		3	3 4								4	4	4							
第Ⅲ層（黒褐色土層） A_1																																
第Ⅲ層（黒褐色土層） A_2		6	6																													
第Ⅲ層（黒褐色土層） B_1		7	7				5	5																								
第Ⅲ層（黒褐色土層） B_2				7							6	6																				
第Ⅲ層（黒褐色土層） C_1																																
第Ⅲ層（黒褐色土層） C_2																																
※1は遺物を多量に含む層 2は遺物を少量含むかまったく含まない層 D_1	7 a 7 b	7 a 7 b 8	8																													
※1は遺物を多量に含む層 2は遺物を少量含むかまったく含まない層 D_2	7 c 7 d	7 c		8																												
第Ⅳ層（極暗褐色土層）	9	9	9					6																								
第Ⅴ層（暗褐色土層）	10	10	10		6 7	6 7	6 7	7 8					6																			
第Ⅵ層（地山）	11	11	11	11	11	11	11	11	11				7											5	5	5	5	5	5	5		



第43－Ｊ・Ｋ区北壁断面図

第43－Ｊ・Ｋ区

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色（――3/3）	シルト	現表土（水田耕作土）
	2	黄褐色（10YR5/8）	シルト	開田の際の盛土 ローム・ブロック
	3	暗褐色（――3/3）	シルト	旧表土（開田以前の耕作土）
第Ⅱ層	4	暗褐色（10YR4/4）	シルト	スコリアをわずかに含む。
第ⅢB層	5	黒褐色（7.5YR2/2）	シルト	良好な遺物包含層 5層として遺物取り上げ
第Ⅳ層	6	極暗褐色（7.5YR2/3）	シルト	スコリアを含む。
第Ⅴ層	7	暗褐色（7.5YR3/4）	――	
	8	暗褐色（7.5YR3/3）	――	スコリア・砂が混っている。
第Ⅵ層	9	明黄褐色（――）	粘土	地山

第41－Ｊ・Ｋ区

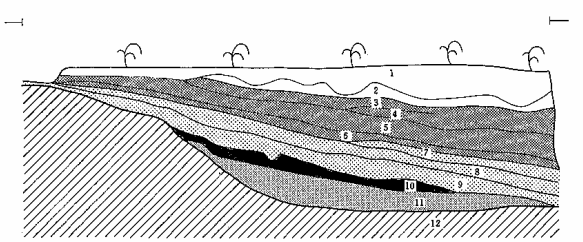
層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色（――3/3）	シルト	現表土（水田耕作土）
	2	黄褐色（10YR5/8）	シルト	盛土
	3	暗褐色（――3/3）	シルト	旧表土（開田以前の耕作土）
第Ⅱ層	4	褐色（――）	シルト	スコリアを若干含む。
第ⅢA層	5	褐色（――）	シルト	
	6	黒褐色（――）	シルト	木炭をふくむ。
	7	黒褐色（7.5YR2/3）	シルト	遺物包含層 7層として遺物取り上げ。
第ⅢB層	8	黒褐色（――）	シルト	スコリアを含む。 8層として遺物取り上げ。
第Ⅳ層	9	暗褐色（10YR2/3）	シルト	
第Ⅴ層	10	暗褐色（――）	シルト	
第Ⅵ層	11	黄褐色（――）	粘土	地山

第42－Ｊ・Ｋ区

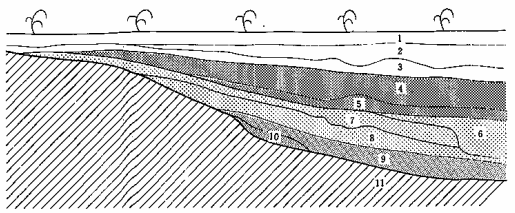
層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色（――3/3） 黄褐色（10YR5/6）	シルト	現表土（水田耕作土） 盛土
	2	暗褐色（――3/3）	シルト	旧表土（開田以前の耕作土）
第Ⅱ層	3	暗褐色（10YR2/3）	シルト	赤褐色の粒子及び礫を含む。
	4	暗褐色（10YR3/3）	シルト	かたくしまっている。
	5	暗褐色（10YR3/3）	シルト	上層に多量のスコリアを含む。
	6	暗褐色（――）	シルト	スコリアを少量含む。
第ⅢA層	7	黒褐色（――）	シルト	炭化物を少量含む。
第ⅢB層	8	黒褐色（7.5YR2/2）	シルト	良好な遺物包含層 7層として遺物取り上げ。
第ⅢD層	9	黒褐色（――）	シルト	スコリアをほぼ点在に含む。 木炭を含む。
第Ⅳ層	10	暗褐色（――）	シルト	炭化物を若干含む。
第Ⅴ層	11	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト	
第Ⅵ層	12	黄褐色（――）	粘土	地山

第35～47－Ｋ区

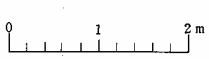
層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色（――3/3）	シルト	現表土（水田耕地耕作土）
	2	黄褐色（10YR5/8）	シルト	盛土
	3	暗褐色（――3/3）	シルト	旧表土（開田以前の耕作土）
第Ⅱ層	4	暗褐色（10YR4/4）	シルト	スコリアをわずかに含む。
	5	暗褐色（10YR3/3）	シルト	かたくしまっている。
	6	褐色（10YR4/4）	シルト	スコリアをわずかに含む。
	7	褐色（10YR5/3）	砂質シルト	スコリアをわずかに含む。
第ⅢA層	8	黒褐色（――）	砂質シルト	木炭を含む。 やわらかい。
第ⅢB層	9	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト	良好な遺物包含層
第ⅢC層	10	黒褐色（――）	シルト	木炭を含む。
第ⅢD層	11	黒褐色（7.5YR2/2）	シルト	遺物包含層
	12	黒褐色（――）	シルト	スコリアを含む。
第Ⅳ層	13	暗褐色（――）	砂質シルト	木炭、スコリアを含む。 かたくしまっている。
第Ⅴ層	14	暗褐色（7.5YR2/3）	シルト	部分的に多量の黄色土粒を含む。
	15	――		
	16	――		
第Ⅵ層	17	黄褐色（――）	粘土	地山

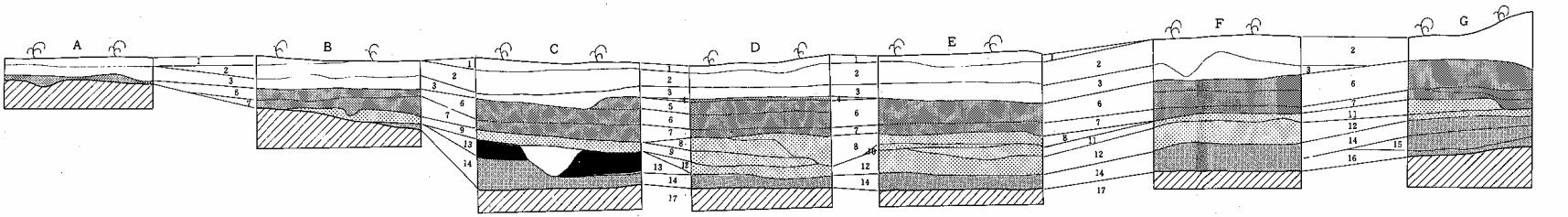


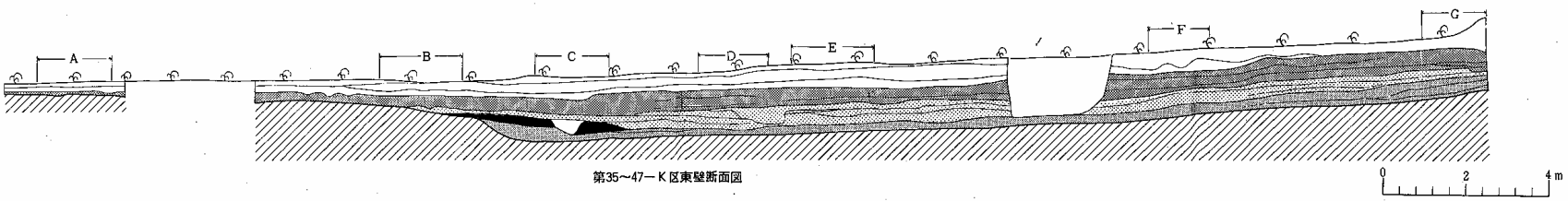
第42－Ｊ・Ｋ区北壁断面図



第41－Ｊ・Ｋ区北壁断面図

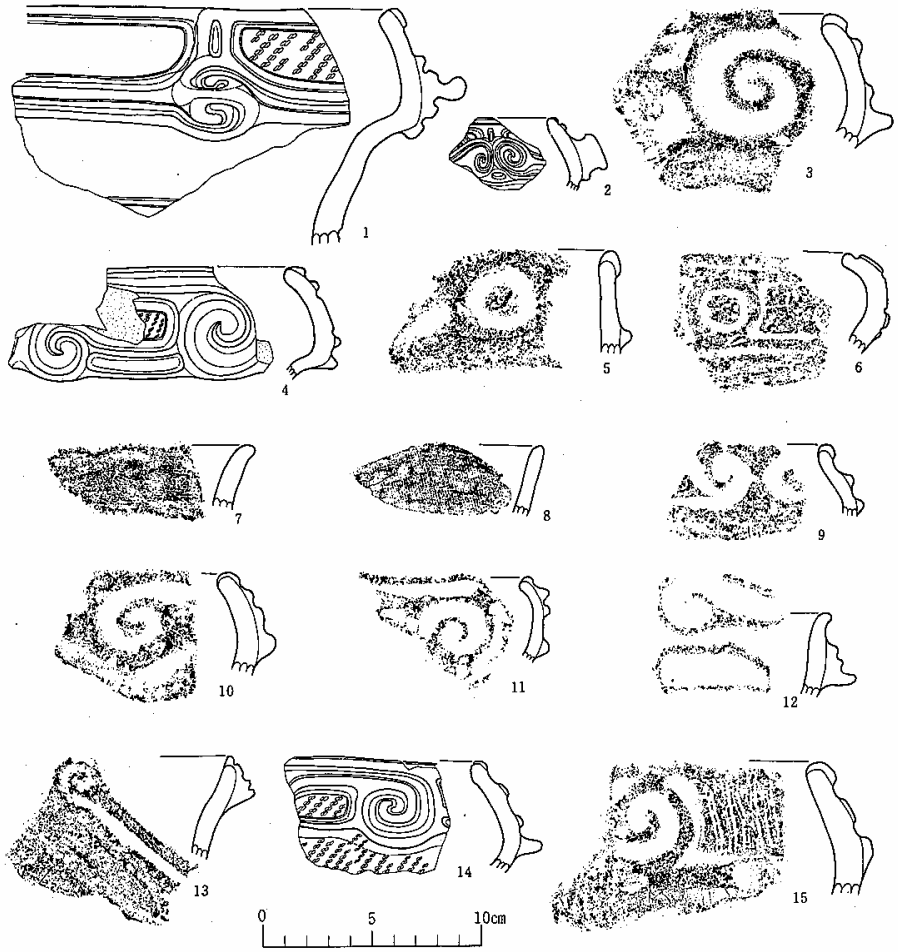






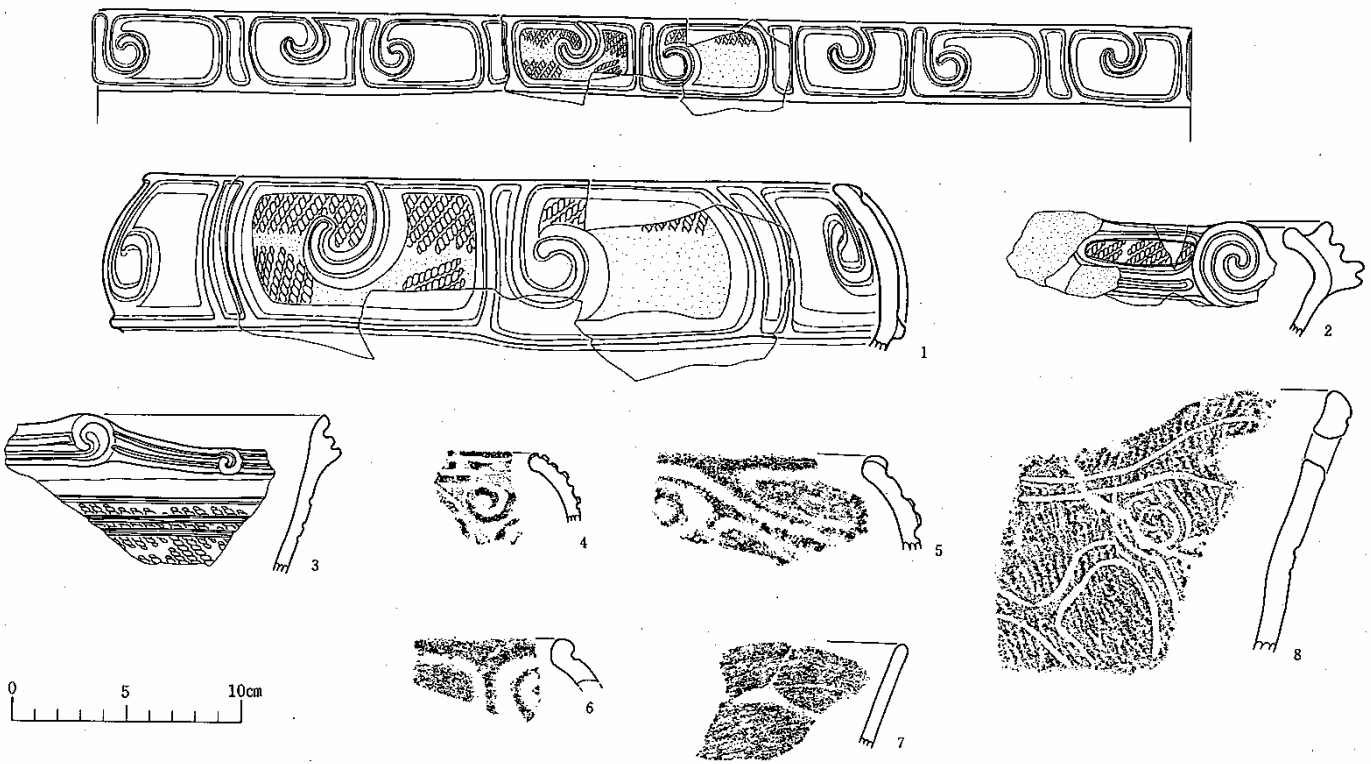
第35～47－Ｋ区東壁断面図

第４図　基本層位



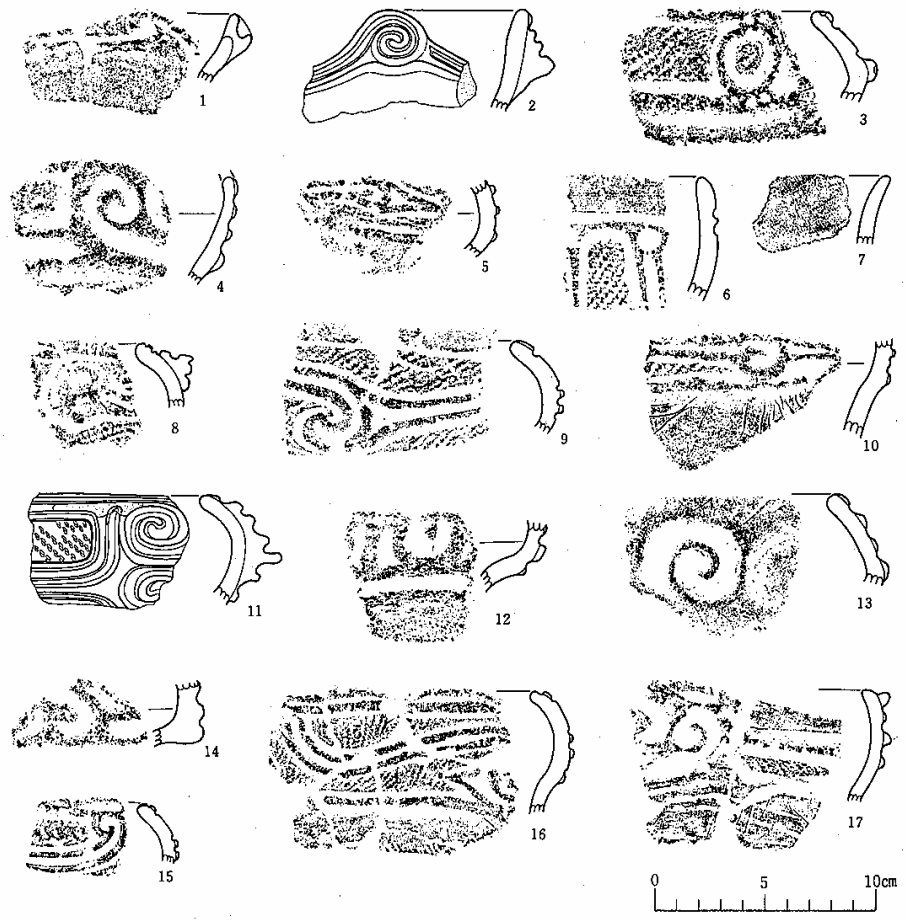
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第29-O区 第4層	深鉢A	2 b_1	口縁部：上下二個結合横位渦巻文(隆沈線文)・二本隆沈線文による縦位連結→ＲＬＲ縄文縦回転充填　頸部：無文　胴部上端：横位沈線文	Po.492	8－1
2	第29-O区 第4層	深鉢A	2 b_1	口縁部：ＲＬＲ縄文横回転→二個結合横位渦巻文(隆沈線文)・二本隆沈線文による縦位連結	Po.491	8－2
3	第29-O区 第2層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結・不明縄文	Po.490	8－3
4	第31-K区 第6層	深鉢A	2 c_2	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結・ＬＲＬ縄文横回転充填？	Po.487	8－4
5	第31-K区 第6層	深鉢C	2 b_1	口縁部：平坦な横位変形渦巻文(隆線文による円形文の横位連結)	Po.486	8－5
6	第31-L区 第4層	深鉢A	3	口縁部：ＬＲ縄文横回転→横位変形渦巻文(隆沈線文による円形文の横位連結)	Po.489	8－6
7	第31-L区 第4層	深鉢D	2	口縁部：無文・波状口縁	Po.488	8－7
8	第32-K区 第6層	深鉢D	2	口縁部：無文・波状口縁	Po.485	8－8
9	第35-J区 第7層	深鉢A	2 c_2	口縁部：横位渦巻文 (隆沈線文)各部分連結・ＬＲ縄文横回転	Po.484	8－9
10	第35-J区 第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結	Po.482	8－10
11	第35-J区 第7層	深鉢B	1 b	口縁部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結	Po.483	8－11
12	第35-K区 第5層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po.106	8－12
13	第35-K区 第0層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po.495	8－13
14	第36-K区 第5層	深鉢A	2 c_2	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結・ＲＬＲ縄文縦回転充填　頸部：ＲＬＲ縄文縦回転	Po.481	8－14
15	第36-K区 第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　櫛目状条線文充填　頸部：無文	Po.480	8－15

第５図　第29～36区出土土器



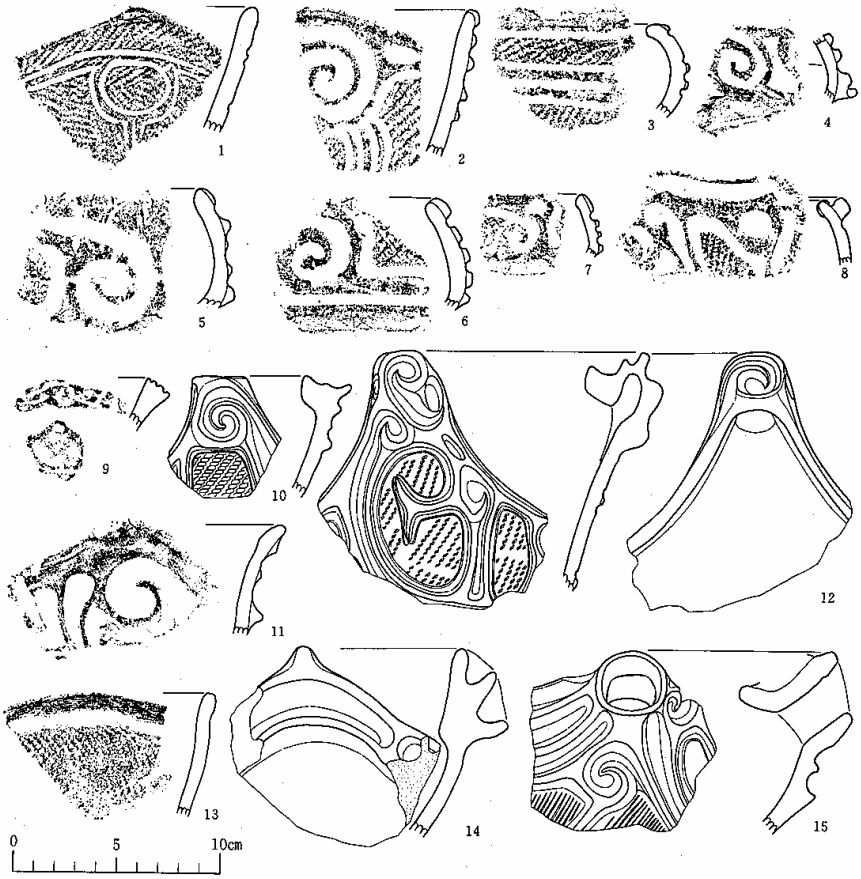
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第36－K区第8層	深鉢A	1	口縁部：LR縄文横回転→変形渦巻文(隆線文)　頸部：無文	Po.367	8－16
2	第36－K区第8層	深鉢A	2 c_1	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結→LR縄文横回転充填　頸部：無文	Po.368	——
3	第37－L区第4層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文　胴部：LR縄文縦回転→沈線文	Po.479	8－17
4	第37－K区第7層	深鉢A	2 a	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po.477	8－18
5	第37－K区第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　不明縄文　Po.352と同一個体	Po.345	8－19
6	第37－K区第9層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　不明縄文　Po.345と同一個体	Po.352	8－20
7	第37－K区第7層	深鉢D	2	口縁部：無文　波状口縁	Po.476	8－21
8	第37－K区第7層	深鉢C	5 b	口縁～胴部：LR縄文縦(斜)回転→曲流渦巻文(沈線文)各部分連結　口縁部に円窓あり	Po.478	8－22

第6図　第36・37区出土土器



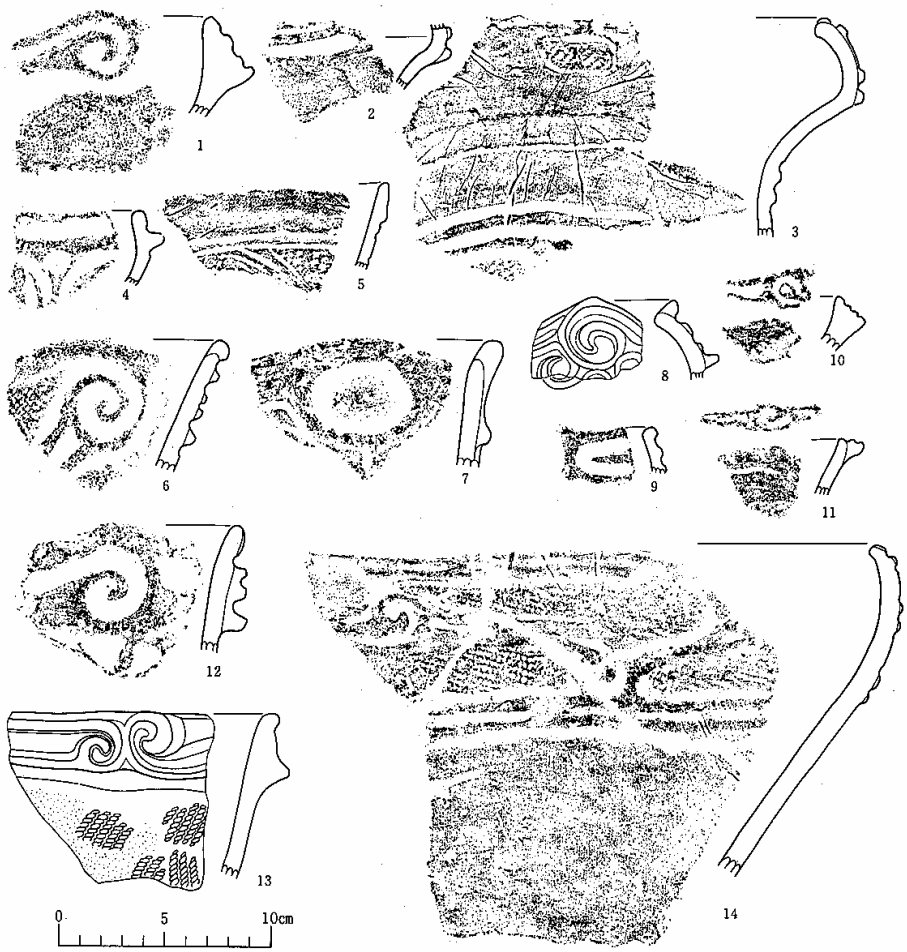
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第38－Ｊ区　第６層	深鉢Ｄ	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po. 476	9－1
2	第38－Ｊ区　第６層	深鉢Ｄ	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po. 475	9－2
3	第38－Ｋ区　第７層	深鉢Ａ	2c$_1$	口縁部：ＬＲ縄文横回転→変形渦巻文(隆沈線文による円形文の横位連結　円形刺突文)　頸部：無文	Po. 470	9－3
4	第38－Ｋ区　第８層	深鉢Ａ	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　不明縄文　頸部：無文　剥落顕著	Po. 473	9－4
5	第38－Ｋ区　第９層	深鉢Ａ	2 a	口縁部：不明縄文横回転→有軸横位渦巻文(隆沈線文)　頸部：無文	Po. 471	9－5
6	第38－Ｋ区　第９層	深鉢Ｃ	4 b	口縁部：無文　隅部：ＲＬ縄文縦回転→変形曲流渦巻文(沈線文)	Po. 472	9－6
7	第39－Ｊ区　第５層	深鉢Ｄ	2	口縁部：無文　波状口縁	Po. 464	9－7
8	第39－Ｊ区　第８層	深鉢Ａ	2 a	口縁部：ＬＲ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po. 359	9－8
9	第39－Ｋ区　第８層	深鉢Ａ	2 a	口縁部：ＬＲ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po. 357	9－9
10	第39－Ｊ区　第８層	深鉢Ａ	2 a	口縁部：ＬＲ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　頸部：無文	Po. 361	9－10
11	第39－Ｊ区　第８層	深鉢Ａ	2c$_1$	口縁部：ＲＬＲ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)上下結合連結	Po. 358	9－11
12	第39－Ｊ区　第８層	深鉢Ａ	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　頸部：無文　剥落顕著	Po. 360	9－12
13	第39－Ｊ区　第８層	深鉢Ａ	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結	Po. 330	9－13
14	第39－Ｊ区　第Ｘ層	深鉢Ａ	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　頸部：無文　剥落顕著	Po. 362	――
15	第39－Ｋ区　第６層	深鉢Ａ	2 a	口縁部：ＲＬ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po. 466	9－14
16	第39－Ｋ区　第６層	深鉢Ａ	2 a	口縁部：ＬＲ縄文横回転→有軸横位渦巻文(隆沈線文)　頸部：無文　頸下部：ＬＲ縄文縦回転	Po. 465	9－15
17	第39－Ｋ区　第６層	深鉢Ａ	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結→ＬＲ縄文縦回転充填　頸部：無文	Po. 468	9－16

第７図　第38・39区出土土器



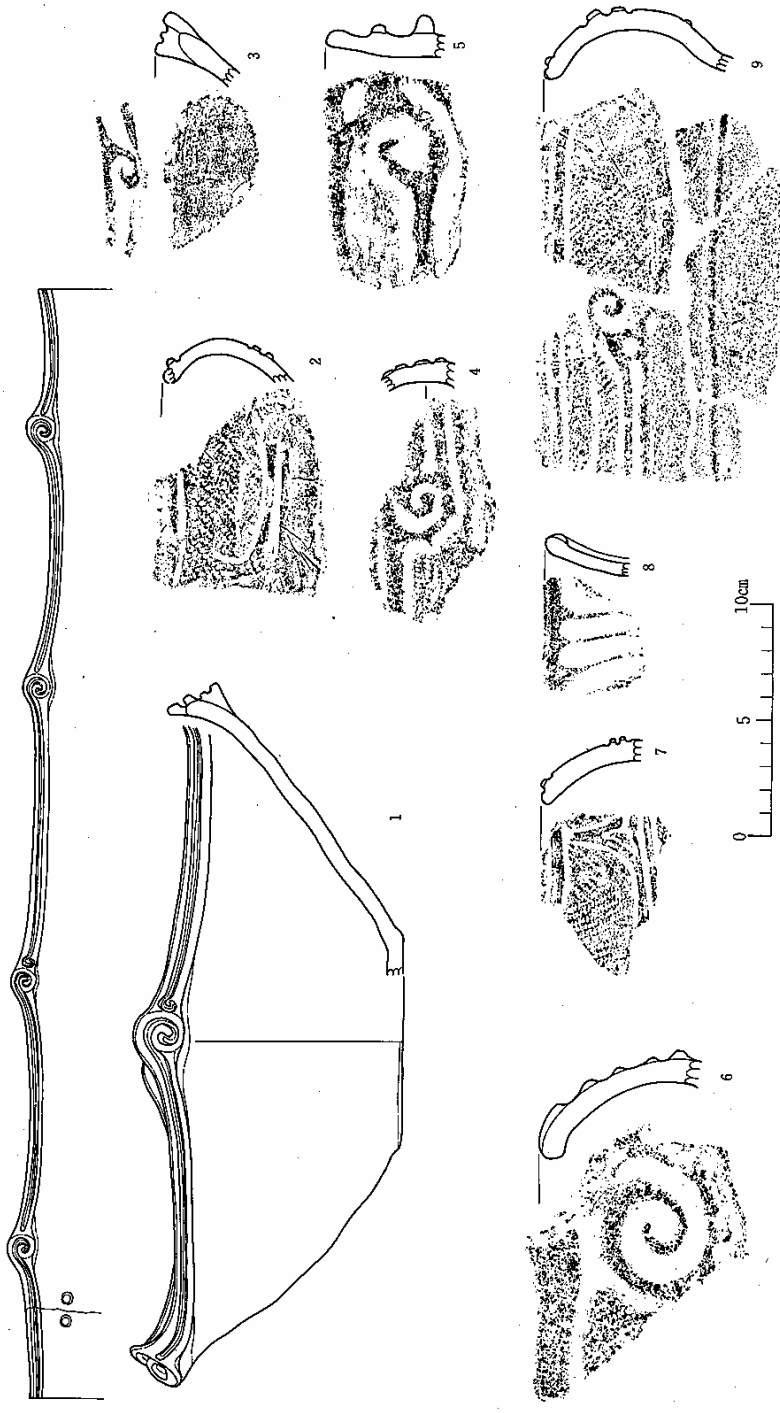
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第39－K区 第6層	深鉢C	5 a	口縁～胴部：ＬＲ縄文(口縁部：横　胴部：縦回転)→変形渦巻文(沈線文)　波状口縁	Po.469	9－17
2	第39－K区 第6層	深鉢C	5 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆線文・沈線文)一部もしくは各部分連結　ＲＬ縄文縦回転　波状口縁	Po.467	9－18
3	第39－K区 第7層	深鉢A	2 a	口縁部：ＬＲ縄文横回転→横位渦巻文？(隆沈線文)	Po.344	9－19
4	第39－K区 第7層	深鉢A	2 a?	口縁部：有棘横位渦巻文(隆沈線文)	Po.346	9－20
5	第39－K区 第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　不明縄文	Po.343	9－21
6	第39－K区 第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結→ＬＲ縄文横回転充填	Po.342	9－22
7	第39－K区 第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＲＬ縄文横回転	Po.347	9－23
8	第39－K区 第7層	深鉢B	1 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＲＬ縄文斜回転	Po.350	9－24
9	第39－K区 第7層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po.354	——
10	第39－K区 第7層	深鉢C	5 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＲＬ縄文縦回転	Po.351	9－25
11	第39－K区 第7層	深鉢D	3	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結→ＲＬ縄文縦回転充填	Po.348	9－26
12	第39－K区 第7層	深鉢C	5 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＲＬＲ縄文縦回転　空洞突起あり	Po.349	9－27
13	第39－K区 第7層	深鉢E	1 b	口縁部：無文　胴部：ＬＲＬ縄文縦回転　波状口縁	Po.355	9－28
14	第39－K区 第7層	深鉢B	1	口縁部：肥大化した渦状文(横位渦巻文の変形か？)　胴部：無文	Po.417	9－29
15	第39－K区 第8層	深鉢B	1 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結→楕目状条線文充填　注口部あり	Po.356	10－1

第８図　第39区出土土器



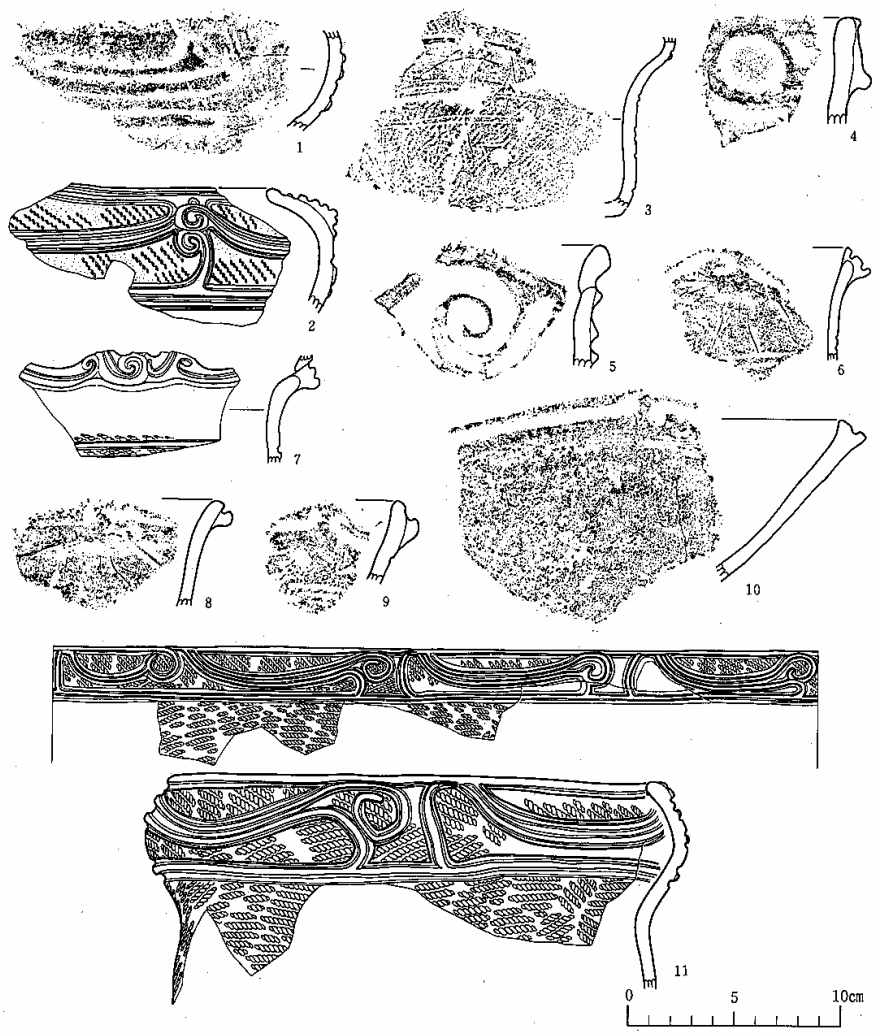
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第39－7区 第7層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁・頸部：無文	Po. 353	10－2
2	第40－H区 第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結 頸部：無文	Po. 341	―――
3	第40－H区 第7層	深鉢A	2 c	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結→LR縄文横回転充填 頸部：無文 胴部：隆沈線文→LR縄文縦回転充填	Po. 339	10－6
4	第40－H区 第7層	深鉢B	1 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結 LR縄文縦回転	Po. 340	10－3
5	第40－I区 第7層	深鉢C	4 b	口縁部：無文 胴部：RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)一部もしくは各部分連結	Po. 462	10－4
6	第40－J区 第5層	深鉢D	3	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結 LR縄文縦回転	Po. 463	10－5
7	第40－J区 第6層	深鉢C	5	口縁～胴部：変形渦巻文(隆線文による円文)・不明沈線文	Po. 404	10－7
8	第40－J区 第6層	深鉢B	1 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結	Po. 405	10－8
9	第40－J区 第7層	深鉢A	$2c_2$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結	Po. 416	10－9
10	第40－J区 第7層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁・頸部：無文	Po. 412	10－10
11	第40－J区 第7層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁・頸部：無文	Po. 414	―――
12	第40－J区 第7層	深鉢D	3	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結	Po. 331	10－12
13	第40－J区 第7層	深鉢C	$2a_2$	口縁部：横位渦巻文(隆線文) 胴部：RL縄文縦回転	Po. 332	10－13
14	第40－J区 第7層	浅鉢A	1 a	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) RL縄文横回転 胴部：無文	Po. 329	10－11

第9図 第39・40区出土土器



番号	地区・層位	器形	分類	文様	登録	図版
1	第40－J区第 7 層	深鉢B	2	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁～胴部：無文	Po. 45	10－18
2	第40－J区第 8 層	深鉢A	2 a	口縁部：L R縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po. 334	10－14
3	第40－J区第 8 層	深鉢B	2	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁～胴部：無文	Po. 338	10－15
4	第40－J区第 9 層	深鉢A	2 a	口縁部：L R縄文斜回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po. 335	10－16
5	第40－K区第 3 層	深鉢C	2 a,	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　全部分遺結　R L縄文横回転	Po. 403	10－17
6	第40－K区第 4 層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　全部分遺結　R L縄文横回転	Po. 461	11－1
7	第40－K区第 4 層	深鉢A	2 aorb	口縁部：R L縄文縦・横回転→胴部：横位渦巻文(隆沈線文)	Po. 458	11－3
8	第40－K区第 5 層	深鉢D	3	口縁～胴部：曲線渦巻文(隆沈線文)　全部分遺結　R L R縄文縦回転	Po. 460	11－2
9	第40－K区第7a層	深鉢A	2 a	口縁部：R L縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　頸部：刺突列点	Po. 310	11－4

第10図　第40－J・K区出土土器

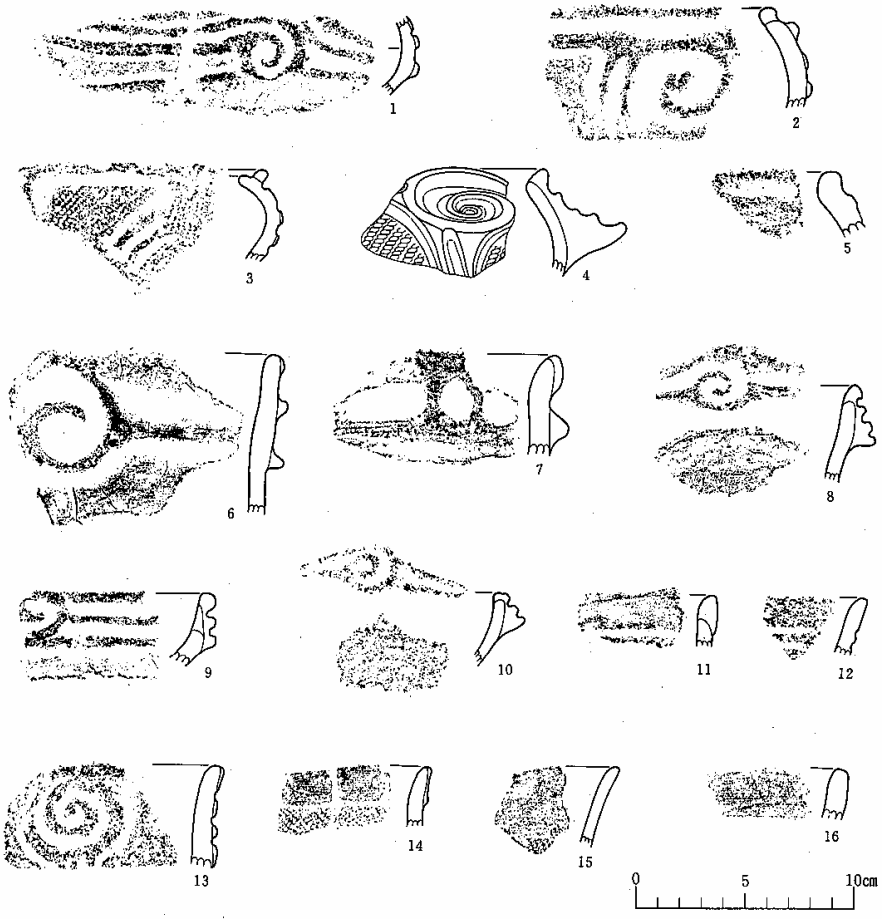


番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第40－K区 第７層	深鉢A	2 a	口縁部：ＲＬ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po.309	11－5
2	第40－K区 第７層	深鉢A	2 b_1	口縁部：ＲＬＲ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)縦位二本隆沈線文による連結　頸部：無文	Po.308	11－6
3	第40－K区 第７b層	深鉢A	2 a	口縁部：ＲＬ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　頸部：無文　胴部：ＲＬ縄文縦回転→曲流(折)渦巻文(沈線文)	Po.313	11－7
4	第40－K区 第７b層	深鉢C	2 b_2	口縁部：変形横位渦巻文(隆線文による円形文の連結)	Po.316	11－8
5	第40－K区 第７a層	深鉢C	5 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結	Po.317	11－9
6	第40－K区 第７a層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁～頸部：無文　胴部：沈線文	Po.318	11－10
7	第40－K区 第７a層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　突起あり　口縁～頸部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転→沈線文	Po.319	11－11
8	第40－K区 第７a層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁～頸部：無文	Po.320	11－12
9	第40－K区 第７層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁～頸部：無文　頸下部～胴部：ＬＲ縄文縦回転→沈線文	Po.323	11－13
10	第40－K区 第７層	浅鉢B	2	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁～胴部：無文	Po.322	11－14
11	第40－K区 第８層	深鉢A	1	口縁部：ＲＬ縄文縦・横回転→横位(曲折)渦巻文(隆沈線文)　頸～胴部：ＲＬ縄文斜回転	Po. 44	11－21

第11図　第40－Ｋ区出土土器

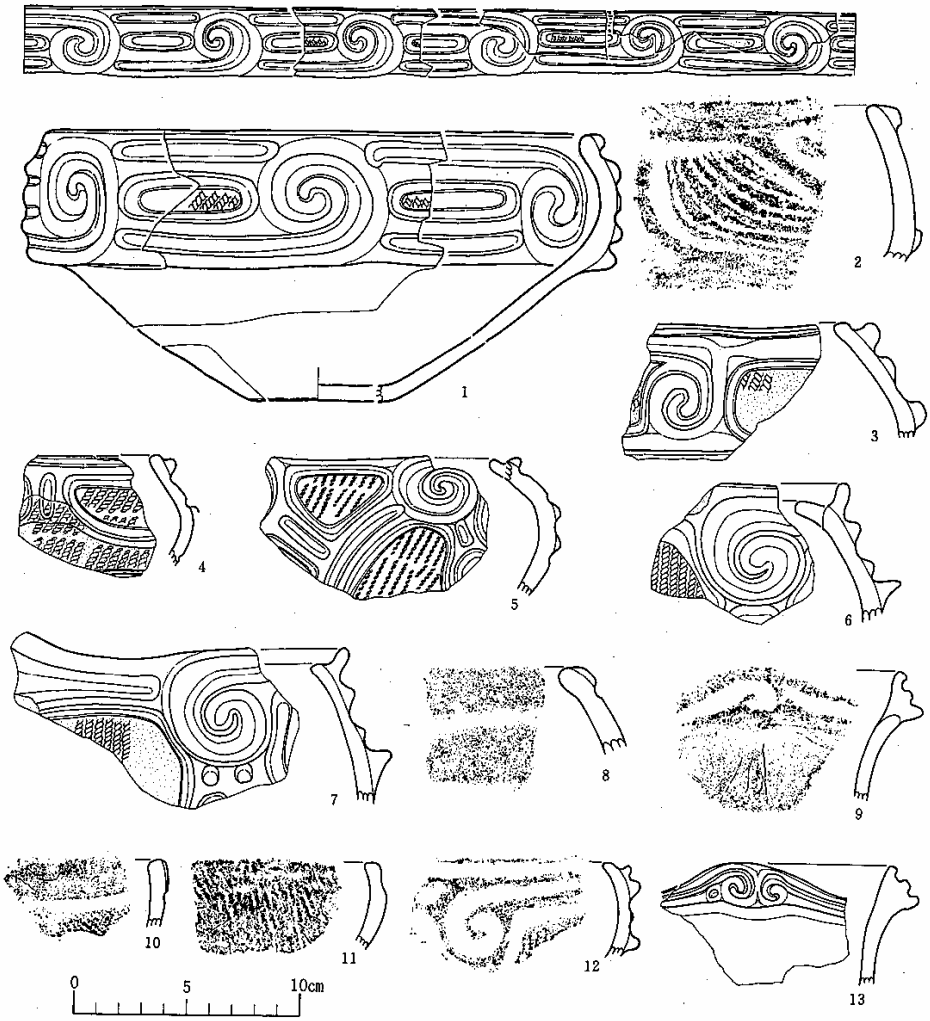
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第40－K区　第8層	深鉢A	2b$_2$	口縁部：LR縄文横回転→有軸横位渦巻文(隆沈線文)　上縁渦巻文縦位連結　頸部：無文	Po.326	11－16
2	第40－K区　第8層	深鉢A	2b$_1$	口縁部：RL縄文横回転→上下二個結合横位渦巻文(隆沈線文)　二本隆沈線文による縦位連結	Po.324	11－17
3	第40－K区　第8層	深鉢A	2b$_2$	口縁部：RL縄文横・斜回転→有軸横位渦巻文(隆沈線文)　上縁渦巻文縦位連結　頸部：無文　剥落顕著	Po.325	11－15
4	第40－K区　第8層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結→LR縄文横回転充填	Po.333	11－18
5	第40－K区　第8層	深鉢C	5b	口縁部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　不明縄文　波状口縁波頂部	Po.336	――
6	第40－K区　第8層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文　胴部：LR縄文縦回転→有軸曲流(折)渦巻文(沈線文)	Po.328	11－20
7	第41－J区　第1層	深鉢B	1b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　波状口縁	Po.301	11－19
8	第41－J区　第7層	深鉢A	2a	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　頸部：無文	Po.311	12－1
9	第41－J区　第7層	深鉢A	2a	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po.281	12－2
10	第41－J区　第7層	深鉢A	2c$_1$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　LRL縄文横回転　頸部：無文	Po.275	12－3
11	第41－J区　第7層	深鉢A	2c$_2$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　RL縄文横回転　頸部：無文	Po.280	12－4
12	第41－J区　第7層	深鉢A	2c$_2$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　不明縄文	Po.278	12－5
13	第41－J区　第7層	深鉢A	2c$_1$	口縁部：RLR縄文縦回転→横位渦巻文(隆沈線文)　二本隆沈線文による縦位各部分連結　頸部：RLR縄文縦回転	Po.274	12－6
14	第41－J区　第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　RL縄文横回転　頸部：無文	Po.282	12－7

第12図　第40－K区・第41－J区出土土器(1)



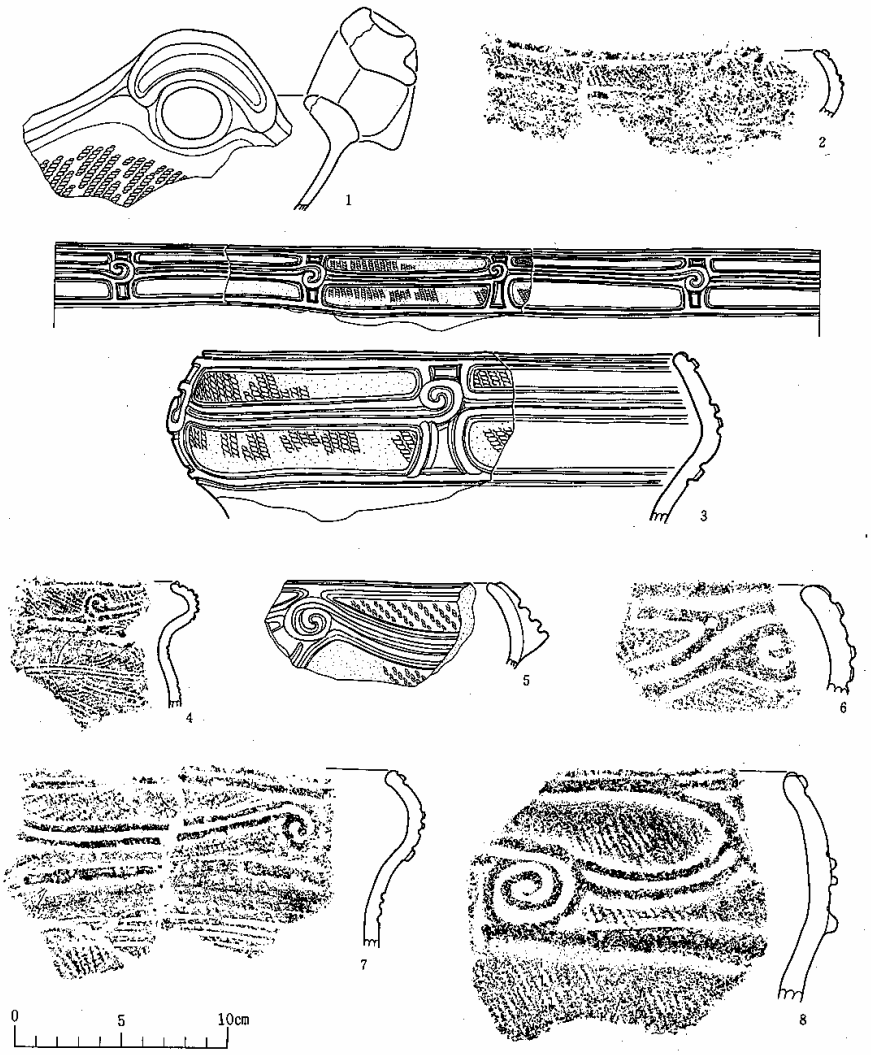
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－J区　第7層	深鉢A	2 a	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　不明縄文　頸部：無文	Po. 224	——
2	第41－J区　第7層	深鉢A	2 a	口縁部：変形渦巻文(隆線文)　不明縄文	Po. 277	12—8
3	第41－J区　第7層	深鉢B	1	口縁～胴部：RL縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)一部もしくは各部分連結	Po. 296	12—9
4	第41－J区　第7層	深鉢B	1 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)一部もしくは各部分連結　RL縄文縦回転	Po. 279	12—10
5	第41－J区　第7層	深鉢B	1	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)？	Po. 289	12—11
6	第41－J区　第7層	深鉢C	2 a,	口縁部：横位渦巻文(隆線文)	Po. 284	12—12
7	第41－J区　第7層	深鉢C	2 b,	口縁部：変形渦巻文(隆線文による円形文の横位連結)	Po. 285	12—13
8	第41－J区　第7層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po. 287	12—14
9	第41－J区　第7層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po. 286	12—15
10	第41－J区　第7層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文　剝落顕著	Po. 288	12—16
11	第41－J区　第7層	深鉢E	1 b	口縁部：一段肥厚　無文　波状口縁　胴部：不明	Po. 291	12—18
12	第41－J区　第7層	深鉢C	4	口縁部：肥厚　無文　頸部：沈線	Po. 293	——
13	第41－J区　第7層	深鉢C	5 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)　不明縄文	Po. 283	12—13
14	第41－J区　第7層	深鉢E	1 b	口縁部：一段肥厚　無文　胴部：LR縄文縦回転	Po. 292	12—19
15	第41－J区　第7層	深鉢E	2	口縁部：無文　胴部：LR縄文縦回転	Po. 418	12—21
16	第41－J区　第7層	浅鉢？		口縁部：無文　波状口縁	Po. 290	12—20

第13図　第41－J区出土土器(2)



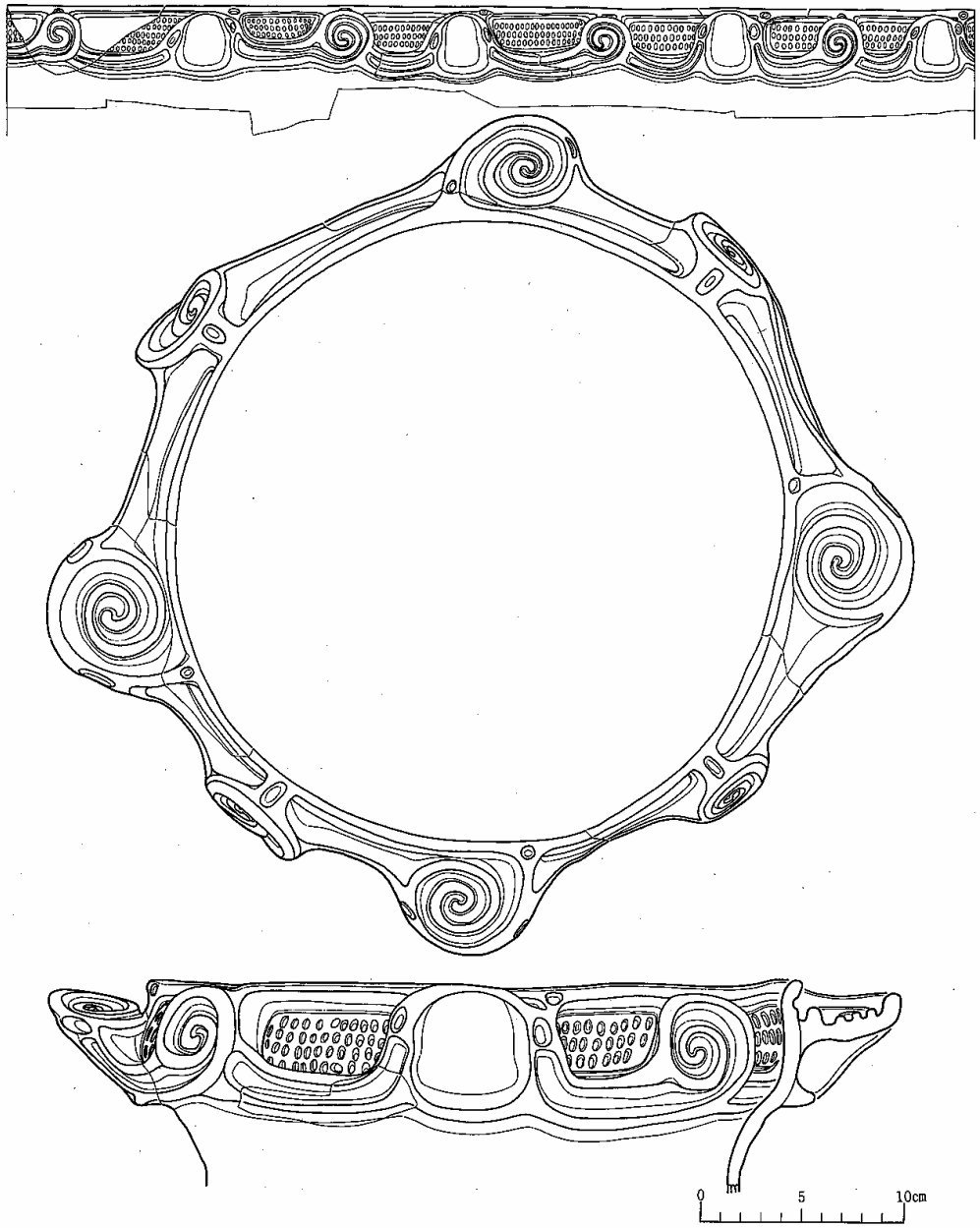
番号	地区・層位	器　形	分類	特　徴	登録	図版
1	第41－Ｊ区　第７層	浅　鉢　Ａ	１ｂ	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＬＲ縄文横回転　胴部：無文	Po.294	12－22
2	第41－Ｊ区　第８層	深　鉢　Ａ	１	口縁部：横位曲流(折)文(隆線文)　隆線文に沿うＬＲ縄文押圧充塡	Po.299	——
3	第41－Ｊ区　第８層	深　鉢　Ａ	２ｃ$_2$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＬＲ縄文横回転	Po.295	13－1
4	第41－Ｊ区　第８層	深　鉢　Ａ	２ｂ$_1$	口縁部：ＲＬ縄文縦回転→横位渦巻文(隆沈線文)　二本隆沈線文縦位連結	Po.297	13－2
5	第41－Ｊ区　第８層	深　鉢　Ｂ	１ｂ	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＲＬＲ縄文縦回転	Po.300	13－3
6	第41－Ｊ区　第８層	深　鉢　Ｂ	１ｂ	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＲＬ縄文斜回転	Po.401	13－4
7	第41－Ｊ区　第８層	深　鉢　Ｂ	１ｂ	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＲＬ縄文斜回転	Po.303	13－5
8	第41－Ｊ区　第８層	深　鉢　Ａ	３	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結？　不明縄文	Po.305	13－6
9	第41－Ｊ区　第８層	深　鉢　Ｄ	１	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po.304	——
10	第41－Ｊ区　第８層	深　鉢　Ｅ	１ｂ	口縁部：一段肥厚　無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po.306	13－7
11	第41－Ｊ区　第８層	特殊小型		口縁部内弯　口縁～胴部：ＬＲ縄文縦・斜回転	Po.559	13－8
12	第41－Ｊ区　第ｘ層	深　鉢　Ｂ	１ｂ	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＬＲ縄文斜回転	Po.298	13－9
13	第41－Ｊ区　第ｘ層	深　鉢　Ｄ	１	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po.512	13－10

第14図　第41－Ｊ区出土土器(3)



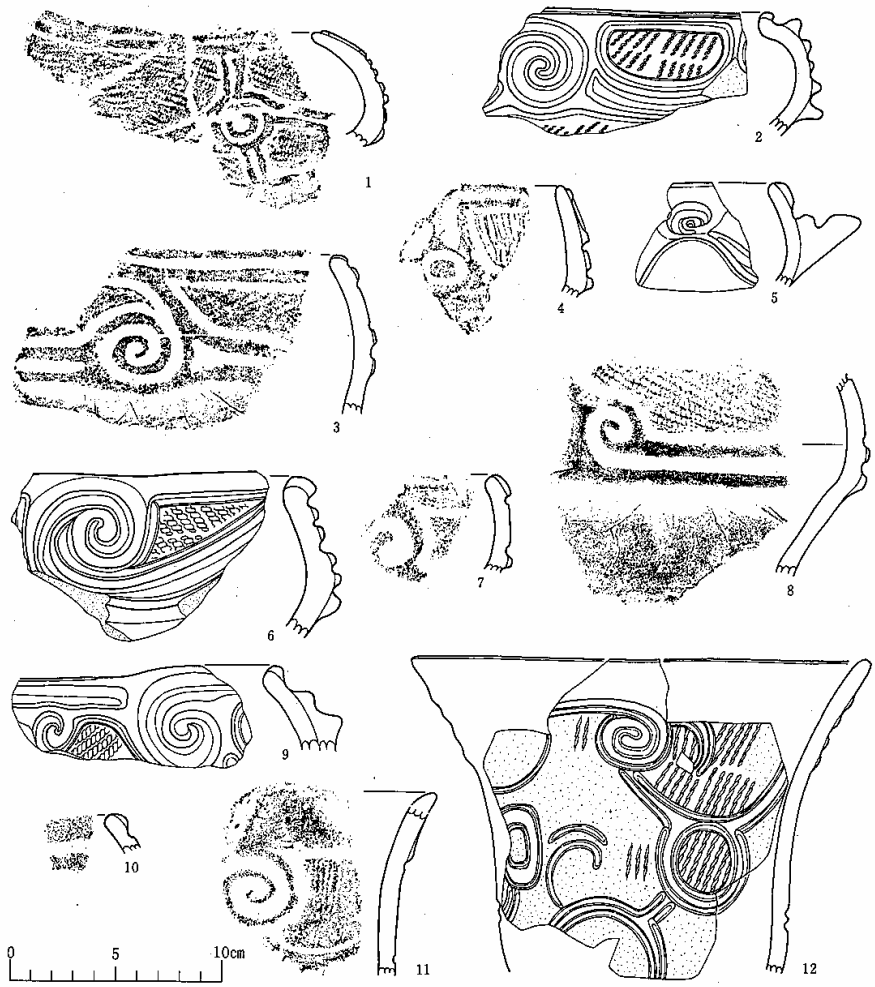
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区　第5層	浅鉢B	1	口縁部：肥大化した渦状文(横位渦巻文の変形か？)　二本隆線による連結　波状突起部に円窓　胴部：ＲＬ縄文縦回転	Po.513	13－11
2	第41－K区　第7層	深鉢A	2 a	口縁部：ＲＬ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po.530	――
3	第41－K区　第7層	深鉢A	2 a	口縁部：ＬＲ縄文斜回転→横位渦巻文(隆沈線文)大単位連結　頚部：無文	Po. 36	13－17
4	第41－K区　第7a層	深鉢A	2 a	口縁部：ＲＬ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　頚部：無文　胴部：ＲＬ縄文縦回転→沈線文	Po.240	13－12
5	第41－K区　第7層	深鉢A	2 b	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　ＲＬＲ縄文横回転	Po.245	13－13
6	第41－K区　第7層	深鉢A	2acrb	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　ＲＬＲ縄文横回転	Po.241	13－14
7	第41－K区　第7b層	深鉢A	2 a	口縁部：ＲＬ縄文横回転→有縄横位渦巻文(隆沈線文)　頚部：無文　胴部：ＲＬ縄文縦回転→沈線文	Po. 40	13－15
8	第41－K区　第7層	深鉢A	2 b	口縁部：ＬＲ縄文縦回転→横位渦巻文(隆沈線文)隆線に沿ってＬＲ縄文押圧　頚・胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po.242	13－16

第15図　第41－K区出土土器(1)



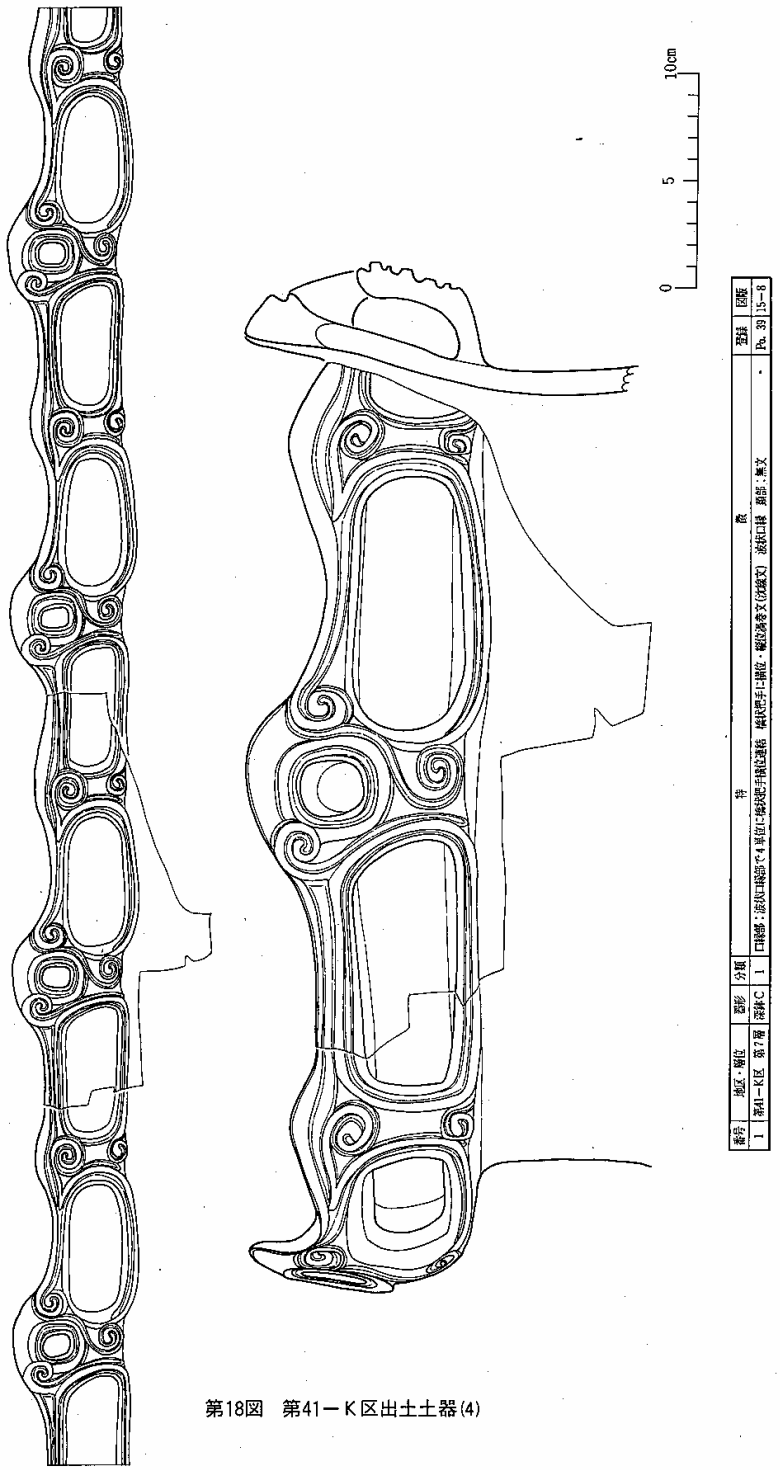
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41-K区 第7層	深鉢A	3	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　刺突文充填　頸部：無文	Po. 35	14

第16図　第41－K区出土土器(2)



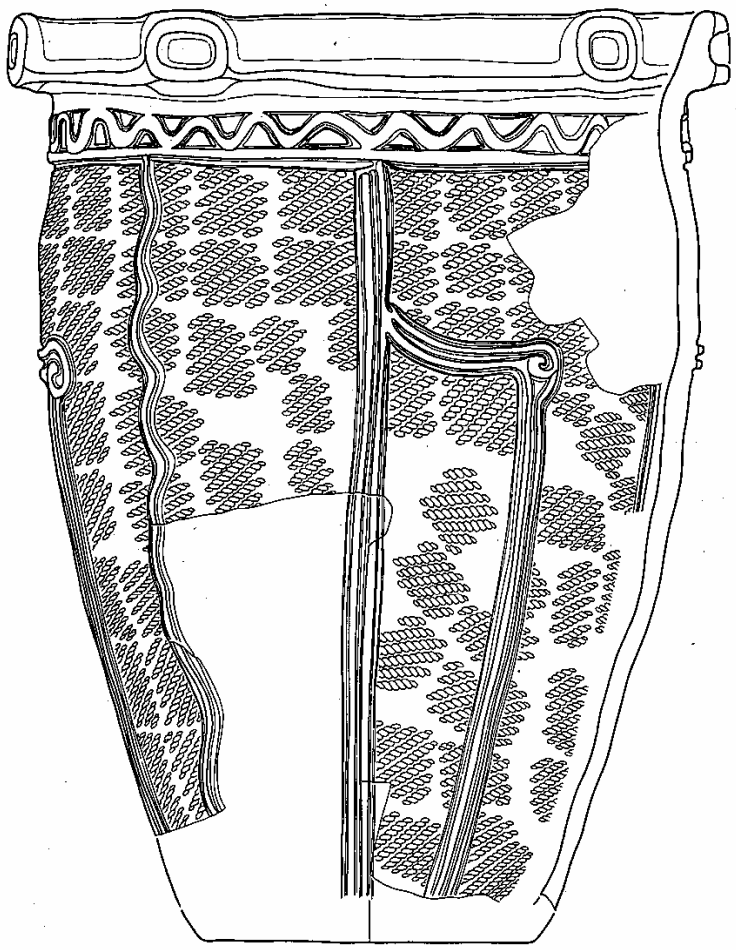
番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	登　録	図版
1	第41－K区　第7層	深鉢A	2 b_1	口縁部：ＲＬ縄文横・斜回転→有棘横位渦巻文(隆沈線文)　二本隆沈線文による縦位連結	Po.529	——
2	第41－K区　第7層	深鉢A	2 c_2	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)→ＲＬＲ縄文縦回転充填　胴部：ＲＬＲ縄文縦回転	Po.244	13－18
3	第41－K区　第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)→ＬＲ縄文横回転　頚部：無文	Po.247	15－1
4	第41－K区　第7層	深鉢A	3	口縁部：有棘横位渦巻文(隆沈線文)→刺突文充填	Po.250	15－4
5	第41－K区　第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結	Po.252	15－6
6	第41－K区　第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＬＲ縄文縦回転　頚部：無文	Po.243	15－2
7	第41－K区　第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)各部分連結　不明縄文	Po.249	15－5
8	第41－K区　第7層	深鉢A	3	口縁部：ＲＬＲ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　頚部：無文	Po.246	15－3
9	第41－K区　第7層	深鉢B	1 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＬＲ縄文縦回転	Po.251	15－7
10	第41－K区　第7層	深鉢B	1	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)？	Po.256	——
11	第41－K区　第7層	深鉢D	3 b	口縁～胴部：Rℓ 撚糸文縦位回転→曲流渦巻文(隆沈線文・沈線文)各部分連結　Po.253bと同一個体の可能性もあり	Po.253a	15－12
12	第41－K区　第7層	深鉢D	3 b	口縁～胴部：Rℓ 撚糸文縦位回転→曲流渦巻文(隆沈線文・沈線文)各部分連結　Po.253aと同一個体の可能性もあり	Po.253b	15－13

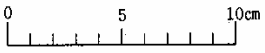
第17図　第41－Ｋ区出土土器(3)



番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区 第7層	深鉢C	1	口縁部：波状口縁部で4単位に橋状把手構位連結 橋状把手に構位・縦位渦巻文(沈線文) 波状口縁 頸部：無文	Po. 39	15－8

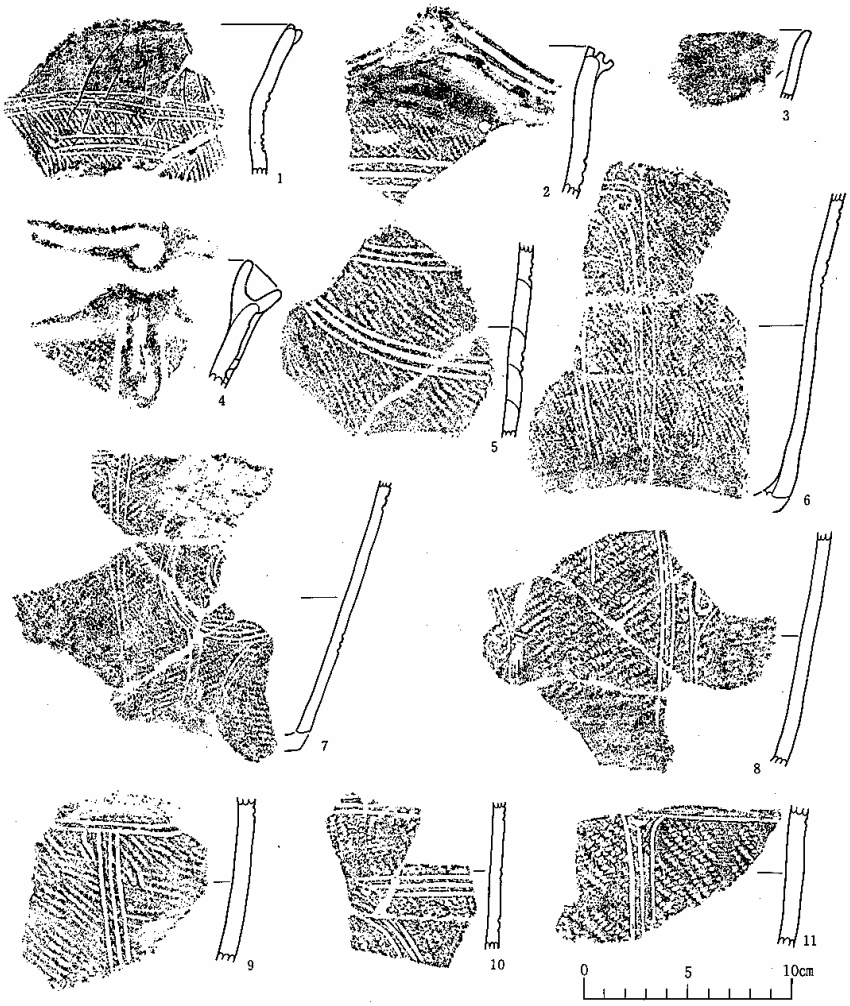
第18図　第41－K区出土土器(4)





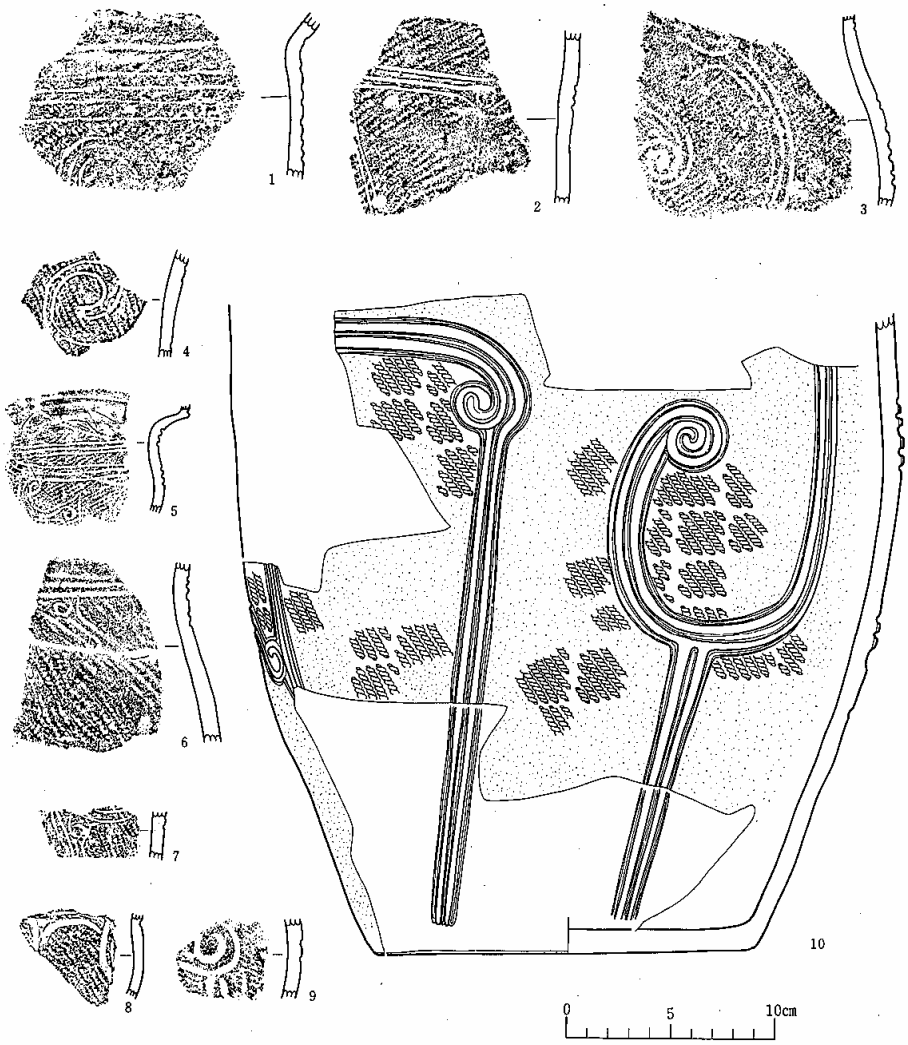
番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	登録	図版
1	第41－K区　第7層	深鉢C	2 b_1	口縁部：変形横位渦巻文（立体的円形文の横位連結）　頸部：上下隆線間に波状文(隆沈線文）狭い部分では沈線が省略される　胴部：RL縄文縦・斜回転→曲流(折)渦巻文・縦位波状文(隆沈線文)	Po. 38	16

第19図　第41－K区出土土器(5)



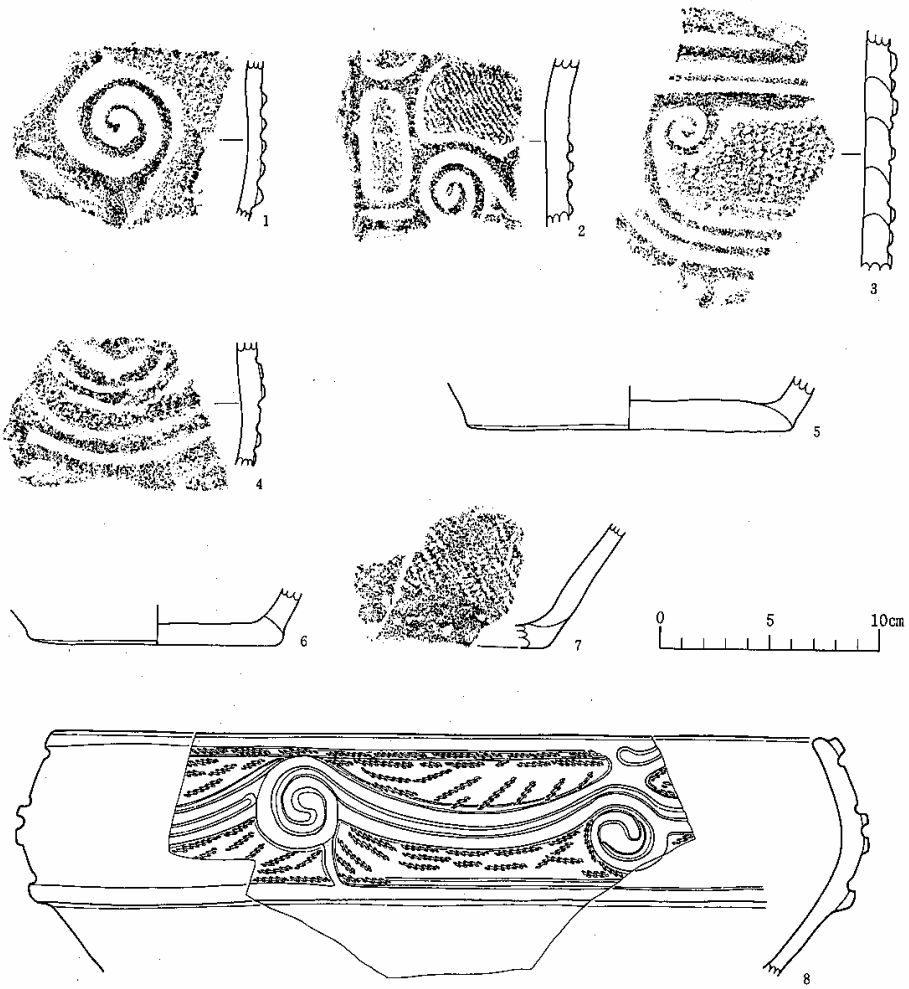
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区 第7b層	深鉢D	1	口唇部：横位変形渦巻文(隆沈線文) 口縁・頸部：無文 胴部：LR縄文縦回転→曲流(折)文(沈線文)	Po.259	15－9
2	第41－K区 第7b層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁・頸部：無文 胴部：LR縄文縦回転→沈線文	Po.258	15－10
3	第41－K区 第 7 層	深鉢D	2	口縁部：無文 波状口縁	Po.255	――
4	第41－K区 第 7 層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁～胴部：LR縄文縦回転→下垂する有軸渦巻文(隆沈線文)	Po.257	15－11
5	第41－K区 第 7 層	深 鉢	胴部	LR縄文縦回転→沈線文	Po.723	17－1
6	第41－K区 第7b層	深 鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流(折)渦巻文(沈線文)	Po.736a	17－2
7	第41－K区 第 7 層	深 鉢	胴部	RL縄文縦回転→曲流(折)渦巻文(沈線文)	Po.911	――
8	第41－K区 第7b層	深 鉢	胴部	RL縄文縦回転→曲流(折)渦巻文(沈線文)	Po.737	17－3
9	第41－K区 第 7 層	深 鉢	胴部	LR縄文縦斜回転→横位・縦位沈線文	Po.730	17－4
10	第41－K区 第 7 層	深 鉢	胴部	LR縄文縦斜回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.739	17－5
11	第41－K区 第7b層	深 鉢	胴部	LR縄文縦回転→有軸曲流(折)渦巻文(沈線文)	Po.735	17－6

第20図　第41－K区出土土器(6)



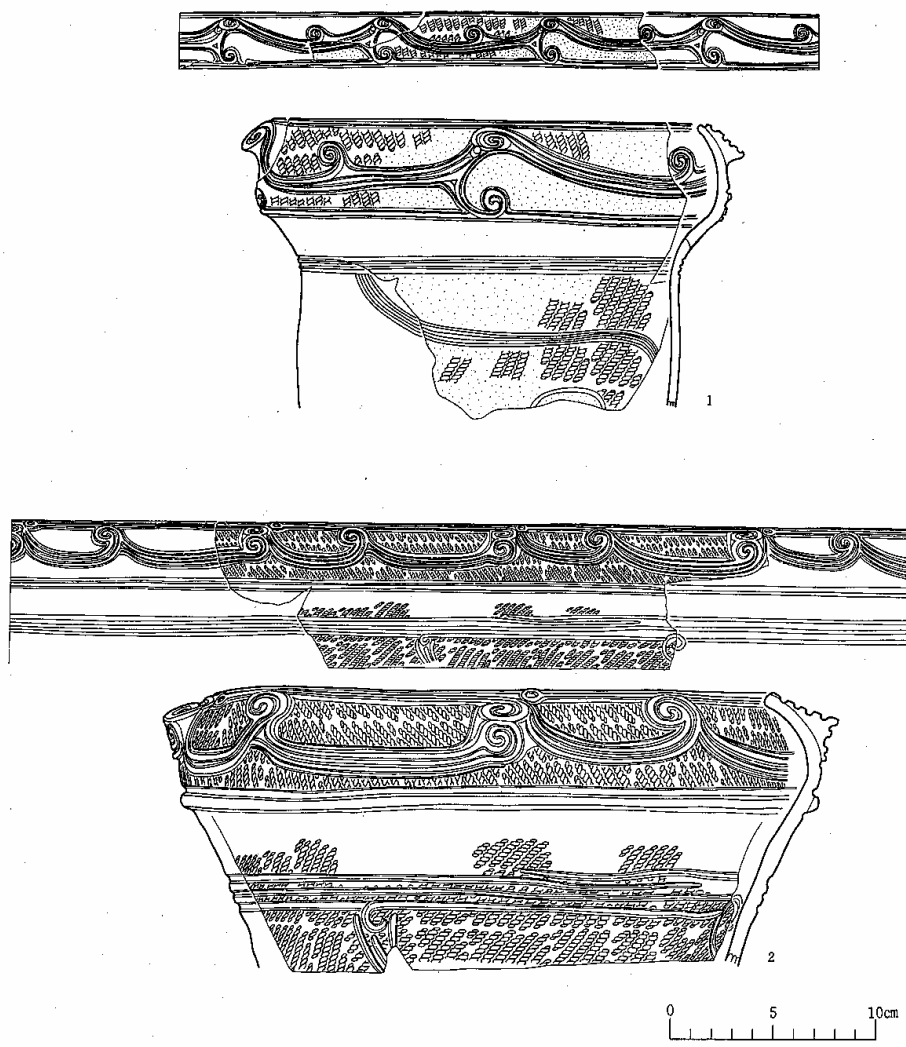
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区 第7a層	深鉢	胴部	RL縄文縦回転→渦巻文(沈線文)	Po.254	17－7
2	第41－K区 第7層	深鉢	胴部	RL縄文縦回転→有機曲流渦巻文(沈線文)	Po.740	17－8
3	第41－K区 第7層	深鉢	胴部	RL縄文縦回転→有機曲流渦巻文(沈線文)	Po.734	17－9
4	第41－K区 第7b層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→渦巻文(沈線文)	Pb.736	17－10
5	第41－K区 第7b層	深鉢A	2	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)？ 頸部：無文 胴部：RL縄文縦回転→有機曲流渦巻文(沈線文)	Po.239	17－13
6	第41－K区 第7a層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→渦巻文(沈線文)	Po.724	17－12
7	第41－K区 第7層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.728	17－11
8	第41－K区 第7層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→沈線文	Po.727	17－15
9	第41－K区 第7層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→渦巻文(沈線文)	Po.729	17－14
10	第41－K区 第7層	深鉢	胴・底部	LR縄文縦回転→曲流(折)渦巻文(隆沈線文)	Po. 37	18－4

第21図　第41－K区出土土器(7)



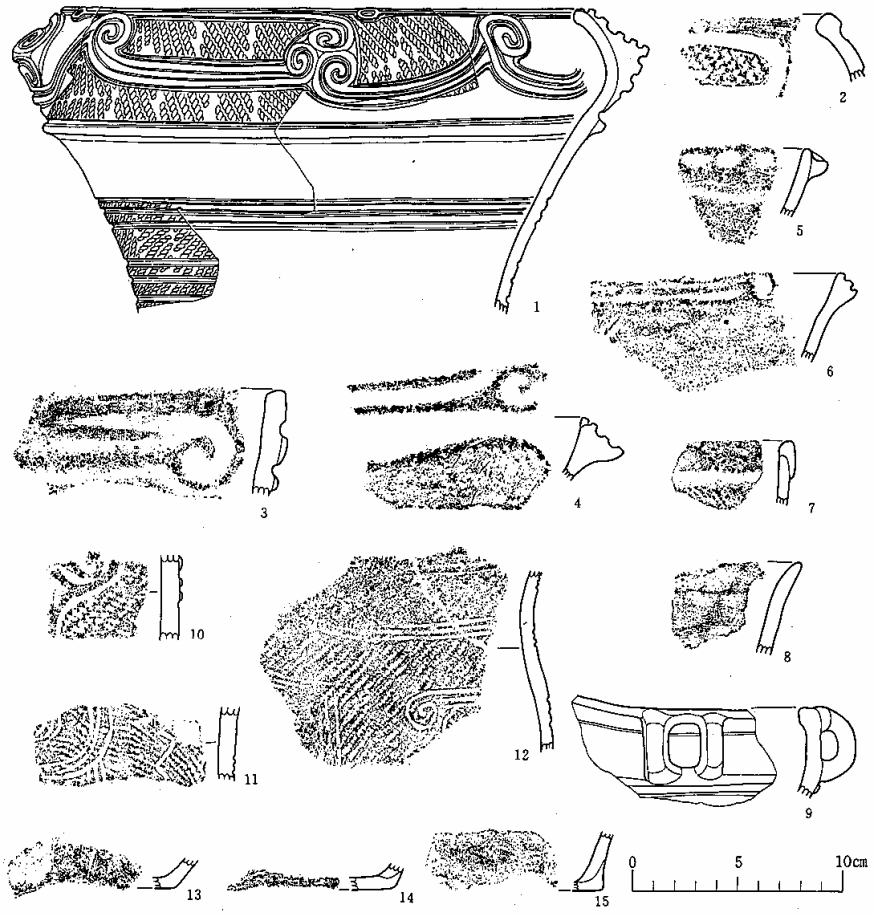
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区　第 7 層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　不明縄文	Po.726	18－1
2	第41－K区　第 7 層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＬＲ縄文縦回転	Po.725	18－2
3	第41－K区　第 7 層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　一部もしくは各部分連結　ＲＬ縄文斜回転	Po.738	18－3
4	第41－K区　第 7 層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＲＬ縄文縦回転	Po.732	17－16
5	第41－K区　第 7 b層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.850	——
6	第41－K区　第 7 b層	深　鉢	底部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転　胴部下端～底部：無文	Po.851	——
7	第41－K区　第 7 b層	深　鉢	底部	Po.851と同一個体で接合	Po.852	——
8	第41－K区　第 8 層	深鉢Ａ	1	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　隆線に沿ってＬＲ縄文押圧充填　頚部：無文	Po.266	20－1

第22図　第41－Ｋ区出土土器(8)



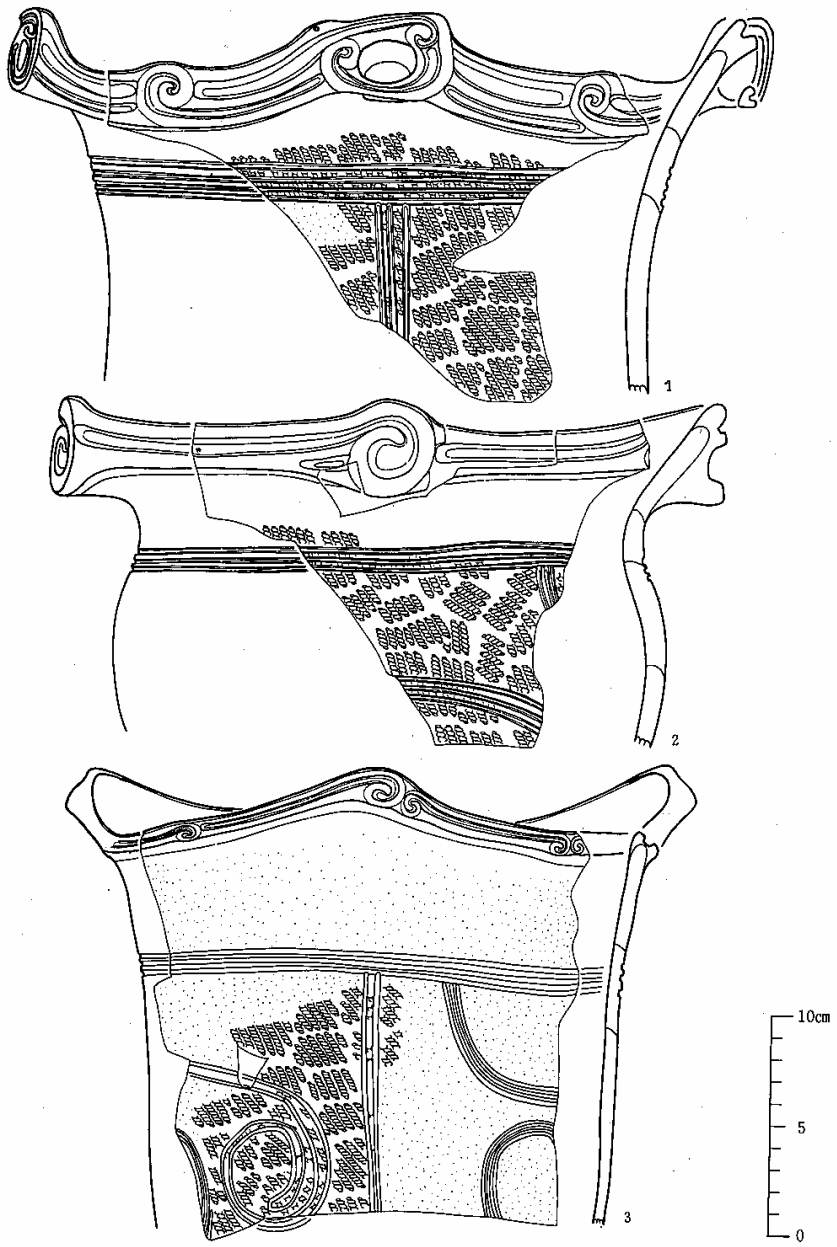
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区　第8層	深鉢A	2 a	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)大単位連結　頸部：無文　胴部：RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.41	19－1
2	第41－K区　第8層	深鉢A	2 b_3	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文二個結合(隆沈線文)大単位・小単位渦巻文連結　頸部：無文　胴部：RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.42	19－2

第23図　第41－K区出土土器(9)



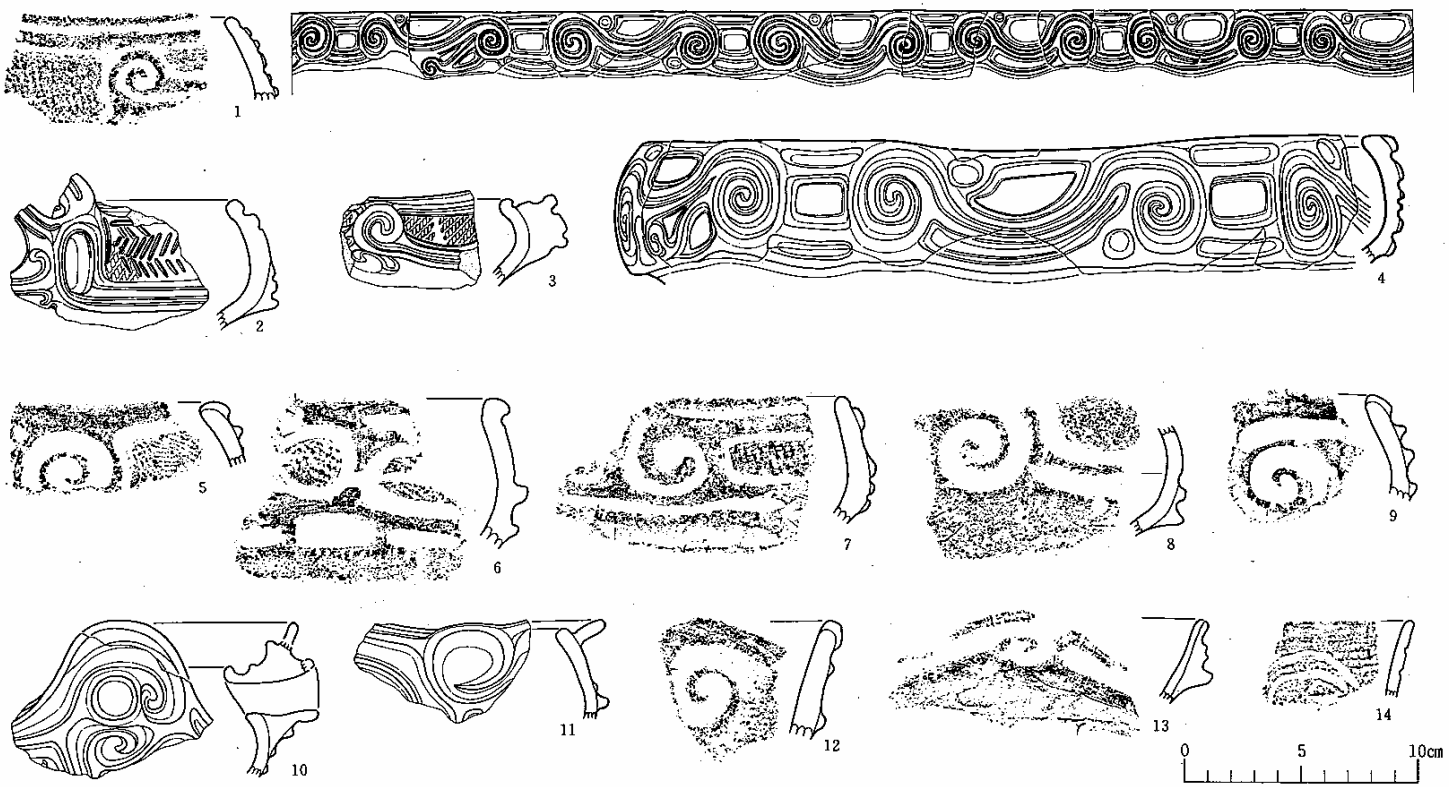
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区 第8層	深鉢A	2 b$_1$	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文三個結合(隆沈線文)大単位：小単位渦巻文結合　頸部：無文　胴部：RL縄文縦回転→沈線文	Po.264	19－3
2	第41－K区 第8層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　RLR縄文横回転	Po.265	20－2
3	第41－K区 第8層	深鉢C	2 a$_1$	口縁部：横位渦巻文(隆線文)	Po.272	20－3
4	第41－K区 第8層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po.187	20－5
5	第41－K区 第8層	深鉢D	1	口唇部：変形渦巻文(隆沈線文による円形文の横位連結)　口縁・頸部：無文	Po.566	20－4
6	第41－K区 第8層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁～頸部：無文	Po.268	20－6
7	第41－K区 第8層	深鉢E	1 b	口縁部：肥厚・無文　胴部：LR縄文縦回転	Po.270	20－7
8	第41－K区 第8層	深鉢D	2	口縁部：無文　波状口縁	Po.271	20－8
9	第41－K区 第8層	深　鉢	小把手付	2個1対の縦位楕状把手が口縁部に付く　無文	Po.397	20－9
10	第41－K区 第8層	深　鉢	胴　部	有軸渦巻文(隆沈線文)　RLR縄文縦回転	Po.743	20－14
11	第41－K区 第8層	深　鉢	胴　部	LR縄文縦斜回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.741	20－15
12	第41－K区 第8層	深　鉢	胴　部	RL縄文縦回転→曲流(折)渦巻文(沈線文)	Po.742	20－13
13	第41－K区 第8層	深　鉢	底　部	胴部下端：無文→縦位沈線の末端　底部：無文	Po.863	——
14	第41－K区 第8層	深　鉢	底　部	胴部下端～底部：無文	Po.862	——
15	第41－K区 第8層	深　鉢	底　部	胴部下端～底部：無文	Po.861	——

第24図　第41－K区出土土器(10)



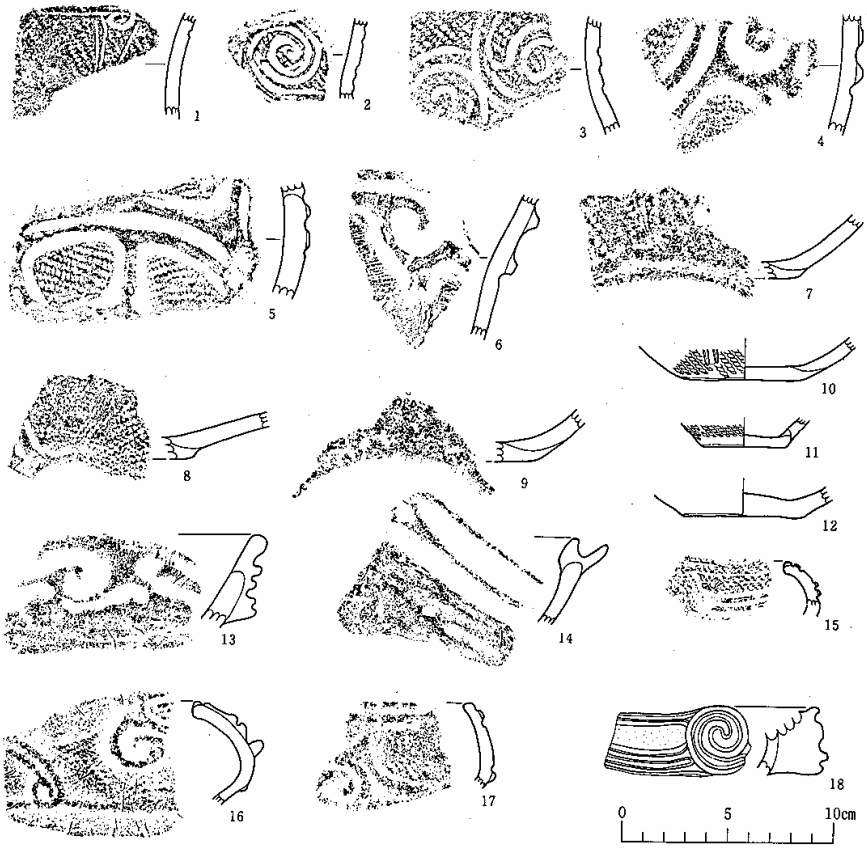
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区 第8層	深鉢D	1a	口唇部：口唇部肥大化し，空洞突起をもつ横位渦巻文(隆沈線文) 頚上部：無文 頚下部～胴部：LR縄文縦回転→横位・縦位線文(沈線文)	Po.263	20－10
2	第41－K区 第8層	深鉢D	1b	口唇部：口唇部肥大化し、横位渦巻文(隆沈線文) 頚上部：無文 頚下部～胴部：LR縄文縦斜回転→横位 曲流文(沈線文)	Po.251	20－11
3	第41－K区 第8層	深鉢D	1c	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁・頚部：刺突頚帯 胴部：LR縄文縦斜回転→横位・縦位線文・曲流渦巻文(沈線文)	Po.262	20－12

第25図 第41－K区出土土器(11)



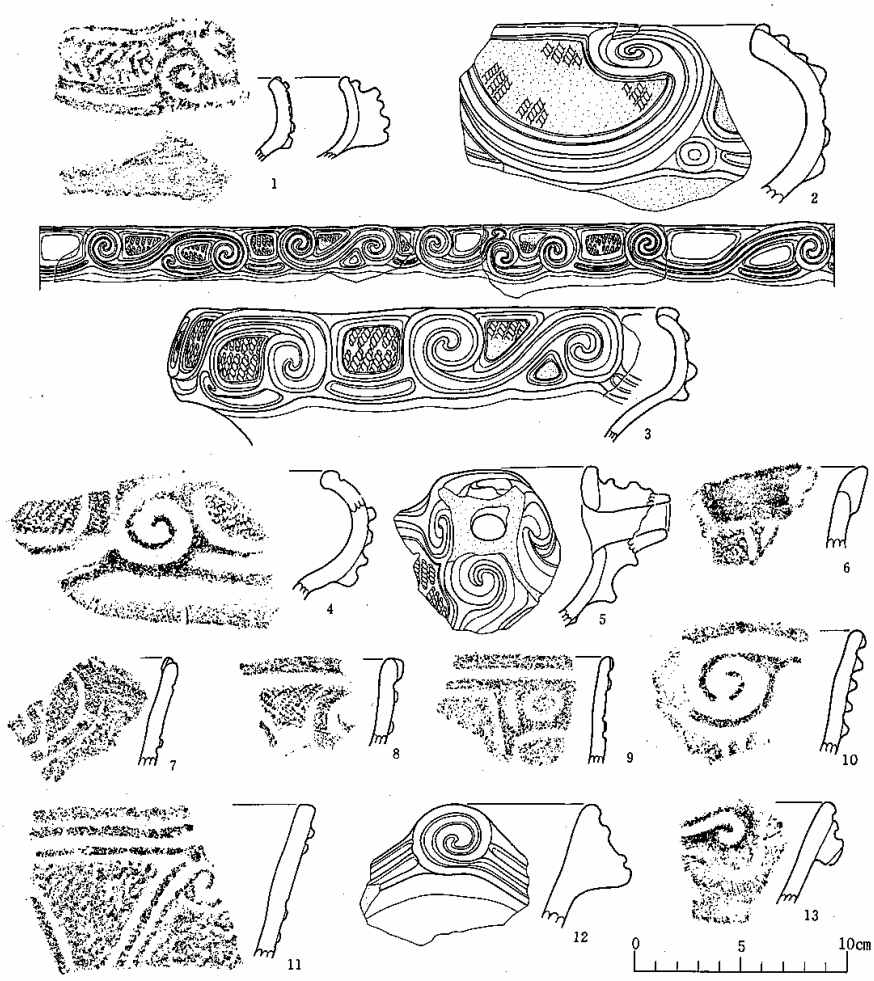
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区 第9層	深鉢A	2b	口縁部：不明縄文横・斜回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po.504	21－2
2	第41－K区 第9層	深鉢A	2c$_1$	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻空間突起(隆沈線文) 矢羽状沈線文充填	Po.509	21－3
3	第41－K区 第9層	深鉢A	2c$_1$	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文) 二本隆線連結 各部分連結	Po.508	21－4
4	第41－K区 第9層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 無文	Po. 43	21－1
5	第41－K区 第9層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 LR縄文縦斜回転	Po.499	21－5
6	第41－K区 第9層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 RLR縄文横回転 浅鉢の可能性もあり	Po.501	21－6
7	第41－K区 第9層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 LR縄文縦回転	Po.503	21－7
8	第41－K区 第9層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 不明縄文	Po.502	21－8
9	第41－K区 第9層	深鉢B	1b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結	Po.498	21－9
10	第41－K区 第9層	深鉢B	1b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 突起部注口状 LR縄文	Po.500	21－10
11	第41－K区 第9層	深鉢B	1b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結	Po.507	21－11
12	第41－K区 第9層	深鉢C	5b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結→不明縄文充填	Po.510	21－12
13	第41－K区 第9層	深鉢D	1	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁・頸部：無文	Po.505	21－14
14	第41－K区 第9層	深鉢C	5a	口縁～胴部：LR縄文斜回転→渦巻文(沈線文)	Po.506	21－13

第26図　第41－K区出土土器(12)



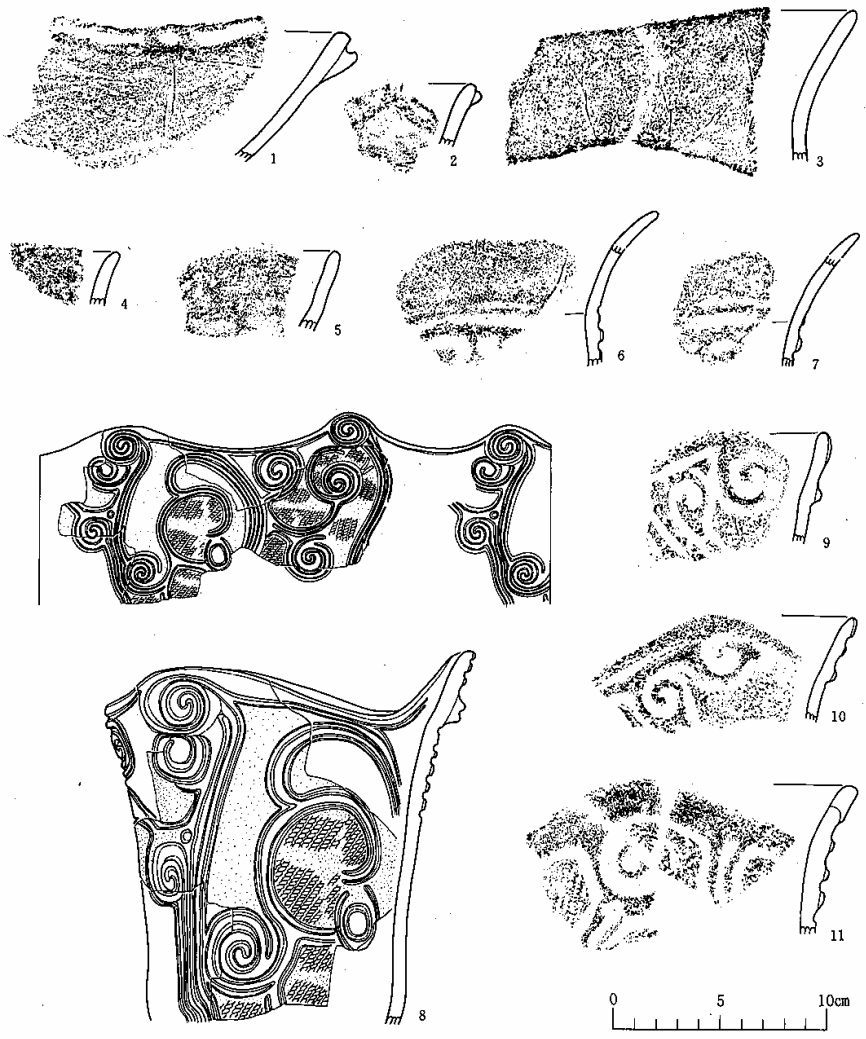
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区　第9層	深　鉢	胴部	ＬＲ縄文縦回転→渦巻文(沈線文)	Po.751	21－15
2	第41－K区　第9層	深　鉢	胴部	ＬＲ縄文縦回転→渦巻文(沈線文)	Po.750	21－16
3	第41－K区　第9層	深　鉢	胴部	ＬＲ縄文縦回転→渦巻文(沈線文)	Po.749	21－17
4	第41－K区　第9層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　ＲＬ縄文縦回転	Po.752	21－18
5	第41－K区　第9層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　ＬＲ縄文縦回転	Po.748	21－19
6	第41－K区　第9層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　一部もしくは各部分連結→櫛目状条線文充填	Po.511	21－20
7	第41－K区　第9層	深　鉢	底部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転　胴部下端～底部：無文	Po.867	——
8	第41－K区　第9層	深　鉢	底部	胴下部：ＲＬＲ縄文縦回転→縦位隆沈線文束端　底部：無文	Po.868	——
9	第41－K区　第9層	深　鉢	底部	胴下部～底部：剥落不明	Po.870	——
10	第41－K区　第9層	深　鉢	底部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転→縦位隆沈線文束端　底部：無文　内面：丹塗	Po.864	——
11	第41－K区　第9層	深　鉢	底部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転　胴部下端～底部：無文	Po.866	——
12	第41－K区　第9層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.865	——
13	第41－K区　第x層	深鉢Ｄ	1	口唇部：口唇部肥大化し横位渦巻文(隆沈線文)	Po.572	21－21
14	第42－Ｊ区　第7a層	深鉢Ｄ	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po.238	——
15	第42－Ｊ区　第7層	深鉢Ａ	2 a	口縁部：ＬＲ縄文横回転→横位曲(折)渦巻文(隆沈線文)	Po.195	——
16	第42－Ｊ区　第7層	深鉢Ａ	2 b_1	口縁部：ＲＬ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　二本隆沈線文縦位連結	Po.196	22－1
17	第42－Ｊ区　第7層	深鉢Ａ	2 b_2	口縁部：ＬＲ縄文横回転→有棘横位渦巻文(隆沈線文)　上棘連結	Po.371	22－2
18	第42－Ｊ区　第7層	深鉢Ａ	2 c_1	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　不明縄文　二本隆線連結	Po.170	22－4

第27図　第41－Ｋ区出土土器(13)・第42－Ｊ区出土土器(1)



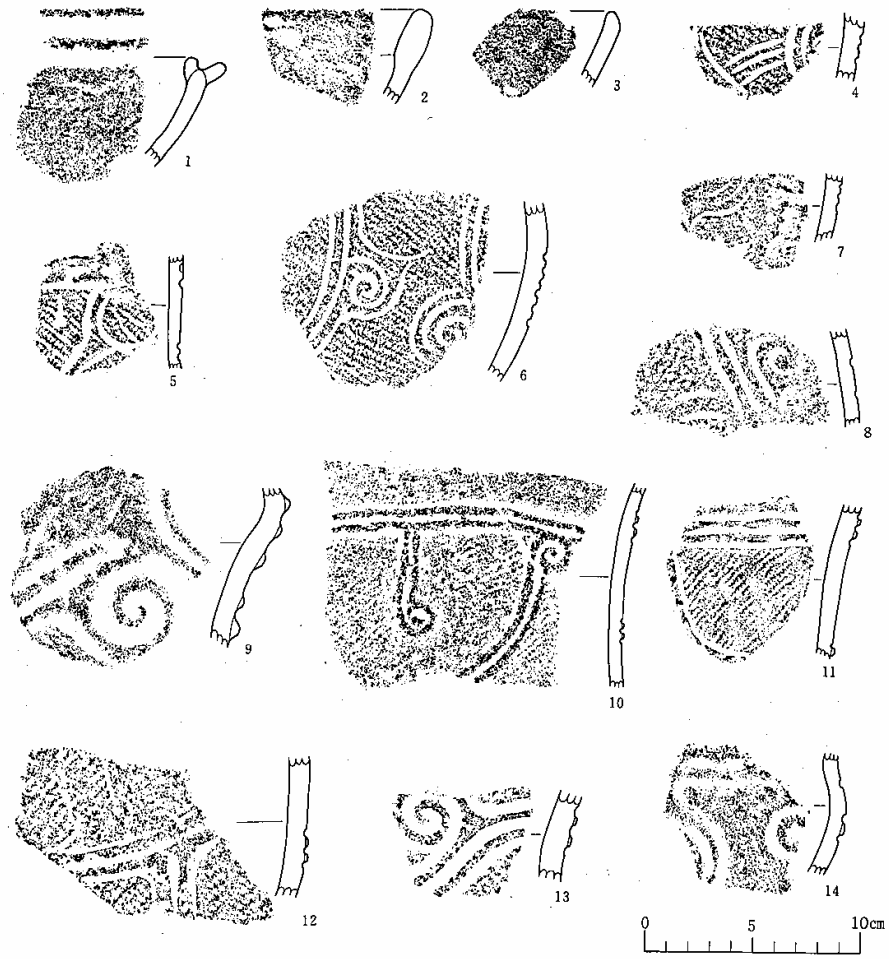
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ａ	２ｃ１	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　二本隆線連結　矢羽状沈線文充填	Po.276	22－３
2	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ａ	２ｂ１	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　渦巻文連結　ＬＲ縄文横回転	Po.199	22－６
3	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ａ	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　ＬＲ縄文横回転	Po.197/198	22－５
4	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ａ	２ｃ２	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)→不明縄文充填　頚・胴部：不明縄文	Po.194	22－７
5	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｂ	１ｂ	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結　ＬＲ縄文　突起部分注口状	Po.372	22－８
6	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｃ	4	口縁部：肥厚・無文　波状口縁　胴部：ＬＲ縄文縦回転→縦位沈線	Po.213	22－９
7	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｃ	５ｂ	口縁～胴部：ＲＬ縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)一部もしくは各部分連結	Po.763	22－10
8	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｃ	５ｂ	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結→ＬＲ縄文　口縁部縦・胴部横回転充填	Po.206	22－11
9	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｃ	５ｂ	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)各部分連結→ＲＬ縄文縦斜回転充填	Po.205	22－12
10	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	3	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)一部もしくは各部分連結→ＲＬ縄文斜回転充填	Po.201	22－13
11	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｃ	5	口縁～胴部：ＲＬ縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)・	Po.374	――
12	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	1	口頚部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頚部：無文	Po.218	――
13	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	１？	口頚部：横位渦巻文(隆沈線文)突起状部分あるが剝落のため不明　口縁・頚部：無文	Po.216	22－14

第28図　第42－Ｊ区出土土器(2)



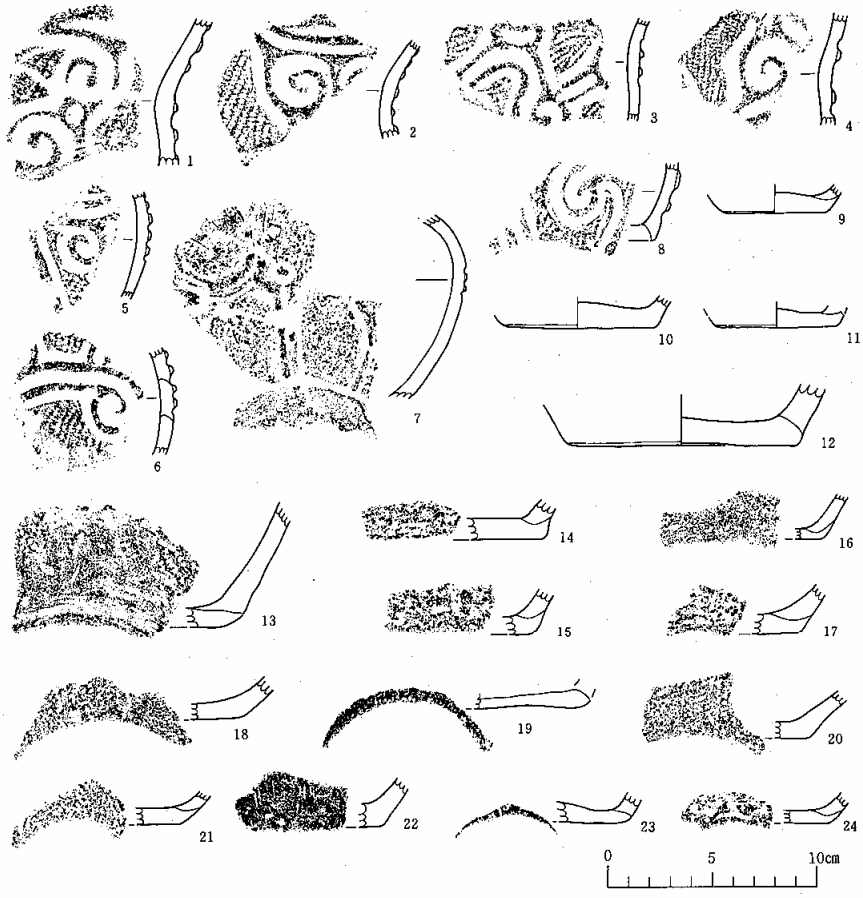
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－Ｊ区　第７層	浅鉢Ｂ	2	Ⅰ群部：横位変形渦巻文（隆沈線文による円形文の横位連結）　Ⅱ群・頸部：無文　浅鉢の可能性あり	Po.215	22－15
2	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	1	Ⅰ群部：横位渦巻文（隆沈線文）　Ⅱ群・頸部：無文	Po.217	-
3	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	2	Ⅰ群部：無文　波状口縁	Po.207	22－17
4	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	2	Ⅰ群部：無文　波状口縁	Po.211	-
5	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	2	Ⅰ群部：無文　波状口縁	Po.209	22－16
6	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	2	Ⅰ群部：無文　胴部：曲流渦巻文（隆沈線文）　各部分連結？	Po.210	-
7	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	2	Ⅰ群部：無文　胴部：曲流渦巻文（隆沈線文）　各部分連結？	Po.221	-
8	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	3	Ⅰ群～胴部：ＲＬ縄文縄回転→曲流渦巻文（隆沈線文・沈線文）　各部分連結	Po. 19	23－1
9	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	3	Ⅰ群～胴部：曲流渦巻文（隆沈線文）→不明縄文充填	Po.202	22－20
10	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	3	Ⅰ群～胴部：曲流渦巻文（隆沈線文）→不明縄文充填	Po.203	22－19
11	第42－Ｊ区　第７層	深鉢Ｄ	3	ＲＬ縄文縄回転→曲流渦巻文（隆沈線文）　各部分連結	Po.200	22－18

第29図　第42－Ｊ区出土土器(3)



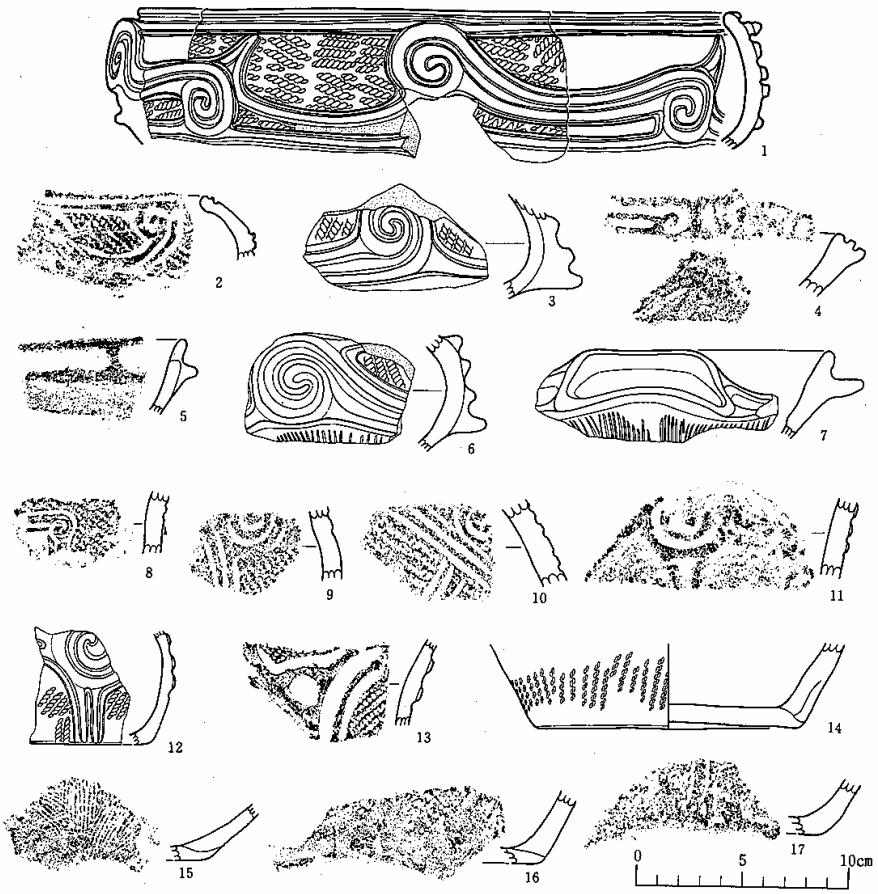
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－Ｊ区　第７層	浅鉢Ｂ	2	口唇部：溝状文（隆沈線文による横位渦巻文の変形か）　口縁・胴部：無文	Po. 223	23－2
2	第42－Ｊ区　第７層	浅鉢Ｂ	3	口縁～胴部：無文　口縁部内面に段あり	Po. 214	23－3
3	第42－Ｊ区　第７層	浅鉢Ｂ	3	口縁～胴部：無文	Po. 874	――
4	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	ＬＲ縄文縦回転→曲流渦巻文（沈線文）	Po. 757	23－4
5	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	頚部：無文・横位刺突文　胴部：ＬＲ縄文縦回転→曲流渦巻文（沈線文）	Po. 761	23－5
6	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	ＬＲ縄文縦回転→有棘曲流渦巻文（沈線文）	Po. 767	23－6
7	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	ＬＲ縄文縦回転→有棘渦巻文（沈線文）	Po. 760	23－7
8	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	ＲＬ縄文縦回転→曲流渦巻文（沈線文）	Po. 753	23－8
9	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文（隆沈線文）　各部分連結	Po. 756	23－9
10	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	ＲＬ縄文縦回転→曲流渦巻文（隆沈線文）	Po. 754	23－10
11	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	ＲＬ縄文縦回転→曲流文（隆沈線文）	Po. 758	23－11
12	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	ＲＬＲ縄文縦回転→曲流文（隆沈線文）	Po. 769	23－12
13	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	不明縄文→曲流渦巻文（隆沈線文）	Po. 764	23－13
14	第42－Ｊ区　第７層	深　鉢	胴部	頚部：無文　横位刺突文　胴部：曲流渦巻文（隆沈線文）	Po. 765	23－14

第30図　第42－Ｊ区出土土器(4)



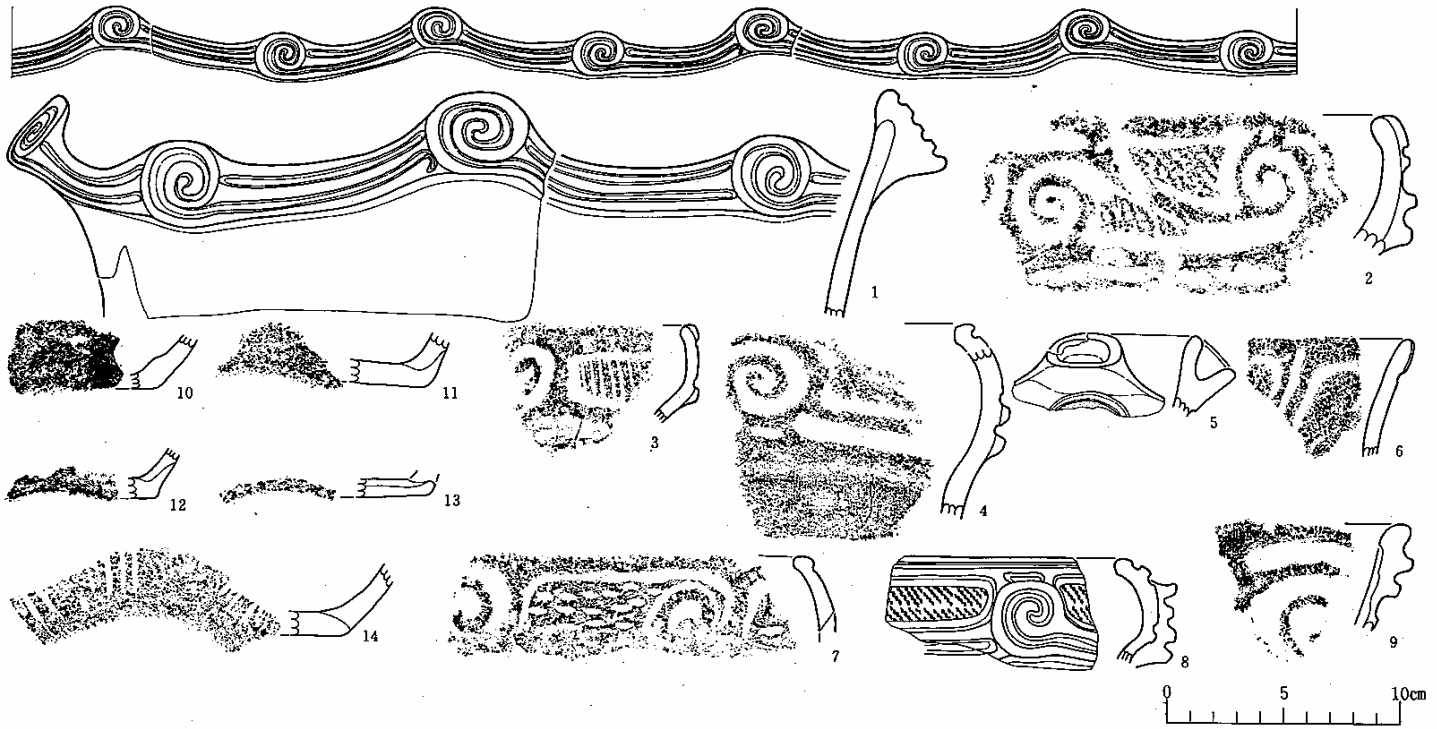
番号	地区・層位	器形	分類	特		登録	図版
1	第42－J区 第7層	深鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 RLorRLR縄文縦回転		Po. 220	23－15
2	第42－J区 第7層	深鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 RLR縄文縦回転		Po. 762	23－17
3	第42－J区 第7層	深鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 RL縄文縦回転		Po. 755	23－16
4	第42－J区 第7層	深鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 RLR縄文縦・斜回転		Po. 219	23－18
5	第42－J区 第7層	深鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 RL縄文縦回転		Po. 759	23－19
6	第42－J区 第7層	深鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 LR縄文斜横回転充填		Po. 768	23－20
7	第42－J区 第7層	壺	胴部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文) 一部連結		Po. 766	23－22
8	第42－J区 第7層	深鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文) 一部もしくは各部分連結 RL縄文縦回転		Po. 222	23－21
9	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 875	Po. 892	――
10	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 885	Po. 884	――
11	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 885	Po. 884	――
12	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 885	Po. 884	――
13	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴下部：LR縄文縦回転 胴部下端：無文	Po. 871	Po. 880	――
14	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 880	Po. 880	――
15	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 883	Po. 879	――
16	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：剥落不明	Po. 879	Po. 879	――
17	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：剥落不明	Po. 866	Po. 876	――
18	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴下部：RLR縄文縦回転 底部：無文	Po. 876	Po. 876	――
19	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 827	Po. 878	――
20	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴下部～底部：網帯	Po. 878	Po. 878	――
21	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴下部：LR縄文縦回転 底部：無文	Po. 877	Po. 881	――
22	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴下部：梯目状条線文 底部：無文	Po. 881	Po. 881	――
23	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 872	Po. 873	――
24	第42－J区 第7層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 873	Po. 873	――

第31図　第42－J区出土土器(5)



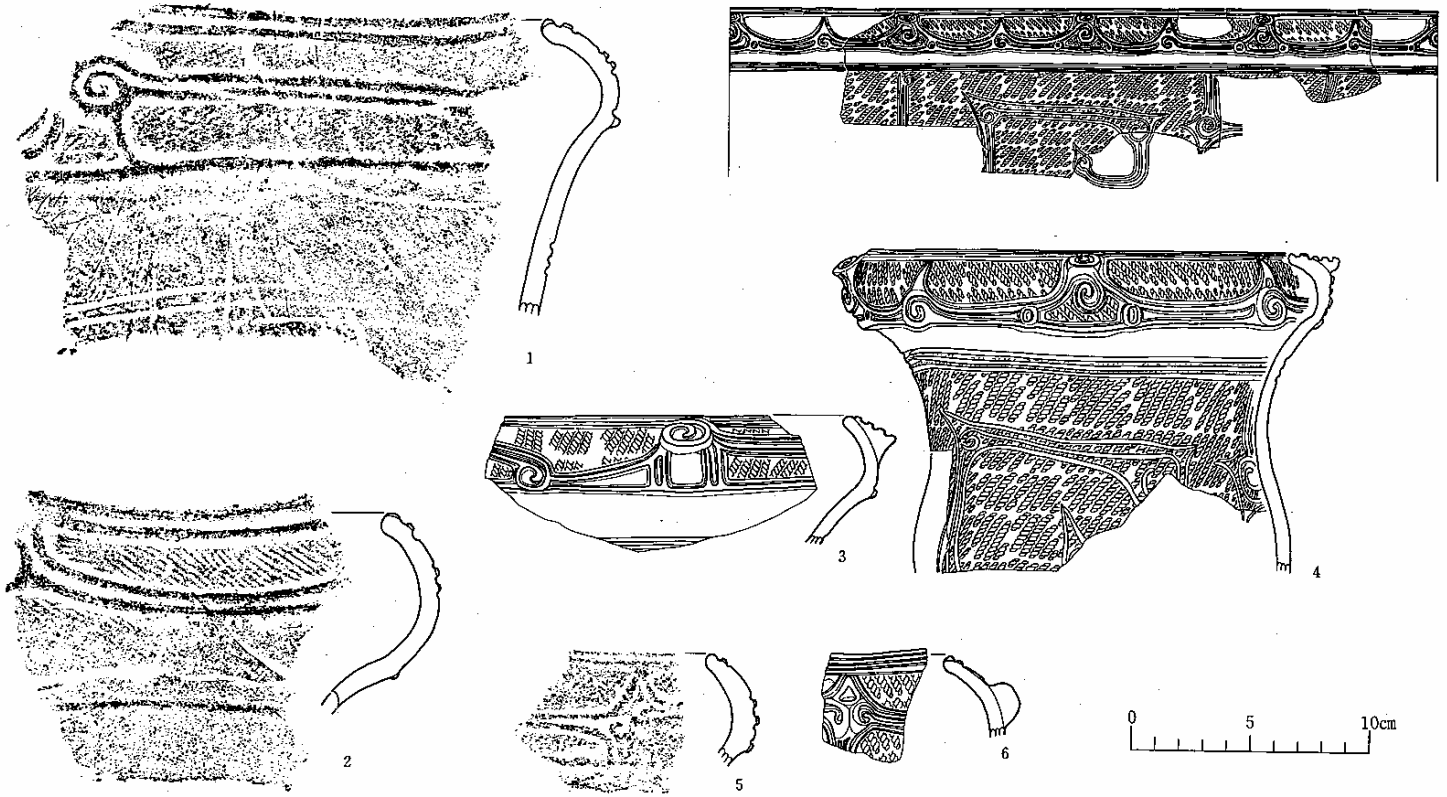
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－Ｊ区　第８層	深鉢Ａ	２ｂ₂	口縁部：ＬＲ縄文斜回転→有線横位渦巻文(隆沈線文)　上端連結	Po.225	24－1
2	第42－Ｊ区　第８層	深鉢Ａ	２ａ	口縁部：ＲＬ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po.227	――
3	第42－Ｊ区　第８層	深鉢Ａ	２ｃ₁	口縁部：ＬＲ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po.229	――
4	第42－Ｊ区　第８層	深鉢Ｄ	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頚部：無文　浅鉢の可能性もあり	Po.228	――
5	第42－Ｊ区　第８層	深鉢Ｄ	1	口唇部：横位変形渦巻文(隆沈線文による円形文の横位連結)　口縁・頚部：無文	Po.230	――
6	第42－Ｊ区　第８層	浅鉢Ａ	1ｂ	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　ＲＬ縄文横回転　頚・胴部：楕目状条線文	Po.226	――
7	第42－Ｊ区　第８層	浅鉢Ｂ	1	口唇部：渦状文(隆沈線文による渦巻文の変形か)　頚・胴部：楕目状条線文	Po.394	24－5
8	第42－Ｊ区　第８層	深　鉢	胴部	ＬＲ縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.772	24－7
9	第42－Ｊ区　第８層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(沈線文)　ＬＲ縄文縦回転	Po.773	24－11
10	第42－Ｊ区　第８層	深　鉢	胴部	ＬＲ縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.770	24－6
11	第42－Ｊ区　第８層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　一部もしくは各部分連結　不明縄文	Po.771	24－13
12	第42－Ｊ区　第８層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　一部もしくは各部分連結　ＲＬ縄文縦回転	Po.893	――
13	第42－Ｊ区　第８層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→ＲＬＲ縄文縦回転充填	Po.688	24－12
14	第42－Ｊ区　第８層	深　鉢	底部	胴下部：ＲＬＲ縄文縦回転　底部：無文	Po.891	――
15	第42－Ｊ区　第８層	深　鉢	底部	胴下部：楕目状条線文　底部：無文　浅鉢の可能性もあり	Po.896	――
16	第42－Ｊ区　第８層	深　鉢	底部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転	Po.889	――
17	第42－Ｊ区　第８層	深　鉢	底部	胴下部：ＲＬ縄文縦回転→縦位隆沈線文末端　底部：剥落	Po.887	――

第32図　第42－Ｊ区出土土器(6)



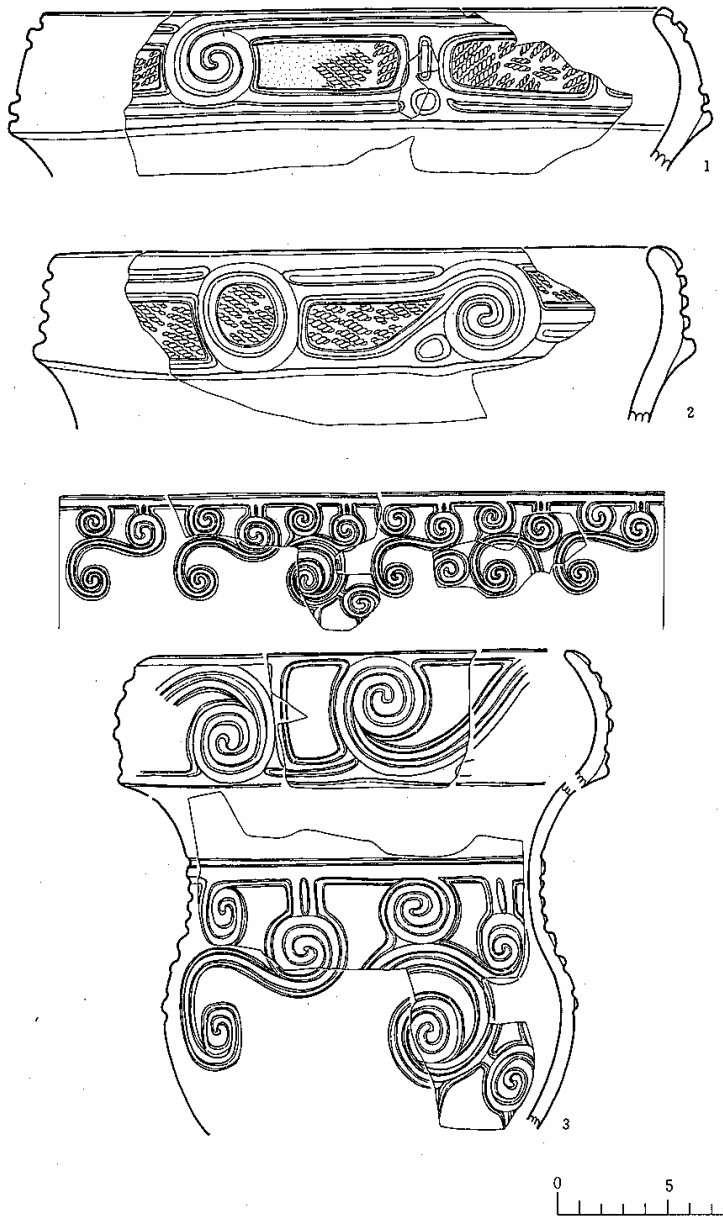
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－K区　第5層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文　刺突列管	Po. 48	24－16	8	第42－K区　第6層	深鉢A	2c$_2$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　RLR縄文横回転	Po. 395	24－10
2	第42－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→LR縄文縦回転充填	Po. 455	24－2	9	第42－K区　第6層	不明		口縁部：渦巻文(隆沈線文)	Po. 391	24－15
3	第42－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→縦位条線文充填　頸部：無文	Po. 85	24－3	10	第42－J区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 888	—
4	第42－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→LR縄文縦回転充填　頸部：無文	Po. 457	24－4	11	第42－J区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 890	—
5	第42－K区　第5層	深鉢D	1	口唇部：肥厚し円形文状の突起　無文	Po. 453	24－8	12	第42－J区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 895	—
6	第42－K区　第5層	深鉢D	3	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　RL縄文縦回転	Po. 456	24－9	13	第42－J区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 894	—
7	第42－K区　第6層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→横位刺突文充填	Po. 390	24－14	14	第42－J区　第8層	深　鉢	底部	胴下部：LR縄文縦回転→縦位沈線文末端　胴部下端～底部：無文	Po. 897	—

第33図　第42－J区出土土器(7)・第42－K区出土土器(1)



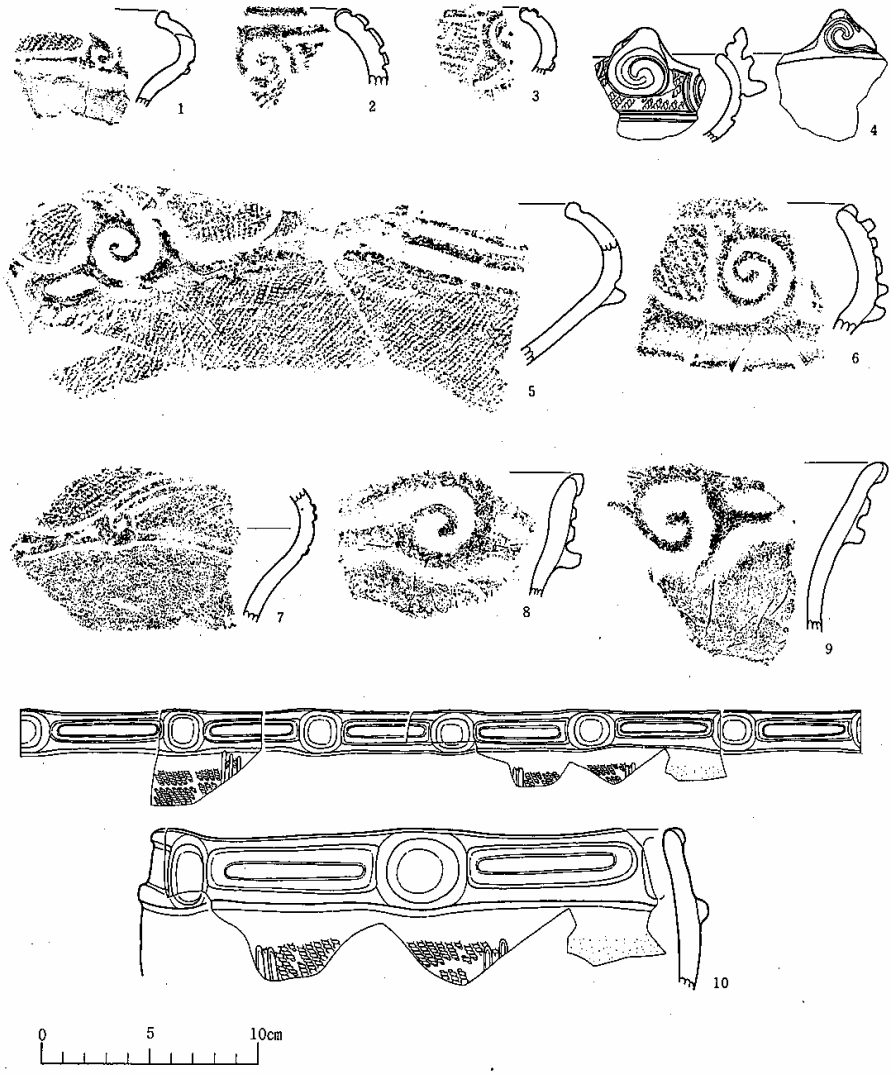
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－K区　第7b層	深鉢A	2a	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　大単位連結　頚上部：無文　頚下部～胴部：LR縄文縦回転→沈線文	Pb.159	25－1
2	第42－K区　第7a層	深鉢A	2a	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　大単位連結　頚部：剥落顕著	Pb.312	25－3
3	第42－K区　第7b層	深鉢A	2a	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　大単位連結　頚部：無文　胴部：沈線文	Pb.167	25－2
4	第42－K区　第7b層	深鉢A	2b$_1$	口縁部：RL縄文横回転→有棘横位渦巻文(隆沈線文)　上棘連結　頚部：無文　胴部：RL縄文縦回転→有棘曲流渦巻文(沈線文)	Pb. 20	25－12
5	第42－K区　第7a層	深鉢A	2b$_1$	口縁部：LR縄文横回転→有棘横位渦巻文(隆沈線文)　上棘連結　頚部：剥落顕著	Pb.169	25－4
6	第42－K区　第7b層	深鉢A	2b$_1$	口縁部：RL縄文横回転→有棘横位渦巻文(隆沈線文)　上棘連結	Pb.162	25－6

第34図　第42－K区出土土器(2)



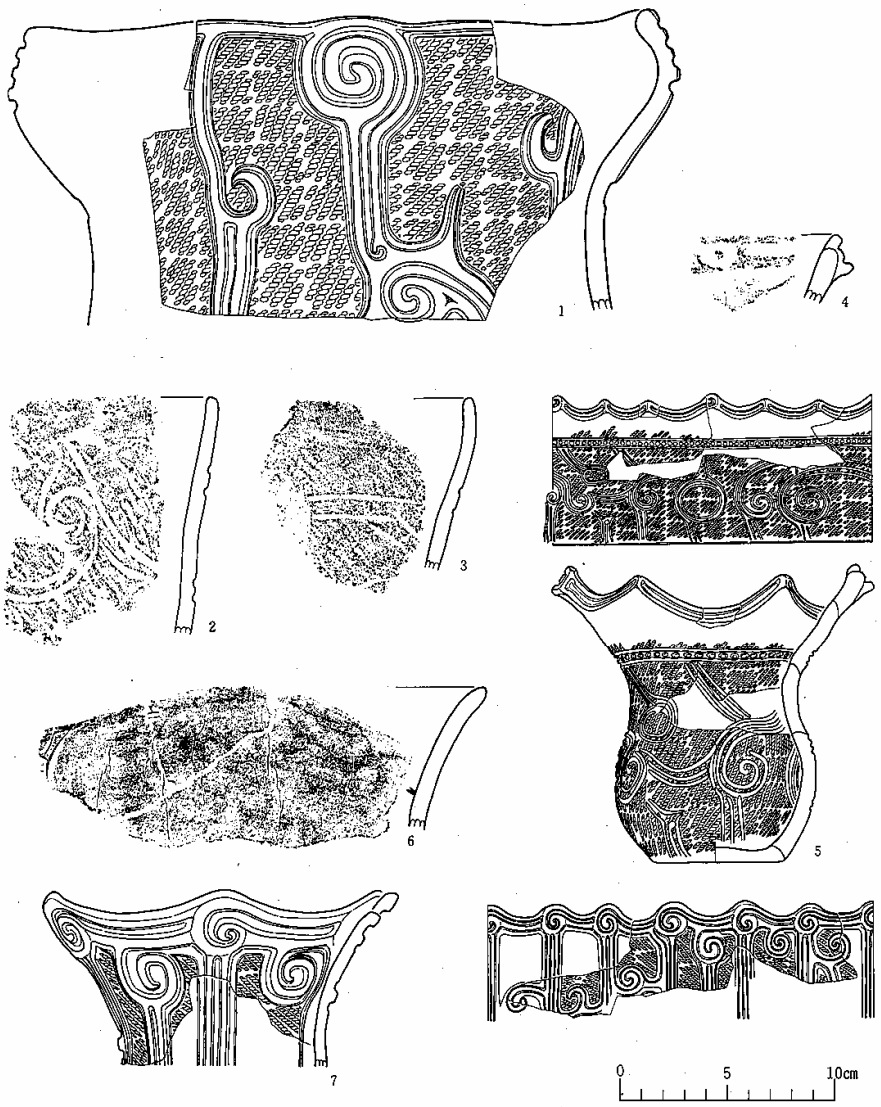
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－K区 第7b層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結→LR縄文縦・横・斜回転充填 頸部：無文	Po.166	26－1
2	第42－K区 第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結→LR縄文縦回転充填 頸部：無文	Po.158	26－2
3	第42－K区 第7a層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 胴部：曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 口縁～胴部：剥落顕著	Po.419	26－3

第35図　第42－K区出土土器(3)



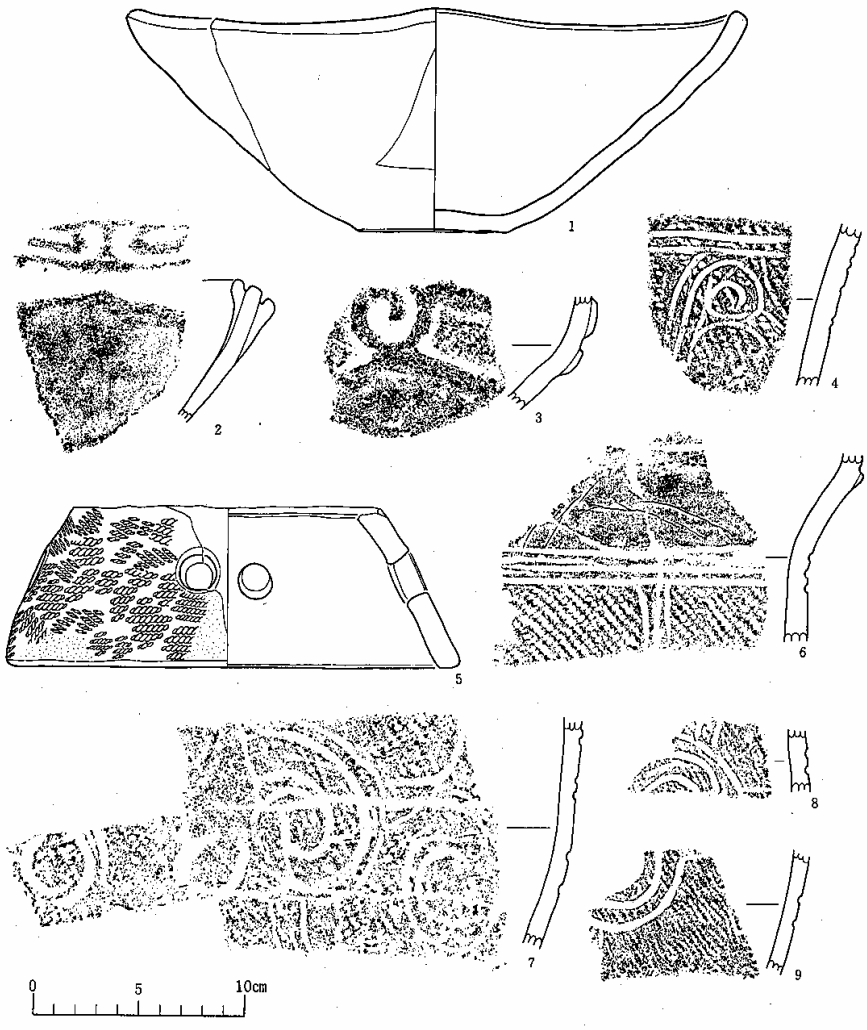
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－K区 第７層	深鉢A	2a	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文) 頸部：無文	Pb.164	25－8
2	第42－K区 第７b層	深鉢A	2a	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Pb.168	25－5
3	第42－K区 第７層	深鉢A	2	口縁部：LR縄文斜回転→右傾横位渦巻文(隆沈線文)	Pb.165	25－9
4	第42－K区 第７a層	深鉢A	$2c_1$	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文？(隆沈線文) 有棘渦巻文状突起あり 頸部：無文	Pb.375	25－10
5	第42－K区 第７b層	深鉢A	$2c_2$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結→RL縄文縦斜回転充填 頸・胴部：RL縄文縦斜回転	Pb.157	25－7
6	第42－K区 第７b層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結→LR縄文縦回転	Pb.172	26－5
7	第42－K区 第７層	深鉢A	$2a_1$	口縁部：RL縄文縦回転→横位渦巻文(隆沈線文) 頸部：無文	Pb.161	25－11
8	第42－K区 第７b層	深鉢C	$2a_1$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 頸部：無文 波状口縁	Pb.174	26－6
9	第42－K区 第７b層	深鉢C	2a	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 頸部：無文	Pb.175	26－7
10	第42－K区 第７b層	深鉢C	$2b_1$	口縁部：変形渦巻文(隆沈線文による円形文の横位連結) 胴部：LR縄文縦回転→横位沈線文	Pb. 24	26－4

第36図 第42－K区出土土器(4)



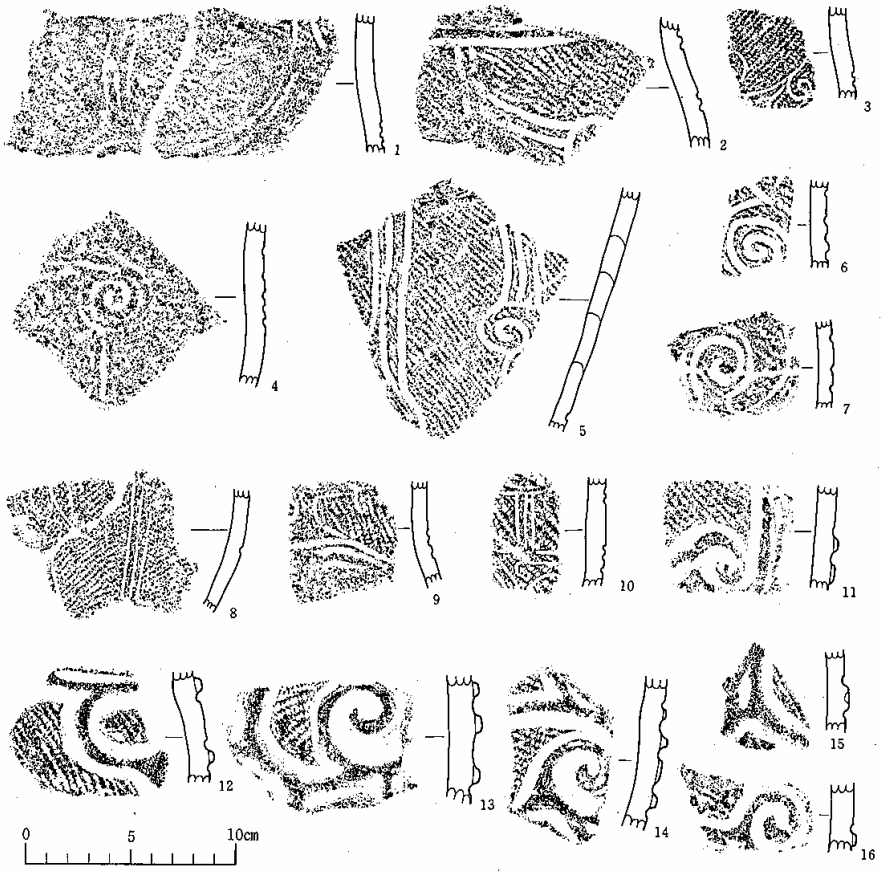
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－K区　第7b層	深鉢B	1a	口縁～胴部：RL縄文縦回転→有軸縦位渦巻文(隆沈線文)　一部連結	Po. 28	27－1
2	第42－K区　第7b層	深鉢C	5a	口縁～胴部：LR縄文縦回転→有軸曲流渦巻文(沈線文)	Po.380	26－8
3	第42－K区　第7b層	深鉢C	5a	口縁部：無文　胴部：LR縄文縦回転→曲流文(沈線文)	Po.706	26－9
4	第42－K区　第7層	深鉢D	1	口唇部：変形横位渦巻文(隆沈線文による円形文の横位連結)　口縁～頸部：無文	Po.180	——
5	第42－K区　第7b層	深鉢D	1b	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁～頸部：無文　頸部：横位沈線文間に刺突文 胴部：RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　一部連結　底部：無文	Po. 25	27－5
6	第42－K区　第7層	深鉢D	2	口縁～頸部：無文　波状口縁	Po.181	27－2
7	第42－K区　第7層	深鉢D	3b	口縁～胴部：LR縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)	Po. 27	27－6

第37図　第42－K区出土土器(5)



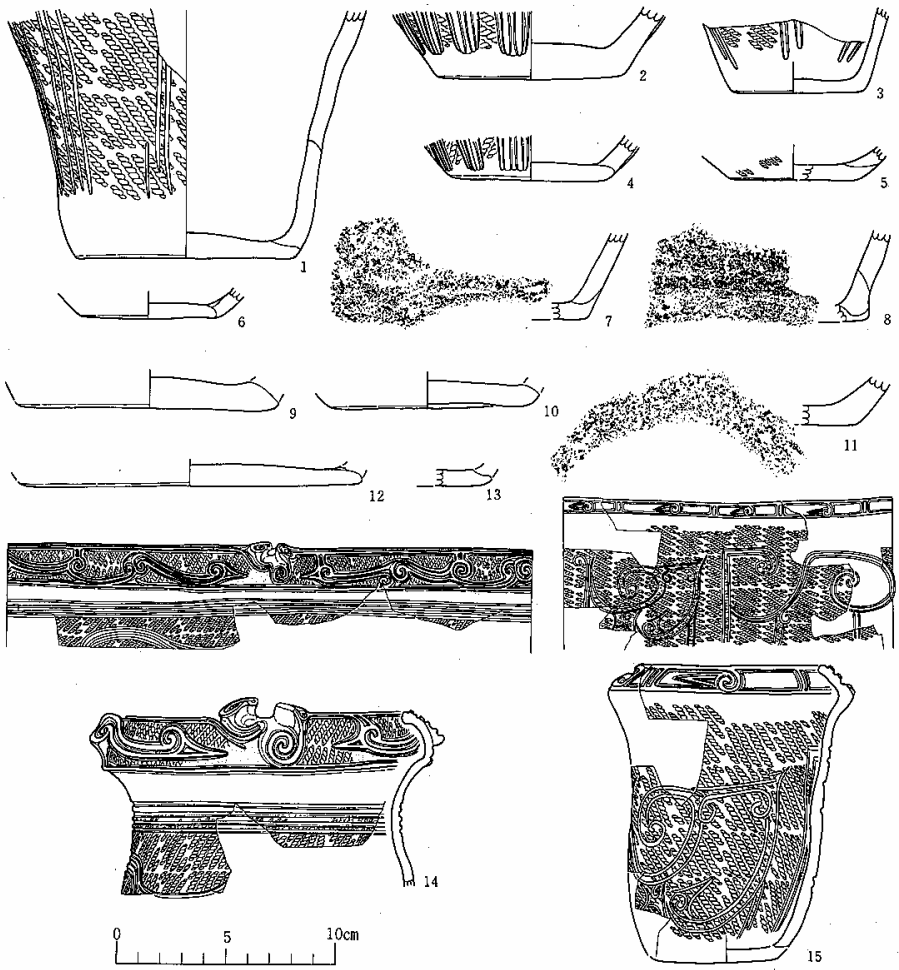
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録・図版
1	第42－K区　第7b層	浅鉢B	3	口縁・胴・底部：無文　波状口縁	Po. 21　27－8
2	第42－K区　第7層	浅鉢B	2	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁～胴部：無文	Po.179　27－3
3	第42－K区　第7層	浅鉢A	2	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　LR縄文横回転　胴部：無文	Po.178　27－4
4	第42－K区　第7b層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.709　28－2
5	第42－K区　第7b層	鉢台		LR縄文縦斜回転　円窓4個　脚部か器台か不明	Po. 26　27－7
6	第42－K区　第7層	深鉢	胴部	頸部：無文　胴部：LR縄文縦回転→横位・縦位沈線文	Po.690　28－1
7	第42－K区　第7b層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.$\frac{702}{711}$　28－3
8	第42－K区　第7層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.696　28－5
9	第42－K区　第7b層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.693　28－4

第38図　第42－K区出土土器(6)



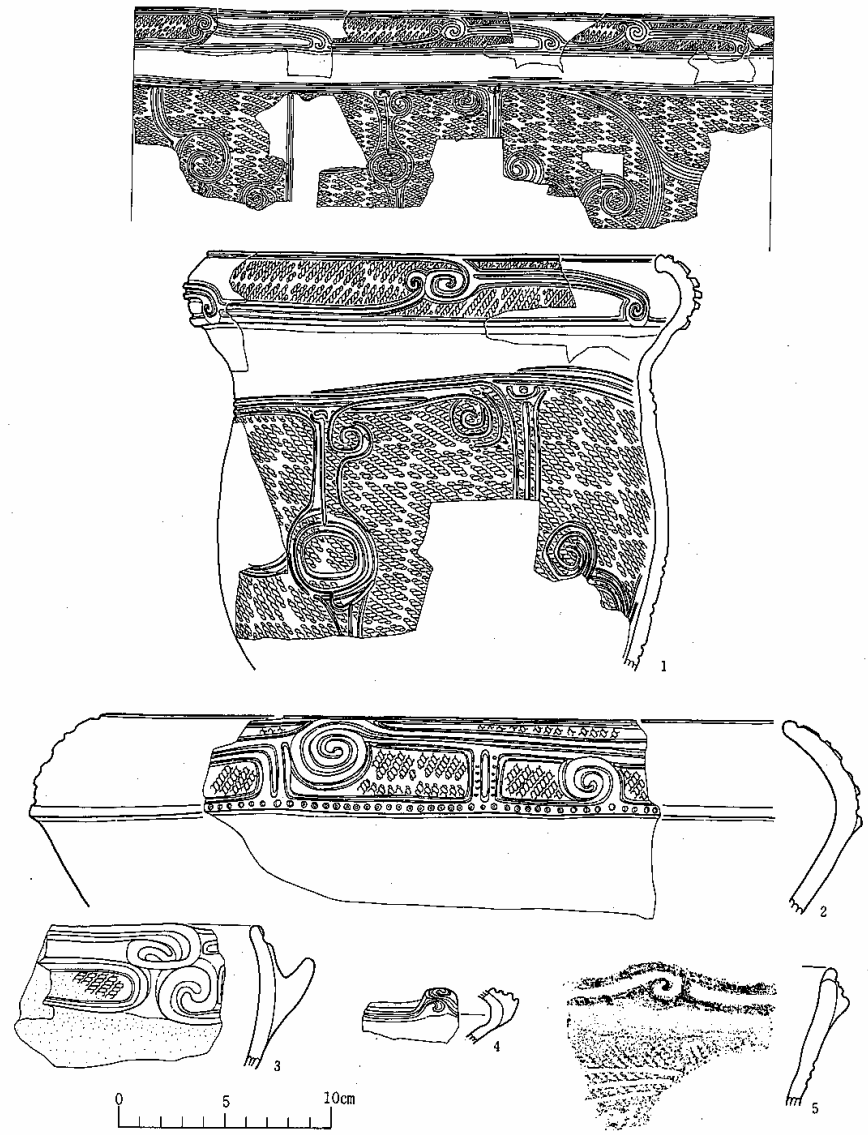
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－K区　第7a層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流文(沈線文)	Po.692	28－7
2	第42－K区　第7b層	深　鉢	胴部	LR縄文縦斜回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.704	28－8
3	第42－K区　第7a層	深　鉢	胴部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.710	28－9
4	第42－K区　第7層	深　鉢	胴部	不明縄文→曲流渦巻文(沈線文)	Po.699	28－10
5	第42－K区　第7b層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.703	28－11
6	第42－K区　第7b層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.712	28－12
7	第42－K区　第7a層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　一部もしくは各部分連結	Po.695	28－13
8	第42－K区　第7b層	深　鉢	胴部	RL縄文縦回転→有棘曲流渦巻文(沈線文)	Po.698	28－14
9	第42－K区　第7a層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流文(沈線文)	Po.697	28－15
10	第42－K区　第7層	深　鉢	胴部	LR縄文回転→有棘曲流渦巻文(沈線文)	Po.700	28－16
11	第42－K区　第7層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)	Po.691	28－17
12	第42－K区　第7b層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)	Po.701	28－18
13	第42－K区　第7層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→LR縄文横斜回転充填	Po.708	28－19
14	第42－K区　第7b層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　LR縄文縦回転	Po.705	28－20
15	第42－K区　第7b層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　LR縄文縦回転	Po.694	28－21
16	第42－K区　第7b層	深　鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　不明縄文	Po.160	28－22

第39図　第42－K区出土土器(7)



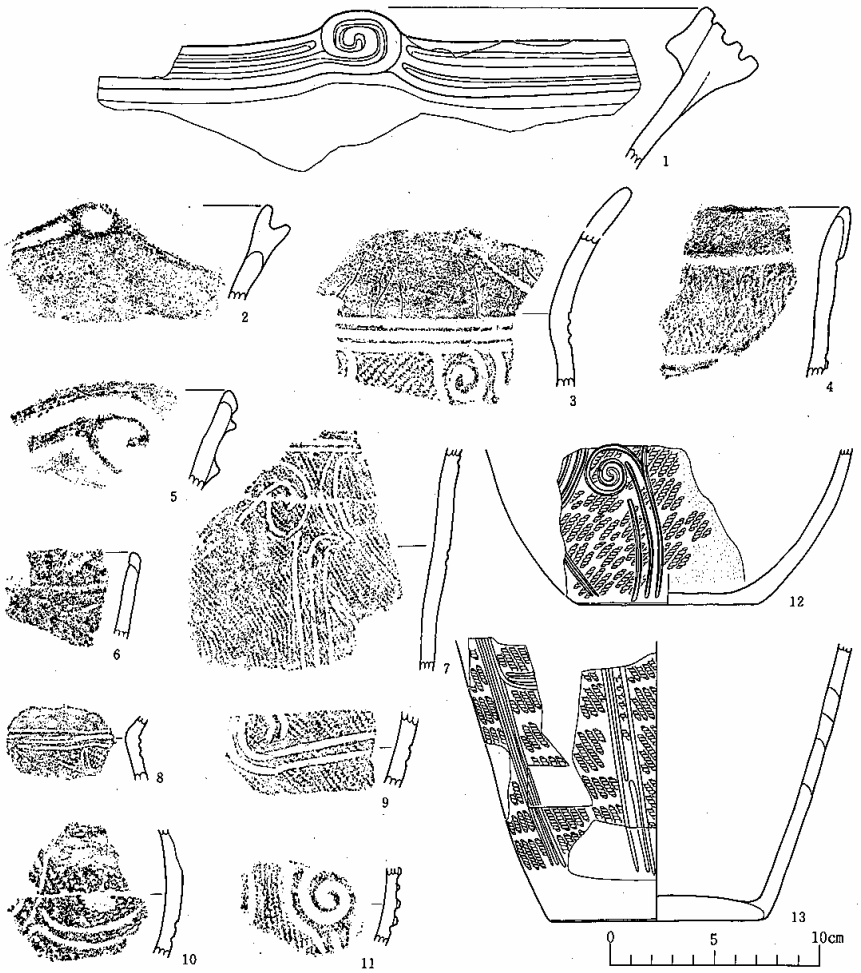
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－K区 第7b層	深 鉢	胴下部	LR縄文縦回転→縦位沈線文 胴部下端～底部：無文	Po. 835	——
2	第42－K区 第7層	深 鉢	胴下部	LR縄文縦回転→縦位隆沈線文 胴部下端～底部：無文	Po. 824	——
3	第42－K区 第7b層	深 鉢	胴下部	LR縄文縦回転→縦位沈線文 胴部下端～底部：無文	Po. 836	——
4	第42－K区 第7b層	深 鉢	胴下部	RL縄文縦回転→縦位隆沈線文 胴部下端～底部：無文	Po. 834	——
5	第42－K区 第7b層	深 鉢	胴下部	LR縄文縦回転 底部：無文	Po. 837	——
6	第42－K区 第7b層	深 鉢	底 部	胴部下端～底部：無文？ 剥落顕著	Po. 830	——
7	第42－K区 第7b層	深 鉢	底 部	胴部下端～底部：剥落顕著	Po. 833	——
8	第42－K区 第7b層	深 鉢	底 部	胴部下端～底部：無文	Po. 831	——
9	第42－K区 第7層	深 鉢	底 部	胴部下端～底部：無文	Po. 825	——
10	第42－K区 第7層	深 鉢	底 部	胴部下端～底部：無文	Po. 826	——
11	第42－K区 第7層	深 鉢	底 部	胴部下端～底部：剥落顕著	Po. 828	——
12	第42－K区 第7b層	深 鉢	底 部	胴部下端～底部：剥落顕著	Po. 832	——
13	第42－K区 第7層	深 鉢	底 部	無文	Po. 829	——
14	第42－K区 第8層	深鉢A	2b1	口縁部：LR縄文横回転→有節横位渦巻文(隆沈線文) 二本隆沈線連結 渦巻突起あり 頸部：無文 胴部：RL縄文（RLRの可能性もあり）縦回転→曲流文(沈線文)	Po. 29	29－2
15	第42－K区 第8層	深鉢A	2c1	口縁部：有節横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 胴部：LR縄文縦回転→有節曲流渦巻文(沈線文) 一部連結	Po. 30	29－3

第40図 第42－K区出土土器(8)



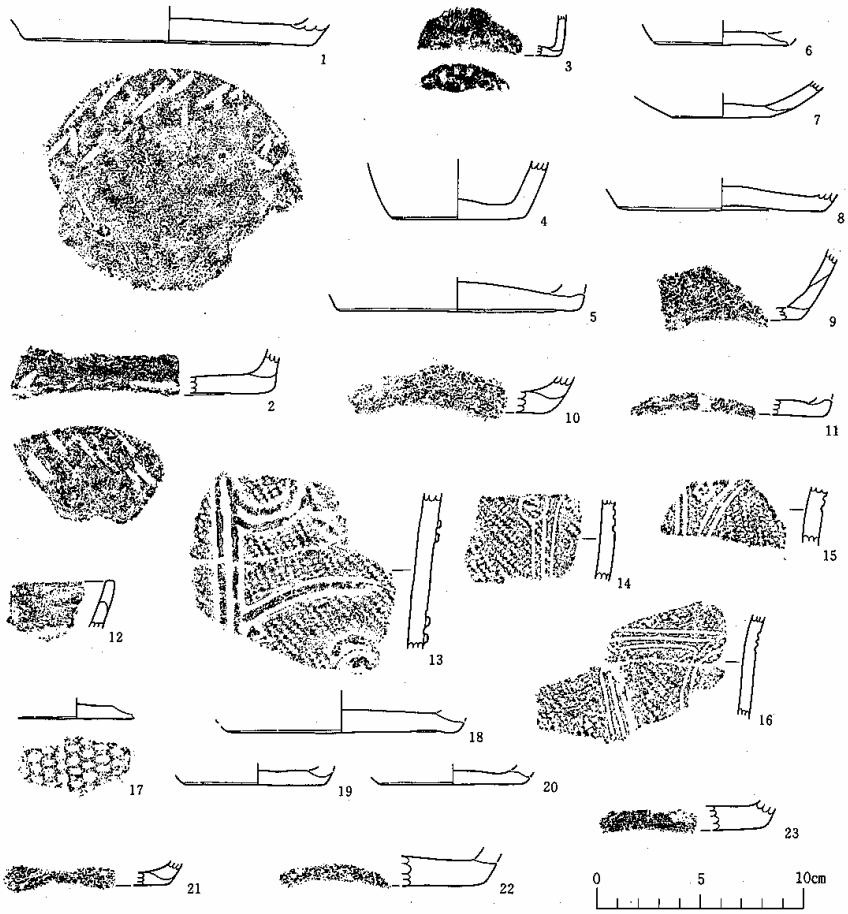
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－K区　第8層	深鉢A	2 a	口縁部：ＬＲ縄文横回転→二個結合横位渦巻文(隆沈線文)　頸部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po. 22	29－1
2	第42－K区　第8層	深鉢A	2 b$_1$	口縁部：ＬＲ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　二本隆沈線縦位連結　隆線に連続刺突文　頸部：無文	Po.183	30－1
3	第42－K区　第8層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分結合　ＲＬ縄文縦回転充填　頸部：剥落不明	Po.184	30－2
4	第42－K区　第8層	深鉢A	2 c$_1$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　剥落顕著　頸部：無文	Po 191	――
5	第42－K区　第8層	深鉢D	1	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁～頸上部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転→沈線文	Po 185	30－4

第41図　第42－Ｋ区出土土器(9)



番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－K区　第8層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文　刺落顕著	Pb.186	30－3
2	第42－K区　第8層	深鉢D	1	口唇部：変形横位渦巻文(隆沈線文による円文の横位連結)　口縁・頸部：無文　刺落顕著	Pb.188	30－5
3	第42－K区　第8層	深鉢D	2	口縁部：無文　胴部：RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　一部連結	Pb.383	30－6
4	第42－K区　第8層	深鉢D	3b	口縁～胴部：L r 撚糸文→曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結	Pb.190	30－7
5	第42－K区　第8層	深鉢C	2a	口縁部：横位渦巻文(隆線文)　波状口縁　外傾強く浅鉢の可能性もある	Pb.189	30－8
6	第42－K区　第8層	深鉢？		外面：無文　内面：粗雑な横のミガキ　深鉢口縁部か脚部か不明	Pb.822	――
7	第42－K区　第8層	深　鉢	胴　部	LR縄文縦斜回転→有軸曲流渦巻文(沈線文)	Pb.713	30－10
8	第42－K区　第8層	深　鉢	胴　部	LR縄文縦回転→沈線文	Pb.718	30－9
9	第42－K区　第8層	深　鉢	胴　部	LR縄文縦回転→曲流(折)渦巻文(沈線文)	Pb.715	30－11
10	第42－K区　第8層	深　鉢	胴　部	LR縄文縦回転→曲流文(沈線文)	Pb.720	30－12
11	第42－K区　第8層	深　鉢	胴　部	曲流渦巻文(隆沈線文)　一部もしくは各部分連結　LR縄文縦斜回転	Pb.717	30－13
12	第42－K区　第8層	深　鉢	胴底部	胴部：RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　一部連結　底部：無文	Pb.841	――
13	第42－K区　第8層	深　鉢	胴底部	胴部：LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　胴部下端：無文　底部：木葉痕	Pb.909	――

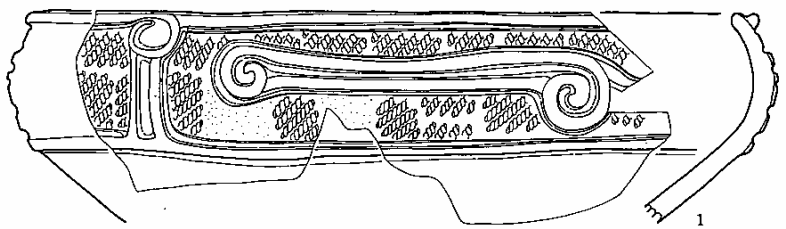
第42図　第42－K区出土土器(10)

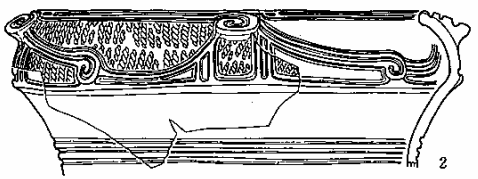


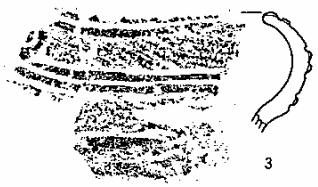
番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	登録	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	登録	図版
1	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端：無文　底部：網代痕	Po.848	―	2	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端：無文　底部：網代痕	Po.840	―
3	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端：無文　底部：網代痕	Po.839	―	4	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.849	―
5	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.838	―	6	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	底部：無文	Po.846	―
7	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.843	―	8	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.842	―
9	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端：無文　底部：刺落	Po.844	―	10	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.847	―
11	第42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.845	―	17	第41・42－K区　第8層	深　鉢	底部	底部：網代痕	Po.854	―
18	第41・42－K区　第8層	深　鉢	底部	底部：無文	Po.853	―	19	第41・42－K区　第8層	深　鉢	底部	底部：無文	Po.859	―
20	第41・42－K区　第8層	深　鉢	底部	底部：無文	Po.856	―	21	第41・42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.857	―
22	第41・42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.855	―	23	第41・42－K区　第8層	深　鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.858	―

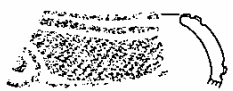
番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	登録	図版
12	第41・42－K区　第8層	深鉢D	2	口縁部：無文　波状口縁	Po.369	30－14
13	第41・42－K区　第8層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)　一部連結	Po.745	30－16
14	第41・42－K区　第8層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.746	30－15
15	第41・42－K区　第8層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.744	30－17
16	第41・42－K区　第8層	深　鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流文(沈線文)	Po.747	30－18

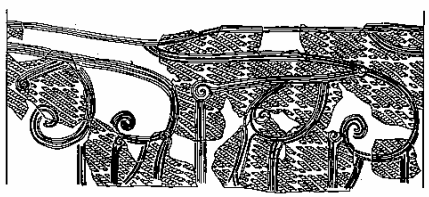
第43図　第42－K区出土土器(11)・第41・42－K区出土土器

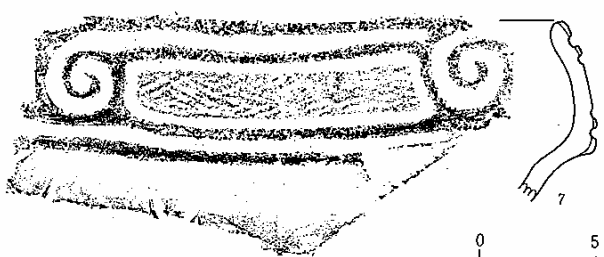


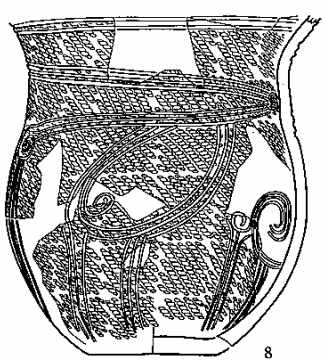


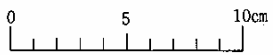






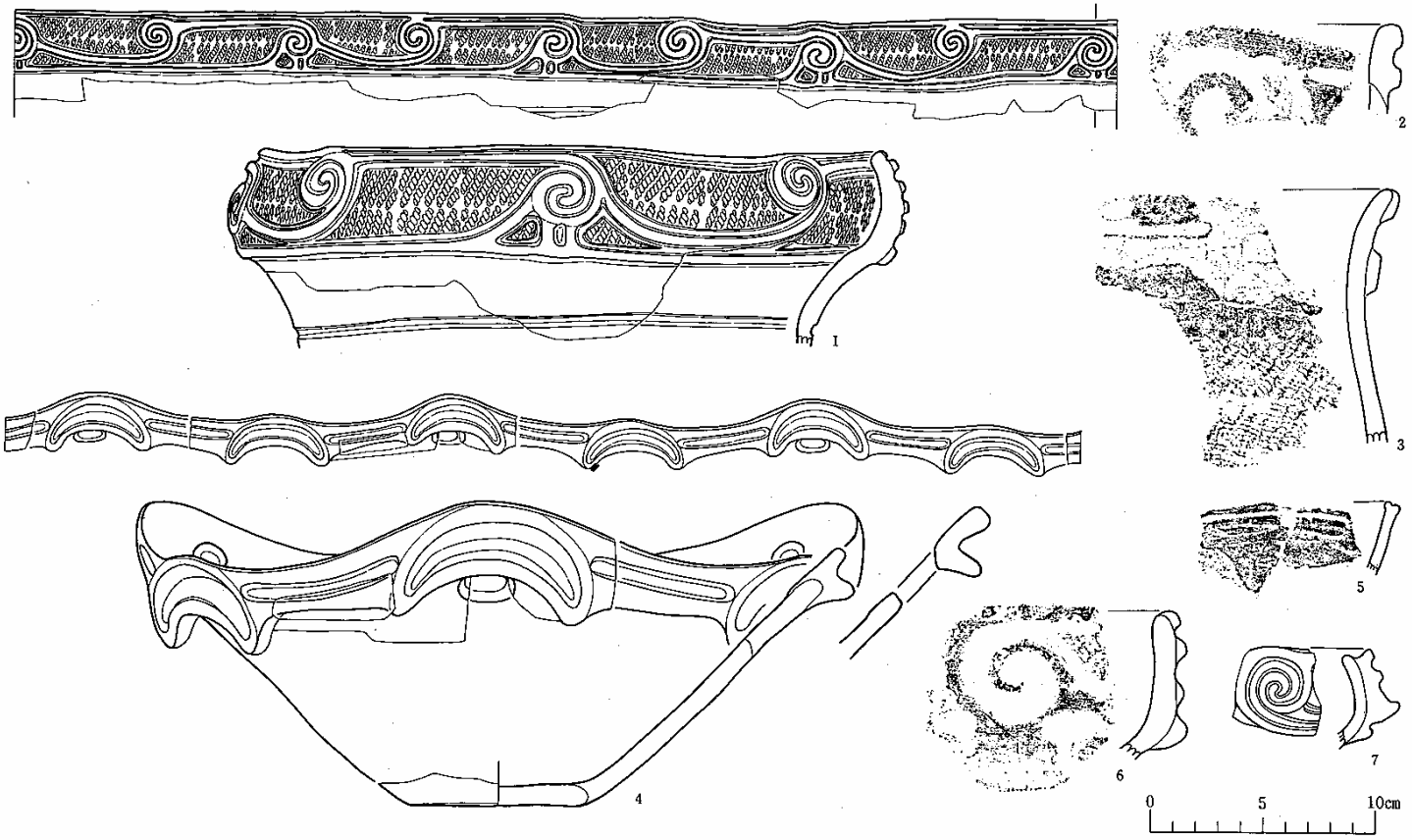






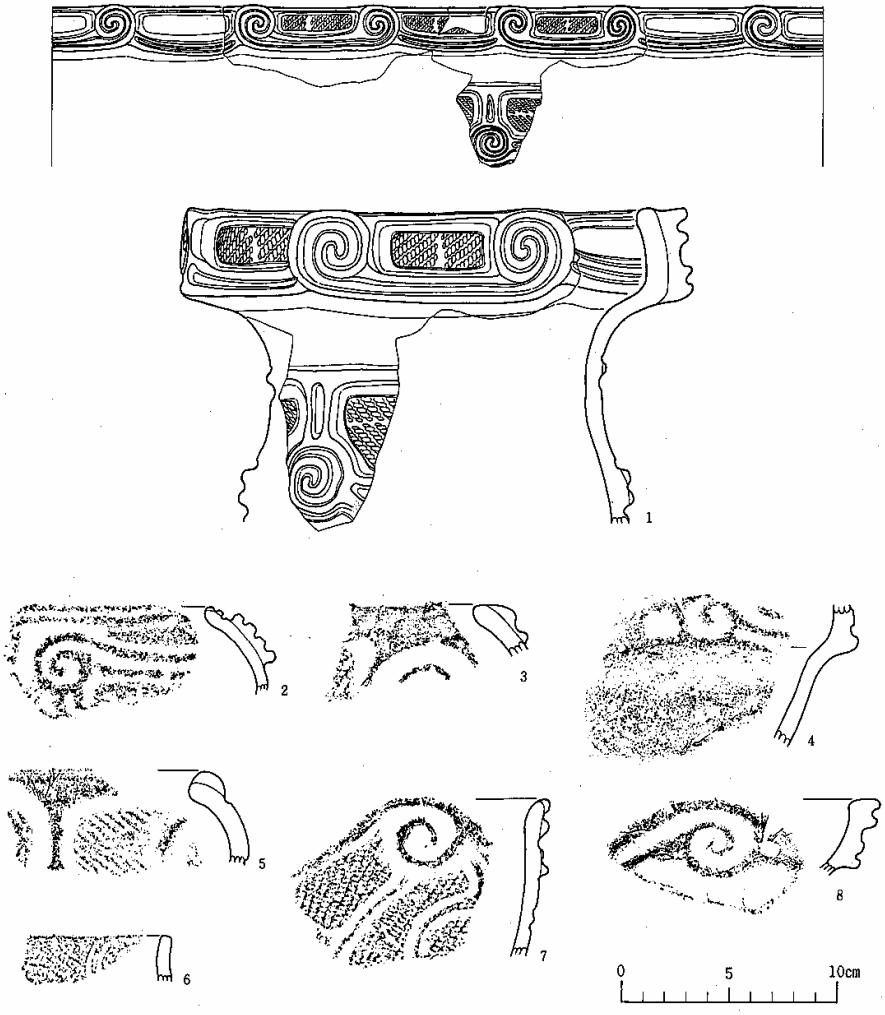
番号	地区・層位	器形	分　類	特　　徴	登録	図版
1	第42－L区　第7a層	深鉢A	1	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　一部隆沈線省略　頸部：無文	Po. 33	30－20
2	第42－L区　第7a層	深鉢A	2a	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　大単位結合　頸部：無文　胴部：沈線文	Po. 18	31－1
3	第42－L区　第7a層	深鉢A	2a	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　大単位連結　頸部：刺落顕著	Po.232	30－21
4	第42－L区　第7a層	深鉢A	$2c_2$	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　各部分結合　頸部：無文	Po.381	——
5	第42－L区　第7a層	深鉢A	2aorb	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po.363	30－22
6	第42－L区　第7層	深鉢A	1or2	口縁部：LR縄文横回転→横位有轆渦巻文(隆線文)	Po.163	——
7	第42－L区　第7a層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分結合→LR縄文縦横回転充塡　頸部：無文	Po.171	31－2
8	第42－L区　第7a層	深鉢A	?	胴部：LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　一部連結　深鉢A2c，類の可能性が強い	Po. 23	31－8

第44図　第42－L区出土土器(1)



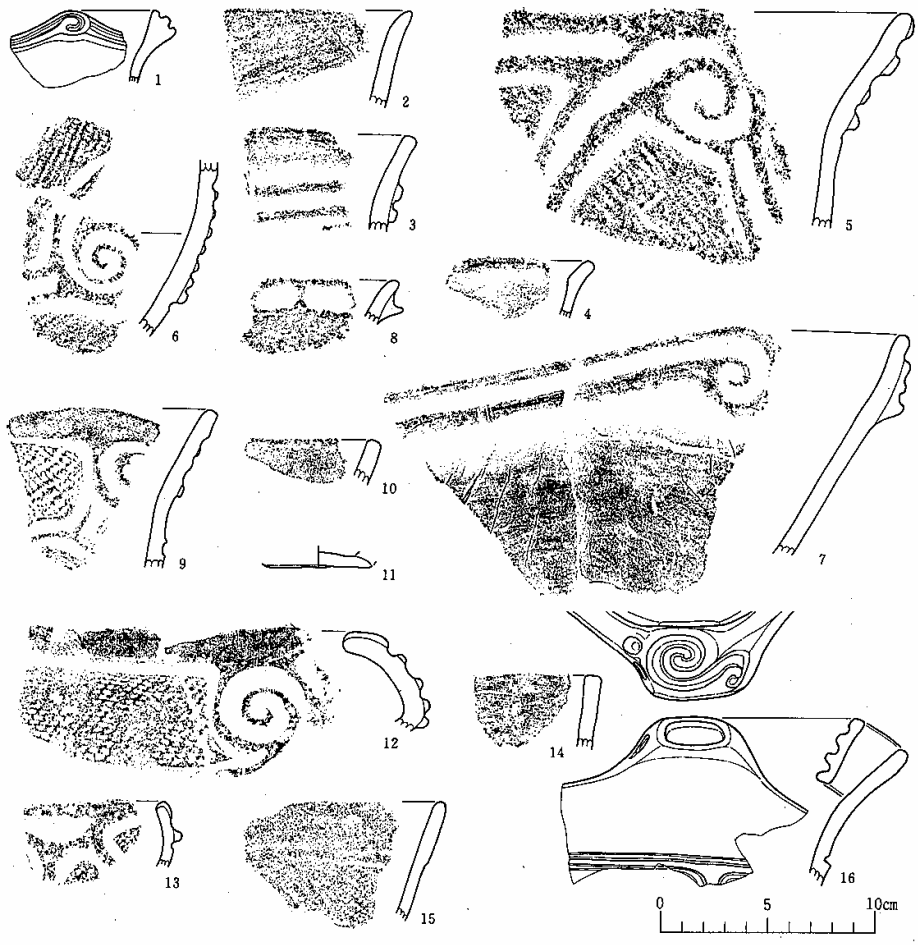
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第42－L区　第7a層	深鉢A	3	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文（隆沈線文）部分連結　底部：無文　胴部上端：横位沈線文	Po. 32	31－7	5	第42－K・L区　第7層	深　鉢	?	口縁状部分に溝状文　深鉢口縁部か胴部か不明	Po.237	31－6
2	第42－L区　第7a層	深鉢C	2 a_1	口縁部：横位渦巻文（隆線文）　波状口縁	Po.233	31－4	6	第42－K・L区　第7層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文（隆沈線文）→LR縄文横回転充填	Po. 73	31－3
3	第42－L区　第7a層	深鉢C	2 a_2	口縁部：横位渦巻文（隆線文）　底部：無文　胴部：RL縄文縦回転	Po.234	—	7	第42－K・L区　第7層	深鉢A	2 c_1	口縁部：横位渦巻文（隆沈線文）	Po.235	31－5
4	第42－L区　第7a層	深鉢B	1	口縁部：溝状文（隆沈線文による横位渦巻文の変形か）　波状突起部に円窓あり　胴～底部：無文	Po.231	31－9							

第45図　第42－L区出土土器(2)



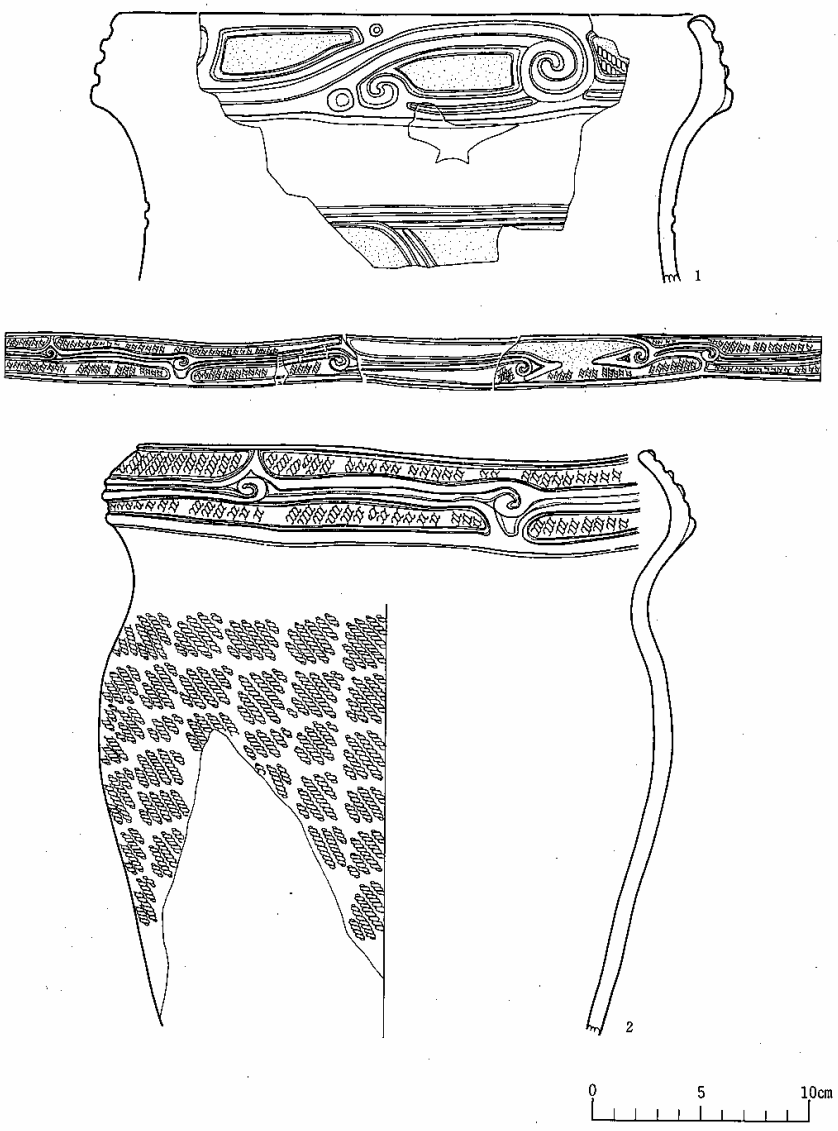
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－Ｊ区　第５層	深鉢Ａ	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　ＬＲ縄文横回転　頸部：無文　胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　ＬＲ縄文縦回転	Po. 94	32－1
2	第43－Ｊ区　第５層	深鉢Ａ	2 b	口縁部：不明縄文→横位渦巻文(隆沈線文)　二本隆沈線縦位連結	Po. 54	31－10
3	第43－Ｊ区　第５層	深鉢Ａ	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→ＲＬ縄文縦回転充填	Po. 56	31－14
4	第43－Ｊ区　第５層	深鉢Ａ	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　頸部：無文	Po. 88	31－11
5	第43－Ｊ区　第５層	深鉢Ａ	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→ＲＬ縄文横回転充填	Po. 62	31－12
6	第43－Ｊ区　第５層	深鉢Ｃ	5 a	口縁～胴部：ＬＲ縄文縦回転→沈線文	Po.528	31－13
7	第43－Ｊ区　第５層	深鉢Ｃ	5 b	口縁～胴部：ＲＬ縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文・沈線文)　各部分連結　波状口縁	Po.120	32－3
8	第43－Ｊ区　第５層	浅鉢Ｂ	2	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　胴部：無文　波状口縁	Po.142	——

第46図　第43－Ｊ区出土土器(1)



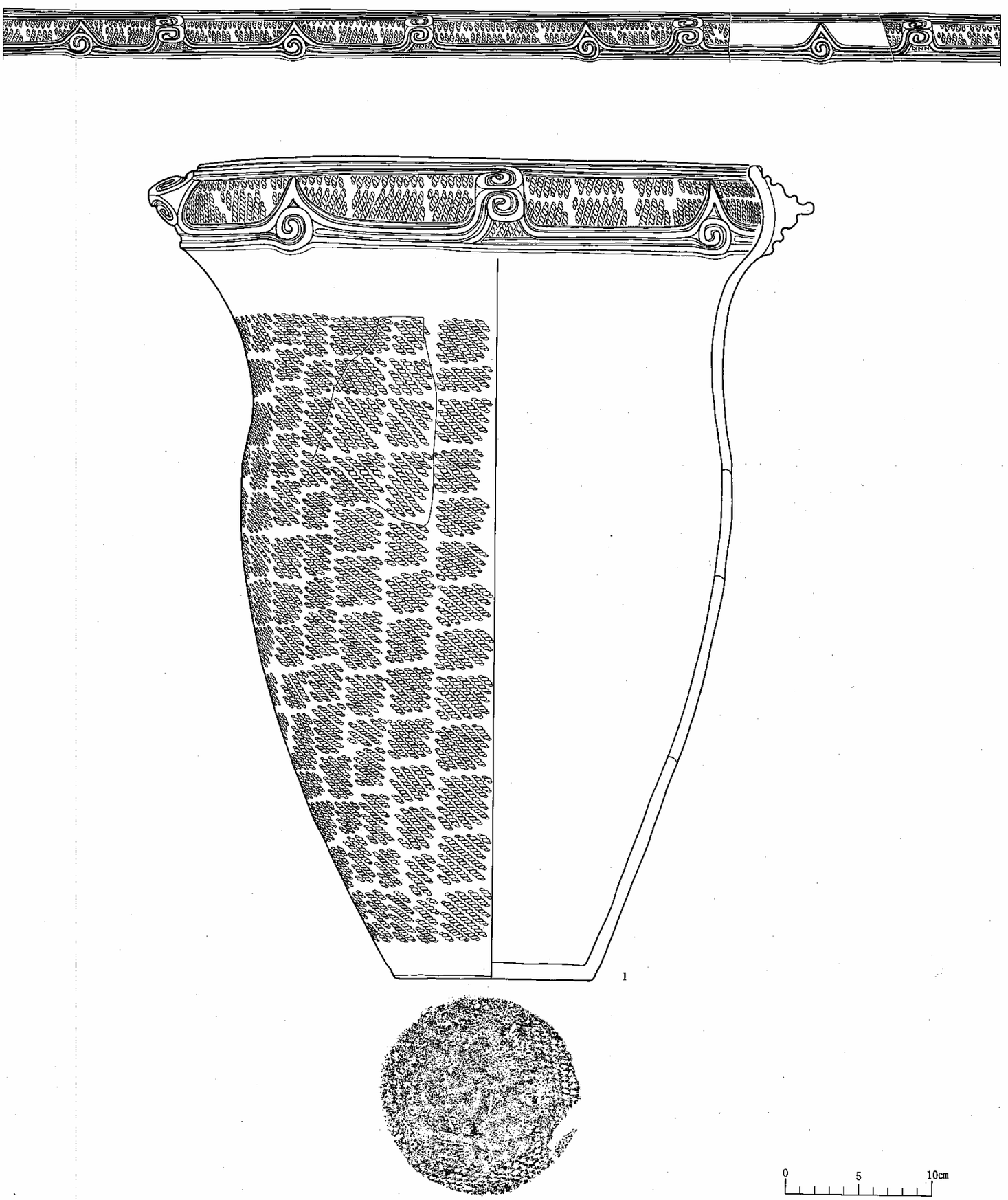
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－J区 第5層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁・頚部：無文	Po.449	31－15
2	第43－J区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 波状口縁	Po.133	——
3	第43－J区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 波状口縁 胴部：隆沈線文	Po.137	31－16
4	第43－J区 第5層	深鉢D	1？	口縁部：無文 肥厚 Po.111と同一個体の可能性あり	Po.130	31－17
5	第43－J区 第5層	深鉢D	3b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 ＬＲ縄文縦回転	Po.118	32－2
6	第43－J区 第5層	深 鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 ＲＬ縄文縦回転	Po.900	——
7	第43－J区 第5層	浅鉢B	2	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 波状口縁 胴部：無文	Po.141	32－4
8	第43－J区 第6層	深鉢D	1	口唇部：変形横位渦巻文(隆沈線文による円文の横位連結)	Po.548	32－5
9	第43－J区 第6層	深鉢D	3b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 波状口縁 ＲＬ縄文縦回転	Po.454	32－7
10	第43－J区 第7層	深鉢D	2	口縁部：無文 波状口縁	Po.441	32－6
11	第43－J区 第7層	深 鉢	底部	剝落顕著	Po.794	——
12	第43－K区 第4層	深鉢A	2c,	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結→ＲＬ縄文縦回転充填	Po. 53	32－8
13	第43－K区 第4層	深鉢B	1b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 ＬＲ縄文横回転	Po.452	32－10
14	第43－K区 第4層	深鉢C	3	口縁部：無文	Po.450	32－9
15	第43－K区 第4層	深鉢E	1b	口縁部：肥厚 無文 胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po.451	32－11
16	第43－K区 第4層	深鉢D	1？	口唇部：肥厚し突起あり 突起は注口状で渦巻文(沈線文)あり 口縁・頚部：無文 胴部：隆沈線文	Po.111	32－12

第47図 第43－Ｊ区出土土器(2)・第43－Ｋ区出土土器(1)



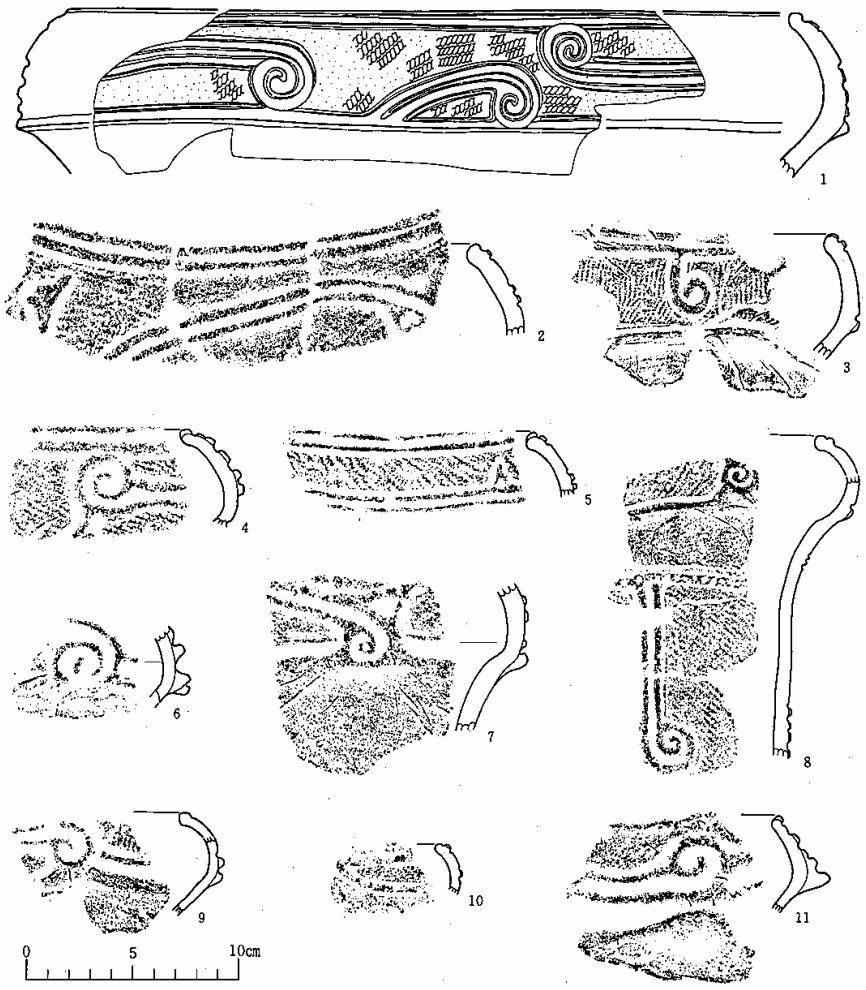
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第4層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　RL縄文横回転　頚部：無文　胴部：沈線文　不明縄文	Po.365	32－13
2	第43－K区　第5層	深鉢A	1	口縁部：LR縄文横回転→有軸横位渦巻文(隆沈線文)　頚部：無文　胴部：LR縄文縦回転	Po. 6	33－1

第48図　第43－K区出土土器(2)



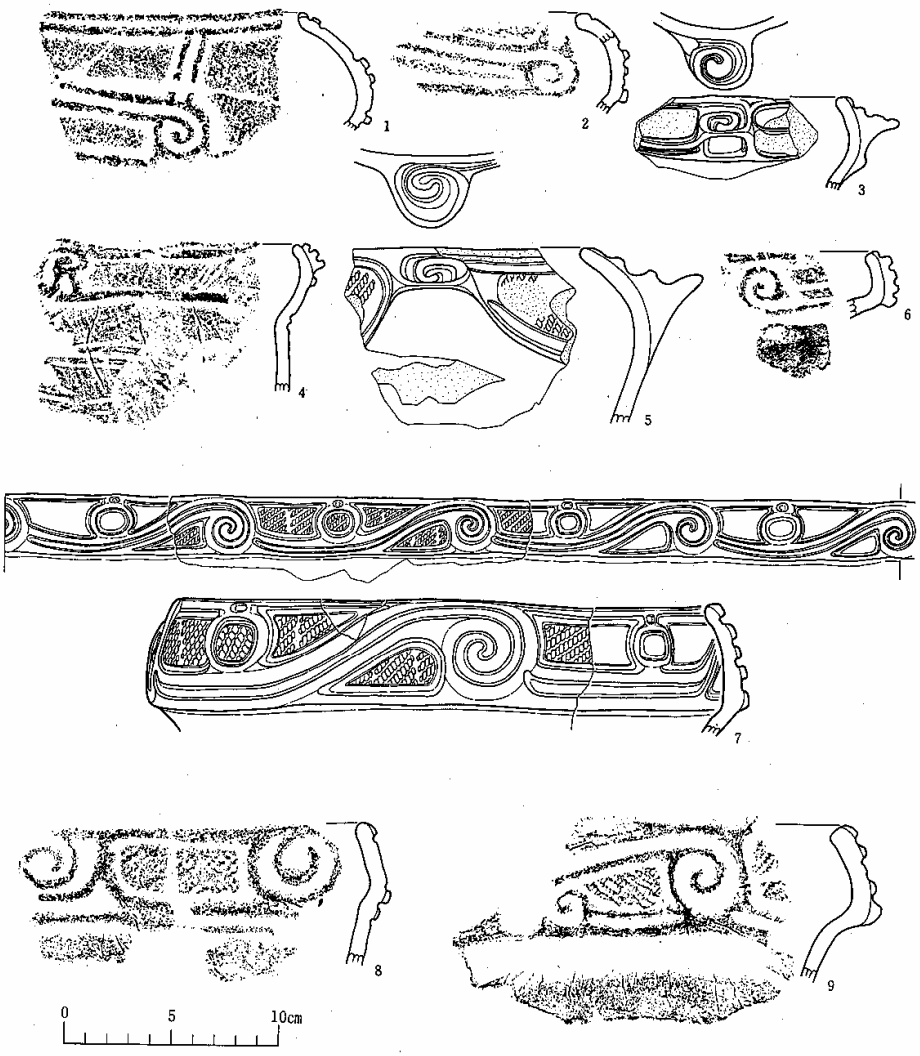
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深鉢A	2b,	口縁部：LR縄文横回転→有棘横位渦巻文(隆沈線文)　有棘渦巻文の部分と上下二個結合渦巻文の部分がある。二個結合渦巻文によって大単位連結　上棘渦巻文にもって小単位連結となっている　頸部：無文　胴部：LR縄文縦回転　底部：網代痕	Po.1	34

第49図　第43－K区出土土器(3)



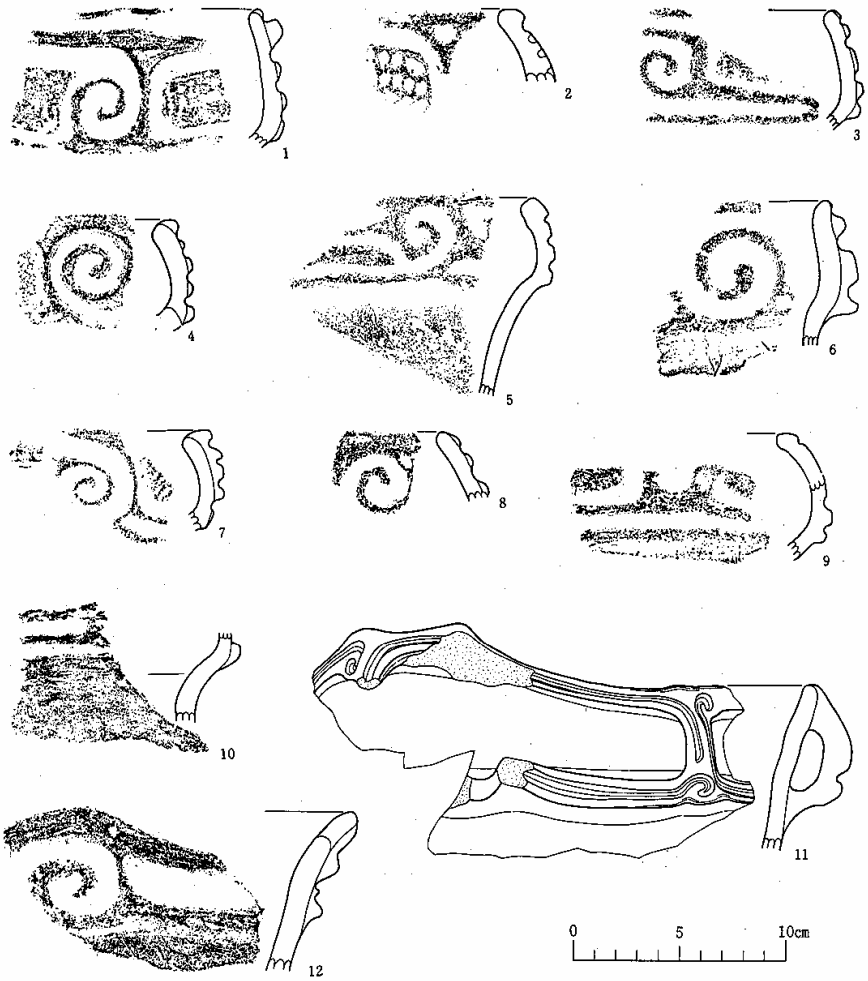
番号	地区・層位	器形	分 類	特 徴	登録	図版
1	第43－K区 第5層	深鉢A	2 a	口縁部：ＬＲ縄文斜横回転→横位渦巻文(隆沈線文) 頚部：無文	Po. 82/90	33－2
2	第43－K区 第5層	深鉢A	2 a	口縁部：ＲＬ縄文斜回転→有軸横位渦巻文(隆沈線文)	Po. 67	35－5
3	第43－K区 第5層	深鉢A	2 a	口縁部：ＲＬ縄文横斜回転→変形渦巻文(隆沈線文) 頚部：無文	Po. 66	35－1
4	第43－K区 第5層	深鉢A	2 a	口縁部：ＲＬ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文) 大単位連結	Po. 72	35－3
5	第43－K区 第5層	深鉢A	2 a	口縁部：ＲＬ縄文横回転→有軸横位渦巻文(隆沈線文)	Po. 68	35－2
6	第43－K区 第5層	深鉢A	2 a	口縁部：ＬＲ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po. 58	35－4
7	第43－K区 第5層	深鉢A	2 a	口縁部：不明縄文→有軸横位渦巻文(隆沈線文) 頚部：無文	Po. 76	35－6
8	第43－K区 第5層	深鉢A	2 a or c$_1$	口縁部：ＬＲ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文) 頚部：無文 胴部上端：連結刺突隆沈線文 胴部：ＬＲ縄文複回転→渦巻文(隆沈線)	Po. 150	35－7
9	第43－K区 第5層	深鉢A	2 a	口縁部：不明縄文→横位渦巻文(隆沈線文) 頚部：刺落顕著	Po. 59	35－10
10	第43－K区 第5層	深鉢A	2 a	口縁部：不明縄文→隆沈線文	Po. 71	――
11	第43－K区 第5層	深鉢A	2 c$_1$	口縁部：不明縄文→横位渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 頚部：刺落顕著	Po. 61	35－11

第50図　第43－K区出土土器(4)



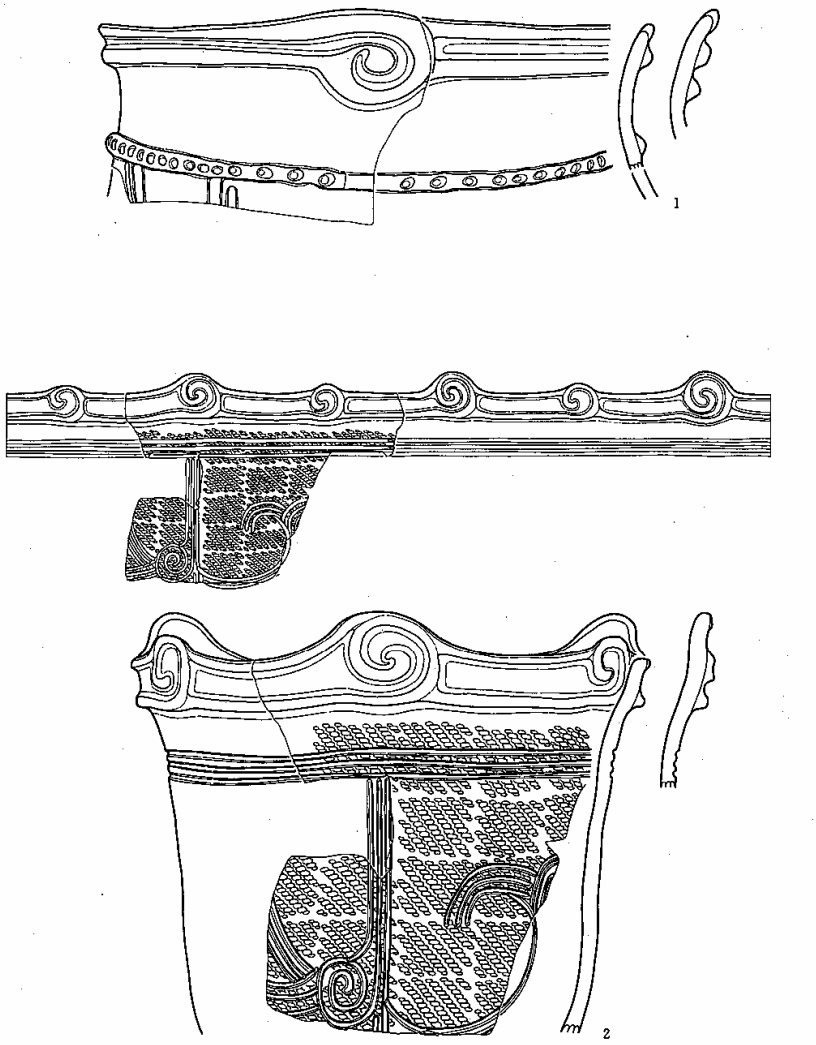
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深鉢A	2 b_1	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　二本隆沈線縦位連結	Po. 74	35－8
2	第43－K区　第5層	深鉢A	2 b_1	口縁部：不明縄文→横位渦巻文(隆沈線文)　二本隆沈線縦位連結	Po. 70	35－9
3	第43－K区　第5層	深鉢A	2 c_1	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　不明縄文　頸部：無文	Po. 81	35－15
4	第43－K区　第5層	深鉢A	2 c_1	口縁部：LR縄文横回転→有線横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　頸～胴部：LR縄文縦回転→沈線文	Po.149	35－12
5	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　推定各部分連結　LR縄文横回転　頸部：無文	Po. 86	35－13
6	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　RL縄文横回転　頸部：無文	Po. 57	35－14
7	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　頸部：無文	Po. 87/92	36－1
8	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　LR縄文横回転　頸部：無文	Po. 78	35－16
9	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→LR縄文縦回転充填　頸部：無文	Po. 69	35－17

第51図　第43－K区出土土器(5)



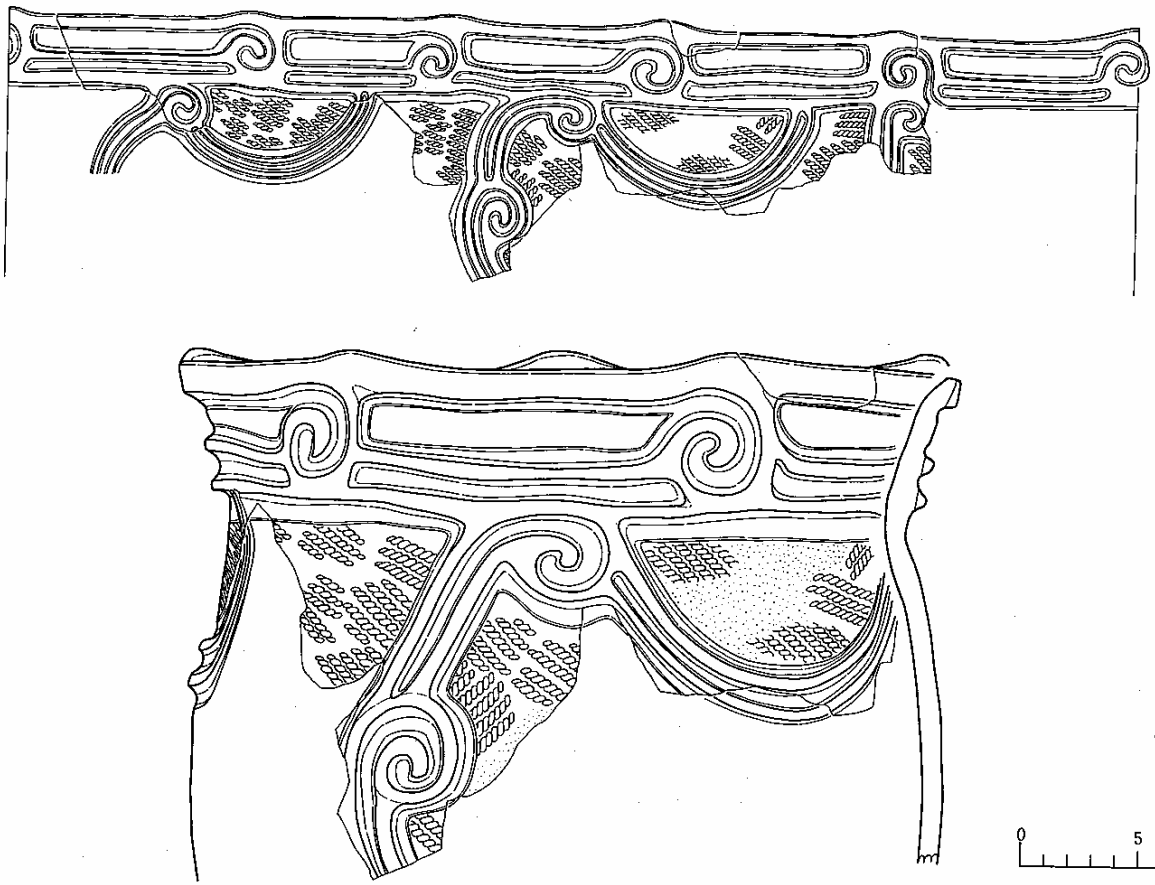
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→LR縄文斜回転充填→軽いミガキ	Po. 65	35－18
2	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→円形刺突文充填	Po. 84	35－22
3	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　不明縄文	Po. 75	35－20
4	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→LR縄文縦回転充填	Po. 77	——
5	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　頸部：無文	Po. 63	35－21
6	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　頸部：無文	Po. 60	35－23
7	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→LR縄文横回転充填	Po. 79	——
8	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　推定各部分連結	Po.906	——
9	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　推定各部分連結	Po. 73	35－24
10	第43－K区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　推字各部分連結　頸部：無文	Po. 98	——
11	第43－K区　第5層	深鉢C	1	口縁部：横状把手横位連結　把手上に渦巻文(沈線文)　頸部：無文	Po.408	37－1
12	第43－K区　第5層	深鉢C	2 a_2	口縁部：横位渦巻文(隆線文)　波状口縁　頸部：無文	Po. 89	37－5

第52図　第43－K区出土土器(6)



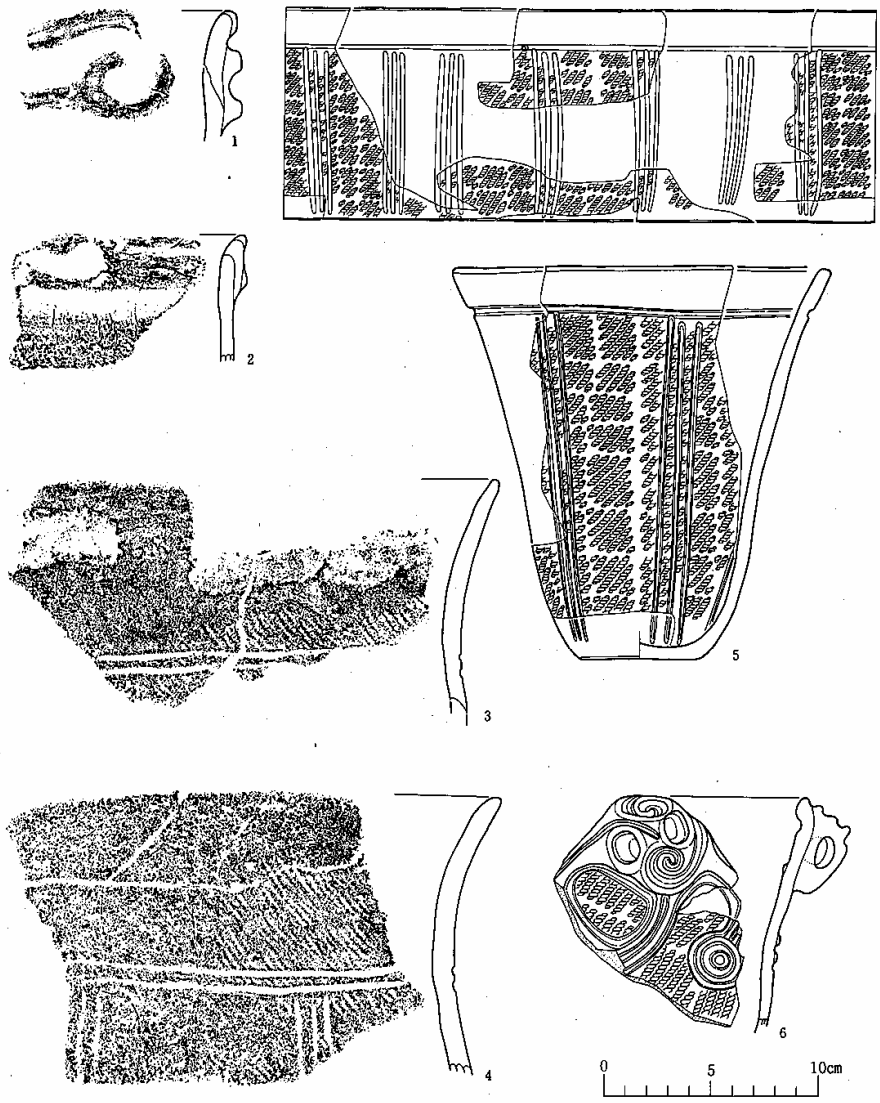
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深鉢C	2a1	口縁部：横位渦巻文(隆線文)　頸部：無文　胴部上端：連続刺突隆線文　胴部：隆沈線文	Po.95	37－2
2	第43－K区　第5層	深鉢C	2a1	口縁部：横位渦巻文(隆線文)　頚上部：無文　頚下部～胴部：LR縄文複回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.13	36－2

第53図　第43－K区出土土器(7)



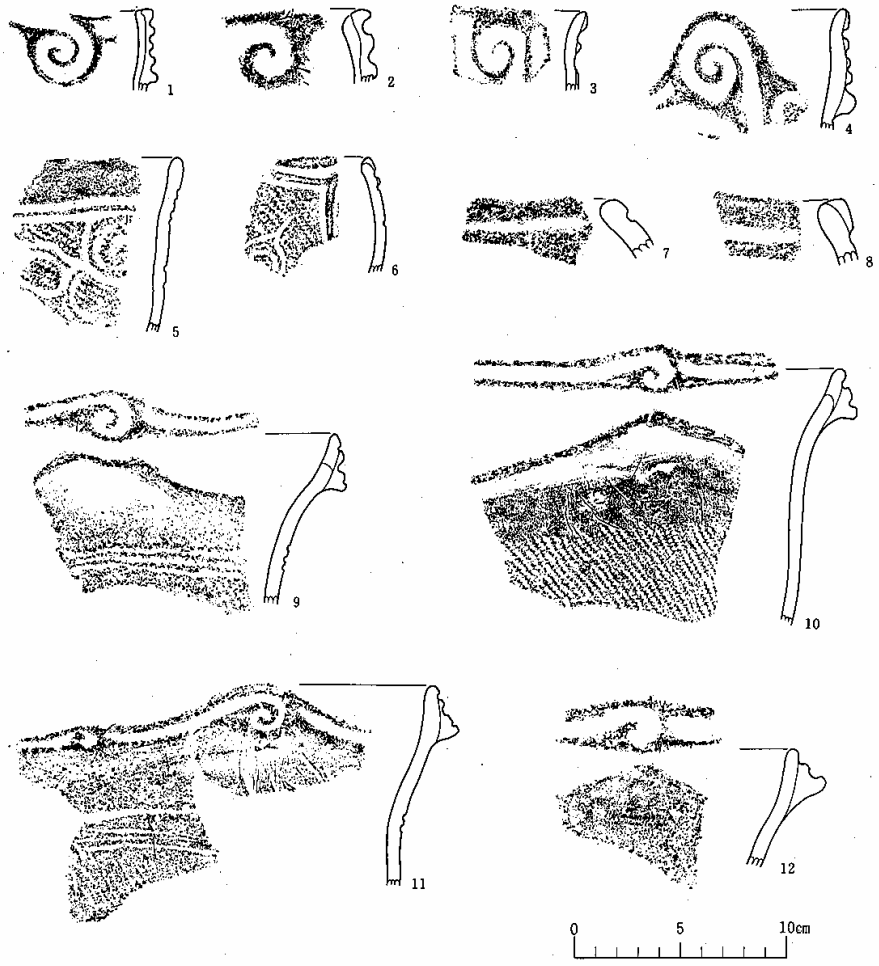
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深鉢C	2a,	口縁部：横位渦巻文(陰沈線文)　胴部：曲流渦巻文(陰沈線文)　各部分連結　口縁部文様と胴部文様も連結　LR縄文縦横斜回転	Po. 7	36－3

第54図　第43－K区出土土器(8)



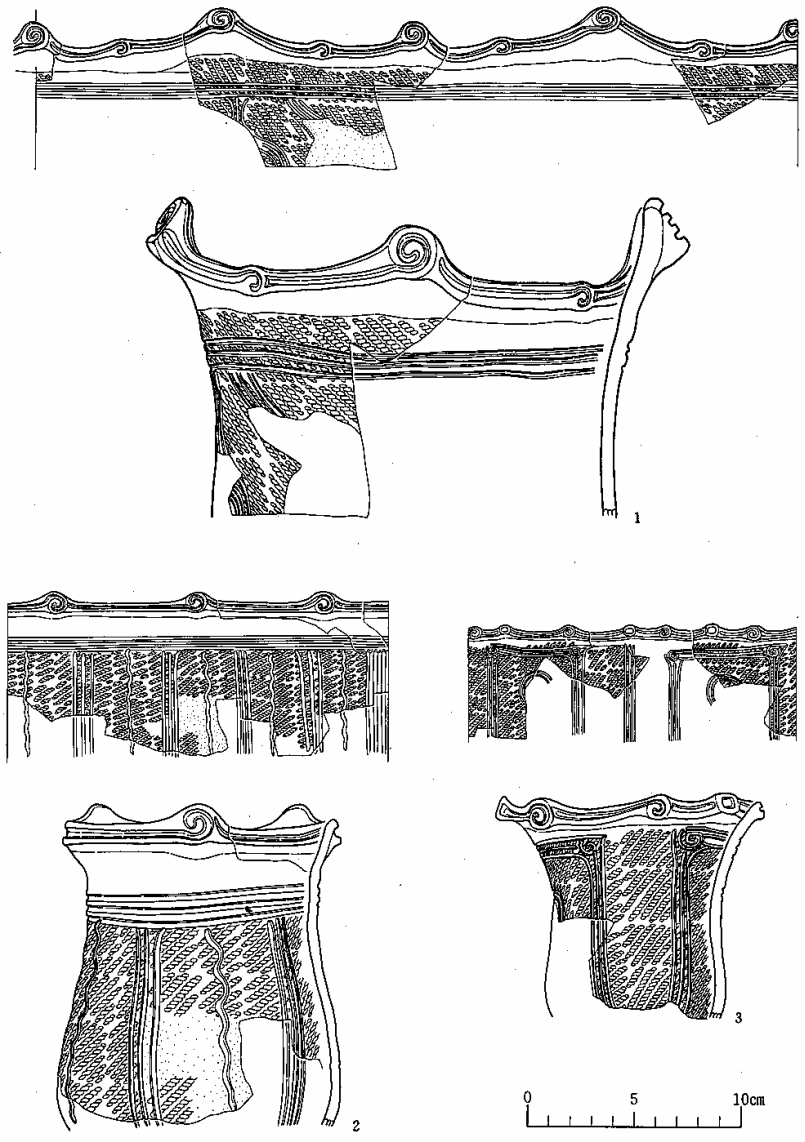
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深鉢C	2 a$_2$	口縁部：横位渦巻文(隆線文)	Po. 93	37－3
2	第43－K区　第5層	深鉢C	2 a	口縁部：横位渦巻文(隆線文)　頸部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po. 96	37－4
3	第43－K区　第5層	深鉢C	3	口縁部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転→横位・縦位沈線文	Po.$\frac{127}{134}$	37－7
4	第43－K区　第5層	深鉢C	3	口縁部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転→横位・縦位沈線文	Po.136	37－6
5	第43－K区　第5層	深鉢C	4 a	口縁部：肥厚無文　胴部：ＲＬ縄文縦回転→三本単位の縦位沈線文　底部：無文　補修孔あり	Po.　5	37－8
6	第43－K区　第5層	深鉢C	5 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文・沈線文)　一部もしくは各部分連結　口縁部：渦巻突起　RL縄文縦回転	Po.117	37－11

第55図　第43－K区出土土器(9)



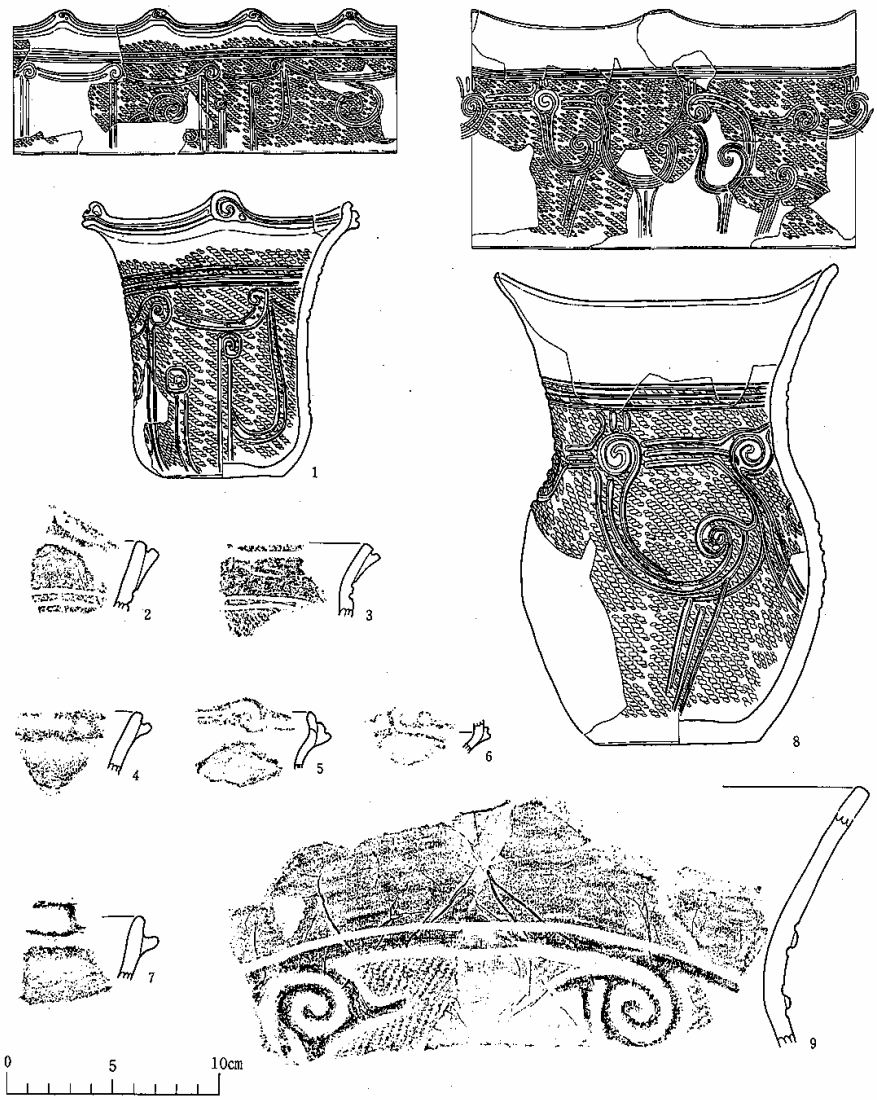
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深鉢C	5 b	口縁部：渦巻文(隆沈線文)	Po.119	37－13
2	第43－K区　第5層	深鉢C	5 b	口縁部：渦巻文(隆沈線文)	Po. 55	——
3	第43－K区　第5層	深鉢C	5 b	口縁部：渦巻文(隆沈線文)	Po.122	37－15
4	第43－K区　第5層	深鉢C	5 b	口縁部：渦巻文(隆沈線文)　不明縄文　波状突起	Po.121	37－12
5	第43－K区　第5層	深鉢C	4 b	口縁部：肥厚・無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　各部分連結　波状口縁	Po.139	37－10
6	第43－K区　第5層	深鉢B	1 a	口縁～胴部：ＬＲ縄文縦回転→有錨曲流渦巻文(隆沈線文・沈線文)　一部もしくは各部分連結　波状口縁	Po.116	37－9
7	第43－K区　第5層	深鉢B	1	口縁部：隆沈線文	Po.113	37－16
8	第43－K区　第5層	深鉢B	1	口縁部：隆沈線文	Po.112	37－14
9	第43－K区　第5層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頚部：無文　胴部：不明縄文→横位沈線文	Po.101	38－7
10	第43－K区　第5層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頚部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po.100	38－6
11	第43－K区　第5層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頚部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転→横位・縦位沈線文	Po.366	38－8
12	第43－K区　第5層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頚部：無文	Po.107	38－9

第56図　第43－K区出土土器(10)



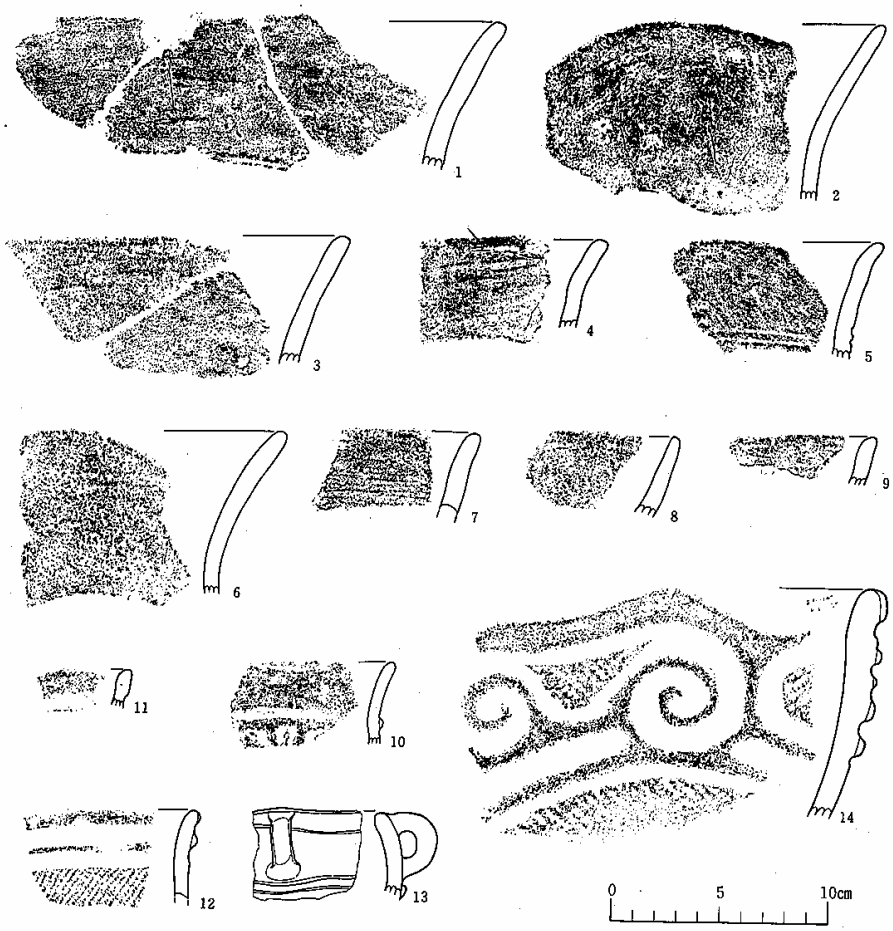
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深鉢D	1 b	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸上部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po. 97	38－1
2	第43－K区　第5層	深鉢D	1 a	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文　胴部：ＲＬ縄文縦回転→横位・縦位・波状下垂沈線文	Po. 3	38－2
3	第43－K区　第5層	深鉢D	1 b	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸上部：無文　胴部：ＲＬ縄文縦回転→有離曲流(折)渦巻文(沈線文)	Po. 9	38－3

第57図　第43－K区出土土器(11)



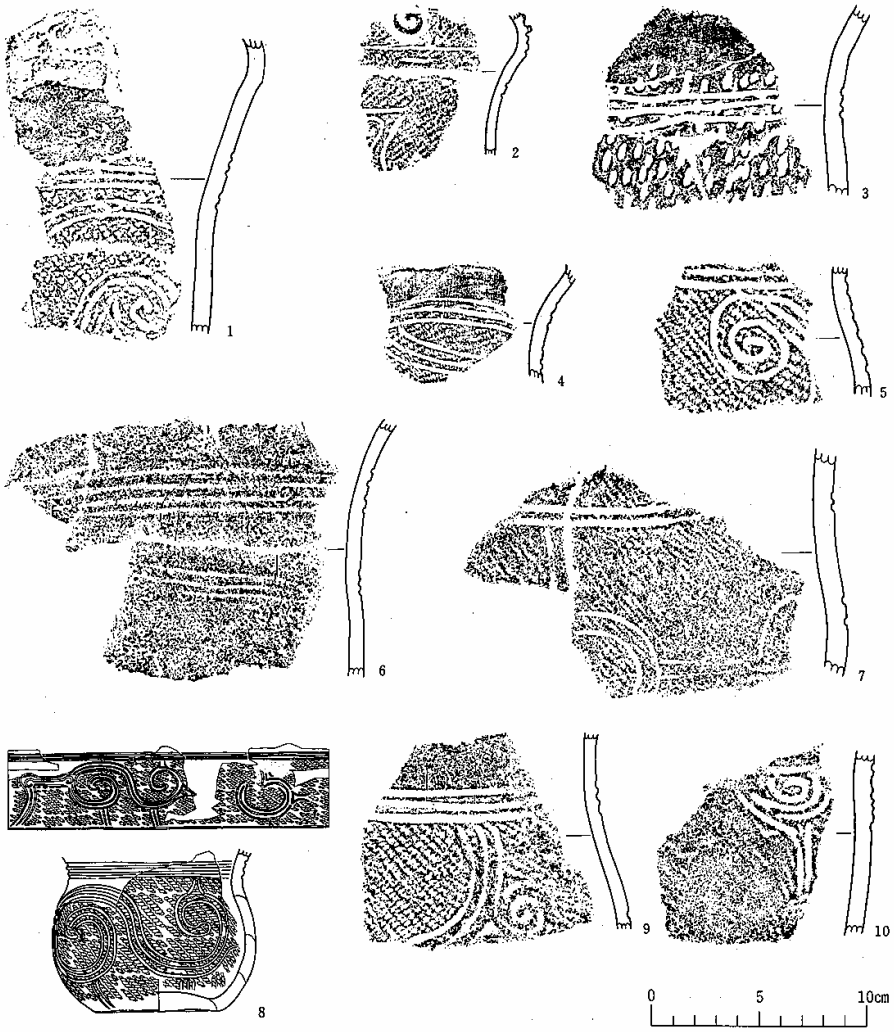
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区 第5層	深鉢D	1c	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁・頚上部：無文 胴部：LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文) 一部連結 底部：網代痕	Po. 12	38－4
2	第43－K区 第5層	深鉢D	1	口唇部：溝状文(隆沈線文による横位渦巻文の変形か) 口縁・頚部：無文 不明縄文→沈線文	Po.105	38－12
3	第43－K区 第5層	深鉢D	1	口唇部：溝状文(隆沈線文による横位渦巻文の変形か) 口縁・頚部：無文 胴部：LR縄文縦回転→沈線文	Po.103	38－13
4	第43－K区 第5層	深鉢D	1	口唇部：変形横位渦巻文(隆沈線文による円形文の横位連結) 口縁・頚部：無文	Po.110	――
5	第43－K区 第5層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁・頚部：無文	Po.109	38－10
6	第43－K区 第5層	深鉢D	1	口唇部：横位渦巻文(隆沈線文) 口縁・頚部：無文	Po.108	――
7	第43－K区 第5層	深鉢D	1	口唇部：変形横位渦巻文(隆沈線文による円形文の横位連結) 口縁・頚部：無文・刺落綴著	Po.104	38－11
8	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 胴部：LR縄文縦回転→有軸曲流渦巻文(沈線文) 一部連結 底部：無文	Po. 2	38－5
9	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 胴部：RL縄文縦回転→有軸曲流渦巻文(隆沈線文) 推定一部連結	Po.135	――

第58図 第43－K区出土土器(12)



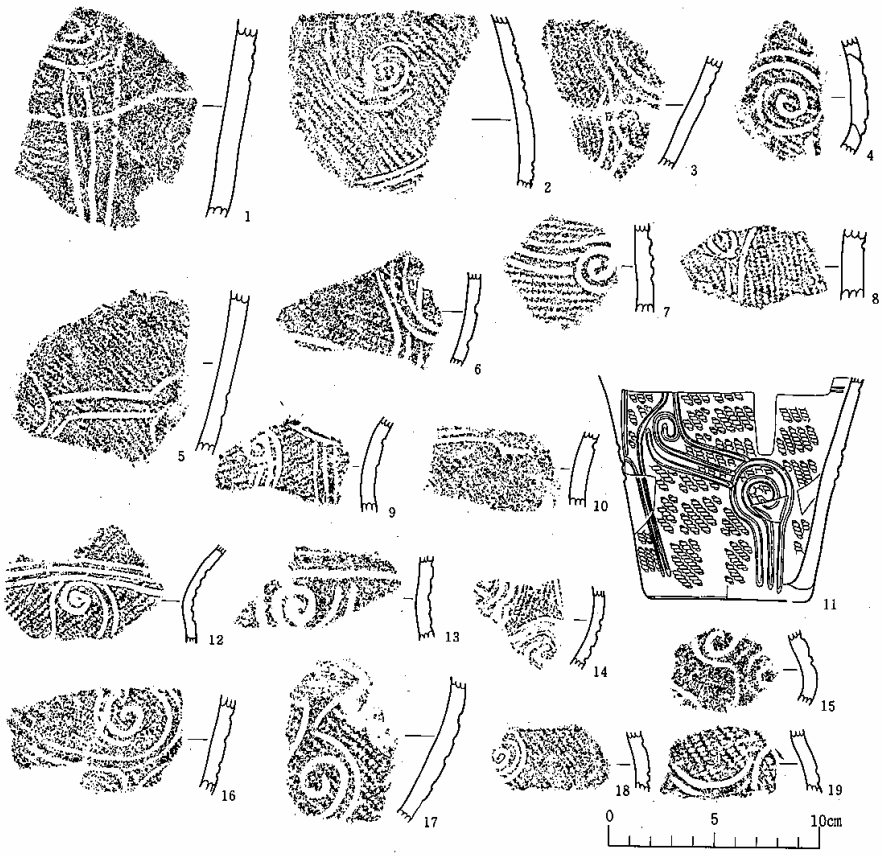
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 波状口縁 胴部：沈線文	Po.370	39－1
2	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 剝落顕著 波状口縁	Po.146	39－3
3	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 波状口縁 Po.370と同一個体の可能性あり	Po.147	39－2
4	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 波状口縁	Po.126	——
5	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 剝落顕著 波状口縁 胴部：沈線文	Po.145	——
6	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 剝落顕著 波状口縁	Po.144	——
7	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 深鉢C3類の可能性もあり	Po.131	——
8	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 深鉢C3類の可能性もあり	Po.132	39－4
9	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 波状口縁	Po.124	39－5
10	第43－K区 第5層	深鉢D	2	口縁部：無文 波状口縁 胴部：隆沈線文	Po.138	——
11	第43－K区 第5層	不 明		口縁部：肥厚 無文	Po.114	39－6
12	第43－K区 第5層	深鉢E	1a	口縁部：肥厚二段無文 胴部：RL縄文縦回転	Po.115	39－7
13	第43－K区 第5層	深 鉢	把手付	口縁部：橋状把手付（二個一対の可能性あり）	Po.520	39－8
14	第43－K区 第5層	浅鉢A	2	口縁部：横位渦巻文（隆沈線文） 各部分連結→LRL縄文縦・横回転充填 胴部：LRL縄文縦回転	Po.140	39－9

第59図 第43－K区出土土器(13)



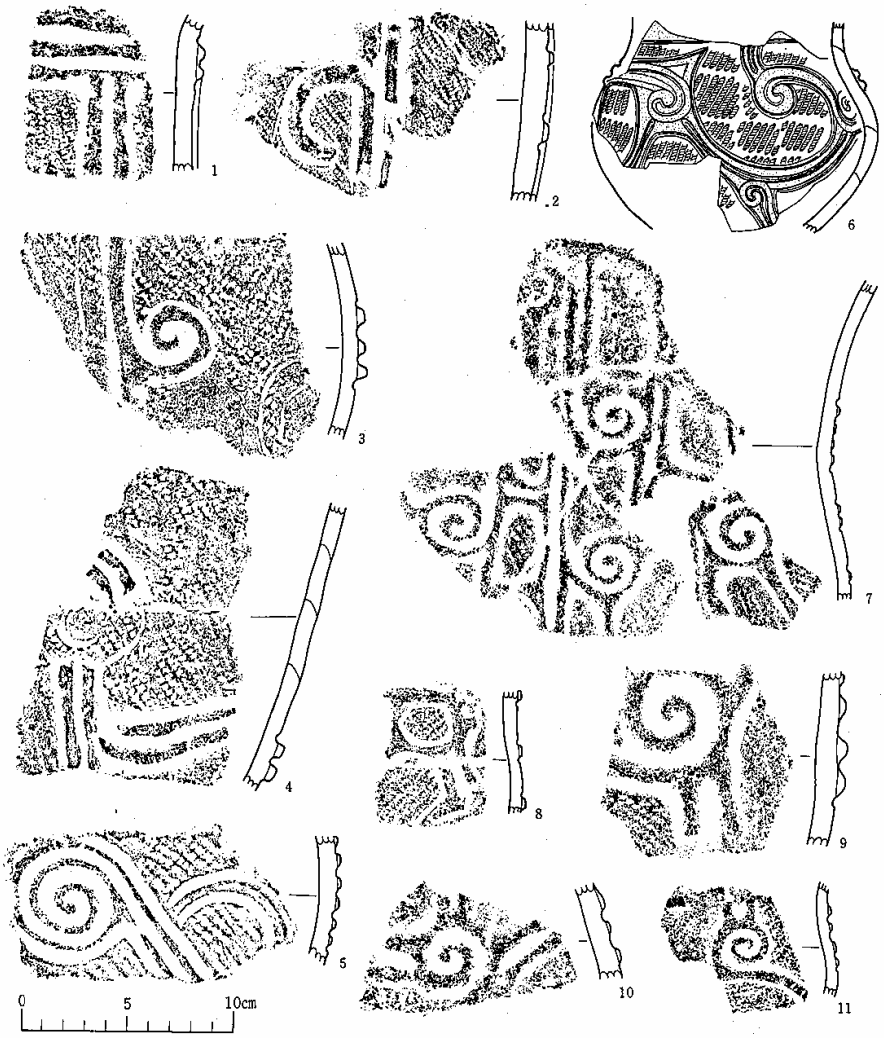
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	頸部：無文 胴部：LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文) 深鉢Aの可能性あり	Po.899	——
2	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	RL縄文縦回転→口縁部：横位渦巻文(隆深線文) 胴部：有棘曲流渦巻文 深鉢A2類の可能性あり	Po.382	——
3	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	頸部：無文 胴部：刺突文→横位沈線文	Po.628	39－12
4	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	頸部：無文 胴部：RL縄文縦回転→曲流沈線文	Po.639	39－10
5	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.629	39－11
6	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流沈線文	Po.653	39－13
7	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.652	39－14
8	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→有棘曲流渦巻文(沈線文) 大単位連結 底部：無文	Po. 10	39－25
9	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	頸部：無文 胴部：LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.626	39－15
10	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→渦巻沈線文	Po.622	39－17

第60図 第43－K区出土土器(14)



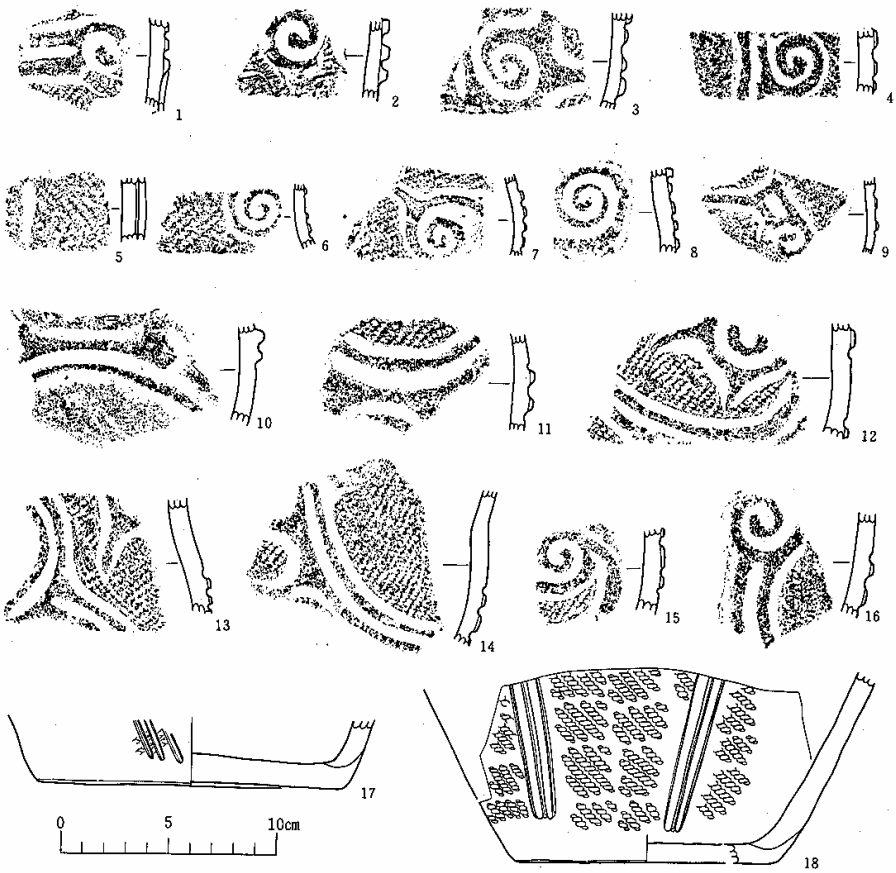
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文斜・縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.646	39－16
2	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.625	39－18
3	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦・斜回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.656	――
4	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→渦巻沈線文	Po.647	39－19
5	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.671	39－20
6	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.657	39－21
7	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.631	39－24
8	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.648	39－22
9	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.657	――
10	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→有隆文(沈線文)	Po.685b	39－23
11	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　底部：無文	Po.898	――
12	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　推定一部もしくは各部分連結	Po.903	――
13	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	不明縄文→渦巻沈線文	Po.676	40－1
14	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　各部分連結	Po.630	40－2
15	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　各部分連結	Po.678	40－7
16	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦斜回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.679	40－3
17	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)　一部もしくは各部分連結	Po.634	40－4
18	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→渦巻沈線文	Po.677	40－5
19	第43－K区 第5層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文)	Po.672	40－6

第61図　第43－K区出土土器(15)



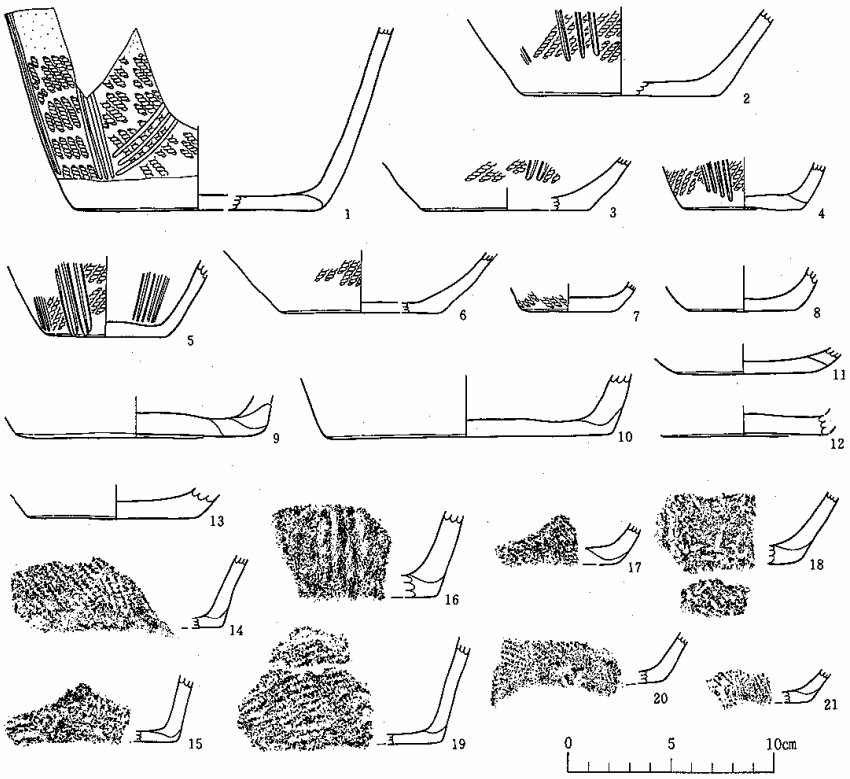
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	LR縄文縦回転→横位・縦位隆沈線文（一部沈線が省略されている）	Po.650	40－8
2	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	LR縄文縦回転→変形渦巻隆沈線文	Po.627	40－9
3	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	LR縄文縦斜回転→曲流渦巻文(隆沈線文)	Po.623	40－10
4	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文　一部沈線が省略されている)	Po.651	40－13
5	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文・沈線文)　一部連結	Po.645	40－14
6	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	RL縄文縦回転→有棘曲流渦巻文(隆沈線文)　一部連結	Po. 11	40－30
7	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　不明縄文	Po.907	——
8	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結	Po.636	40－11
9	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	曲流渦巻文(隆沈線文)　一部もしくは各部分連結の可能性あり　LR縄文縦回転	Po.643	40－12
10	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	曲流渦巻文(隆沈線文)　推定各部分連結　不明縄文	Po.642	40－19
11	第43－K区　第5層	深　鉢	胴　部	曲流渦巻文(隆沈線文)　一部もしくは各部分連結　RL縄文縦回転	Po.655	40－15

第62図　第43－K区出土土器(16)



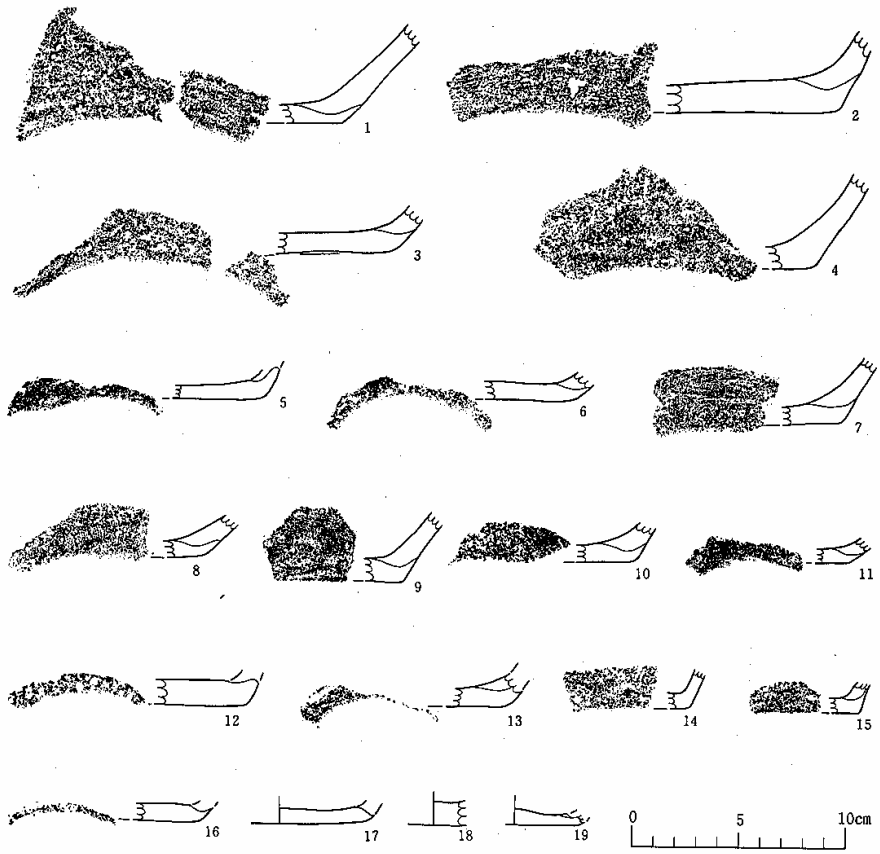
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)	Po. 640	40－16
2	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)	Po. 641	40－20
3	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　RL縄文縦回転	Po. 624	40－17
4	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	曲流渦巻文(隆沈線文)　LR縄文縦回転	Po. 621	40－21
5	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	隆沈線文　LR縄文縦回転	Po. 632	——
6	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	渦巻隆沈線文　RL縄文縦回転	Po. 659	40－18
7	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)	Po. 674	40－22
8	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	渦巻隆沈線文	Po. 638	40－23
9	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)	Po. 635	——
10	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　剝落顕著	Po. 91	——
11	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　RL縄文縦回転	Po. 670	40－24
12	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	RL縄文縦回転→有棘曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　Po. 654・Po. 633・Po. 637と同一個体の可能性あり	Po. 902	——
13	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	RL縄文縦回転→有棘曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結	Po. 654	40－27
14	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	RL縄文縦回転→有棘曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結	Po. 633	40－28
15	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	RL縄文縦回転→有棘曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結	Po. 637	40－25
16	第43－K区　第5層	深鉢	胴　部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結	Po. 658	40－29
17	第43－K区　第5層	深鉢	胴底部	胴下部：RL縄文縦回転→横位沈線文末端　胴部下端～底部：無文	Po. 776	——
18	第43－K区　第5層	深鉢	胴底部	胴下部：LR縄文縦回転→横位隆沈線文末端　胴部下端～底部：無文	Po. 910	——

第63図　第43－K区出土土器(17)



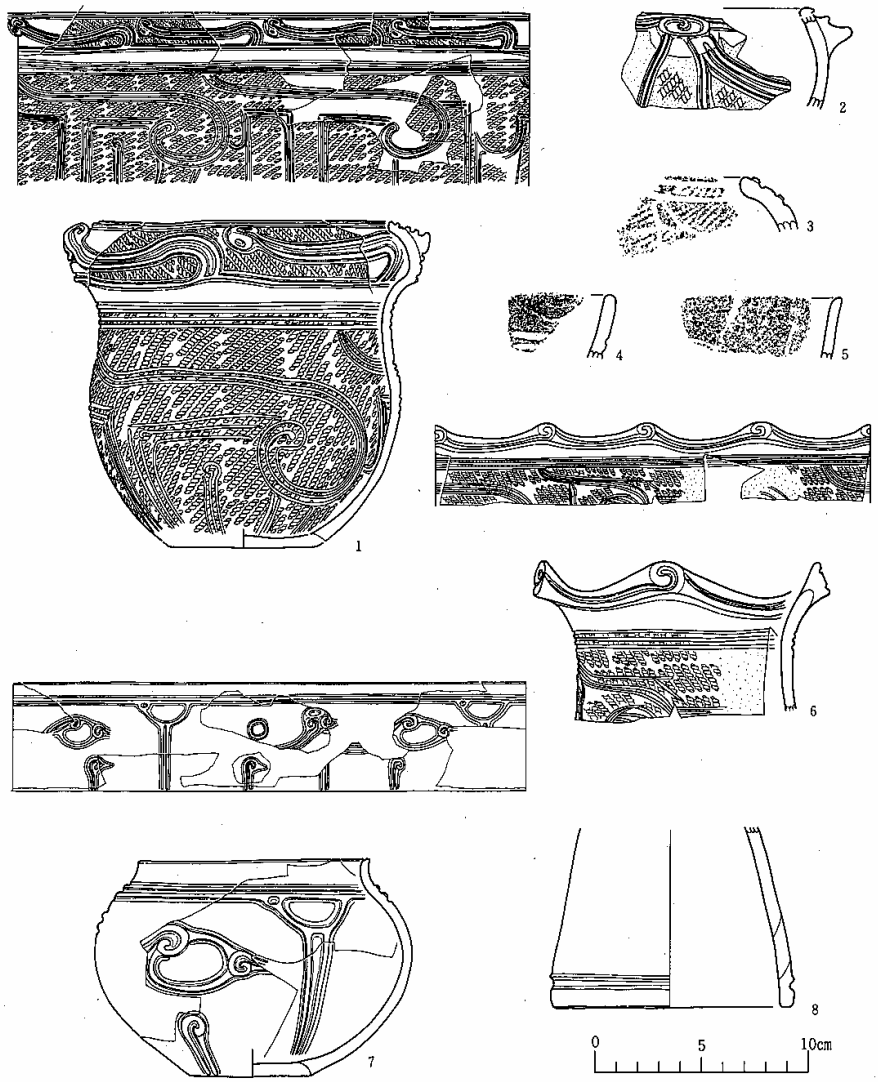
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転→沈線文　胴部下端～底部：無文	Po.908	——
2	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＲＬ縄文縦回転→沈線文　胴部下端～底部：無文	Po.788	——
3	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＲＬ縄文縦回転→沈線文　胴部下端～底部：無文	Po.786	——
4	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＲＬ縄文縦回転→沈線文　底部：無文	Po.905	——
5	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＲＬ縄文縦回転→縦位隆沈線文末端　底部：無文	Po.790	——
6	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＲＬ縄文縦回転　胴部下端～底部：無文	Po.789	——
7	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転　底部：無文	Po.787	——
8	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：不明縄文　沈線文　底部：無文	Po.782	——
9	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴部下端～底部：無文	Po.779	——
10	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴部下端～底部：無文	Po.775	——
11	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴部下端～底部：無文　剝落顕著	Po.783	——
12	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	底部：無文	Po.796	——
13	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴部下端～底部：無文	Po.784	——
14	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転　底部：無文	Po.812	——
15	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：不明縄文→沈線文　底部：無文	Po.101	——
16	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：不明縄文→隆沈線文　底部：無文　剝落顕著	Po.813	——
17	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴部下端～底部：無文	Po.805	——
18	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転　底部：網代痕	Po.901	——
19	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＲＬ縄文縦回転　底部：網代痕	Po.809	——
20	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転→縦位沈線文末端　底部：無文	Po.811	——
21	第43－K区　第5層	深　鉢	底　部	胴下部：ＬＲ縄文縦回転→縦位沈線文末端　底部：無文	Po.802	——

第64図　第43－Ｋ区出土土器(18)



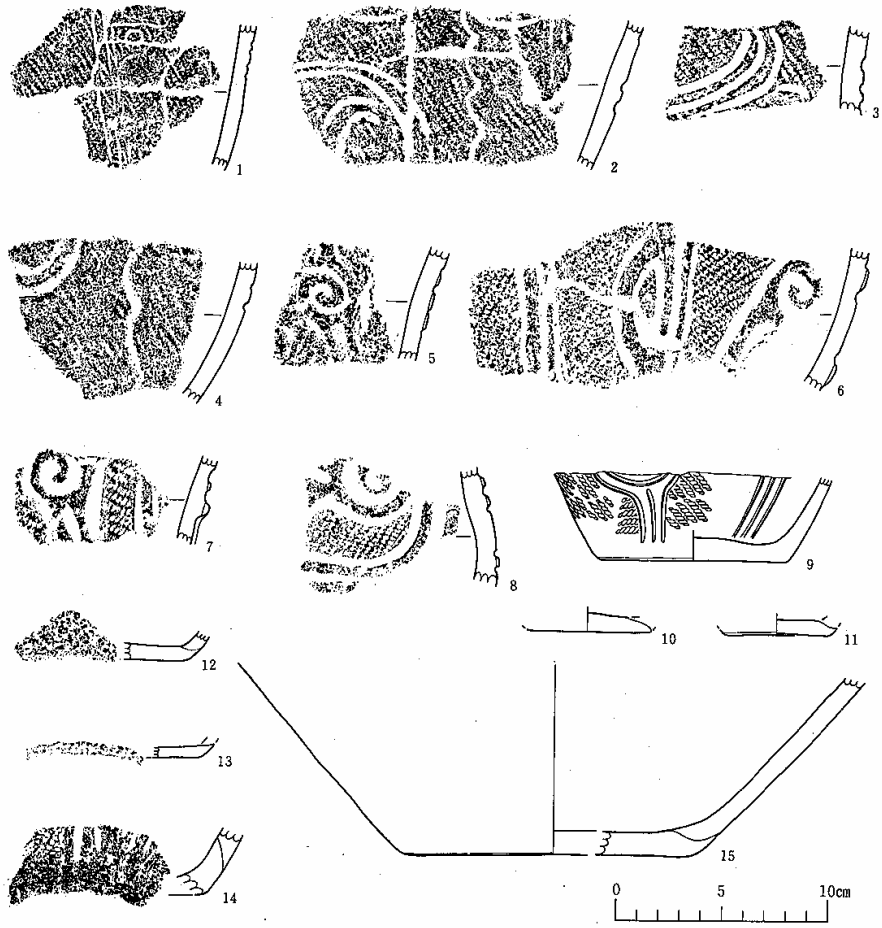
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴下部：LR縄文斜回転 胴部下端～底部：無文	Po. 806	—
2	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 778	—
3	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 780	—
4	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴下部：不明縄文 鞭位沈線文末端 胴部下端～底部：無文	Po. 792	—
5	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 810	—
6	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 781	—
7	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 804	—
8	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 815	—
9	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 817	—
10	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 818	—
11	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 807	—
12	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端：不明 底部：無文	Po. 799	—
13	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 808	—
14	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 814	—
15	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 803	—
16	第43－K区 第5層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po. 798	—
17	第43－K区 第5層	深鉢	底部	無文 剝落顕著	Po. 793	—
18	第43－K区 第5層	深鉢	底部	無文	Po. 800	—
19	第43－K区 第5層	深鉢	底部	無文	Po. 795	—

第65図 第43－K区出土土器(19)



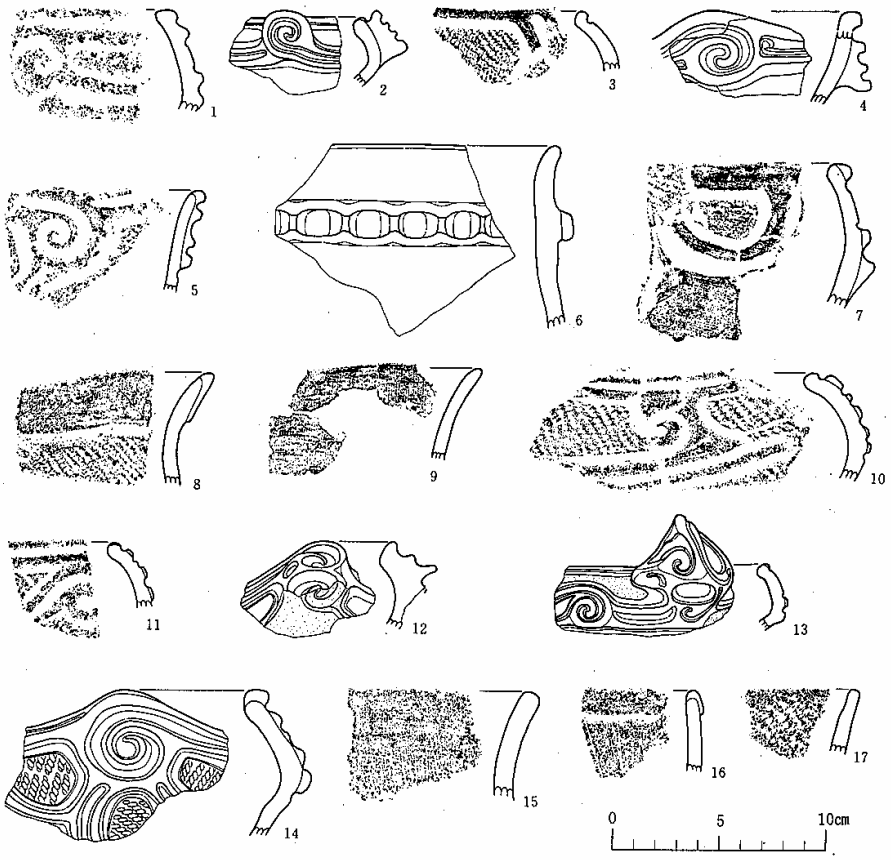
番号	地区・層位	器形	分類	特	徴	登録	図版
1	第43－K区　第6層	深鉢A	2 a	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　頸部：無文　胴部：RL縄文縦回転→曲線(折)渦巻文(沈線文)		Po. 15	41－1
2	第43－K区　第6層	深鉢A	2 a	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　大単位連結		Po.151	41－6
3	第43－K区　第6層	深鉢A	2 b_1	口縁部：LR縄文横回転→右線(渦巻)文(隆沈線文)　上純連結		Po.152	41－5
4	第43－K区　第6層	深鉢D	2	口縁部：無文　波状口縁　胴部：沈線文		Po.154	41－7
5	第43－K区　第6層	深鉢C	5 a	口縁部：RL縄文縦回転→沈線文		Po.156	——
6	第43－K区　第6層	深鉢D	1 b	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頚部：無文　胴部：LR縄文縦回転→曲線渦巻文(沈線文)		Po.14･16	41－3
7	第43－K区　第6層	壺	無頚	全面丁寧に研磨　胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)　一部連結		Po. 17	41－2
8	第43－K区　第6層	脚　台		外面：口縁状部分に一条の沈線　粗雑な研磨　内面：ナデ　脚部か器形か不明		Po. 4	41－4

第66図　第43－K区出土土器(20)



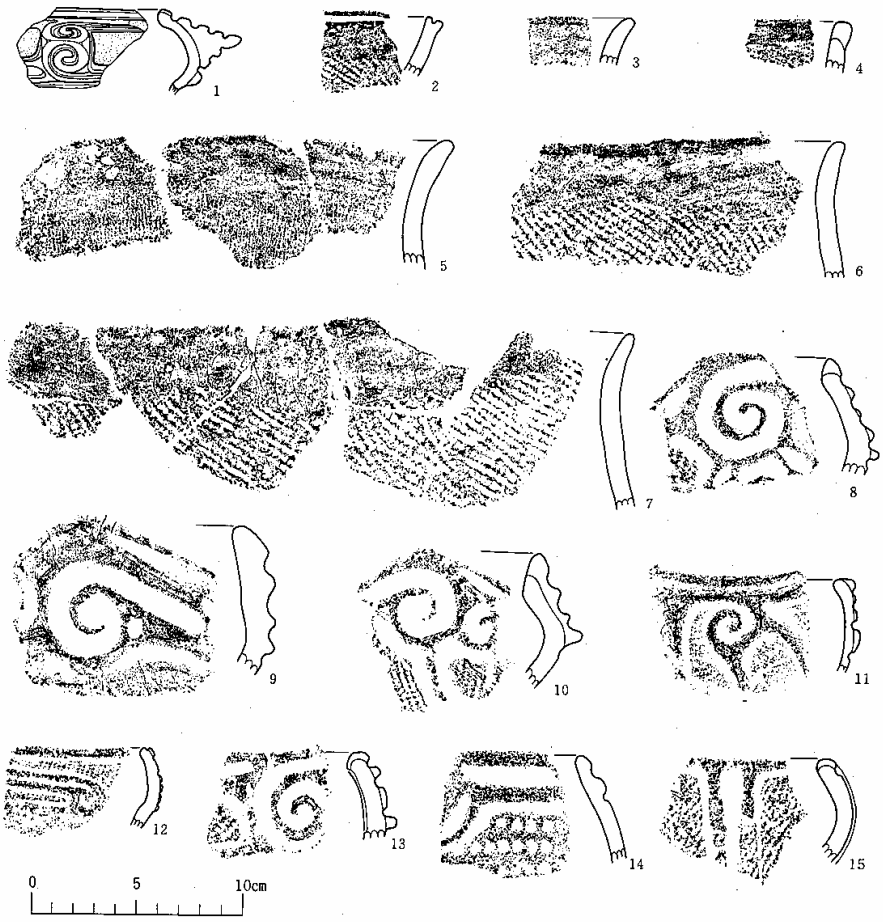
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区 第6層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→有線曲流渦巻文(沈線文)	Po.685a	41－9
2	第43－K区 第6層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文) 縦位波状沈線文 Po.681と同一個体	Po.689	41－10
3	第43－K区 第6層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流沈線文	Po.680	41－8
4	第43－K区 第6層	深鉢	胴部	LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文) 縦位波状沈線文 Po.689と同一個体	Po.681	41－11
5	第43－K区 第6層	深鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文) RL縄文縦回転	Po.682	41－14
6	第43－K区 第6層	深鉢	胴部	RL縄文縦回転→曲流渦巻文(隆沈線文) 一部連結	Po.683	41－12
7	第43－K区 第6層	深鉢	胴部	曲流渦巻文(隆沈線文) 一部もしくは各部分連結 LR縄文縦回転	Po.684	41－13
8	第43－K区 第6層	深鉢	胴部	RL縄文縦回転→有線曲流渦巻文(隆沈線文) 各部分連結 Po.902等と同一個体の可能性あり	Po.687	40－26
9	第43－K区 第6層	深鉢	底部	胴下部：LR縄文縦回転→曲流渦巻文(沈線文) 底部：無文	Po.777	――
10	第43－K区 第6層	深鉢	底部	剥落顕著	Po.794	――
11	第43－K区 第6層	深鉢	底部	無文	Po.823	――
12	第43－K区 第6層	深鉢	底部	胴部下端～底部：無文	Po.819	――
13	第43－K区 第6層	深鉢	底部	胴部下端：RL縄文縦回転 底部：無文	Po.821	――
14	第43－K区 第6層	深鉢	底部	胴下部：RL縄文縦回転→縦位隆沈線文末端 胴部下端～底部：無文	Po.820	――
15	第43－K区 第6層	浅鉢	底部	胴～底部：無文	Po.791	――

第67図 第43－K区出土土器(21)



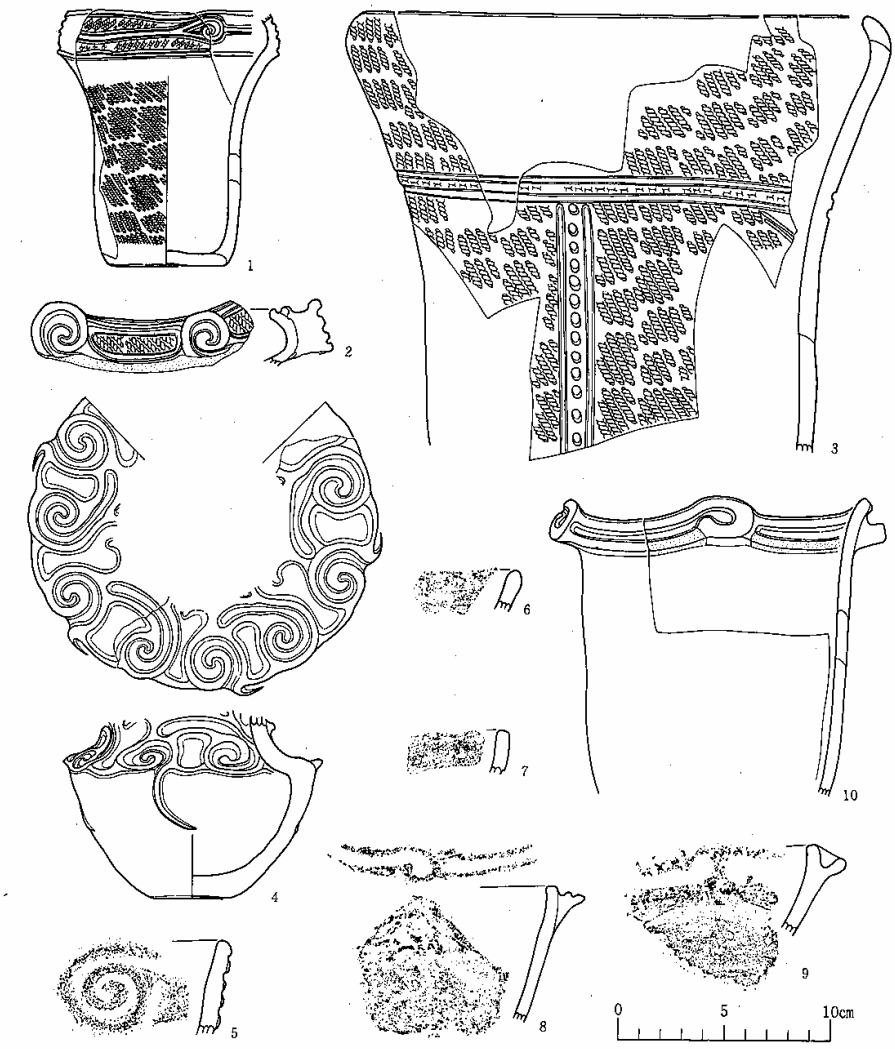
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－L区　第5層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　LR縄文横回転	Po.448	——
2	第43－L区　第5層	深鉢A	2c$_1$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　不明縄文	Po.445	41－16
3	第43－L区　第5層	深鉢A	2	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)	Po.442	41－15
4	第43－L区　第5層	深鉢D	1	口頸部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頸部：無文	Po.446	41－17
5	第43－L区　第5層	深鉢C	5b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)　一部もしくは各部分連結　RL縄文縦回転	Po.441	——
6	第43－L区　第5層	樽		口縁部：無文　頸部：幅広隆線に連続押圧　胴部：無文	Po.443	41－18
7	第46－Q区　第1～4層	深鉢A	3	口縁部：RL横回転→変形横位渦巻文(隆沈線文)　頸部：無文	Po.439	41－19
8	第47－Q区　第4層	深鉢E	1b	口縁部：肥厚無文　波状口縁　胴部：LR縄文縦回転	Po.438	41－20
9	第48－P区　第3層	深鉢D	2	口縁部：無文　波状口縁	Po.437	41－21
10	第48－Q区　P$_1$	深鉢A	2c$_2$	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結	Po.436	——
11	第49－Q区　第3層	深鉢A	2a	口縁部：RL縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　一部沈線省略	Po.434	——
12	第49－Q区　第3層	深鉢B	1b	口縁部：曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結	Po.433	——
13	第49－Q区　第X層	深鉢A	2a	口縁部：不明縄文→横位渦巻文(隆沈線文)　渦巻突起あり	Po.435	——
14	第50－R区　第1層	深鉢B	1b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　LR縄文横縦回転	Po.432	——
15	第51－R区　第1層	深鉢E	2	口縁部：無文　胴部：櫛目状条線文	Po.420	——
16	第51－R区　第1層	深鉢E	1b	口縁部：複合口縁状　無文　胴部：櫛目状条線文	Po.421	——
17	第51－R区　第1層	深鉢E	1c	口縁部：LR縄文縦回転	Po.422	——

第68図　第43～51区出土土器



番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第51－R区　第2層	深鉢A	2c1	口縁部：上下二個結合横位渦巻文(隆沈線文)　不明縄文	Po.423	42－1
2	第51－R区　第2層	深鉢D	1	口唇部：溝状文(隆沈線文)　口縁・頚部：無文　胴部：LR縄文縦回転	Po.424	42－2
3	第51－R区　第2層	深鉢D	2	口縁部：無文　波状口縁	Po.425	42－3
4	第51－R区　第2層	深鉢E	1b	口縁部：肥厚　無文　胴部：RL縄文縦回転	Po.427	42－4
5	第51－R区　第1層	深鉢E	2	口縁部：無文　胴部：櫛目状条線文	Po.426	42－5
6	第51－R区　第2層	深鉢E	2	口縁部：無文　胴部：LR縄文縦斜回転	Po.428	——
7	第51－R区　第2層	深鉢E	2	口縁部：無文　胴部：LR縄文縦回転	Po.912	——
8	第51－S区　第2層	深鉢B	1b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　LR縄文横回転	Po.431	42－6
9	第51－S区　第1層	深鉢B	1b	口縁部：曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結	Po.429	42－7
10	第51－S区　第2層	深鉢B	1b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結→RLR縄文縦斜回転充填	Po.430	42－8
11	第x区　第x層	深鉢B	1	口縁部：曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　LR縄文横斜回転　内面丹塗	Po.302	——
12	第x区　第x層	深鉢A	2a	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　頚部：無文	Po. 80	42－9
13	第x区　第x層	深鉢A	3	口縁部：LR縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結	Po.497	42－10
14	第x区　第x層	深鉢A	3	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)→刺突文充填	Po.314	42－11
15	第x区　第x層	深鉢B	1a	口縁部：RL縄文縦回転　隆沈線文　Po.28と同一個体の可能性あり	Po.496	42－12

第69図　第51・X区出土土器



番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第Ⅹ区　第Ⅹ層	深鉢A	2a	口縁部：ＬＲ縄文横回転→有軸渦巻文(隆沈線文)　頚部：無文　胴部：ＬＲ縄文縦回転　底部：不明圧痕	Po. 50	42−16
2	第Ⅹ区　第Ⅹ層	深鉢A	2c$_1$	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　ＲＬ縄文横回転	Po.494	42−13
3	第Ⅹ区　第Ⅹ層	深鉢B	2a	ＬＲ縄文縦回転→頚部：横位沈線文　胴部：縦位沈線文にはさまれた連続刺突文	Po. 51	42−17
4	第Ⅹ区　第Ⅹ層	壺	有頚	頚部～肩部：横位渦巻文(隆線文)　各部分連結　渦巻文の末端は胴部までのびる　全面丁寧に研磨	Po. 49	42−19
5	第Ⅹ区　第Ⅹ層	深鉢C	5b	口縁部：曲流渦巻文(隆沈線文)　推定各部分連結	Po.337	42−14
6	第Ⅹ区　第Ⅹ層	器　形	不明	口縁部：無文	Po.208	——
7	第Ⅹ区　第Ⅹ層	深鉢C	4	口縁部：肥厚　無文　Po.5と同一個体	Po.129	42−15
8	第Ⅹ区　第Ⅹ層	深鉢D	1	口縁部：横位渦巻文(隆沈線文)　口縁・頚部：無文	Po.102	——
9	第Ⅹ区　第Ⅹ層	浅鉢B	2	口縁部：横位渦巻文　隆沈線文　胴部：無文	Po.321	——
10	第37−K区　第8層	深鉢C	2a$_1$	口縁部：横位渦巻文(隆線文)　胴部：無文	Po. 47	42−18

第70図　第Ⅹ・37区出土土器

縄文時代の遺構とその出土土器

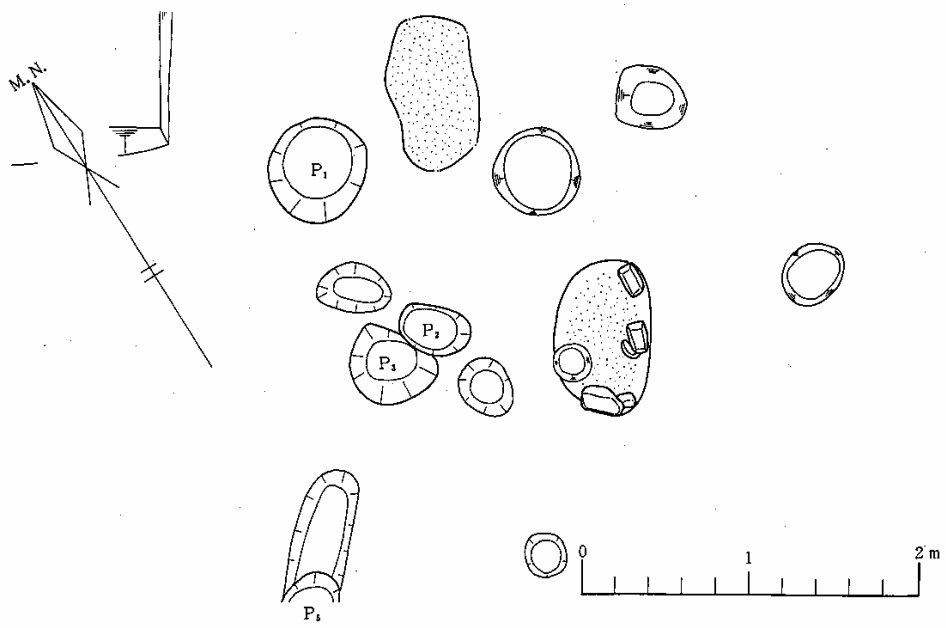
第２号住居跡

第48－Ｐ・Ｑ区の地山面直上で石組炉と焼土面を確認した。この地区は地山面まで削平や攪乱がおよんでいるため、住居平面形・規模などは把握できなかった。

石組炉には、隅の丸くなった長方形の礫（長さ20cm前後）が使用されている。攪乱や削平のため、原位置のまま残存している礫は4個だけである。礫に沿って炉の掘り方と推定される隅丸長方形の掘り込みが確認された。礫の配置と掘り方の形状から平面形は隅丸長方形（規模：90cm×60cm）と推定される。炉の方向は北東－南西である。石には火熱を受けた痕跡が認められる。石組炉内には大量の焼土が堆積していた。

石組炉の北側には90×50cmの不整楕円形の焼土面が認められる。この焼土面と石組炉は、住居に伴うものか、あるいはまったく別のものかは確認できなかった。

遺物は縄文土器が少量出土している。調査の過程で後述する第３号住居跡の遺物と混同してしまったため、どちらの住居跡の遺物か区別できなくなった。



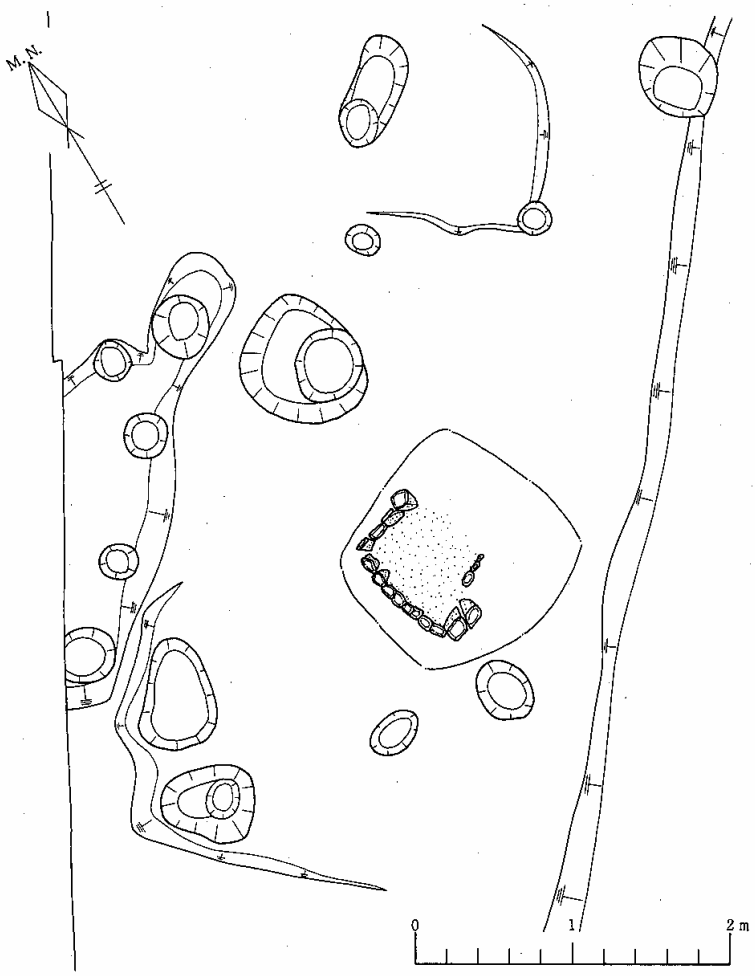
第71図　第２号住居跡

第３号住居跡

第45－Q区で石組炉を検出した。この地区は前述の第２号住居跡と同様に攪乱がおよんでおり、住居平面形・規模等を確認できなかった。

石組炉は東半がトレンチ調査の際破壊してしまったが、西半では10～15cmの小さな円礫が[⊏]字状に残っていた。炉の掘り方は不明確であった。炉の規模は残存部分から南北軸が90cmであるが東西軸については不明である。石は火熱で赤変し、炉内を焼土がおおっていた。

炉周辺にいくつかのピットを検出したが、不規則な配置をしており柱穴かどうか不明である。

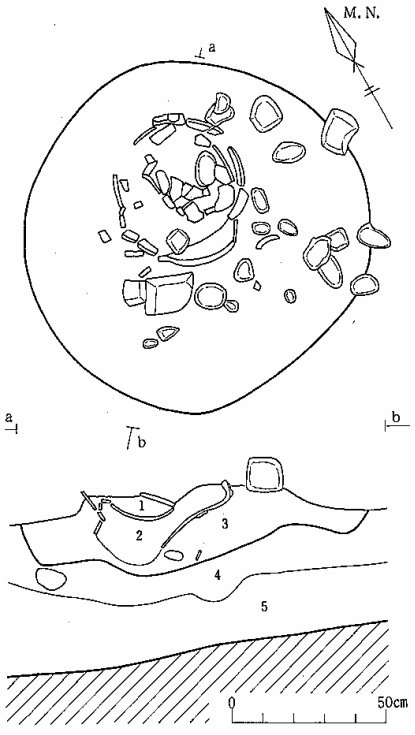


第72図　第３号住居跡

第１埋設土器遺構

第39－Ｋ区のほぼ中央に位置し、基本層位第Ⅲ層上面で確認した。胴下部から底部を欠く大形の深鉢が斜位の状態で埋設されていた。埋設土器よりも大きい円形（径約１cm）の掘り方が認められた。土器の下部は掘り方底面に接していなかった。埋設土器の周辺には人頭大の凝灰岩の切り石や10～20mの大きさの円礫が東半にだけ認められた。その配列は不規則であった。土器周辺には石の抜き取り痕と思われる凹みも認められず、配石していたかどうか明らかではない。

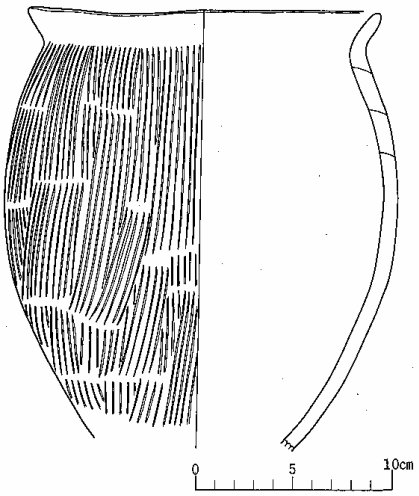
土器内の上部には小形の粗製深鉢が押しつぶされた状態で発見されたが、この土器が埋設されたものかあるいは流れこんだものかは確認できなかった。土器内の堆積土は微量の木炭を含むややしまりのある黒色土である。



層　位	層No.	土色・土性		備　考
第１層	1	黒　色	シルト	やわらかい
	2	やや茶色味をおびた黒色	シルト	微量の木炭を含む
掘り方埋土	3	暗褐色	シルト	少量のスコリアを含む
基本層位第Ⅲ層	4	黒褐色土	シルト	スコリアを含む
基本層位第Ⅲ層	5	黒褐色土	シルト	多量のスコリアを含む

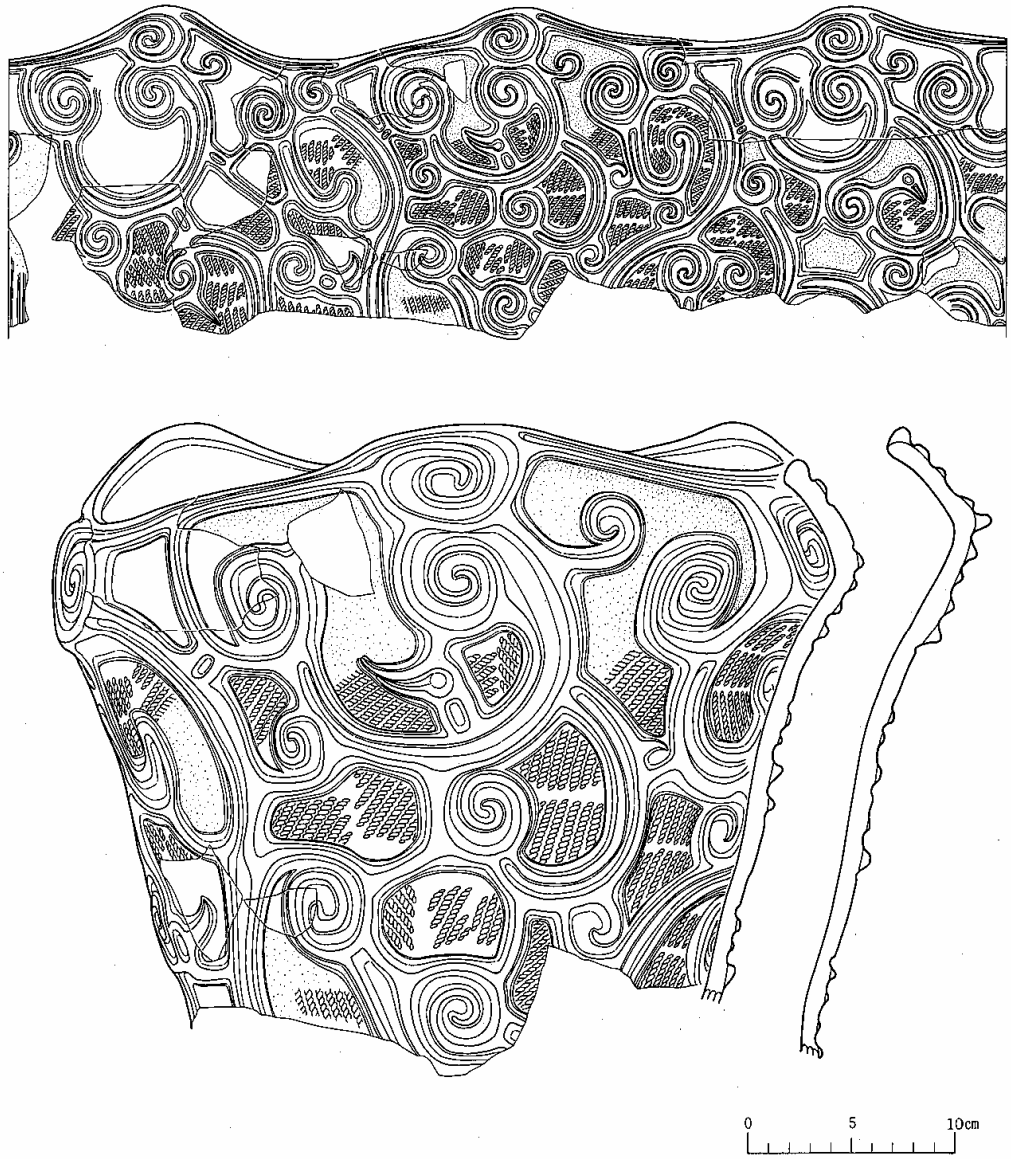
第２埋設土器遺構

第43－Ｊ区に位置し、基本層位第Ⅲ層上面で確認した。この土器を平面・断面で検討したが、埋設土器か否かは確認できなかった。しかし、この土器は確認面から土器底面まで約30数cmあり、遺物包含層を通りこし、無遺物層中にまで



番号	地区・層位	器形	分類	特　徴	登録	図版
1	第39－K区 第6層	深鉢E	2	口縁部：無文　胴部：梅目状条線文	Po.52	43－2

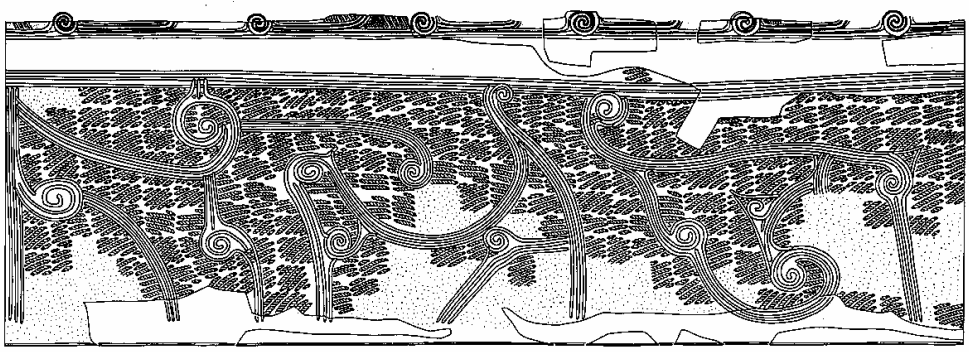
第73図　第１埋設土器遺構とその土器(1)

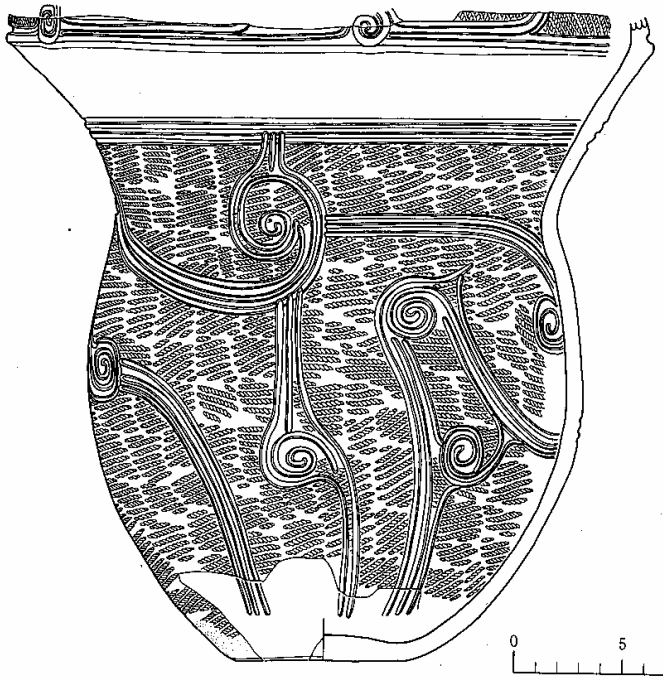


番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第 39 － K 区	深鉢 B	1 b	口縁～胴部：曲流渦巻文(隆沈線文)　各部分連結　R L 縄文充填	Po.46	43－1

第74図　第１埋設土器遺構の土器(2)

達していた。さらに、正位の状態で確認されたことから掘り方と埋設土器が接していた可能性もあり、ここでは埋設土器として取り扱うことにした。この埋設土器は、口縁部の一部を欠損しているが、ほぼ完形の深鉢形土器である。





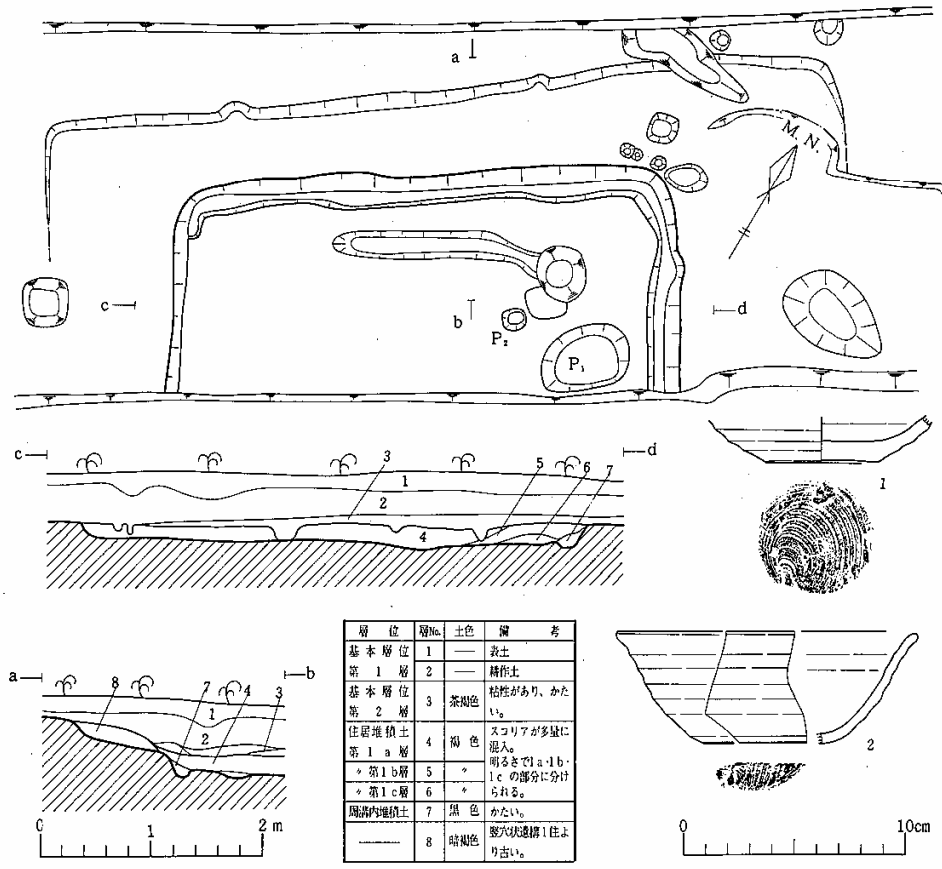
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－Ｊ区　第６層	深　鉢	２ｂ	口縁部：ＲＬ縄文横回転→横位渦巻文(隆沈線文)　頚部：無文　胴部：ＲＬ縄文斜縦回転→有軸曲流渦巻文(沈線文)　一部連結	Po.148	44

第75図　第２埋設土器遺構の土器

平安時代の遺構とその出土土器

第１号住居跡

第33・34－O・M区の地山面と暗褐色土上面で確認した。住居平面形は、東半がすでに破壊されているが、西壁の長さは4.6mあり、隅丸方形と推定される。残存壁はいずれも急角度で立ち上がる。保存の良い北壁の高さは15～25cmである。住居床面は地山で、南半が北半よりわずかに高くなっているが、ほぼ平坦である。ピットは床面で2個体検出されたが、柱痕跡が不明確で、大きさ・深さ・配置の点で規則性が認められず、柱穴については不明である。周溝は、南壁を除く垂直下に巡っており、その断面形はU字状(幅:10～15cm　深さ：５～10cm) をしている。カマド・貯蔵穴状ピット等の施設は調査部分では検出できなかった。堆積土は1層であ



層位	層No.	土色	備考
基本層位	1	――	表土
第１層	2	――	耕作土
基本層位 第２層	3	茶褐色	粘性があり、かたい。
住居堆積土 第１a層	4	褐色	スコリアが多量に混入。明るさで1a・1b・1cの部分に分けられる。
〃 第1b層	5	〃	
〃 第1c層	6	〃	
周溝内堆積土	7	黒色	かたい。
――――	8	暗褐色	竪穴状遺構1住より古い。

第76図　第１号住居跡

る。

遺物として堆積土・床面から土師器・須恵器・縄文土器が少量出土している。土師器・須恵器は平箱にして約1/4ほどである。土師器・須恵器には坏・甕があり、第76図に示した須恵器坏2点のほかはいずれも小破片である。土師器坏は第1層・床面から出土しているが、ともに製作にロクロを使用しており、内面に黒色処理されている。甕はいずれも胴部破片で磨滅が激しく製作技法、再調整などは不明である。これらは、表杉ノ入式（氏家和典：1967・３）に位置ずけられる。須恵器坏は第76図１・２とも底部に回転糸切り痕を残す。甕はいずれも胴部破片で、外面平行タタキ目、内面ロクロナデのものと、内外面ロクロナデのものがある。これらの須恵器は表杉ノ入式の土師器と共伴しており、平安時代のものと考えられる。

その他の遺構

第33・34－Ｏ区の地山面で、第1号住居跡に切られた方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。この面を精査したところ、暗褐色土の落ち込みの平面形は西側では長さ約7.2mあり、隅丸方形と思われる。壁は５～10cmの高さがあり比較的急角度に立ち上がっている。この結果、この落ち込みは住居平面形に似ているが、住居跡かどうか確認することができなかった。

基本層位出土の土師器・須恵器

基本層位第Ⅰ・Ⅱ層から出土した土師器、須恵器についての特徴を述べてみたい。いずれも小破片で図示可能なものはない。

土師器には坏と甕があり、平箱で１箱ある。土師器の中では坏が大半を占める。製作にロクロを使用しており、内面には黒色処理が施されている。底部には糸切り痕が認められる。

甕では製作にロクロを使用しているものが少量あるが、これ以外は磨滅が顕著でロクロ使用かあるいは不使用かは区別できないものが多い。再調整として、胴部にヘラケズリされているものがわずかにある。

須恵器には坏・甕・壺があり、平箱で１箱である。須恵器の中では坏が大部分で、甕・壺は少ない。坏は全てロクロナデがみられ、再調整は施されていない。底部には糸切り痕が認められる。甕の口縁部破片では口縁端部が上・下方に張り出したものがある。胴部破片の中には、外面に平行タタキ目、内面に青海波文のみられるものが少量あるほかは、内外面にロクロナデが施されている。

壺は頚部、胴部破片が少量出土している。内外面にロクロナデが施されている。

以上の土師器・須恵器は第１号住居跡出土のものと同様で、土師器は表杉ノ入式に位置づけられ、須恵器もそれらと同時期と推定され、いずれも平安時代のものと考えられる。

Ⅳ．遺物の検討

今回の調査で出土した遺物には、縄文土器・特殊小型土器・土師器・須恵器・陶磁器･土偶･鞴の羽口・各種の石器があり、その量は平箱にして約100個程である。これらの中で、大部分を占めるのは縄文土器と石器で、その他の遺物は量的に少ない。ここでは、おもに縄文土器と石器を中心として検討を加えることにしたい。

縄文土器には、層位的まとまりをもたず混入と考えられる土器群と、層位的にまとまりをもつ土器群がある。前者を第Ⅰ群土器、後者を第Ⅱ群土器とする。第Ⅰ群土器については、各々の特徴を観察し、従来の研究成果に基いて編年的位置づけと現段階での問題点を指摘したい。第Ⅱ群土器については、特徴の観察・出土状況の吟味を通して、編年的位置・地域性を検討し、併せて問題点の指摘を行なうことにする。

石器には剥片石器と磨製石器・礫石器などがある。剥片石器は、Ⅰ～Ⅳ群に分類し、各々の観察結果に基いて形態的特徴･技術的特徴を指摘し、その中に含まれる問題点について述べたい。また、使用痕跡の観察によって使用状況が判明したものについては、その範囲内で若干の検討を行なった。その他の剥片石器については全体量が多かったため、特徴の明瞭なものをとりあげて観察し、その特徴を述べるに留まった。この他の石器については各々の特徴を述べ、一部問題点を指摘した。

陶磁器・土偶・鞴の羽口については、出土量も少なくまとまりもみられなかったので、各々の特徴を簡単に説明し、年代的位置づけを行なうに留めた。土師器・須恵器については、既に述べてあるので、ここでは触れないことにする。

縄文土器

第Ⅰ群土器

第Ⅰ群土器は調査区･各地区の基本層位第Ⅰ～Ⅳ層･竪穴住居跡などから深鉢･浅鉢の口縁部･胴部破片が出土しているが、その量は少なく、出土状況にまとまりはみられなかった。本項では口縁部破片について分類し、編年的位置づけを行ないたい。

土器の分類

深鉢

第1類：胎土に繊維を含んでいるもの（第77図１～３）。

口縁部が直線的に外傾する器形である。１は羽状縄文が施され、２・３は縄文施文後、刻目が加えられている。

第2類：交互刺突文が施文されているもの（第77図４）。

胴部から口縁部にかけて外傾し、口縁部が隆帯状に肥厚する。口縁部は無文帯で、口縁下部から胴部は縦位隆線と２条の沈線間に交互刺突文が加えられている。

第3類：横位の押圧縄文が施文されているもの（第77図５～７）。

口縁部が外傾する器形である。肥厚した口唇部には横位に1･2条の押圧縄文が施されている。7は口唇下端に円形刺突文が加えられている。

第4類：隆沈線によって弧状区画文が施文されているもの（第77図９）。

口縁部が内弯する器形である。口縁部には隆沈線によって弧状区画文が施されている。隆線は粘土紐貼付時の形状を残しているが、調整が加えられているところもある。

第5類：連弧状に押圧縄文が施文されているもの（第77図８）。

口縁部が外傾し、口唇部が肥厚する。口縁部には連弧状の押圧縄文が２段施文され、さらに口唇部には横位Ｓ字状突起がついている。

第6類：幅の広い口唇部に文様が施文されているもので、文様の施文技法によりａ～ｄに細分される。

a類：肥厚した口唇部に粘土紐貼付による小波状文が施文されているもの（第77図10～20）。

口縁部が外傾する深鉢である。貼付文には粘土紐の太いものと細いものがある。17･20は粘土組上面に刻目が加えられている。粘土紐は貼付時の形状をそのまま残している。

b類：肥厚した口唇部に連続した縦位刻目（短い縦位沈線文）が施文されているもの（第78図１～17）。

口縁部が外傾する深鉢である。１は口縁下部に縄文施文後、平行する沈線間に鋸歯状の交互刺突文が施文されている。さらに口唇部には立体的な横位Ｓ字状突起がついている。４～６・８は口唇部が隆線によって区画され、その間に縦位刻目が施文されている。隆線は粘土紐貼付時の形状を残している。

c類：肥厚した口唇部に連続した縦位の押圧縄文が施文されているもの（第79図１～20）。

口縁部が外傾あるいは内弯する深鉢である。１～３は口唇部文様帯が隆線によって区画され、その間に縦位の押圧縄文が施文されている。さらに３は長楕円形の区画に沿って押圧縄文が施文されている。19は押圧縄文施文後粘土紐を横位に貼付している。隆線は粘土紐貼付時の形状をそのまま残している。

d類：交互押圧が加えられているもの(第80図１・２)。

口縁部が外傾する深鉢である。１は口縁下部に横位の押圧縄文、２は口唇部に刻目が加えられている。

第7類：幅の狭い口唇部に文様が施文されているもので、文様の施文技法によりａ・ｂに細分される。

a類：肥厚した口唇部に縦位の押圧縄文が施文されているもの(第80図３～６)。

口縁部が外傾する深鉢である。４・５は口縁部に縦位の押圧縄文を施文後、細い粘土紐を横位に貼付している。粘土紐は貼付時の形状を残している。

b類：肥厚した口唇部に角押文が施文されているもの(第80図７～16)。

口縁部が外傾する深鉢である。７～14は口縁部に縦位の押圧縄文が施文されている。７～11・14は押圧縄文後細い粘土紐を横位に貼付している。粘土紐は貼付時の形状をそのまま残している。

第8類：肥厚した口唇部に沈線による連続山形文が施文されているもの(第81図１・２)。

胴部から口縁部にかけて直線的に外傾する。口縁下部から胴部には縄文が施文されている。

第9類：竹管状工具によって口唇部に刺突文が加えられているもの(第81図３～５)。

口縁部が外反あるいは外傾する器形である。刺突文には円形のもの（３・４）とC字状のもの（５）とがある。口唇部には隆線によるＳ字状突起(４)、渦巻文（５）が施されているものもある。

第10類：口縁部と胴部に文様をもつもの(第81図６)。

口縁部は頚部でややくびれて外傾し、胴部はわずかに脹みをもつ。口縁部は隆線によって区画され、その間に縦位の押圧縄文が施文されている。頚部から胴上部には３～４条の平行状沈線間に波状文が施文されている。隆線は粘土紐貼付時の形状を残している。

第11類：沈線によって曲折文が施文されているもの(第81図７～９)。

口縁部は外傾または直立する。いずれも、縄文施文後沈線によって曲折文が施文されている。

第12類：隆線によって曲折渦巻文・曲折文が施文されているもの(第81図１～14、第82図１～10、第83図１～４)。

本類の中には一部隆沈線によって曲折渦巻文・曲折文が施文されているものがある。また隆線に沿う沈線が省略されることもある。隆線には粘土紐の細いもの（第81図１～14）と太いもの（第82図１～10、第83図１～４）とがある。前者では曲折文（10・11）・曲折渦巻文（12～14）が施文されている。後者では横位曲折渦巻文（第82図１～８)、曲折文(第82図9･10、第83図１～４)が施文されている。隆線はいずれも粗雑で粘土紐の接合部が観察されるものが多いが、一部には調整が加えられているものもある。いずれも、縄文施文後粘土紐を貼付してい

る。

突起部（第83図５～15）：隆線による立体的な横位Ｓ字状突起（５・７～９）、山形突起(11)、区画内に粘土紐を小波状に貼付した突起（６）、渦巻状突起（12）などがある。

浅鉢

第1類：口唇部外面に文様帯をもつもの（第84図１～６）。

胴部はゆるやかに内弯し、口縁部が直立する。口唇部文様には角押文（１～４）・円形刺突文（５）･縦位押圧縄文（６）がある。５は刺突後粘土紐を貼付している。

第2類：口縁部内面に文様帯をもつもの(第84図7～10)。

胴部から口縁部にかけて外傾する。10は隆線によって渦巻文が施文されている。７～９の口縁部文様は隆線によって平行線文が施文されているが渦巻文の一部かもしれない。

突起部：第84図11は隆線によるＳ字状突起がみられる。

土器の編年的位置

第Ⅰ群土器を深鉢12類、浅鉢２類、突起部に分類することができた。次に以上で述べた土器群の編年的位置づけを行なってみたい。はじめに、深鉢から行なうことにする。

第１類は名取市宇賀崎貝塚（阿部恵：1980・３）のＢ群土器の特徴と類似しており、縄文時代前期初頭に属するものと思われる。

第２類は築館町嘉倉貝塚（佐藤信行：1973：３）の中に類例がみられ、大木7ａ式に位置づけられる。

第３類は南方町青島貝塚（加藤・後藤他：1975・３）の第5ａ類土器の特徴と類似しており、大木7b式に位置づけられる。

第４類は文様構成などの特徴から大木7b～8a式に属するものと思われるが、細かな時期の特定はできない。

第５類～第12類、浅鉢の第１・２類は南方町青島貝塚・長者原貝塚（阿部・遊佐：1978･3）出土の土器などと特徴が類似しており、大木8a式に位置づけられると思われる。また、突起部についても同様な時期と考えられる。

以上のように、本遺跡出土の第Ⅰ群土器について、それぞれ編年的位置づけを行なった。ここでは比較的出土量が多い、大木8a式の深鉢について詳しく述べることにする。

最近、宮城県内で報告された縄文時代中期中葉（大木8a式）の遺跡には前述した南方町青島貝塚・長者原貝塚などがある。この中で、長者原貝塚の第１号住居跡からまとまった資料が出土している。第１号住居跡出土の土器群の特徴は粘土紐貼付による隆線や沈線によって曲折文が施文され、その末端に渦巻文が形成される。さらに、渦巻文には棘が加えられるものもある。

隆線には沈線が沿うものもみられる。隆線は粘土紐貼付時の形状をそのまま残しているものが多いが、調整が加えられているものもある。また、口縁部文様帯には縦位の押圧縄文・角押文・刻目・粘土紐を小波状に貼付したものなどもある。文様の施文工程をみると、地文施文後隆線・沈線文が施文されている。

以上のように、長者原貝塚の第1号住居跡出土の大木8a式土器は曲折文の末端に渦巻文が加えられ、さらに渦巻文には棘を有するものが出現する。また、縦位の押圧縄文、角押文が施文されたものが少ないことなどから次型式である大木8b式に連続する要素をもっており、大木8a式の中でも比較的新しい段階のものと考えられる。

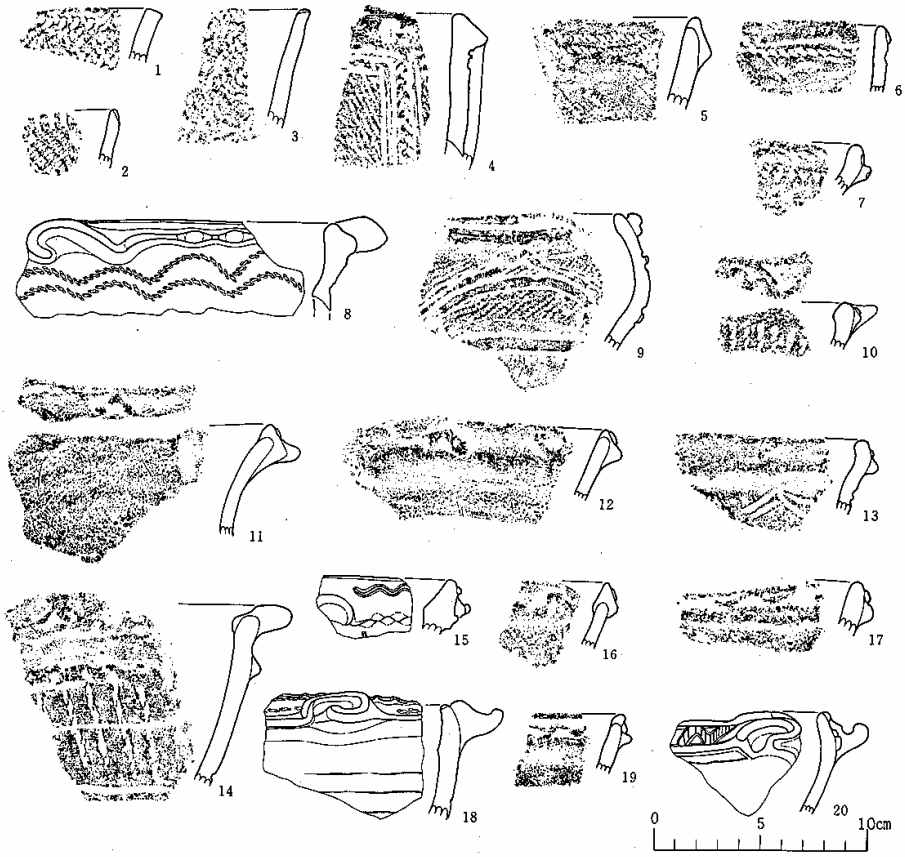
この長者原貝塚の大木8a式土器と共通した特徴を示しているものは第Ⅰ群土器の中では第6a・7・11・12類であり、ほぼ同時期のものと考えられる。

一方、長者原貝塚の土器群とは若干様相を異にするものとしては第５・６b・６c・10類がある。この中には連弧状の押圧縄文や隆線によって区画され、その間に縦位の押圧縄文・刻目が施文されたものがあり、これらは前型式である大木7b式に接続する要素をもっており、大木8a式の中でも古い段階のものと考えられる。

第６d・８・９類としたものは青島貝塚や長者原貝塚の土器群には類例がみられないが現時点では大木8a式の中に含めておきたい。

以上、大木8a式に位置づけられた深鉢形土器の概要であるが、すでに述べた通り、小破片のため全体の器形は不明であり、また層位的な関係や出土状況などについても把握できず、大木8a式土器のあり方について十分な検討を加えることができなかった。

県内では、この時期の内容については南方町長者原貝塚の資料のほか、また不明な点が多い。したがって、層位的な関係や出土状況を把握できる資料の増加をまって今後解決したい。

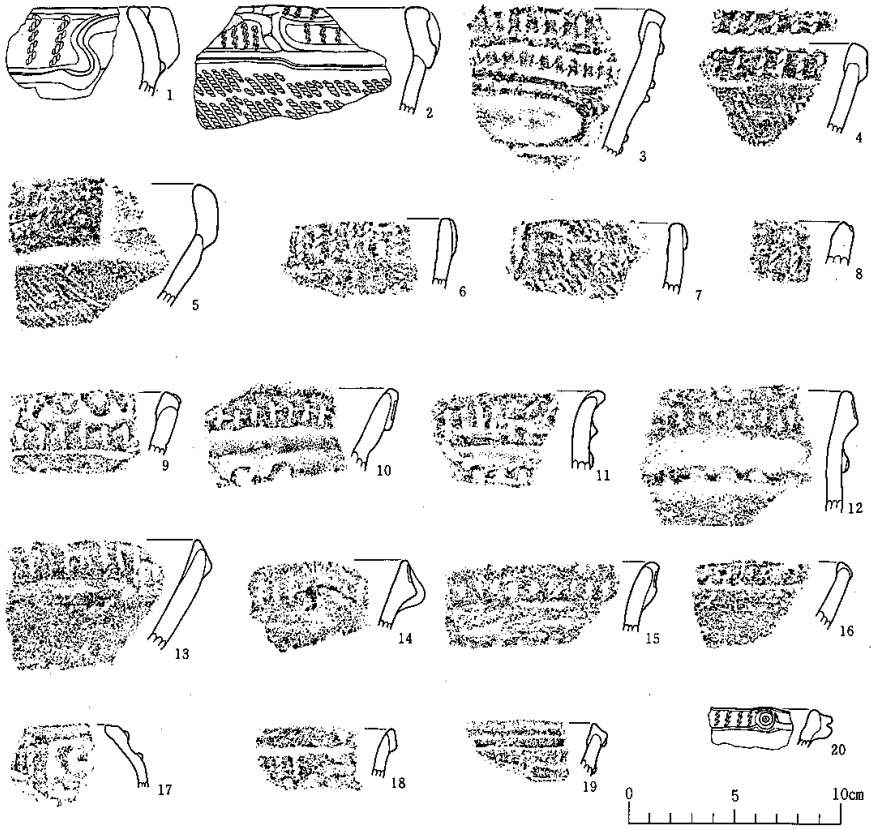


番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第40－K区 第 8 層	深鉢	1	口縁部：ＬＲ縄文横回転 羽状縄文？ 繊維混入	Po. 596	4－1
2	第30－O区 第 5 層	深鉢	1	口縁部：ＲＬ縄文横回転→刻目 繊維混入	Po. 615	4－2
3	第41－K区 第 8 層	深鉢	1	口縁～胴部：羽状縄文？ 口唇部上面：刻目 繊維混入	Po. 560	4－3
4	第41－K区 第 7 層	深鉢	2	口縁部：無文 胴部：ＬＲ縄文縦回転 隆線上・沈線間に交互刺突文	Po. 573	4－4
5	第40－K区 第 8 層	深鉢	3	口縁部：横位ＬＲ縄文押圧 頚部・胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po. 402	4－5
6	第43－K区 第 6 層	深鉢	3	口縁部：横位ＬＲ縄文押圧	Po. 522	4－6
7	第40－K区 第 7 層	深鉢	3	口縁部：横位ＬＲ縄文押圧 隆帯状に肥厚した部分に円形刺突文	Po. 581	4－7
8	第42－K区 第 8 層	深鉢	5	口縁部：連弧状にＬＲ縄文押圧 隆線によるＳ字状突起	Po. 385	4－8
9	第41－K区 第 8 層	深鉢	4	口縁部：ＬＲ縄文横回転→懸垂線による弧状区画文 頚部：無文	Po. 398	4－9
10	第40－K区 第 5 層	深鉢	6 a	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧 口唇部：粘土紐貼付による小波状文	Po. 599	4－10
11	第43－K区 第 6 層	深鉢	6 a	口縁部：剥落顕著 口唇部：粘土紐貼付による小波状文 突起有	Po. 523	4－15
12	第40－J区 第 5 層	深鉢	6 a	口縁部：剥落顕著 口唇部：粘土紐貼付による小波状文	Po. 587	4－14
13	第43－K区 第 5 層	深鉢	6 a	口縁部：沈線文 口唇部：粘土紐貼付による小波状文	Po. 517	4－13
14	第40－K区 第7 b層	深鉢	6 a	口縁部：無文 口唇部：粘土紐貼付 頚部・胴部：隆線上を交互押圧 隆線による区画内に縦位ＬＲ縄文押圧 突起有	Po. 579	----
15	第40－K区 第 2 層	深鉢	6 a	口唇部：粘土紐貼付による小波状文 突起有	Po. 602	4－12
16	第40－K区 第 5 層	深鉢	6 a	口縁部：ＬＲ縄文縦回転 口唇部：粘土紐貼付による小波状文	Po. 598	----
17	第40－K区 第 6 層	深鉢	6 a	口唇部：粘土紐貼付による小波状文 粘土紐上に刻目	Po. 563	4－17
18	第40－K区 第 8 層	深鉢	6 a	口縁・頚部：無文(ナデ？) 口唇部：粘土紐貼付による小波状文 区画内に縦位ＬＲ縄文押圧 隆線による渦巻突起	Po. 578	4－16
19	第40－K区 第 8 層	深鉢	6 a	口縁部：剥落顕著 口唇部：粘土紐貼付による小波状文	Po. 577	4－11
20	第42－K区 第 8 層	深鉢	6 a	口縁部：無文 口唇部：粘土紐貼付による小波状文 粘土紐上に刻目 隆線による渦巻突起	Po. 551	4－18

第77図 第Ⅰ群土器 第１～６ａ類

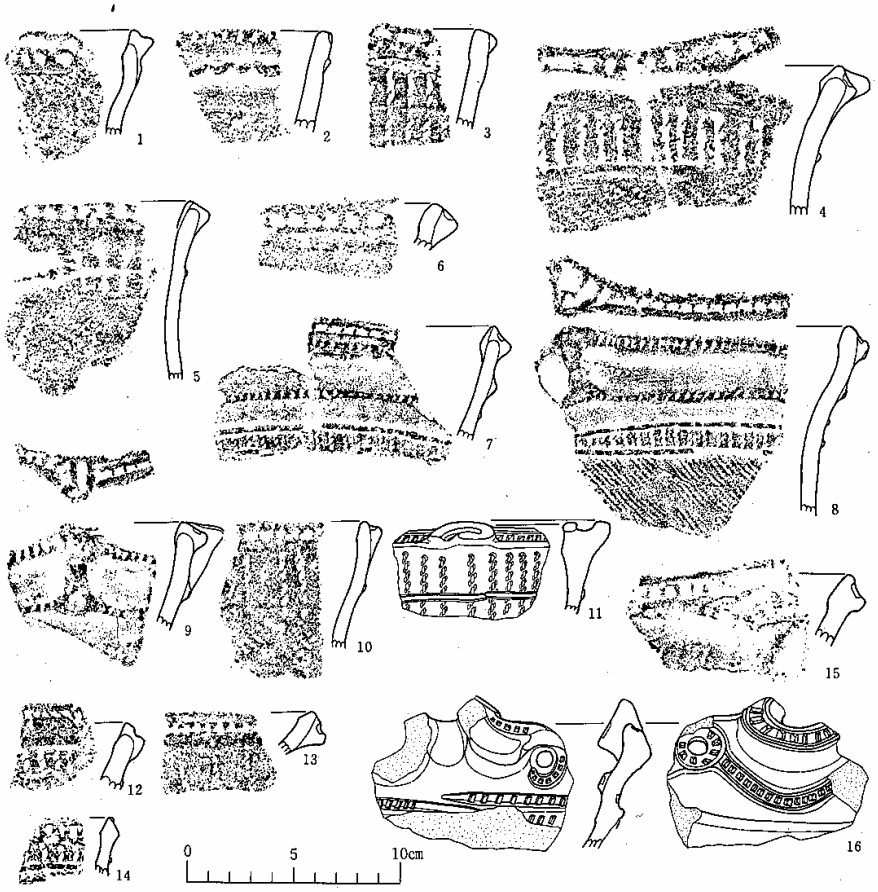
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第41－K区 第８層	深鉢	6 b	口縁部：ＬＲ縄文縦回転→横位沈線間に鋸歯状の交互刺突文　口唇部：刻目（短い縦位沈線）　隆線によるＳ字状突起	Po. 562	4－20
2	第42－K区 第８層	深鉢	6 b	口縁部：横位ＬＲ縄文押圧　口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 555	4－19
3	第43－K区 第５層	深鉢	6 b	口縁部：隆線間に縦位ＬＲ縄文押圧　口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 540	――
4	第42－K区 第７b層	深鉢	6 b	口縁部：ＬＲ縄文斜回転→縦位ＬＲ縄文押圧　口唇部：刻目（短い縦位沈線）　隆線による縦位Ｓ字状突起　突起内面：隆線による渦巻文	Po. 543	4－21
5	第42－K区 第８層	深鉢	6 b	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　口唇部：刻目（短い縦位沈線）　隆線による縦位Ｓ字状突起　突起内面：隆線による渦巻文　Po. 543と同一？	Po. 549	4－22
6	第42－K区 第８層	深鉢	6 b	口縁部：ＬＲ縄文縦回転　口唇部：刻目（短い縦位沈線）　口唇部内面：粘土紐貼付による波状文　Po. 543と同一？	Po. 554	4－23
7	第41･42-K区 第8層	深鉢	6 b	口縁部：横位沈線　口唇部：刻目（短い縦位沈線）　隆線による渦巻状突起　口唇部内面に波状に粘土紐貼付	Po. 407	4－31
8	第42－K区 第７b層	深鉢	6 b	口縁部：隆線による区画内に縦位ＬＲ縄文押圧　口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 544	4－25
9	第43－J区 第６層	深鉢	6 b	口唇部：刻目（短い縦位沈線）　隆線による横位逆Ｃ字状突起	Po. 546	4－30
10	第40－K区 第７層	深鉢	6 b	口縁部：無文　口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 580	4－24
11	第40－J区 第６層層	深鉢	6 b	口縁部：沈線文　口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 600	――
12	第１住－埋土	深鉢	6 b	口縁部：剝落顕著　口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 618	4－29
13	第40－I区 第７層	深鉢	6 b	口縁部：剝落顕著　口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 586	4－27
14	第40－K区 第７b層	深鉢	6 b	口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 582	4－28
15	第37－J区 第５層	深鉢	6 b	口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 613C	――
16	第41－K区 第７層	深鉢	6 b	口縁部：剝落顕著　口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 575,	4－26
17	第41－K区 第８層	深鉢	6 b	口縁部：頚部：３～数本の平行沈線間に沈線による山形文　口唇部：刻目（短い縦位沈線）	Po. 396	4－32

第78図　第Ⅰ群土器 第６ｂ類



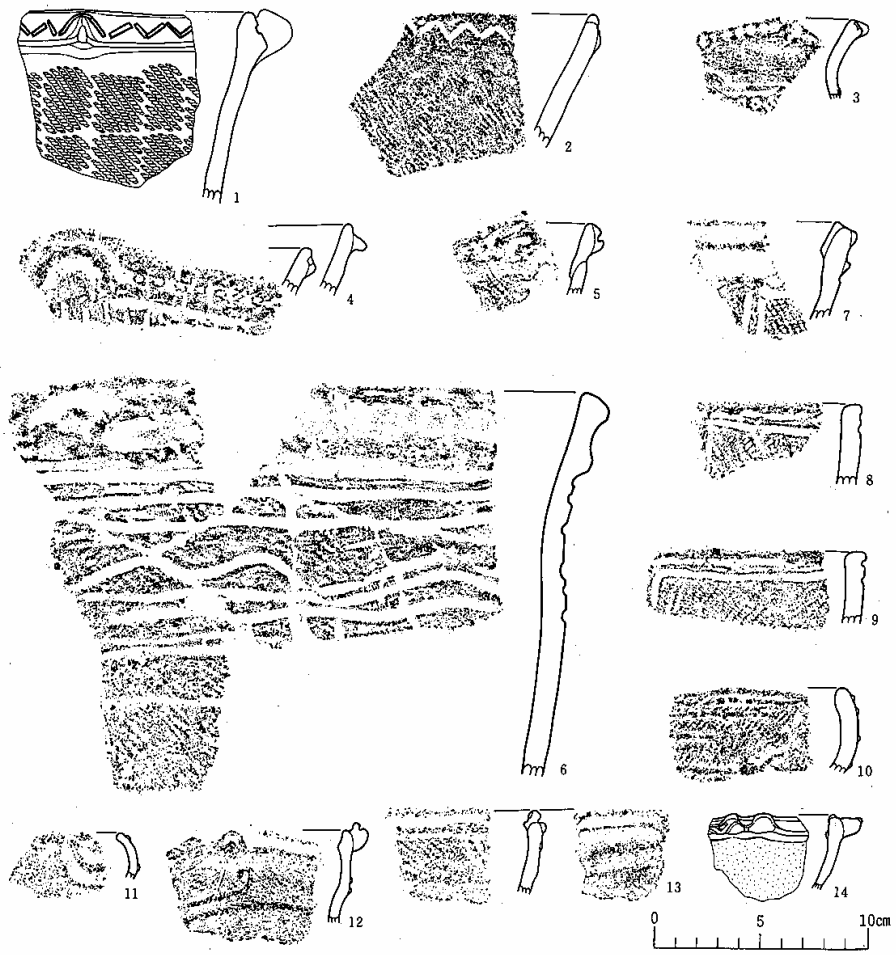
番号	地区・層位	器形	分類	特	徴	登録	図版
1	第43－K区　第5層	深鉢	6ｃ	口縁部：S字状隆線による区画文　区画内に縦位ＬＲ縄文押圧		Po.534	5－1
2	第43－K区　第6層	深鉢	6ｃ	口縁部：隆線による区画文　区画内に縦位ＬＲ縄文押圧　口唇部：縦位ＬＲ縄文押圧　胴部：ＬＲ縄文縦回転		Po.533	5－2
3	第41－K区　第8層	深鉢	6ｃ	口縁部：隆線による区画文　区画文内に2段縦位ＬＲ縄文押圧　区画文に沿ってＬＲ縄文押圧		Po.564	5－3
4	第42－K区　第8層	深鉢	6ｃ	口縁・口唇部：縦位ＬＲ縄文押圧　胴部：ＬＲ縄文縦回転		Po.553	5－4
5	第43－K区　第6層	深鉢	6ｃ	口縁・口唇部：縦位ＬＲ縄文押圧　胴部：ＬＲ縄文縦回転		Po.524	5－5
6	第40－K区　第4層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧		Po.594	――
7	第1住一埋3層	深鉢	6ｃ	口縁部：ＬＲ縄文縦回転→縦位ＬＲ縄文押圧		Po.617	5－6
8	第39－J区　第7層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　口唇部：波状に粘土紐貼付		Po.604	5－7
9	第40－J区　第7層	深鉢	6ｃ	口縁部：横位Ｌｒ縄文押圧→縦位Ｌｒ縄文押圧　口唇部：小波状に粘土紐貼付		Po.591	5－8
10	第40－J区　第7層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　頚部：交互押圧		Po.593	5－9
11	第40－K区　第5層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　頚部：隆線上を交互押圧		Po.595	5－10
12	第41－J区　第8層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　頚部：隆線上を交互押圧		Po.558	5－11
13	第33－O区　第1層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　胴部：剥落顕著		Po.614	5－12
14	第41－K区　第5層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　S字状の突起		Po.515	5－13
15	第41－J区　第8層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧		Po.557	5－14
16	第42－K区　第8層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧		Po.552	――
17	第43－K区　第5層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　縦位押圧縄文→沈線　隆線による渦巻文		Po.516	5－15
18	第42－K区　第3層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧		Po.386	5－16
19	第38－K区　第4層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧→横位に粘土紐貼付		Po.616	――
20	第42－K区　第8層	深鉢	6ｃ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　円形刺突文の加えられた突起		Po.388	5－17

第79図　第Ⅰ群土器 第６ｃ類



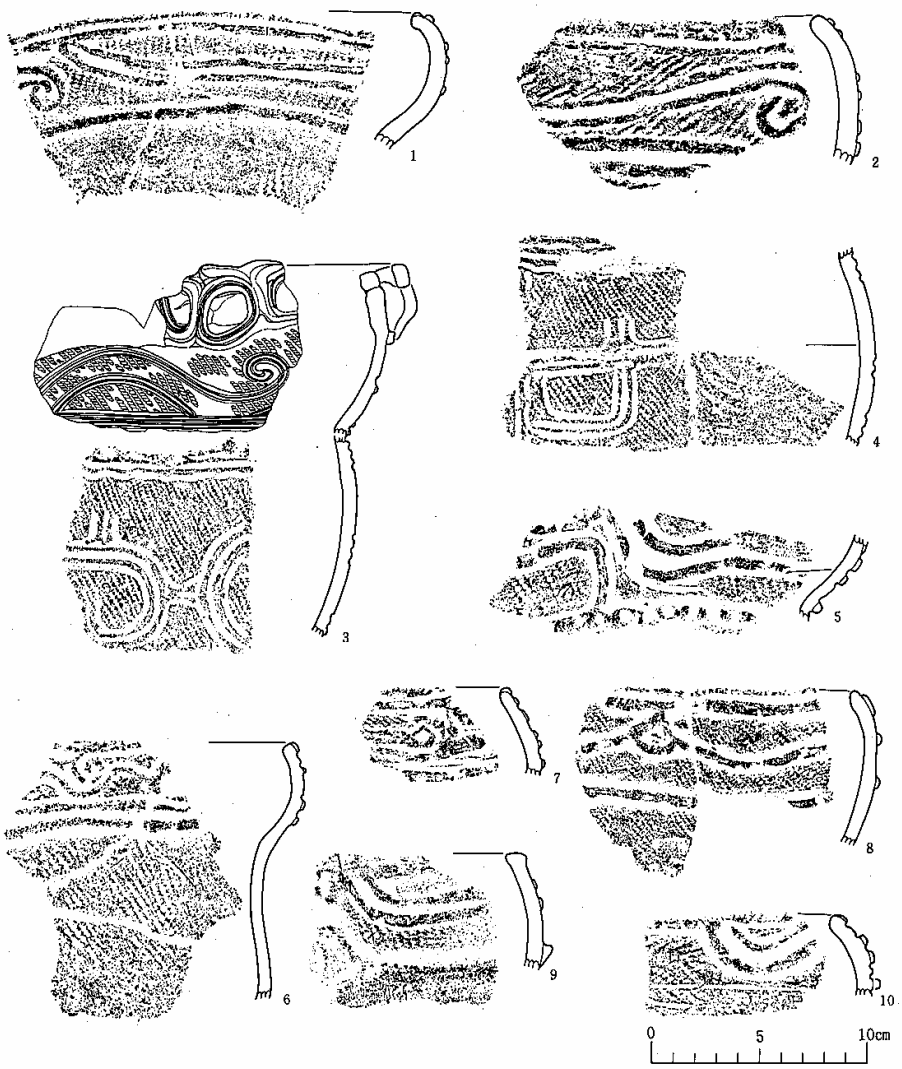
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第40－K区第７ａ層	深鉢	６ｄ	口縁部：横位ＬＲ縄文押圧　口唇部：交互押圧　胴部：不明縄文	Po.584	５－18
2	第39－K区　第７層	深鉢	６ｄ	口縁部：隆線上を交互押圧　口唇部：刻目	Po.609	５－19
3	第40－K区　第５層	深鉢	７ａ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　口唇部：押圧縄文？	Po.597	５－20
4	第41－K区　第８層	深鉢	７ａ	口縁・口唇部：縦位ＬＲ縄文押圧→横位に２本の粘土紐貼付(口縁部と口唇部の区画？)　突起有　胴部：ＬＲ縄文縦回転　Po.611と同一？	Po.565	５－21
5	第39－K区　第８層	深鉢	７ａ	口縁・口唇部：縦位ＬＲ縄文押圧→横位に粘土紐貼付(口縁部と口唇部の区画？)　胴部：ＬＲ縄文縦回転　Po.565と同一個体？	Po.611	５－22
6	第43－J区　第６層	深鉢	７ａ	口唇部：縦位不明縄文押圧	Po.545	５－23
7	第42－J区　第８層 第41－K区　第７層	深鉢	７ｂ	口縁部：隆線による区画文(隆線上に刻目)　縦位ＬＲ縄文押圧→２本の粘土紐貼付　口唇部：角押文　胴部：ＬＲ縄文縦回転 Po.569・576と同一個体	Po.568	――
8	第41－K区　第７層	深鉢	７ｂ	口縁部：隆線による区画文(隆線上に刻目)　縦位ＬＲ縄文押圧→２本の粘土紐貼付　口唇部：角押文　胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po.569	５－25
9	第41－K区　第７層	深鉢	７ｂ	口縁部：隆線による区画文(隆線上に刻目)　口唇部：角押文	Po.576	――
10	第40－K区第７ｂ層	深鉢	７ｂ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧→粘土紐貼付　口唇部：角押文　胴部：ＬＲ縄文縦回転　Po.550と同一個体	Po.583	５－26
11	第40－K区第７ａ層	深鉢	７ｂ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧→粘土紐貼付　口唇部：角押文	Po.550	５－27
12	第40－J区　第７層	深鉢	７ｂ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧　口唇部：角押文	Po.601	５－29
13	第43－K区　第５層	深鉢	７ｂ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧？　口唇部：角押文	Po.536	――
14	第30－K区　第ｘ層	深鉢	７ｂ	口縁部：縦位ＬＲ縄文押圧→粘土紐貼付　口唇部：角押文	Po.606	５－28
15	第41－K区　第８層	深鉢	７ｂ	口縁部：隆線による区画文？　口唇部：角押文	Po.561	５－24
16	第42－J区　第８層	深鉢	７ｂ	口唇部：角押文　隆線による横位Ｓ字突起　突起上・内面に角押文　円窓有	Po.542	５－30

第80図　第Ⅰ群土器 第６ｄ・７類



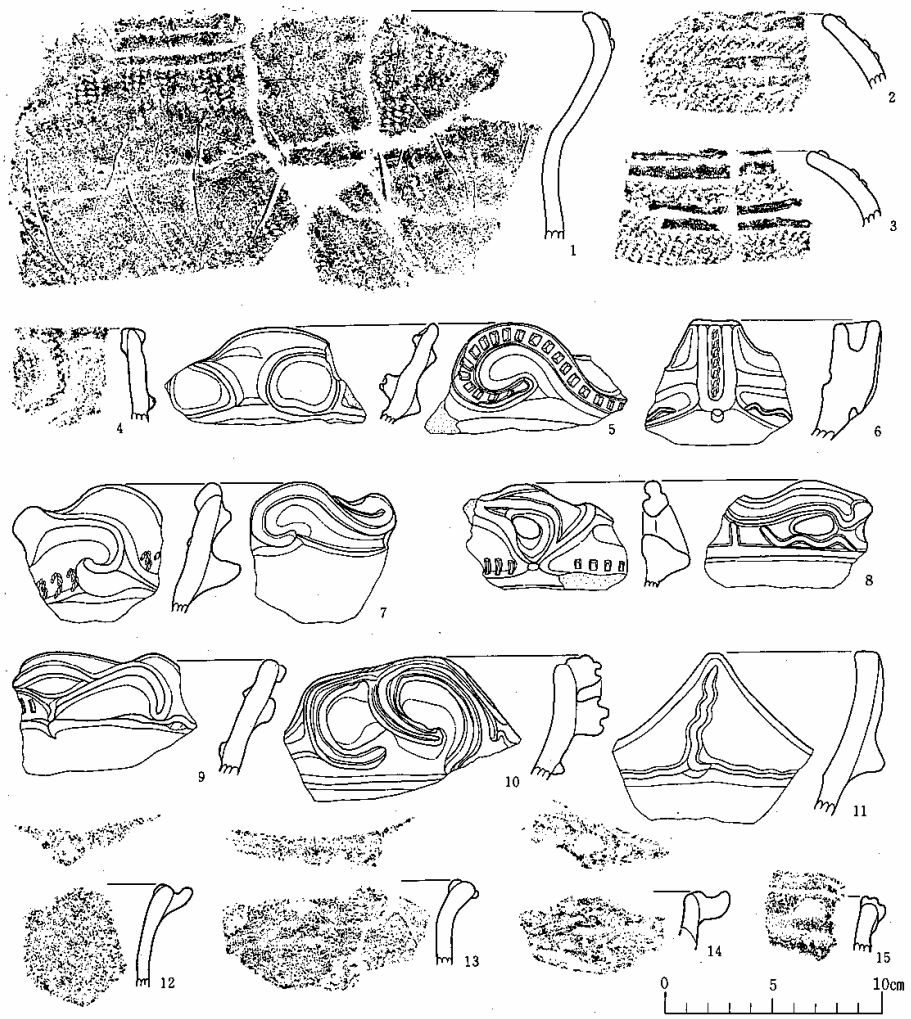
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第39－K区　第7層	深鉢	8	口唇部：沈線による連続山形文　突起有　胴部：ＬＲ縄文縦回転　Po.538と同一個体	Po.610	5－31
2	第43－K区　第5層	深鉢	8	口唇部：沈線による連続山形文　胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po.538	5－32
3	第41－K区　第6層	深鉢	9	口縁部：剝落顕著　口唇・頸部：円形刺突文	Po.567	6－1
4	第39－K区　第7層	深鉢	9	口縁部：条線文　口唇部：円形刺突文　S字状突起の一部？	Po.608	6－2
5	第40－J区　第7層	深鉢	9	口縁部：粘土紐貼付による渦巻文→C字状刺突文　胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po.592	6－3
6	第41－K区　第8層	深鉢	10	口縁部：隆線による区画文→縦位・斜位ＬＲ縄文押圧　胴部：ＬＲ縄文縦回転→沈線による平行線文・波状文	Po.399	6－5
7	第43－K区　第6層	深鉢	11	口縁部：隆線文による区画文？　胴部：ＬＲ縄文縦回転→沈線による曲折文	Po.155	6－4
8	第42－K区　第7層	深鉢	11	口縁部：ＲＬ縄文横・斜回転→沈線による曲折文	Po.379	6－7
9	第43－K区　第5層	深鉢	11	口縁部：ＬＲ縄文横・斜回転→沈線による曲折文	Po.518	6－6
10	第42－J区　第7層	深鉢	12	口縁部：ＬＲ縄文横回転→隆線による曲折文	Po.373	6－8
11	地区・層位不明	深鉢	12	口縁部：剝落顕著　隆線による曲折文	Po.378	6－9
12	第40－K区　第3層	深鉢	12	口縁部：ＲＬ縄文横回転→隆線による曲折渦巻文　口唇部：角押文？　突起有　Po.588・Po.612と同一？	Po.327	6－10
13	第40－J区　第5層	深鉢	12	口縁部：ＲＬ縄文横回転→隆線による曲折渦巻文　口唇部：角押文？　口唇部内面：波状に粘土紐貼付	Po.588	6－11
14	第39－K区　第6層	深鉢	12	口縁部：不明縄文→隆線による曲折渦巻文　口唇部内面に渦巻状に粘土紐貼付	Po.612	6－12

第81図　第Ⅰ群土器 第８～第12類



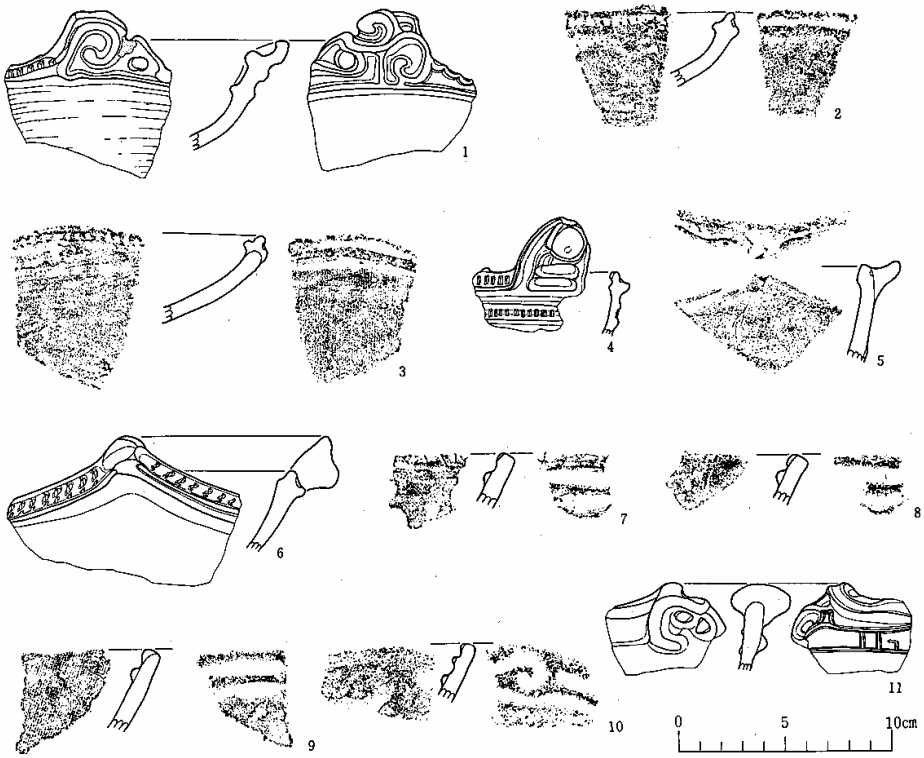
番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区 第6層	深鉢	12	口縁部：LR縄文横回転→隆線による横位曲折渦巻文　頚部：LR縄文斜回転	Po. 527	6－13
2	第23－L区 第11層	深鉢	12	口縁部：LR縄文横回転→隆線による横位曲折渦巻文	Po. 493	6－14
3	第41－K区 第7層	深鉢	12	口縁部：LR縄文縦回転→隆線による横位曲折渦巻文(一部沈線が加わる)胴部：LR縄文縦回転→沈線による曲折文　Po. 714・721Aと同一	Po. 570A	6－16
4	第42－K区 第8層	深鉢	12	胴部：LR縄文縦回転→沈線による曲折文	Po. 714 Po. 721A	――
5	第40－K区 第7a層	深鉢	12	口縁部：RL縄文横回転→隆沈線による曲折渦巻文	Po. 409	――
6	第41－J区 第7層	深鉢	12	口縁部：LR縄文横回転？→隆沈線による横位曲折渦巻文　一部沈線省略　頚・胴部：LR縄文縦回転	Po. 273	6－19
7	第40－J区 第7層	深鉢	12	口縁部：RL縄文横回転→隆沈線による横位曲折渦巻文(一部沈線省略)	Po. 410	6－15
8	第41－K区 第7層	深鉢	12	口縁部：LR縄文縦回転→隆線による横位渦巻文　頚部：LR縄文縦回転	Po. 574	6－18
9	第40－J区 第7層	深鉢	12	口縁部：LR縄文横・斜回転→隆線による横位曲折文　(一部沈線が加わる)	Po. 590	6－20
10	第40－K区 第7b層	深鉢	12	口縁部：RL縄文横・斜回転→隆沈線による曲折文	Po. 315	6－17

第82図　第Ⅰ群土器 第12類



番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区 第 6 層	深 鉢	12	口縁部：ＬＲ縄文横・斜回転→隆線による横位曲折文の一部？　胴部：ＬＲ縄文縦回転	Po. 364	――
2	第42－Ｊ区 第 8 層	深 鉢	12	口縁部：ＬＲ縄文横回転→隆線による横位曲折文の一部？	Po. 585	7－1
3	第42－Ｊ区 第 8 層	深 鉢	12	口縁部：ＬＲ縄文横回転→隆線による横位曲折文の一部？	Po. 393	7－2
4	第40－K区 第 5 層	深 鉢	12	口縁部：ＲＬ縄文横回転→隆線による曲折文　一部に 沈線が加わる、隆線上に刺突文	Po. 459	7－3
5	第43－K区 第 6 層	深 鉢	突起	隆線による立体的な横位Ｓ字状突起　突起部内面の隆線上に角押文	Po. 525	7－5
6	第39－O区 第 7 層	深 鉢	突起	隆線による区画文　区画文間に波状に粘土紐貼付　隆線上に縦位ＬＲ縄文押圧　盲孔有	Po. 603	7－4
7	第42－K区 第 8 層	深 鉢	突起	隆線による立体的な横位Ｓ字状突起　縦位ＬＲ縄文押圧	Po. 384	7－7
8	第39－K区 第 1 層	深 鉢	突起	隆線による立体的な横位Ｓ字状突起　円窓有　角押文	Po. 607	7－6
9	第43－K区 第 5 層	深 鉢	突起	隆線による立体的な横位Ｓ字状突起　角押文	Po. 519	――
10	第43－K区 第 5 層	深 鉢	突起	隆線による立体的な突起（Ｓ字状突起の変形？）	Po. 514	7－10
11	第43－Ｊ区 第 6 層	深 鉢	突起	山形突起による大波状口縁　波状隆線による区画文	Po. 547	7－8
12	第41－K区 第 8 層	深 鉢	突起	隆線による渦巻状の突起？	Po. 269	――
13	第41－K区 第7ｂ層	深 鉢	突起	隆線による小突起	Po. 260	7－9
14	第41－K区 第 8 層	深 鉢	突起	隆線によるＳ字状の突起	Po. 267	――
15	第39－K区 第 7 層	深 鉢	突起?	隆線による突起　突起部の一部？	Po. 605	――

第83図　第Ⅰ群土器 第12類・突起部



番号	地区・層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	第43－K区　第 5 層	浅鉢	1	口唇部：角押文　隆線による渦巻突起　円窓有　胴部：無文　Po.535・541と同一個体	Po.537	7－11
2	第43－K区　第 5 層	浅鉢	1	口唇部：角押文　胴部：無文　Po.537・535と同一個体	Po.541	7－12
3	第43－K区　第 5 層	浅鉢	1	口唇部：角押文　胴部：無文　Po.537・541と同一個体	Po.535	7－13
4	第43－K区　第 6 層	浅鉢	1	口唇部：角押文　突起有　突起部に円窓有	Po.526	7－14
5	第42－K区　第 8 層	浅鉢	1	口唇部：円形刺突文→粘土紐貼付　小突起有　胴部：無文	Po.387	7－16
6	第41－J区　第 8 層	浅鉢	1	口唇部：縦位LR縄文押圧→粘土紐貼付　胴部：無文	Po.556	7－15
7	第42－K区　第 8 層	浅鉢	2	口縁～胴部：無文　内面に隆線による平行線文（渦巻文の一部？）	Po.193	7－19
8	第43－K区　第 6 層	浅鉢	2	口縁～胴部：無文　内面に隆線による平行線文（渦巻文の一部？）	Po.153	7－20
9	第42－L区　第7a層	浅鉢	2	口縁～胴部：無文　内面に隆線による平行線文（渦巻文の一部？）	Po.236	7－17
10	第42－K区　第 8 層	浅鉢	2	口縁～胴部：無文　内面に隆線による渦巻文	Po.192	7－21
11	第42－K区　第 8 層	浅鉢	突起	隆線によるS字状突起	Po.389	7－18

第84図　第Ⅰ群土器 浅鉢

第Ⅱ群土器

本群は今回の調査において、遺物包含層および遺構（埋設土器など）から主体的に出土した土器群である。ここでは、第Ⅱ群土器について器形･文様の特徴に基いて分類し、検討を加えることにする。

土器の分類

第Ⅱ群土器には、深鉢・浅鉢・壺・壜・小把手付・脚台などの器形がある。このように、器形の判明する土器は復元資料・破片資料を含めて総計447点である。この447点の資料を対象として分類を行なうことにする。なお、この中で深鉢か浅鉢か判定困難なものについては、便宜上深鉢に含めた。このため、深鉢の数量は最大値であり、浅鉢の数量は最小値となっている。この点をあらかじめ断っておきたい。

深鉢

深鉢には文様をもつものと地文のみのものがある。前者については、器形上の大きな特徴から、次のA・B・C・Dに大別する。

深鉢A：口縁部が内弯し、キャリパー形のもの

深鉢B：口縁部が内弯し、胴部の屈曲が緩やかなもの

深鉢C：口縁部が直立ないしは外傾するもの

深鉢D：口縁部が外反するもの

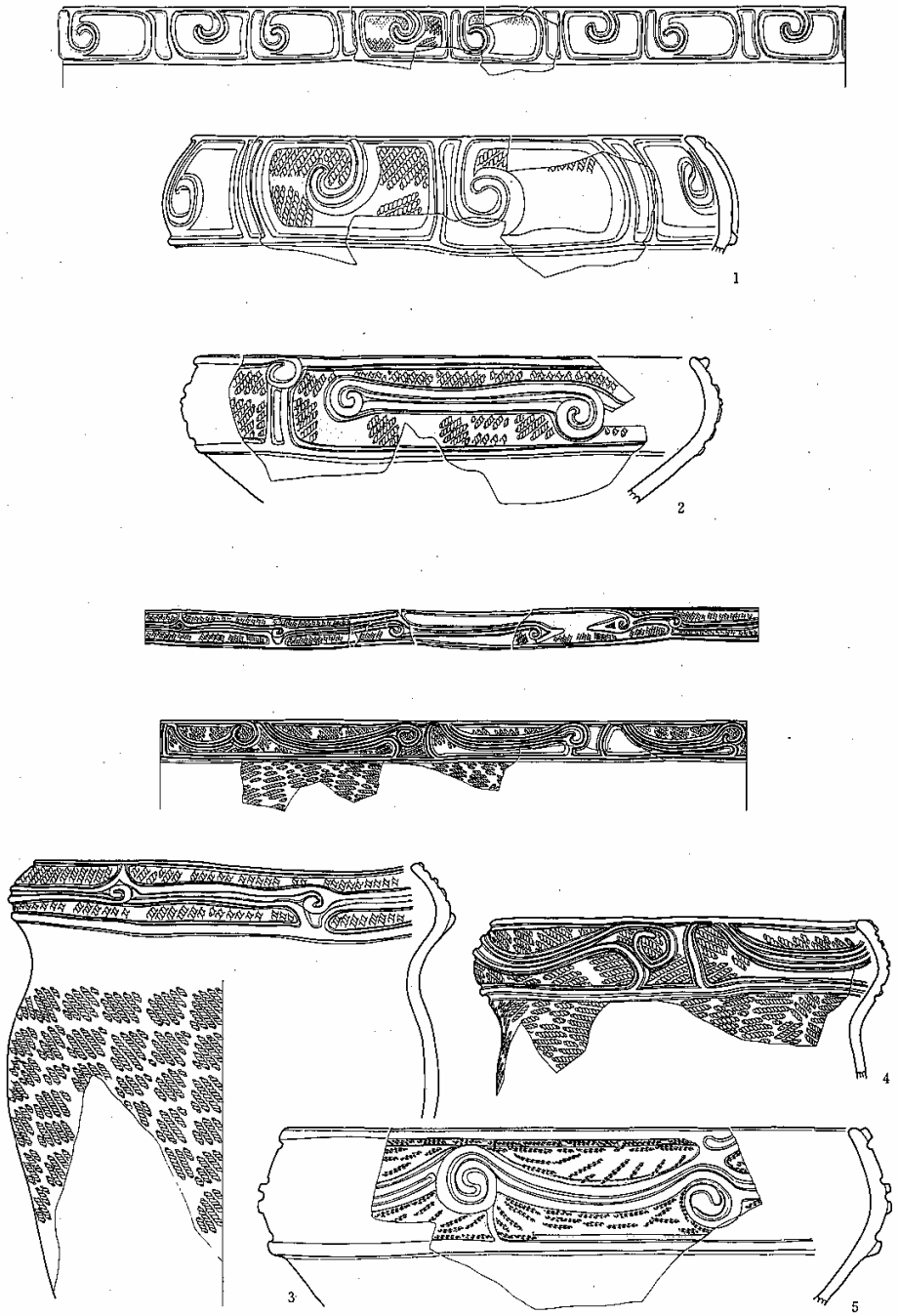
これら深鉢A・B・C・Dについては、器形細部の特徴と文様帯の配置・文様の種類によって細分する。後者の地文のみのものについては深鉢Eとして一括し、器形細部の特徴と地文の種類によって細分する。

深鉢A：口縁部が内弯し、キャリパー形のもの

第1類: 口縁部の口唇部分が肥厚するもの（第85図）

口縁部の内弯は緩やかである。口唇部が肥厚しているのは、口縁部上端の隆線のためで、隆線との合目が消されて平坦化しているもの（1）、合目が消えずに残っているもの（3・4）、合目が溝状（沈線）になっているもの（2・5）などがある。

文様帯は口縁部文様帯と頚部無文帯からをるもの（1・2・3・5）、口縁部文様帯と頚部以下の地文帯からなるもの（4）がある。前者の場合、3では胴部が地文帯であるが、その他のものは破損のため不明である。



第85図　深鉢Ａ第１類

口縁部文様には、隆沈線によって文様帯を区画し、その中に下向の渦巻文（1）・横位渦巻文（2）を描いているものと、区画線から出発する横位渦巻文を描いているもの（3・4・5）がある。文様を描いている隆沈線は、隆線と沈線との間に隙間がみられ両者が完全に一体化していなかったり、隆線の研磨が不均質であるなどの特徴をもっている。

地文にはＬＲ・ＲＬ縄文・ＬＲ押圧縄文がある。ＬＲ・ＲＬ縄文は文様を描く前段階に施文され、その施文方向は口縁部が横・斜、胴部が縦・斜である。ＬＲ押圧縄文は文様を描いた後に、文様に沿って間隙を埋める形で施文されている。

第2類：口縁部が内傾するもの（第86～89図）

口縁部が内傾気味に強く内弯するもので、頚部で強くしまる。胴部は上半が開き気味のもの（第88図8）と、中央部秒脹むものがある（第86図5）。

文様帯は大部分のものが口縁部文様帯・頚部無文帯・胴部文様帯（地文帯）からなるが、第88図8のように口縁部文様帯と胴部地文帯からなるものも一部にある。第2類は口縁部および胴部文様の特徴によって次のａ・ｂ・ｃ類に細分される。

a類：非連結・大単位連結文様（第86図）

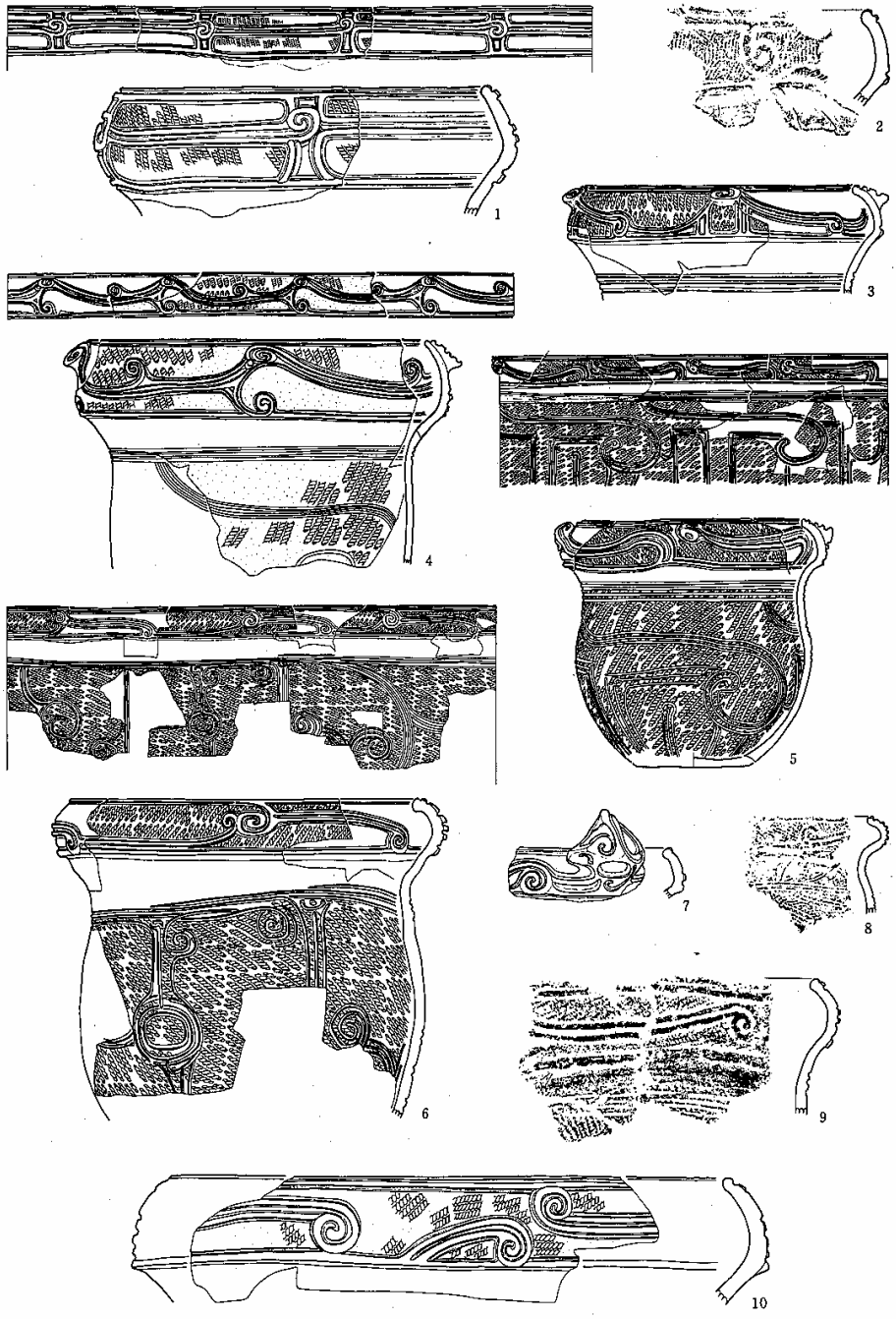
口縁部文様は隆沈線による横位渦巻文が主体（1・3～10）で、一部に下向渦巻文もある（2）。横位渦巻文には、口縁部文様帯の縦位区画線状部分や口縁部上・下端から出発し、文様の小単位が連結しないもの（1・5・7・8・10）と、口縁部上・下端と文様の大単位は連結するが小単位は連結しないもの（3・4・6）がある。文様を描く隆沈線は隆線と沈線が一体化したもので、丁寧な研磨調整を受けている。また、隆線は頂面が平坦で、その幅と高さがほぼ等しく、断面が正方形状をしている。

胴部文様は判明するものが少ないが、５では緩やかな曲線を描きながら流れる渦巻文や縦位・横位渦巻文が沈線によって描かれている（以下、このような文様を曲流渦巻文と総称する）。6も同様な文様と推定されるが、破損部分が多いため全容は不明である。残存部分から推定すると大単位ごとに連結されている可能性がある。胴部文様を描いている沈線は、深く鋭い。この沈線は二～三本を一単位としており、三本の場合が多い。三本沈線の場合、端部において中央の沈線が渦を巻き、両側の沈線がその渦巻を包みこむことが多い。また、沈線間は軽い研磨かナデ調整が加えられているが、前段階の地文（縄文）を消し去る程のものではない。

地文にはＬＲ・ＲＬ縄文がある。このような地文はいずれも文様が描かれる前段階に施文されている。施文方向は、口縁部が横、胴部が縦である。

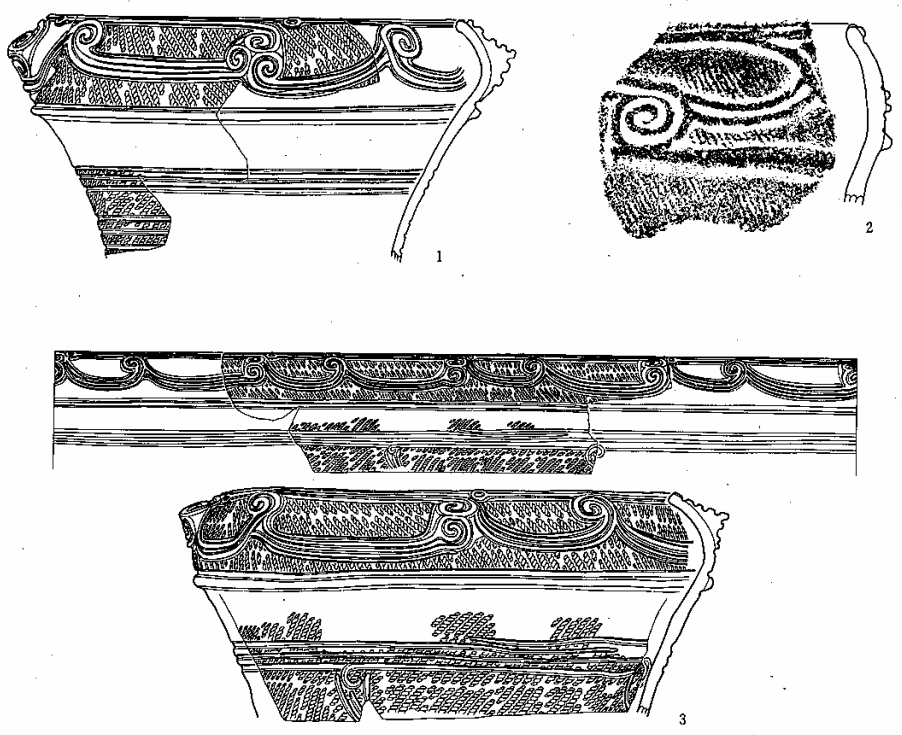
b類：小単位一部連結文様（第87・88図）

口縁部文様は隆沈線による横位渦巻文である。この横位渦巻文は大単位以外に小単位の部分においても、口縁部の上端ないしは下端と連結し、不規則を区画部分を生じさせる。ｂ類は文

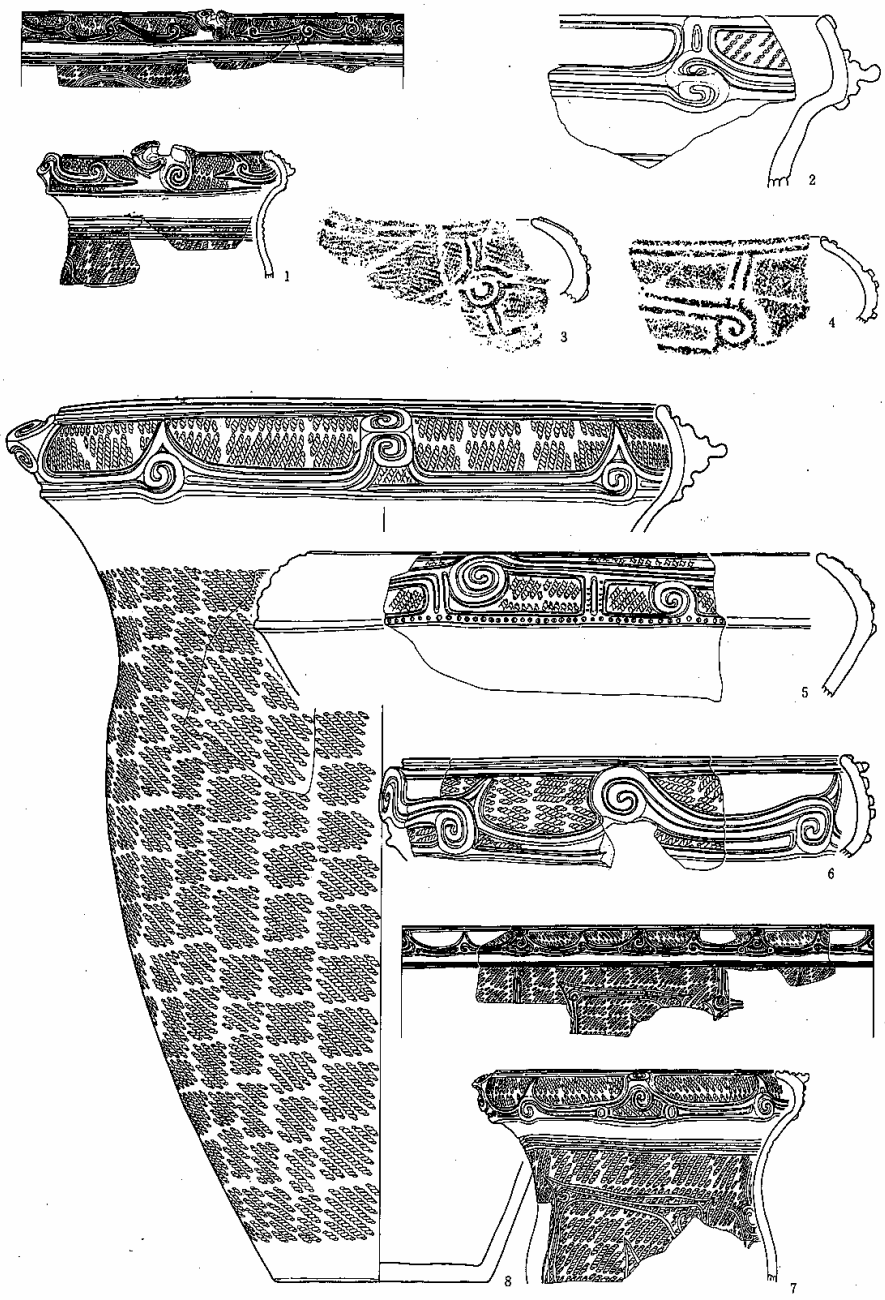


第86図　深鉢Ａ第２ａ類その１

様における連結状態と細部の特徴から、次の三種類（b_1・b_2・b_3）のものがみられる。b1類は横位渦巻文が二本単位の縦位隆線（三本の沈線を伴う）によって口縁部の上端ないしは下端と連結されるものである（第88図１～５）。渦巻文は一個一単位のもの（３～５）と、二個結合一単位のものがある。また、１では端部の渦巻文に横方向の棘が付加されている。b_2類は横位渦巻文の中で、小単位の渦巻文（口縁部下端と接する）に付加された上向の棘が上方に延び、口縁部上端と連結しているものである（第88図６～８）。大単位の渦巻文は一個一単位（６）と二個結合一単位のもの（７・８）がある。b_3類は、横位渦巻文に拾ける大単位・小単位両者の渦巻文が、口縁部上端もしくは下端と連結しているものである（第87図１～３）。小単位の渦巻文は一個一単位であるが、大単位の渦巻文は二個（３）ないしは三個（２）結合一単位となっている。胴部文様は、その全容が判明するものはない。第88図１・７、第87図３の残存部分に沈線による曲流渦巻文の一部と推定される文様がある。端部の渦巻文の中には中央の沈線が渦巻状になり、その両側の沈線がのびて渦巻文を包み、さらに棘状になっているものもある（第88図７）。このような曲流渦巻文（有棘）はａ類と同じものか否か直接判断できる資料はないが、口縁部文様帯における文様のあり方（相違）からすると、一部の小単位で連結し、その部



第87図　深鉢Ａ第２ｂ類その１



第88図　深鉢Ａ第２ｂ類その２

分に不規則な区画を生じさせている可能性がある。

口縁部と胴部の文様を描いている隆沈線には、隆沈線部分の断面が正方形状・長方形状のものがあり、ａ類と較べると彫りが浅い。沈線は深いが鋭さを欠いている。地文にはＬＲ・ＲＬ・ＲＬＲ縄文がある。これらの地文には文様が描かれる前段階に施文されているもの（第88図・３～７　第87図１～３）と充填縄文のもの（第88図２）がある。施文方向は、前者の場合口縁部が横、胴部が縦であるが、後者の口縁部では縦になっている。

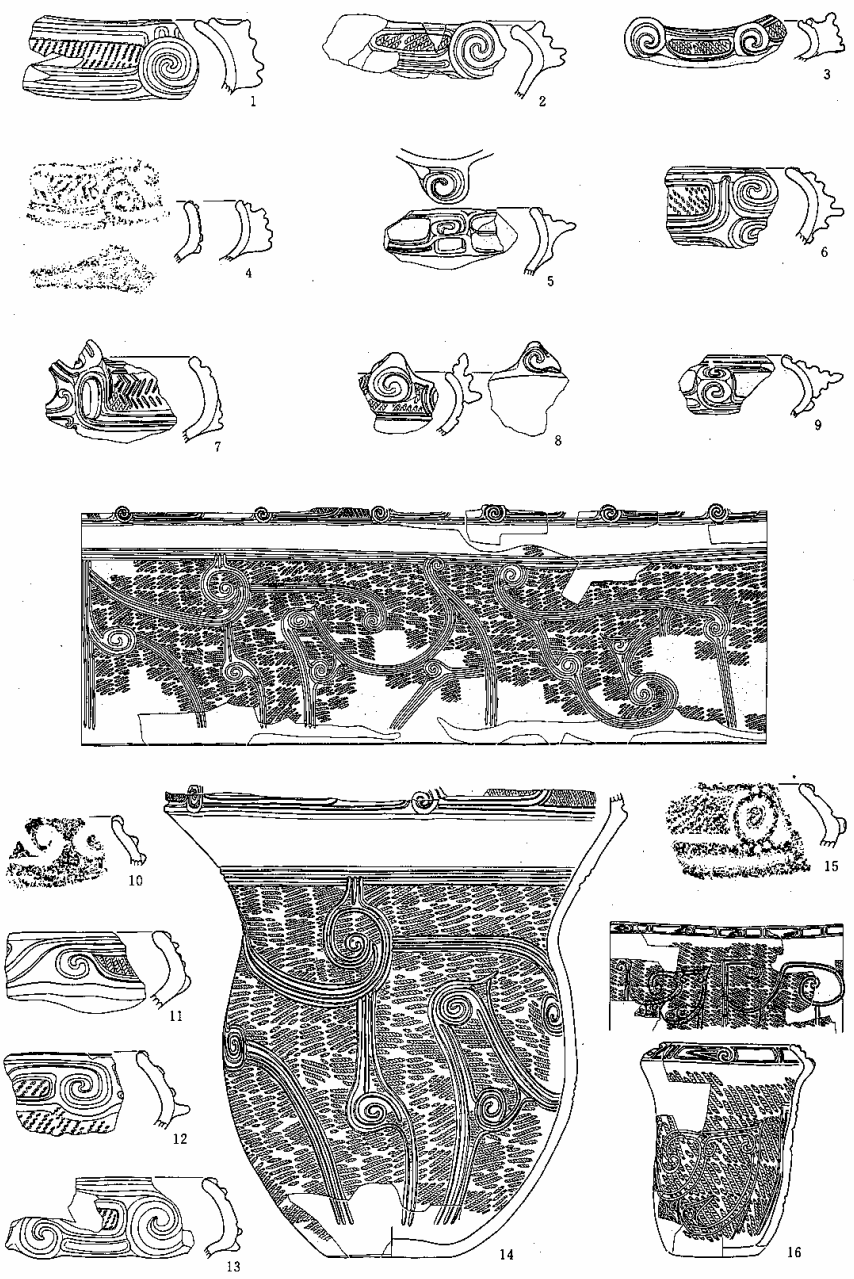
c類：小単位各部分連結文様（第89図）

口縁部文様は隆流線による横位渦巻文である。この横位渦巻文は口縁部の幅とほぼ一致し、それぞれ口縁部の上・下端と連結し、各部分に入組み長方形・入組み三角形・楕円形状の区画を生じさせる。また、このｃ類は口縁部幅の比率が、ａ・ｂ類と較べると狭くなっている。ｃ類には口縁部文様の特徴において次の二種類（c_1・c_2）のものがある。c_1類は渦巻文と他の部分との段差が極めて大きいものである（１～９）。この段差の大きい横位渦巻文には横に連続するだけのもの（２・３）の他に、二本隆線（三本の沈線を伴う）で口縁部上端と連結されているもの（１・４）や、二個上・下結合の渦巻文によって形成されているもの（５・６・９）、突起状のもの（７・８）などがある。c_2類は渦巻文と他の部分の段差が小さいものである（10～16）。横位渦巻文には渦巻文が連続するもの（10～13）の他に、横方向の棘が付加されたもの（16）や円形文状になったもの（15）などがある。

胴部文様が判明するのは16である。16は沈線によって有棘曲流渦巻文が描かれ、小単位の一部が連結し、入組み楕円状の区画部分を生じさせている。14は口縁上部が破損しているが、残存部分からc類と推定されるものである。14も沈線によって有棘曲流渦巻文が描かれ、小単位の三ケ所が連結し、入組み三角形・入組み長方形状の区画部分を生じさせている。

ｃ類の口縁部文様を描いている隆沈線には、隆線部分の断面が正方形状・長方形状のもの（４・７・８・９・14・16）と、隆線部分の断面が隅丸方形状のもの（１～３・10～13・15）がある。胴部文様を描いている沈線は、深い。地文にはＬＲ・ＲＬ・ＬＲＬ縄文・矢羽根状沈線文がある。これらの地文には文様が描かれる前段階に施文されるもの（１・６・７・14・15・16）と、その後に充填されるもの（２・４・７・12・13）がある。また、16のように口縁部文様帯に地文の施文されないものもある。７は口縁部全体にＬＲ縄文を施文し、隆流線によって文様を描いた後、再び矢羽状沈線文を充填しているものである。地文の施文方向は、文様を描く前段階施文の場合、口縁部が横、胴部が縦であるが、文様を描いた後で充填している場合は口縁部が縦・横の両者がある。後者の場合、縦・横というより、むしろ充填される部分の形に左右されている。

第3類：口縁部が直立気味のもの（第90・91図）



第89図　深鉢Ａ第２ｃ類

口縁部は直立気味で、内弯が弱く、頚部でしまる。胴部は中央がやや脹むものもある（第91図１・３）が破損して不明なものが多い。

文様帯は口縁部文様帯･頚部無文帯･胴部文様帯からなる。

口縁部文様は、隆流線による横位渦巻文である。この横位渦巻文は第１・２類のものと較べると大柄で、その大きさが口縁部の幅とほぼ一致する。このため、渦巻文は各々の部分で口縁部の上・下端と連結し、入組み長方形・入組み三角形･入組み楕円形･楕円形状の区画を生じさせ、一見渦巻楕円文に似た文様となっている。横位渦巻文には同じ方向の渦巻を連続させているもの(第90図２)、左・右逆方向の渦巻を交互に組み合わせて連続させているもの(第90図１)、左・右逆方向の渦巻きを交互に組み合わせ、さらに一方を上方に向けているもの(第90図４)、左・右逆方向の渦巻を向い合わせて連続させているもの(第90図４、第91図１)、左・右逆方向の渦巻を横長の「Ｓ」字状に組み合わせて連続させているもの(第90図３第91図２・３)などの他、それらの変形と考えられるもの（第90図５～７）がある。また、これらは渦巻間の広狭に応じて、小さな渦巻文や円形文がその隙間に配されている(第90図２～４　第91図２)。

胴部文様が判明する資料は第91図３だけである。隆沈線による曲流渦巻文が各部分で連結し、各々に不規則な区画部分を生じさせている。第91図１は胴部の一部が残っているだけであるが、３と同様に各部分で連結する曲流渦巻文と推定されるものである。

口縁部と胴部の文様を描いている隆沈線には、隆線部分の断面が長方形状のもの(第90図４～７)と、隅丸長方形状・隅丸台形状のもの(第90図１～３　第91図１～９)がある。地文にはＬＲ･ＲＬ･ＲＬＲ縄文･櫛目状条線文･縦位沈線文･刺突文がある。これらの地文には文様が描かれる前段階に施文されるもの(第90図１・２　第91図４)と、その後に充填されるもの(第90図６･７　第91図４・６・７・９)がある。また、第90図４のように口縁部文様帯に地文の施文されないものもある。第91図４は、口縁部全体にＲＬ縄文を施文し、隆沈線による文様を描いた後、再び刺突文を充填しているものである。地文の施文方向は、文様を描く前段階施文の場合、口縁部が横、胴部が縦である。文様を描いた後に充填している場合、その区画部分の形態や広狭に応じてなされている。

深鉢Ｂ：口縁部が内弯し、胴部の屈曲が緩やかなもの

第1類：口縁部から胴部へ連続する文様帯をもつもの

a類：下垂渦巻文様（第92図１・２）

口縁部から胴部へ下垂する有棘渦巻文が、隆沈線･沈線によって描かれている。文様の全容を知り得る資料はないが、第92図1の有棘渦巻文の状況から推定すると、文様の小単位が一部で連結する可能性がある。

文様を描いている隆沈線は、１の場合隆線部分の断面が隅丸台形状、２の場合長方形状である。沈線は深い。地文は、１がＲＬ縄文、２がＬＲ縄文で、両者とも隆沈線・沈線によって文様を描く前段階に施文されており、その方向は縦である。

b類：各部連結曲流渦巻文様（第92図３～５）

ｂ類には波状口縁のもの（５）と、波状口縁の波頂部が突起状になり注口部が付されるもの（３・４）がある。文様は口縁部から胴部全体に隆沈線による有棘曲流渦巻文が展開し、それらが各部分で連結されている。その結果、渦巻文によって囲まれた不整楕円形・入組み楕円形・入組み三角形・入組み長方形の区画が各部分に生じている。

文様を描いている隆沈線の隆線部分は、頂面が丸味をもっており、高さに対し基底幅の広い隅丸台形状・隅丸正三角形状をしている。地文にはＬＲ・ＲＬ・ＲＬＲ縄文・櫛目状条線文がある。これらの地文は、文様を描いた後で充塡しているもの（４・５）の他は、文様を描く前段階かその後の充塡か区別し得ないもの（３）である。

第2類：口縁部地文帯と胴部文様帯をもつもの（第92図６）

口縁部から胴部全体に地文を施文し、胴部に沈線による文様を描いているものである。このため、文様帯が口縁部地文帯と胴部文様帯という形になっている。

胴部文様は、上端に二条の横位沈線をめぐらせ、その下部に二条の沈線を縦に引いて、縦位沈線間に連続する刺突文を配した簡素なものである。沈線は深く鋭い。地文はＬＲ縄文で、その施文方向は縦である。

深鉢Ｃ：口縁部が直立ないしは外傾するもの

第1類：橋状把手を連結させているもの（第93図）

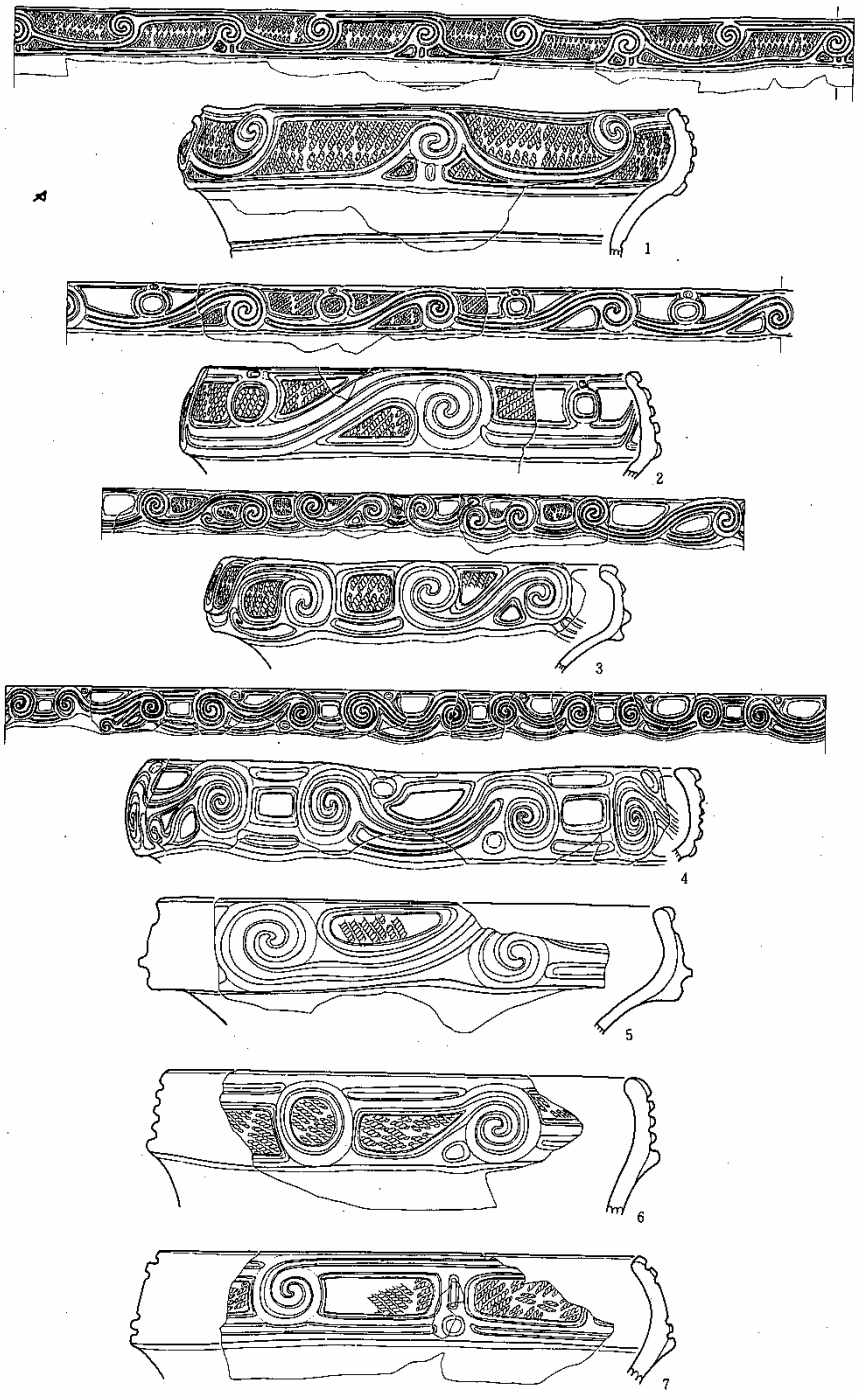
口縁部は大柄な橋状把手を横方向に連結させたもので、頚部は無文帯となっている。また、口縁部は交互に繰り返される大小の波状口縁で、その各々に大小の橋状把手が付いている。把手とその連結部分には、隆沈線による渦巻文が配されている。渦巻文は橋状部・連結部に連続して展開するもので、端部の渦巻文には棘が付加されている。隆沈線の隆線部分は隅丸正方形状をしている。

第2類：口縁部文様帯と胴部文様（地文・無文）帯からなるもの（第94・95図）

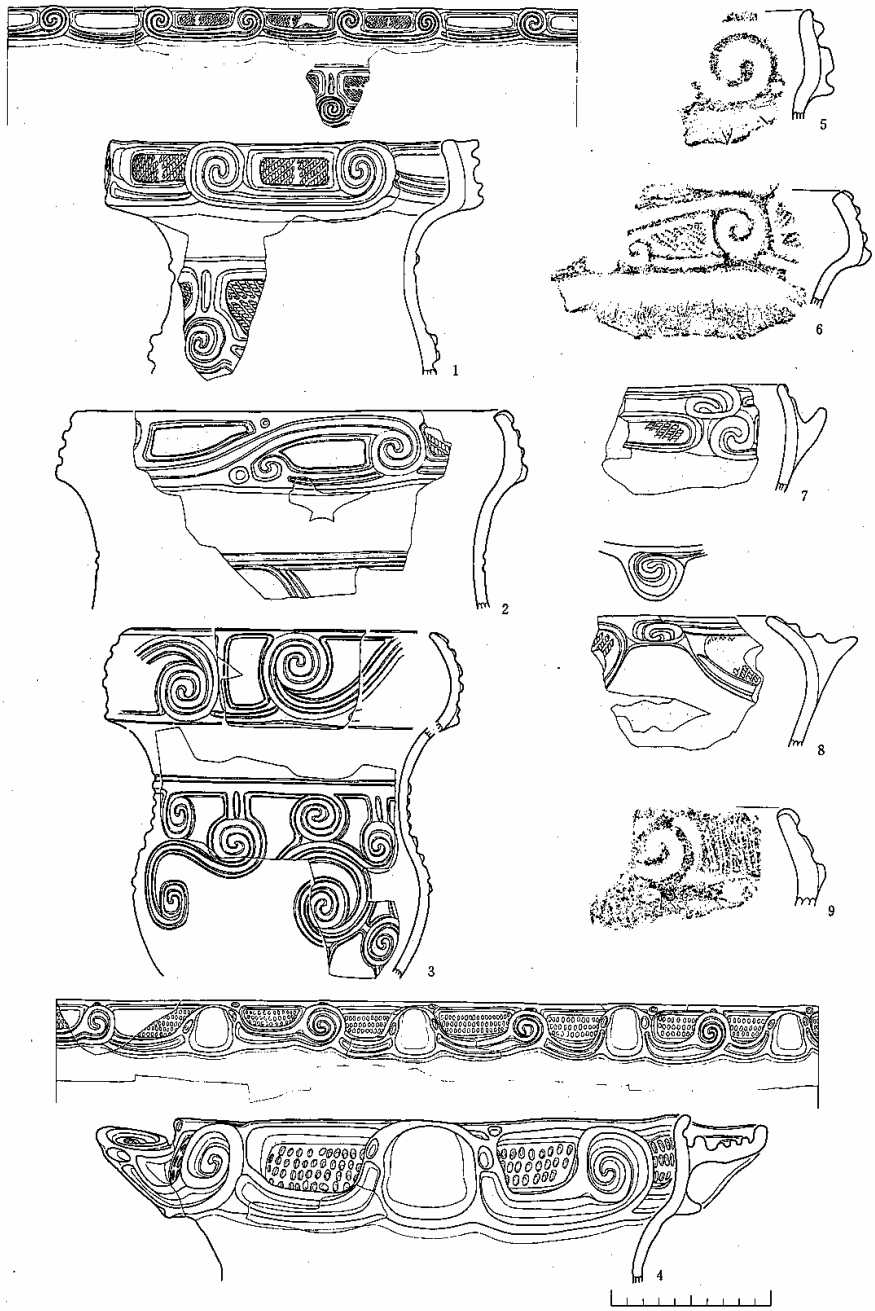
a類：横位渦巻文様（第94図）

口縁部文様は隆(沈)線による横位渦巻文である。ａ類は、文様細部の特徴から、次の三種類（a_1・a_2・a_3類）に細分される。

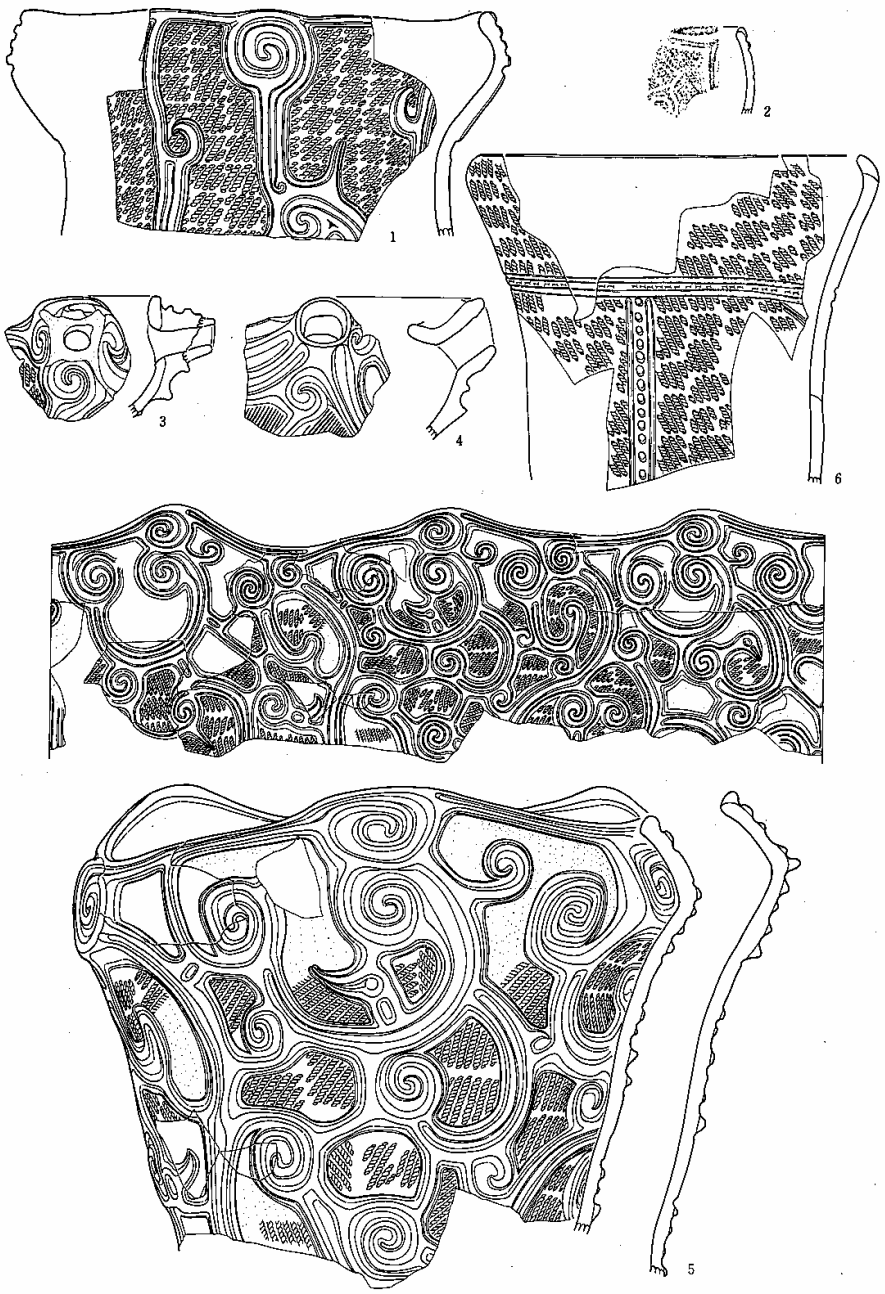
a_1類の口縁部文様は沈線を挟んだ二本の隆線による横位渦巻文である（１・４）。胴部は無文帯のもの（４）と文様帯をもつもの（１）がある。後者の胴部上端には連続刺突文の施こさ



第90図　深鉢Ａ第３類その１



第91図　深鉢Ａ第３類その２



第92図　深鉢Ｂ

れた横位隆線がめぐらされ、その下部に隆沈線による文様が描かれている。胴部文様の形は破損のため不明である。文様を描いている隆沈線は研磨調整が不均質で、沈線が省略されている部分もある。

a_2類の口縁部文様は、間隔のあいた二本の隆線による横位渦巻文である（２・５・６）。胴部は地文帯のもの（５・６）と文様帯をもつもの（２）がある。後者の胴部文様は沈線による曲流渦巻文である。文様を描いている隆線は丁寧に研磨され、断面が隅丸台形状をしている。沈線は深い。地文にはＬＲ・ＲＬ縄文があり、胴部文様帯をもつものでは、文様を描く前段階に施文されている。施文方向はいずれも縦である。

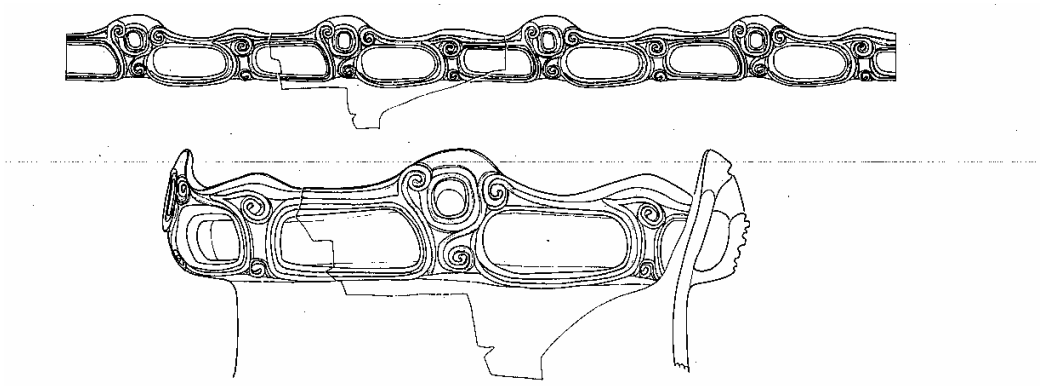
a_3類の口縁部文様は、間隔の広い二本の隆沈線による横位渦巻文であるが、その下部がさらに横位隆線によって連結されている（３）。二本の隆沈線で囲まれた部分は、入組み長方形の区画状になっている。胴部には、隆沈線によって一部もしくは各部分で連結する曲流渦巻文描かれている。文様を描いている隆沈線および隆線は、隅丸長方形状のもので、丁寧な研磨調整が加えられている。地文はＬＲ縄文で、胴部文様を描いた後に充填されている。その施文方向は、施文部分の形状に応じて変化している。

b類：変形横位渦巻文様（第95図）

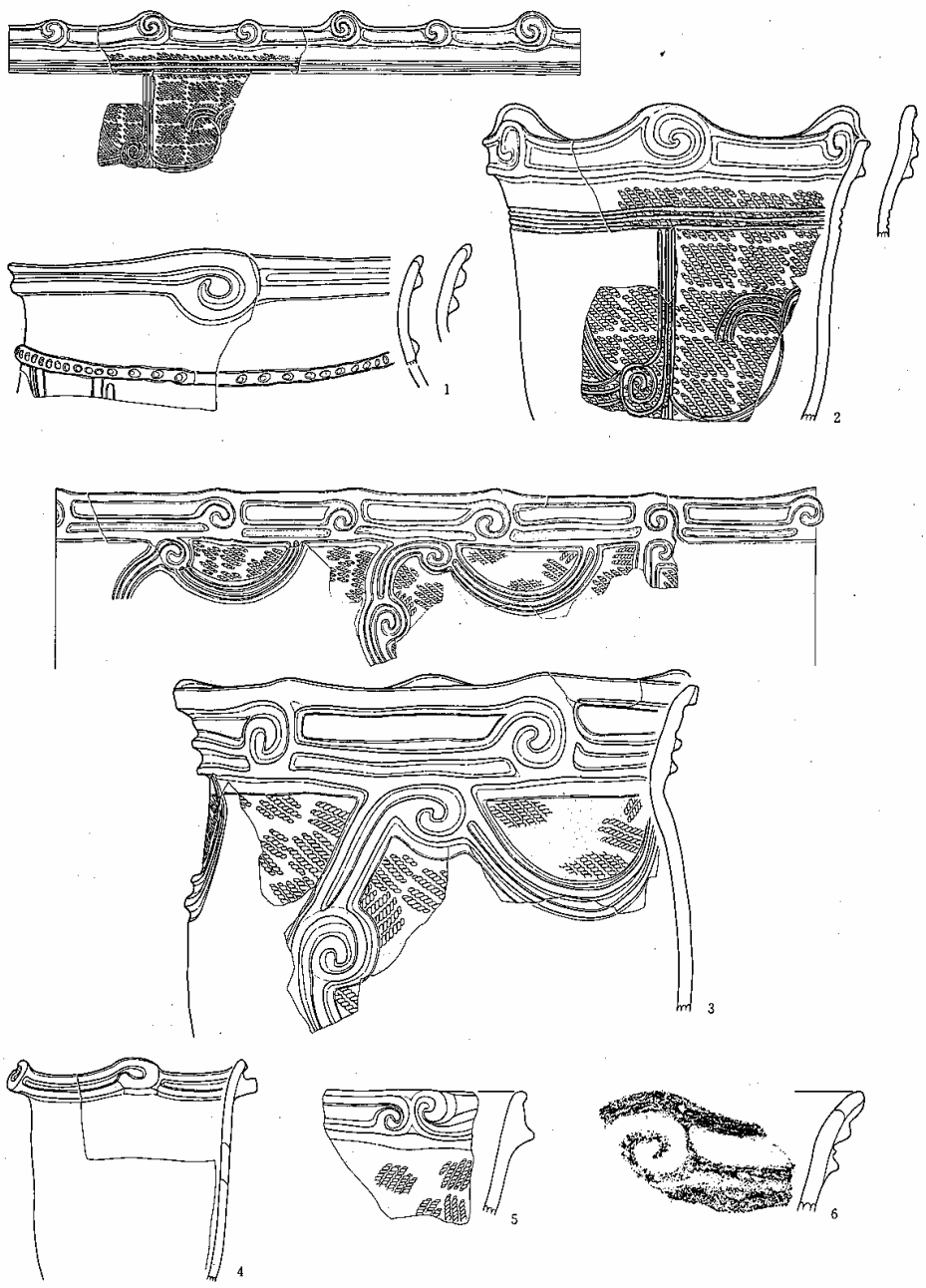
口縁部文様は、隆線による円形文の上下を横位隆線によってつなぎ連続させた変形横位渦巻文である。ｂ類は変形横位渦巻文の形状から次の二類（b_1・b_2類）に細分される。

b_1類の口縁部文様は、立体的な円形文が横位に連続するものである（１・２）。頚・胴部文様は、頚部に隆沈線による波状文をめぐらし、胴部に隆沈線による縦位波状文･縦位の曲折状渦巻文を描いたものである（１）。文様を描いている隆沈線は、隆線と沈線が完全に一体化しておらず、一部で沈線が省略されている。地文はＲＬ縄文で、隆沈線による文様が描かれる前段階に施文されている。施文方向は縦である。

b_2類の口縁部文様は、平板化した円形文が横位に連続するものである（３・４）。胴部文様



第93図　深鉢Ｃ第１類

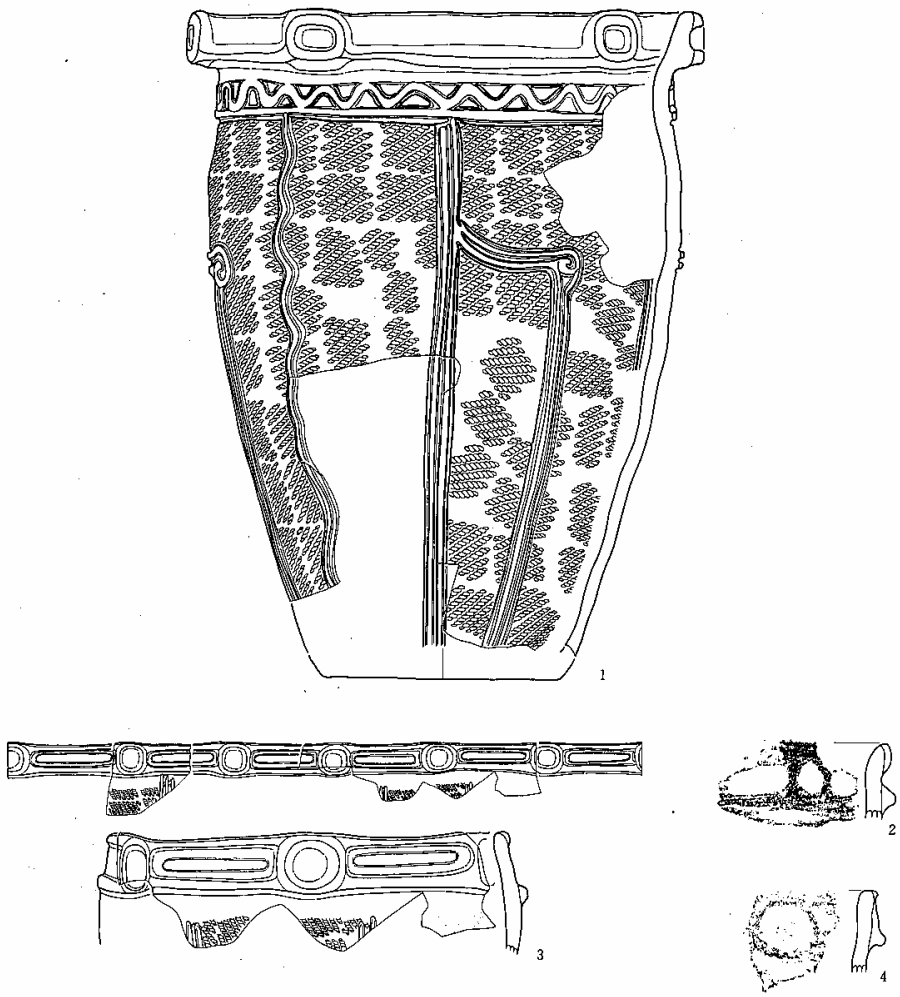


第94図　深鉢Ｃ第２ａ類

は沈線によって描かれているが、破損のためその形は不明である。沈線は深い。地文はＬＲ縄文で、沈線による文様が描かれる前段階に施文されている。施文方向は縦である。

第3類：口縁部地文帯と胴部文様帯からなるもの（第96図１）

口縁部から胴部全体に地文を施文し、胴部に沈線による文様を描いているものである。このため、文様帯が口縁部地文帯と胴部文様帯という形になっている。胴部文様は、上端に二条の横位沈線をめぐらせ、その下部に三条の沈線を縦に引いた簡素なものである。沈線は深い。地文はＬＲ縄文で、その施文方向は縦である。



第95図　深鉢Ｃ第２ｂ類

第4類: 口縁部無文帯と胴部文様帯からなるもの（第96図２～５）

口縁部無文帯は幅が狭く、肥厚している。このため、胴部文様帯は非常に縦長なものとなっている。第4類は、胴部文様の特徴から次の二種類（ａ・ｂ類）に細分される。

a類：縦位沈線文様（５）

三条一単位の沈線を縦に引き、これを一定間隔ごとに配したものである。沈線は深い。地文にはＬＲ・ＲＬ縄文があり、沈線によって文様が描かれる前段階に施文されている。施文方向は縦である。

b類・連結曲流渦巻文様（２～４）

沈線によって曲流渦巻文が描かれているものである。この曲流渦巻文は一部もしくは各部分で連結し、不定形な区画を生じさせている。沈線は浅い。地文にはＬＲ・ＲＬ縄文があり、文様が描かれる前段階に施文されている。施文方向は縦である。

第5類：口縁部から胴部に連続する文様帯をもつもの（第96図６～17）

口縁部から胴部に連続する文様帯に、隆沈線･沈線による曲流渦巻文が描かれるものである。曲流渦巻文の連結状況から、次の二種類（ａ・ｂ類）に細分される。

a類：非連結･一部連結曲流渦巻文様（６～８・10・11）

隆沈線・沈線による曲流渦巻文が、一部で連結するか、もしくは連結しないものである。いずれも破片資料のため両者を区別することができない。隆沈線の隆線部分は、断面が隅丸台形状をしている。流線は深い。地文にはＬＲ・ＲＬ縄文があり、文様が描かれる前段階に施文されている。施文方向は縦である。

b類：各部分連結曲流渦巻文様（９・12～17）

隆沈線･沈線による曲流渦巻文が各部分で連結し、不定形な区画部分を生じさせているものである。隆沈線の隆線部分には、断面が隅丸長方形状のものと、隅丸台形状・隅丸正三角形状のもの(13～17)がある。沈線は深い。地文にはＬＲ・ＲＬ・ＲＬＲ縄文があり、文様が描かれる前段階に施文されるもの（９・13・16）と、その後に充填されるもの(12)がある。施文方向は、前者の場合縦、後者の場合施文部分の形状に応じて変化している。

深鉢Ｄ：口縁部が外反するもの

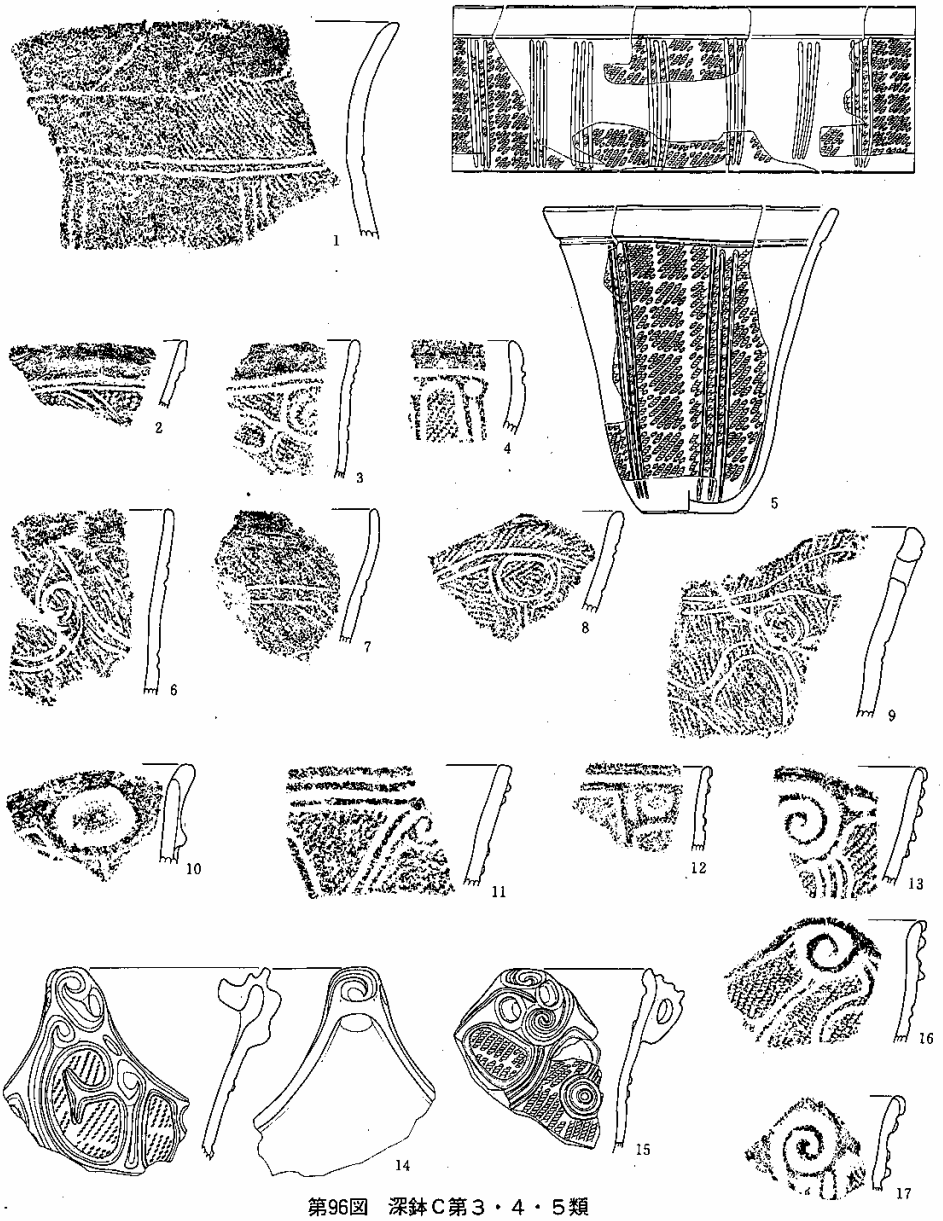
第1類：口縁部の口唇部分が強く肥厚するもの（第97図）

口縁部は強く外反する波状口縁である。口唇部分が強く肥厚し、その肥厚部分が、隆沈線による横位渦巻文となる。第１類には中形品（１～４）と小形品（５～８）があり、それぞれ胴部中央が脹むもの（１・５・６）と、胴部が円筒状（２～４・７・８）のものがある。文様帯は口唇部文様帯と胴部文様帯からなる。これらをおもに胴部文様の特徴から分類すると次の三

種類(ａ・ｂ・ｃ類)に細分される。

a類：縦位沈線文様(２・５)

胴部上端に三条の横位沈線をめぐらせ、その下に三条一単位の縦位沈線と縦位波状沈線を一定の間隔をおいて交互に配したものである。地文はＲＬ縄文で、文様が描かれる前段階



第96図　深鉢Ｃ第３・４・５類

に縦方向に施文されている。２は破損が顕著であるが、残存部分から同様な文様のものと推定される。地文はＬＲ縄文で、５と同様文様が描かれる前段階に縦方向に施文されている。

口唇部文様帯の横位渦巻文を形づくる隆沈線は、隆線部分の断面が２は正方形状、５は隅丸台形状である。胴部文様を描いている沈線は、２・５とも深いが、２の方が５よりもさらに深く鋭い。このように、２と５ではａ類として一括したが、若干の相違を含んでいる。

b類：非連結・大単位連結曲流渦巻文（１・３・４・６・７）

胴部文様が沈線による曲流渦巻文で、小単位における連結がみられないものである（６・７）。口唇部文様帯の横位渦巻文を形づくる隆沈線は、隆線部分の断面が正方形状をしている。胴部文様を描いている沈線は、深く鋭い。地文はＲＬ縄文で、文様が描かれる前段階に縦方向に施文されている。１・３は、破損が顕著であるが、残存部分から同様なものと推定される。地文がＬＲ縄文である他は、口唇部文様帯の横位渦巻文を形づくる隆沈線や胴部文様帯の沈線の特徴においても共通している。

c類：小単位一部連結曲流渦巻文様（４・８）

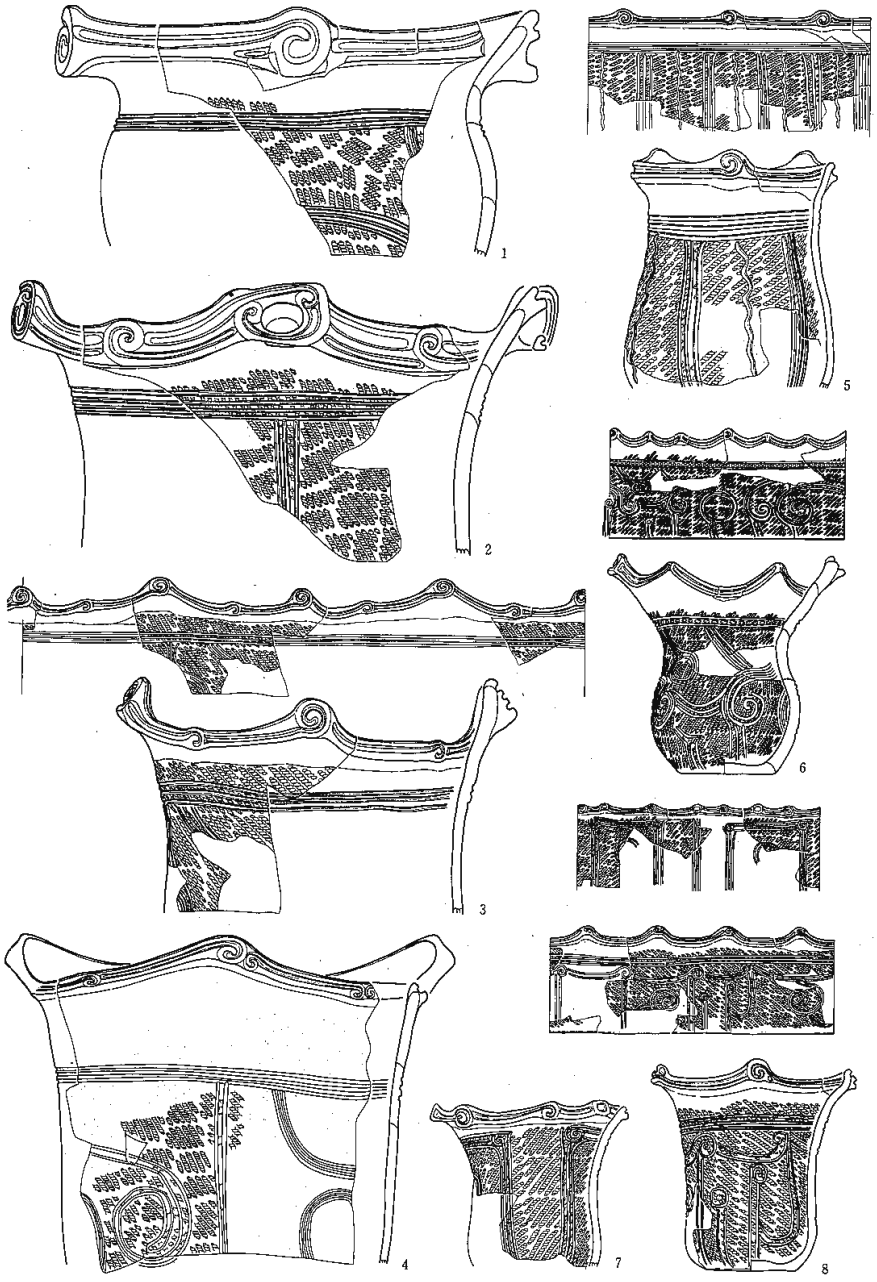
胴部文様が沈線による曲流渦巻文で、小単位において一部連結しているものである（８）。渦巻文相互によって囲まれた部分は、不定形な入組み区画状をしている。口唇部文様帯の横位渦巻文を形づくる隆沈線の隆線部分は、断面が台形状をしている。胴部文様を描いている沈線は、深い。地文はＬＲ縄文で、文様が描かれる前段階に施文されている。施文方向は縦である。４は破損しているが、残存部分から同様な文様をもつものと推定される。口唇部文様帯の隆沈線や、胴部文様帯の沈線・地文なども共通している。

第2類：口縁部が強く外反し、胴部が球形のもの（第98図１～３）

口縁部は波状口縁である。文様帯は、口縁･頚部無文帯と胴部文様帯からなる。第２類は、胴部文様の判明する資料が少ない。第98図３は、沈線によって有棘曲流渦巻文が描かれているもので、文様の小単位が一部で連結し、その部分に不定形な区画を生じさせている。沈線は深い。地文はＬＲ縄文で、文様が描かれる前段階に施文されている。施文方向は縦である。１は沈線、２は隆沈線によるもので、２は３と同様な文様と推定される破片資料である。１の沈線は３と同様で、２の隆沈線は、隆線部分の断面が隅丸台形状をしている。地文は、１・２ともＲＬ縄文で、文様が描かれる前段階に施文されている。施文方向は縦である。この他の大部分は口縁・頚部資料で、胴部文様については不明である。

第3類：口縁部が緩外反し、胴部が僅かに脹むもの（第98図４～７）

口縁部は波状口縁で、文様帯は口縁部から胴部へ連続する。口縁・胴部文様は、隆沈線･沈線によって描かれた曲流渦巻文が各部分で連結し、各々の部分に不定形な区画を生じさせている。



第97図　深鉢Ｄ第１類

隆沈線は、隆線部分の断面が隅丸台形状のもの（４・６・７）と、隅丸正三角形状のもの（５）がある。沈線には深いもの（６）と浅いもの（４・５）がある。沈線間は、研磨調整が加えられ、その部分の地文が消されている（４～６）。また、第３類には、７のように文様が隆沈線で描かれているものと、４・６のように隆沈線と沈線が併用されているものがある。

地文には、ＬＲ･ＲＬ縄文･Ｌｒ･Rℓ 撚糸文があり、これらは文様が描かれる前段階に施文されるもの（４・６・７）と、その後に充填されるもの（５）がある。

深鉢Ｅ：地文のみのもの

第1類：口縁部が直立ないしは外傾するもの（第98図８～11）

第１類は口縁部の特徴から、次の四類（ａ・ｂ・ｃ・ｄ類）に細分される。

a類：口縁部が二段肥厚のもの（８）

地文はＲＬ縄文で、施文方向は縦である。

b類：口縁部が一段肥厚のもの（９・10）

地文はＲＬ・ＬＲ・ＬＲＬ縄文・櫛目状条線文で、施文方向は縦である。

c類：口縁部が単純口縁のもの（11）

地文はＬＲ縄文で、施文方向は縦である。

第2類：口縁部が外反するもの（第98図12～14）

第２類は口縁部の特徴から次の二類（ａ・ｂ類）に細分される。

a類：口縁部が単純外反のもの（12・13）

地文にはＬＲ縄文・櫛目状条線文がある。

b類：口縁部が「く」の字状に外反するもの（14）

地文は櫛目状条線文である。

浅鉢

浅鉢は器形上の大きな特徴から次のＡ・Ｂに大別する。

浅鉢Ａ：口縁部が内弯するもの

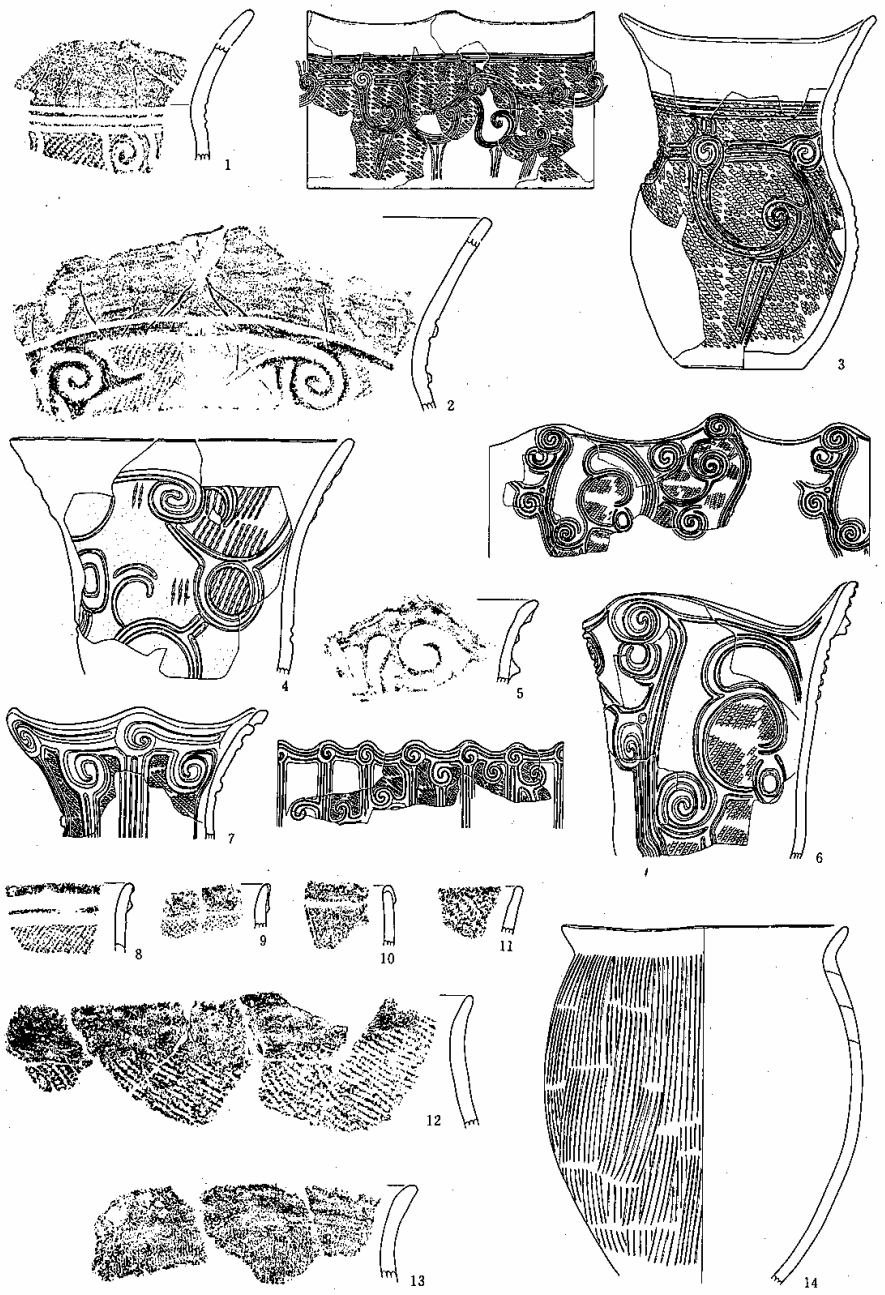
浅鉢Ｂ：口縁部が外傾するもの

これらの浅鉢Ａ･Ｂについて、深鉢の場合と同様に器形細部の特徴と文様帯の配置･文様の種類によって細分する。

浅鉢Ａ：口縁部が内弯するもの

第1類：口縁部が明確に内弯するもの（第99図１～３）

口縁部文様帯と胴部地文帯（無文帯）からなる。第1類は、口縁部文様帯における文様の特



第98図　深鉢Ｄ第２・３類 深鉢Ｅ第１・２類

徴によって次の二類（ａ・ｂ類）に細分される。

a類：非連結・大単位連結横位渦巻文様（１）

口縁部文様帯に、隆沈線による横位渦巻文が描かれるものである。文様全体は不明であるが、この横位渦巻文は小単位における連結がみられないことから、非連結か大単位連結と考えられる。文様を描いている隆沈線は、隆線と沈線が完全に一体化したものではなく、沈線が省略されている部分もある。地文はＲＬ縄文で、施文方向は横である。胴部は無文帯である。

b類：各部連結横位渦巻文様（２・３）

口縁部文様帯に、隆沈線による各部分で連結する横位渦巻文が描かれるものである。連結された渦巻文間には、横長楕円状の区画を生じさせている。文様を描いている隆沈線は、隆線部分の断面が隅丸台形状のものである。地文はＬＲ縄文で、施文方向は横である。胴部は地文帯（３）と無文帯（２）のものがある。前者の地文は櫛目状条線文である。

第2類：口縁部が外傾気味に内弯するもの（５）

口縁部文様帯と胴部地文帯(無文帯)からなる。口縁部文様は、隆沈線による各部分で連結する横位渦巻文である。連結された渦巻文間には、不定形な区画を生じさせている。文様を描いている隆沈線は、隆線部分の断面が隅丸台形状のものである。地文にはＬＲ縄文とＬＲＬ縄文がある。後者は文様が描かれた後に充填されている(５)が、前者については不明である。胴部文様帯は地文帯（５）と無文帯(４)のものがある。前者の地文はＬＲＬ縄文で、施文方向は縦である。

浅鉢Ｂ：口縁部が外傾するもの

第1類：口縁部の口唇部が肥大しているもの（第99図６～８）

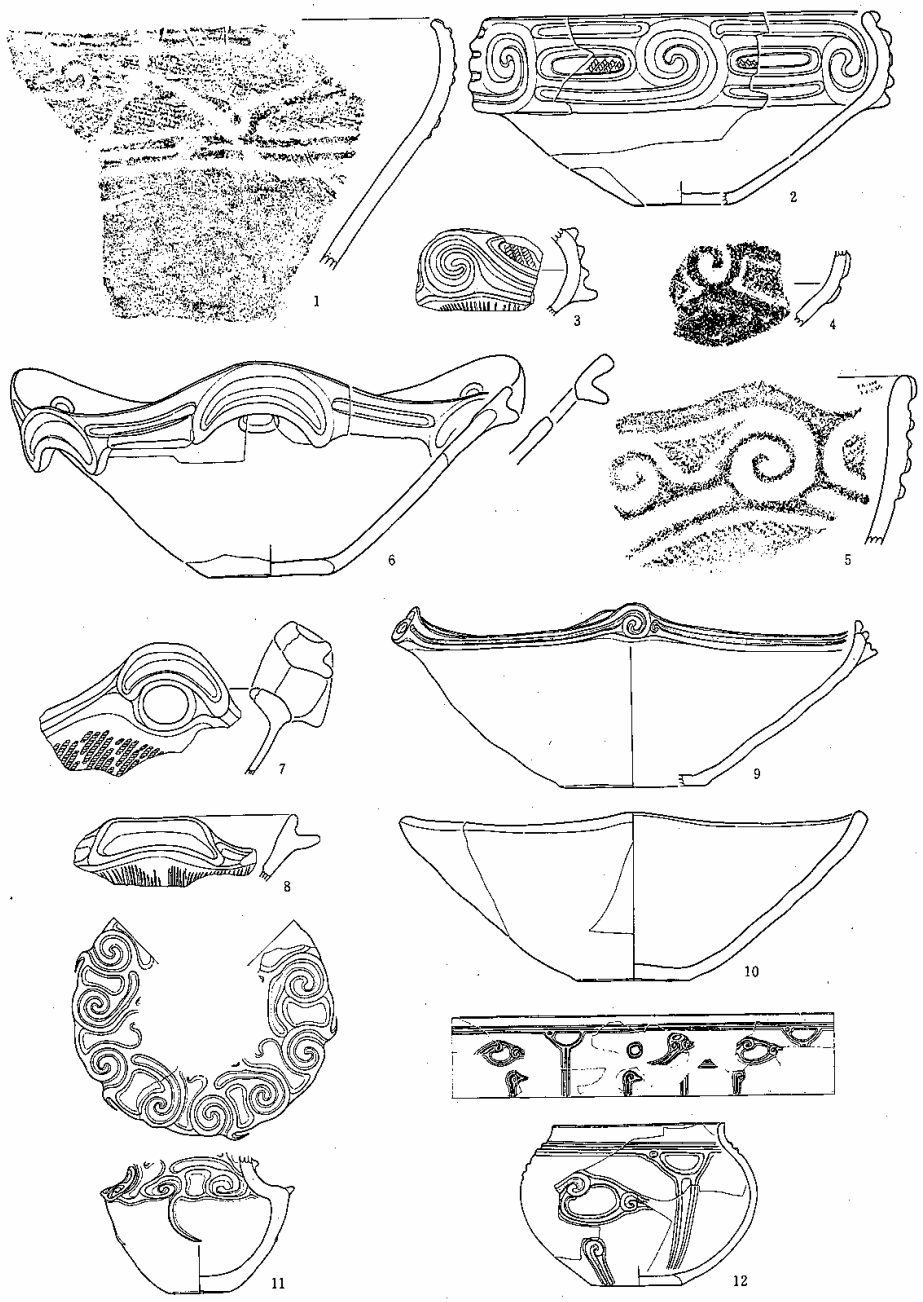
口縁部の口唇部分が横長の把手状に肥大し、それが横方向に連結されているものである。文様帯は口唇部文様帯と胴部文様帯（無文帯）からなる。口唇部文様帯の把手状部分には、その下に円窓の付いたものもある(６・７)。胴部は無文帯（６）と地文帯（７・８）のものがあり、後者には地文がＲＬ縄文と櫛目状条線文がある。施文方向は縦である。

第2類：口縁部の口唇部分が肥厚しているもの（第99図９）

口縁部の口唇部分が肥厚し、隆沈線による横位渦巻文が描かれるものである。９の隆沈線は、隆線部分の断面が正方形状をしているが、この他の破片資料には隅丸方形状・隅丸台形状のものもある。胴部は無文帯となっている。

第3類：単純口縁のもの（第99図10）

口縁部は波状口縁で、口縁部から胴部が無文帯となっている。



第99図　浅鉢Ａ・Ｂ 壺Ａ・Ｂ

壷

壺は、全面が丁寧に研磨されており、他の器形のものとは異なっている。器形上の特徴から次の二種類（壺A・B）がある。

壺A：有頚壺（第99図11）

口縁部を欠いているが、頚部以下が残っている。頚部でしまり、肩が張る。肩から胴部へはそのまますぼまる。文様は、頚部から肩部にみられ、その一部が尾のようになって胴部に続いている。頚・肩部文様帯には隆沈線による曲流渦巻文が描かれ、各部分で連結している。隆沈線は、隆線部分の断面が隅丸台形状をしており、丁寧に研磨されている。

壺B：無頚壺（第99図12）

胴部が球形で、口縁部が極めて短い立ち上りを示すものである。文様は胴部にみられ、隆沈線による曲流渦巻文が描かれている。この曲流渦巻文は文様の小単位において一部連結し、その部分に不整楕円状の区画を生じさせている。隆沈線の隆線部分は、断面が隅丸台形状で、丁寧に研磨されている。

埦（第100図１）

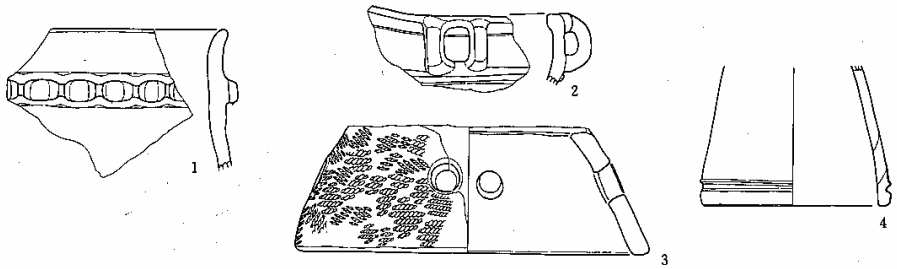
口縁部が直立気味に外反し、肩から胴部へ脹らんでいくものである。頚部には幅広の隆帯がめぐらされている。この隆帯は頂面が連続的に押圧されている。器面は研磨され無文である。

把手付（第100図２）

全体の器形は不明であるが、口縁部に二個一対の縦位橋状把手が付いているものである。

脚台（第100図３・４）

器台か、他の器形に伴う脚部か判明せず、脚台として一括する。３は円窓をもつもので、二種類の原体（大・小）によるＬＲ縄文が施文されている。４は全面が研磨されているもので、下端付近に一条の沈線がめぐらされている。



第100図　埦・把手付・脚台

第5表　第Ⅱ群土器の地文

分類 ＼ 地文		単節縄文						複節縄文						撚糸文		押圧縄文		櫛目状条線文	沈線文		刺突文
		LR			RL			LRL			RLR										
		全面	全面or充填	充填	全面	全面or充填	充填	全面	全面or充填	充填	全面	全面or充填	充填	Lr	Rℓ	RL	LR		矢羽状	縦位	
深鉢A	第1類	3			1												2				
	第2類	1			1																
	a類	21			20																
	b類		1		1							1									
	b_1類	4			5						2		1								
	b_2類	5			3																
	b_3類	1	1		2																
	c類			1																	
	c_1類	3		1		1					2								2		
	c_2類	3	2	1	1	1	2		1	1		1	1								
	第3類	5	7	15	1	6	2				1							1		1	5
深鉢B	第1a類	2			1	1															
	b類		8	1		4	1					1						1			
深鉢C	第2a類	1																			
	a_2類	1			1	1															
	a_3類			1																	
	b_1類				1																
	b_2類	1																			
	第3類	2																			
	第4類	1																			
	a類	1			1																
	b類	1			2																
	第5類				1																
	a類	5			1																
	b類			1	2	3	1					1									
深鉢D	第1類	18																			
	a類	1			1																
	b類	3			2																
	c類	2																			
	第2類	1			2																
	第3類	1	2		2	4	2							1	1						
深鉢E	第1a類				1																
	b類	5			1				1	1								1			
	c類	1																			
	第2a類	3																2			
	b類																	1			
浅鉢A	第1a類					1															
	b類		1			1												1			
	第2類		1							1	1										
浅鉢B	第1類				1													1			

土器の編年的位置

問題の所在

第Ⅲ群土器は、今回の調査で出土した土器の中から明らかに混入と推定される第Ⅰ群土器を除いたものである。第Ⅰ群土器は、従来の研究成果から第Ⅲ群土器に先行するもので、それぞれ前期初頭・大木7a式・大木7b式・大木8a式に位置づけられ、その多くが大木8a式であることは、前述した通りである。ここでは、第Ⅲ群土器の編年的位置について検討を加えたい。

第Ⅲ群土器と現在の所最も類似する土器群は、大木囲貝塚・大松沢貝塚から出土している大木8b式土器(加藤孝：1956・６・12)である。ところが、第Ⅱ群土器には、大木囲貝塚・大松沢貝塚の大木8b式土器にみられないものが多量に含まれている。すなわち、大木8b式土器か大木9式土器がという点で、種々の見解が提出されている土器群である。この種の土器群は上深沢遺跡でも出土しており、Ｘグループの土器としたことがあった（宮城県教委：1978・３）。ただし、上深沢遺跡でＸグループの土器としたものには、山前遺跡(小牛田町教委：1977・３)や幡谷貝塚(東北大学文学部蔵)出土土器に類似するものも含まれており、これらは第Ⅱ群土器の中に明確な形では存在しない。したがって、第Ⅱ群土器は、大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と共通するものと上深沢遺跡Ｘグループの土器の一部から構成されていることになる。

このような点から、第Ⅱ群土器については、すべて同一時期のものか、それともその中に一部古い段階のものが混入しているのか、さらには時期の異なる土器群が混在しているのかという問題が含まれている。これらの点を、大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器との比較、出土状況による共伴関係の検討を通して明らかにしたい。

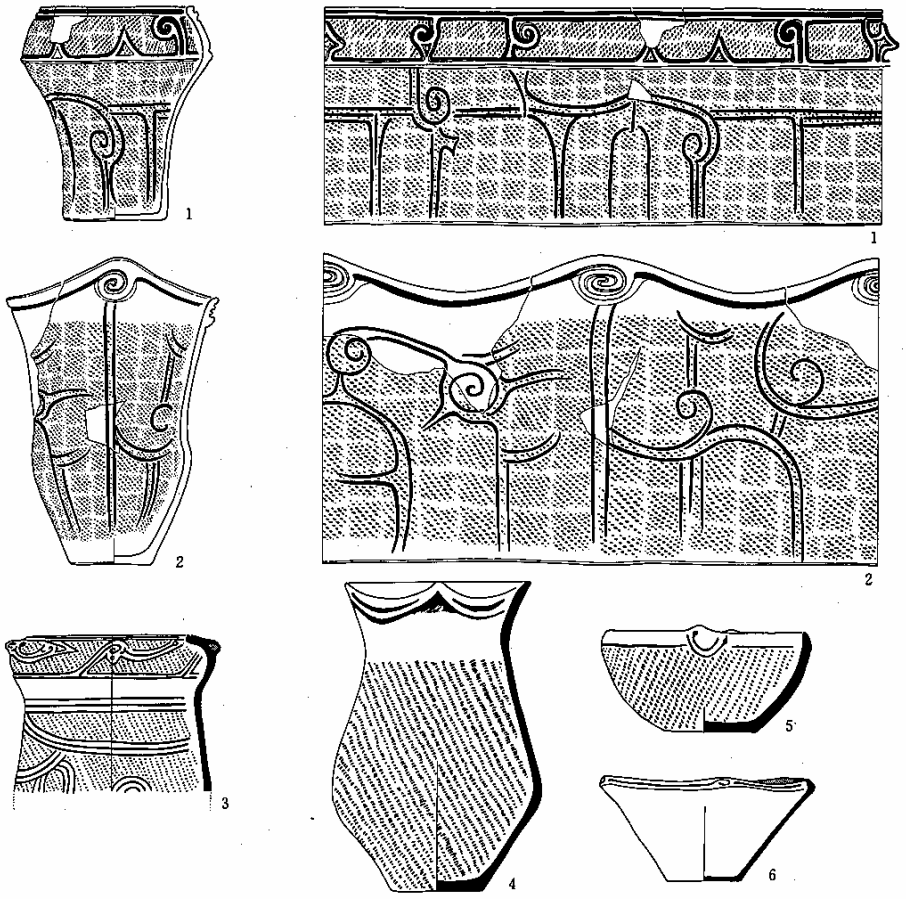
大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器の検討

大木囲貝塚・大松沢貝塚出土の大木8b式土器は、現在東北大学文学部と大和町吉岡中学校に保管されている。今回は、加藤孝氏の報告(加藤孝:1956・６・12)に基き観察と検討を行なった(第101～104図)。この中で、正面図の断面を白抜きにしたものと、展開図を示したものは、観察結果に基いて加藤孝氏の原図に加筆したものである。正面図の断面を黒く塗り潰しであるものは、実物にあたることができなかったもので、加藤孝氏の原図をそのまま示したものである。

土器の検討は、勝負沢遺跡第Ⅱ群土器の観察・分類基準を適用し、不充分なものについてはその都度補うことにしたい。

大木囲貝塚出土土器

第101図が、山内清男氏蔵とする大木囲貝塚出土の大木8b式土器で、深鉢が４点、浅鉢が２点ある。１は深鉢Ａ第１類と共通する。口縁部文様帯には隆流線による下向の（有棘）渦巻文･上向の棘文が描かれている。胴部文様帯には沈線による非連結曲流渦巻文が描かれている。３は深鉢Ａ第2a類と共通する。口縁部文様帯には隆沈線による有棘横位渦巻文、胴部文様帯には沈線による曲流渦巻文が描かれている。２は深鉢Ｃ第2a_1類と共通している。口縁部文様帯には隆沈線による横位渦巻文、胴部文様帯には沈線による大単位連結の有棘曲流渦巻文が描かれている。４も深鉢Ｃ第2a類と共通するが、胴部は地文(斜行縄文)帯となっている。口縁部文様帯は隆沈線による溝状文(横位渦巻文の端部渦が省略されたもの)である。６は浅鉢Ｂ第２類と共通している。口唇部文様帯は隆沈線による横位渦巻文で、胴部は無文帯となっている。５は詳細不明の浅鉢である。



第101図　大木囲貝塚出土土器

以上、１～４・６の深鉢・浅鉢における口縁部･口唇部文様帯の隆沈線は、１が隆線と沈線が完全に一体化していないもので、部分的に沈線が省略されている。２・６の隆沈線は、隆線部分の断面形が正方形状のものである（６の浅鉢は実見したが、原図に加筆しなかった)。胴部文様帯の沈線は、１・２とも深く鋭い。地文は１･２ともＬＲ縄文で、文様が描かれる前段階に施文されている。施文方向は口縁部が横、胴部が縦である。

大松沢貝塚出土土器

第102～104図が大松沢貝塚出土の大木8b式土器である。深鉢が16点、浅鉢が９点である。第102図１～４は深鉢Ａ第2a類と共通する。口縁部文様帯には隆流線による(有棘)横位渦巻文が描かれている。この(有棘)横位渦巻文には非連結のもの（４）と、大単位連結のもの(１～３)があるが、小単位連結のものはみられない。胴部には文様帯をもつもの（１・２・４）と地文帯のもの（３）があり、前者には沈線による非連結曲流渦巻文（１・２）か、縦位の曲折状渦巻文（４）が描かれている。

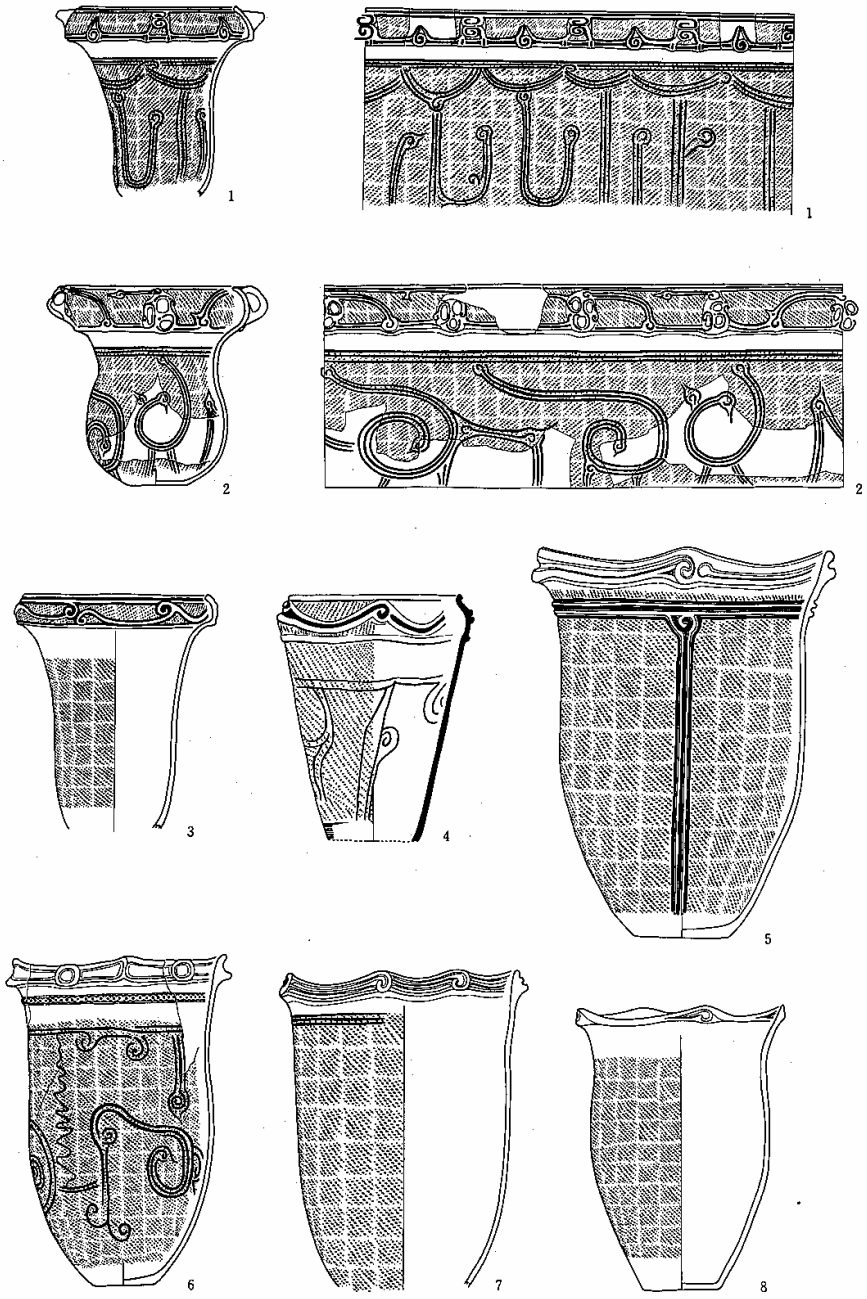
第102図５～８は深鉢Ｃ第2a_1･2b類と共通する。口縁部文様帯には隆線および隆沈線による横位渦巻文、変形渦巻文（円文の横位連結）が描かれている。胴部には文様帯をもつもの（５～７）と地文帯のもの（８）がある。前者には沈線による非連結曲流渦巻文（６）や簡単な横位線文（７）のものと、隆沈線による縦位下垂渦巻文（５）の描かれるものがある。

第103図５は深鉢Ｄ第1ａ類と共通する。口唇部文様帯には隆沈線による変形横位渦巻文(端部渦巻が省略されたもの)、胴部文様帯には沈線による下垂線文が描かれている。

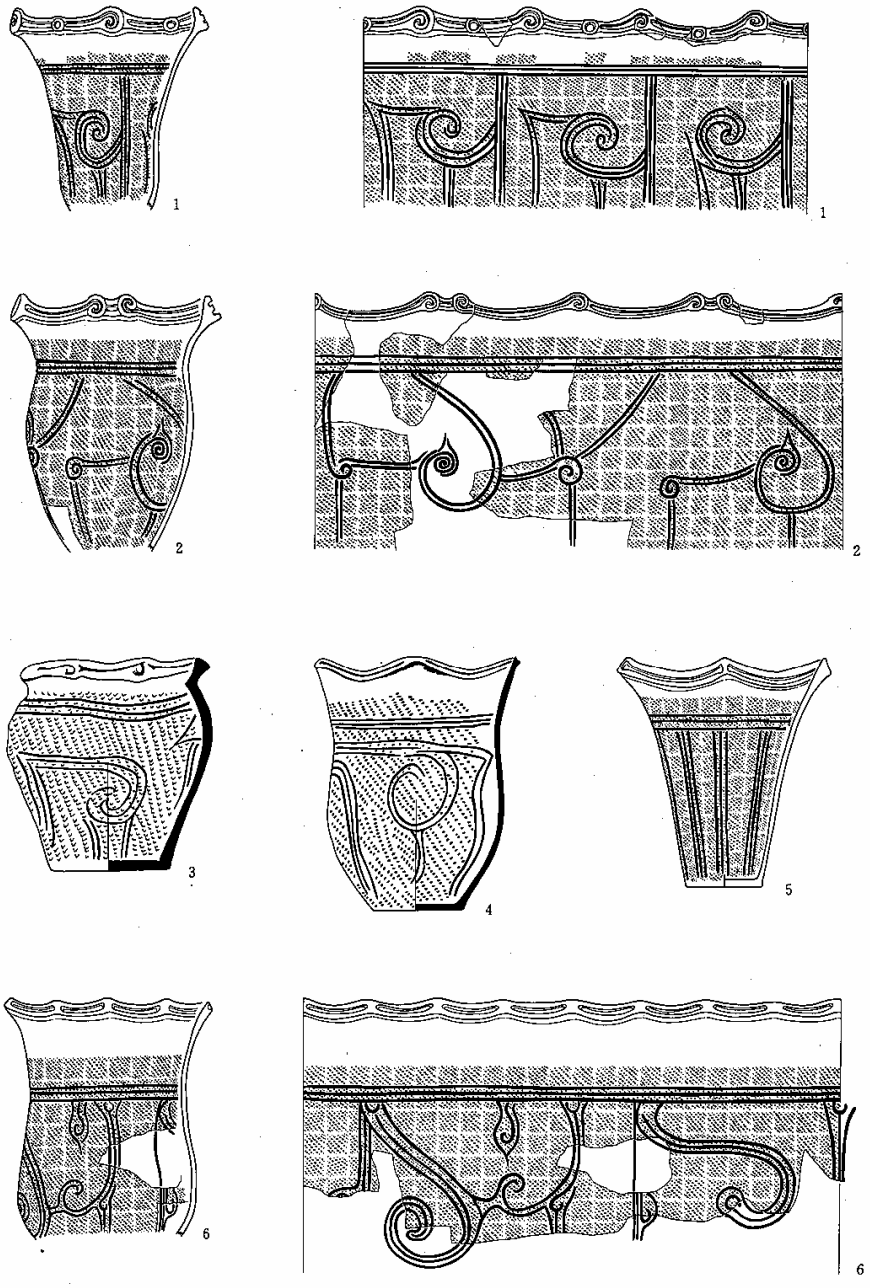
第103図１～４・６は深鉢Ｄ第1ｂ類と共通する。口唇部文様帯には隆沈線による横位渦巻文･変形横位渦巻文(端部渦巻が省略されたもの)、胴部文様帯には沈線による曲流渦巻文･縦位曲折状渦巻文が描かれている。１は非連結の縦位曲折状渦巻文、２・６は大単位連結の曲流渦巻文である。３･４は実見していないが、原図から両者のいずれかに含まれるものと推定される。このように、１～４・６には明らかな小単位連結の曲流渦巻文・曲折状渦巻文は含まれていない。

第104図１・２は深鉢Ｄ第２類と器形・文様帯配置の点で共通するが、胴部文様において異なる。すなわち、１・２の口縁部は無文帯であるが、胴部には大単位連結の有棘曲流渦巻文が描かれている。深鉢Ｄ第２類の有棘曲流渦巻文が小単位で連結しているのとは相違する。

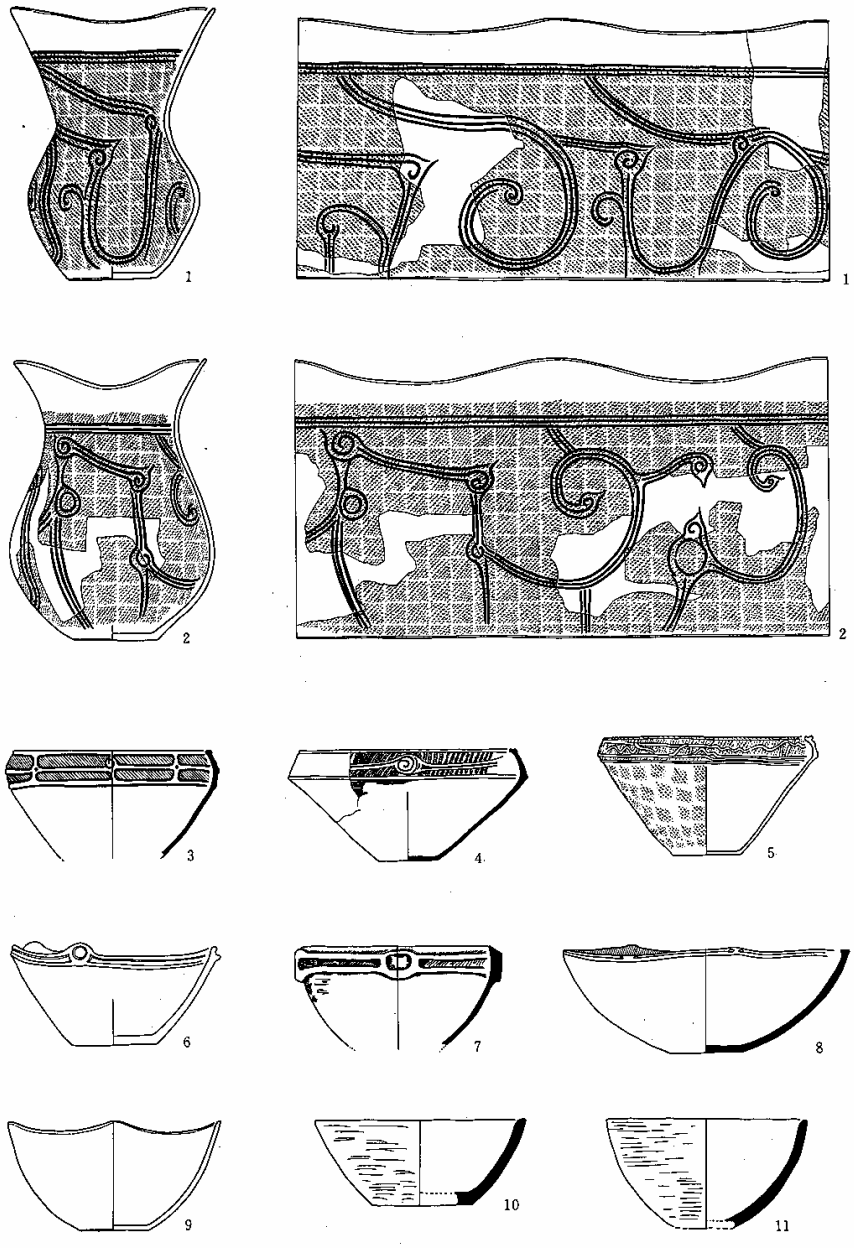
第104図３～11は浅鉢である。４は実見していないので正確は期し難いが、器形・文様帯配置･口縁部文様(非連結もしくは大単位連結の横位渦巻文)などから、浅鉢Ａ第1ａ類と共通している。８は浅鉢Ｂ第2類と共通している（この資料は加筆していないが実見した)。口唇部文様帯に隆沈線による横位渦巻文が描かれている。９は浅鉢Ｂ第３類と共通している。



第102図　大松沢貝塚出土土器その１



第103図　大松沢貝塚出土土器その２



第104図　大松沢貝塚出土土器その３

以上の深鉢・浅鉢における隆線には、全面に丁寧な研磨が加えられた彫りの深いもの（第102図６・８）と、軽い研磨が加えられただけで貼り付けられているもの（第104図５）がある。隆沈線には隆線と沈線が完全に一体化せず、一部沈線が省略されているもの（第102図３・４）と、隆線部分が丁寧に研磨されその断面形が正方形状をしているもの（第102図１・２・５・７、第103図１～６）がある。沈線はいずれも深く鋭い。地文にはＬＲ縄文（第102図１の口縁部・３・５～７、第103図１・２・５・６、第104図１・５）、ＲＬ縄文（第102図１の胴部・２）、ＲＬＲ縄文（第104図２）があり、いずれも隆線・隆沈線によって文様が描かれる前段階に施文かれている。施文方向は口縁部が横、胴部が縦である。

第Ⅱ群土器と大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器の関係

前項において、第Ⅱ群土器と大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器との比較を行なった。その結果を整理すると次のようになる。

Aグループ：大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と共通するもの
深鉢Ａ第１類、第2a類、深鉢Ｃ第2ａ$_1$類・第2ｂ$_1$類、深鉢Ｄ第1ａ類・第1ｂ類深鉢Ａ第1ａ類・浅鉢Ｂ第２類・第３類

Bグループ：大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と器形・文様帯配置の一点で共通するが、文様細部、文様表現技法等において異なるもの
深鉢Ｄ第２類

これらの中でＡグループとしたものの大部分は、非連結もしくは大単位連結の横位（有棘）渦巻文・縦位曲折状渦巻文などの文様をもつものである。それらの文様を描いている隆沈線は隆線部分の断面が正方形状であるか、立体的で彫りの深いものである。沈線も深く鋭い。これらをA_1グループとする。また、Ａグループとした土器には、深鉢Ｄ第1a類や浅針Ｂ第２類・第３類のように、大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と器形・文様は共通するが、文様表現技法の相違するものも含まれている。すなわち、深鉢Ｄ第1ａ類の隆沈線には、隆線部分の断面が正方形のものと隅丸台形状のものがあり、沈線にも深く鋭いものと、鋭さを欠くものがある。浅鉢Ｂ第2類の隆沈線にも隆線部分の断面が正方形状・隅丸方形状・隅丸台形状のものがある。浅鉢Ｂ第3類は無文であるため、その特徴を適確にとらえ難いものである。これらの土器は、その一部が大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と共通することはまちがいない。しかし、いずれも文様が単純であったり（縦位下垂線文）、極めて限定された文様をもつか（口唇部の横位渦巻文）、無文のものであるため、共通するのか否か、文様表現技法の相違だけでは識別困難である。この点は、深鉢Ｅも同様である。これらの土器をA_2グループとする。第Ⅱ群土器には、A_1・A_2・Ｂグループの土器の他に、これらに含まれない土器がある。これをＣグループとする。

第Ⅱ群土器が、A_1・A_2・B・Cグループの四つの土器群からなることは上述の通りである。しかし、その特徴については大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と直接対比できるものに限られていたため、説明が不充分であった。次に、これらの土器群の特徴を整理して述べることにする。

A_1グループ：非連結・大単位連結文様の土器群

器形には深鉢A・C・D、浅鉢Aがある。口唇部文様は横位渦巻文・溝状文（横位渦巻文の端部渦巻が省略されたもの）、口縁部文様は（有棘）横位渦巻文・下向渦巻文、胴部文様は（有棘）流渦巻文・（有棘）縦位曲折状渦巻文である。隆線は立体的である。隆沈線には、隆線と沈線が完全に一体化していないものと、隆線部分の断面が正方形状のものがある。沈線は深く鋭い。地文にはＬＲ・ＲＬ縄文・ＬＲＬ押圧縄文がある。前者は文様が描かれる前段階に施文され、後者はその後に押圧される。

A_2グループ：単純文様・地文・無文の土器群

器形には深鉢Ｂ・Ｃ・Ｄ、浅鉢Ｂがあり、この他深鉢Ｅ・壜・小把手付・脚台も含める。深鉢は口唇部文様が横位渦巻文、胴部文様が縦位下垂線文である。浅鉢は口唇部文様が横位渦巻文で胴部が無文か、全面無文である。隆沈線には、隆線部分の断面が正方形状・隅丸方形状・隅丸台形状のものがある。沈線には深く鋭いものと、鋭さを欠くものがある。地文にはＬＲ・ＲＬ縄文があり、いずれも文様が描かれる前段階に施文されている。

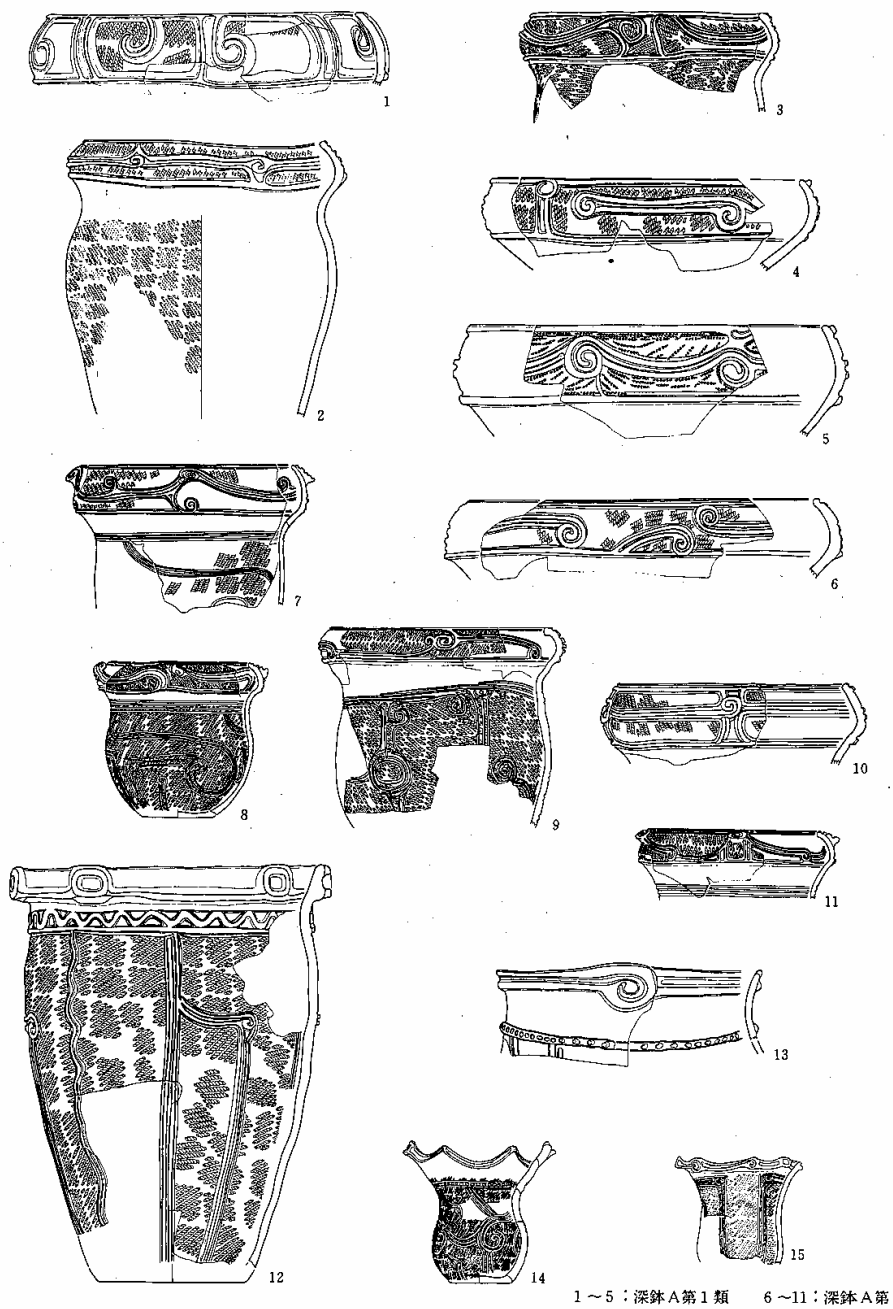
Bグループ：小単位一部連結文様の土器群

器形には深鉢A・B・C・D、壺Bがある。口唇部文様は横位渦巻文・溝状文（横位渦巻文の端部渦巻が省略されたもの）、口縁部文様は（有棘）横位渦巻文、口縁～胴部文様と胴部文様は（有棘）曲流渦巻文である。隆沈線には、隆線部分の断面が正方形状・長方形状・台形状・隅丸台形状のものがある。沈線は深いが、鋭さを欠いている。地文にはＬＲ・ＲＬ・ＲＬＲ縄文があり、いずれも文様が描かれる前段階に施文されている。

Cグループ：小単位各部連結文様の土器群

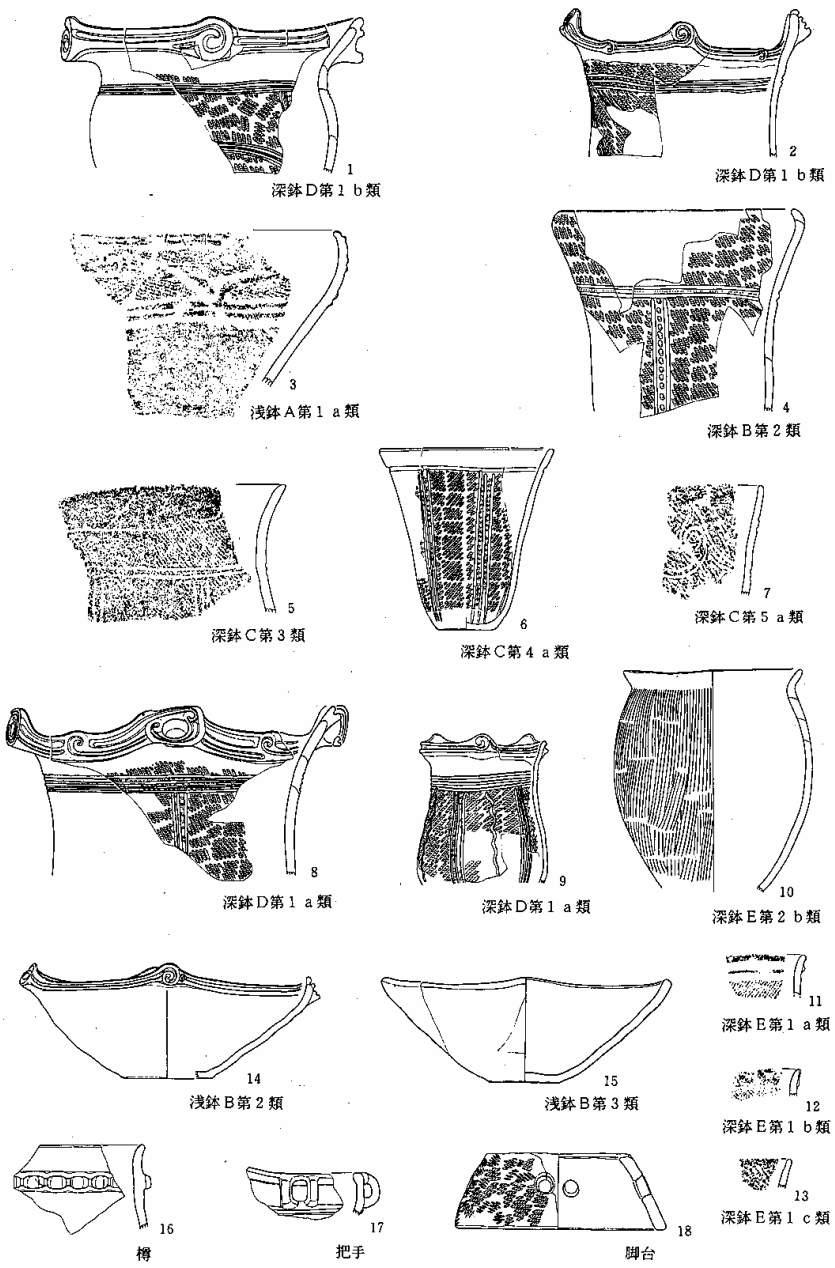
器形には深鉢A・B・C・D、浅鉢Ａ・Ｂ、壺Aがある。口縁部文様は横位渦巻文、口縁～胴部・胴部文様は（有棘）曲流渦巻文である。これらの渦巻文が連結した部分は不定形な区画状になっている。隆沈線には、隆線部分の断面が正方形状・長方形状・隅丸方形状・隅丸長方形状・隅丸台形状・隅丸三角形状のものがある。沈線には、深いが鋭さを欠いているものと、浅いものがある。地文にはＬＲ・ＲＬ・ＬＲＬ・ＲＬＲ縄文・Ｌｒ・Ｒℓ 撚糸文・櫛目状条線文・矢羽根状沈線文・縦位沈線文がある。これらの地文は文様が描かれる前段階に施文されるものと、その後に充填されるものがある。

A_1・A_2・B・Cグループの土器の特徴は以上の通りである。第105～110図第６表に各グルー

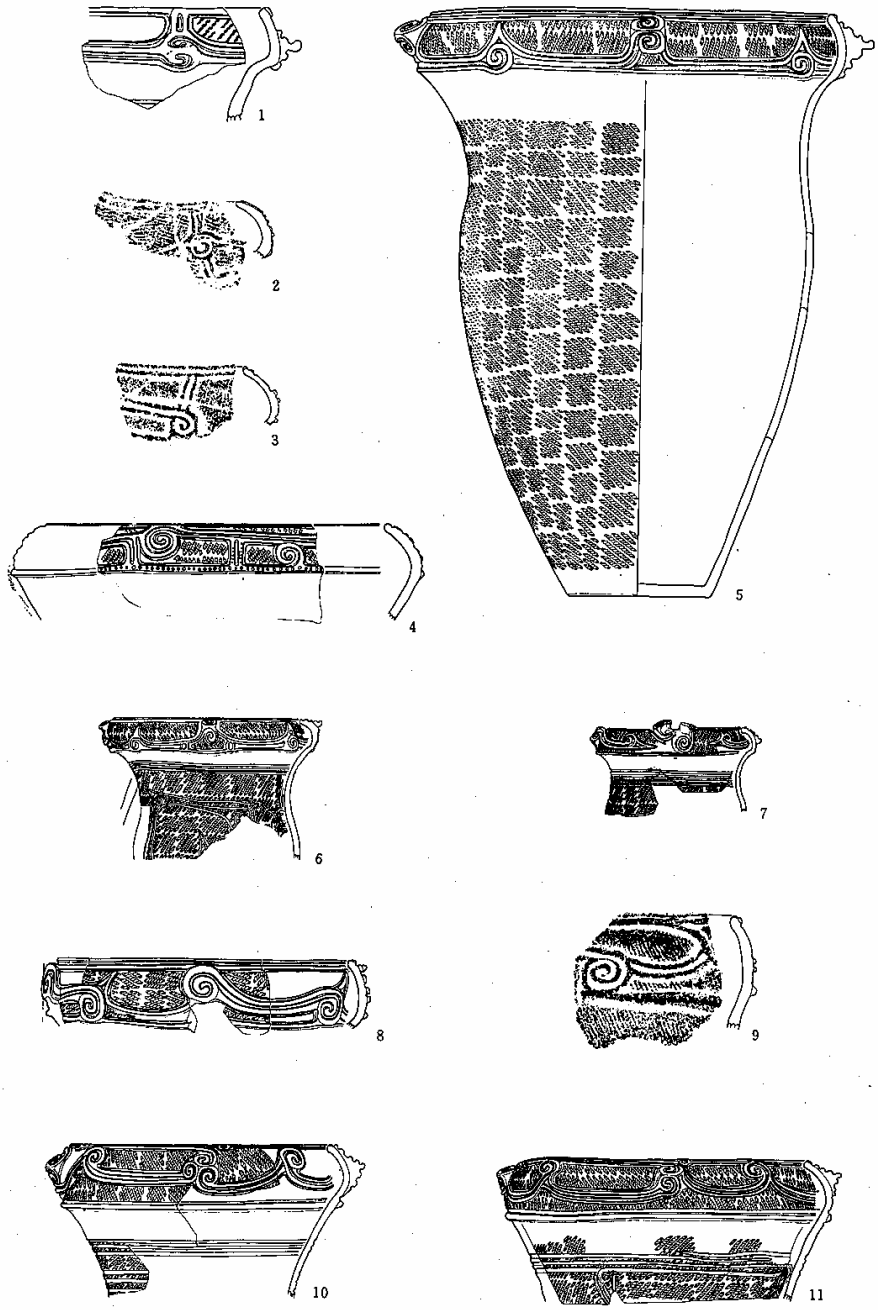


第105図　A，グループの土器

1～5：深鉢A第1類　6～11：深鉢A第2a類
12：深鉢C第2b，類　13：深鉢C第2a，類
14～15：深鉢D第1b類

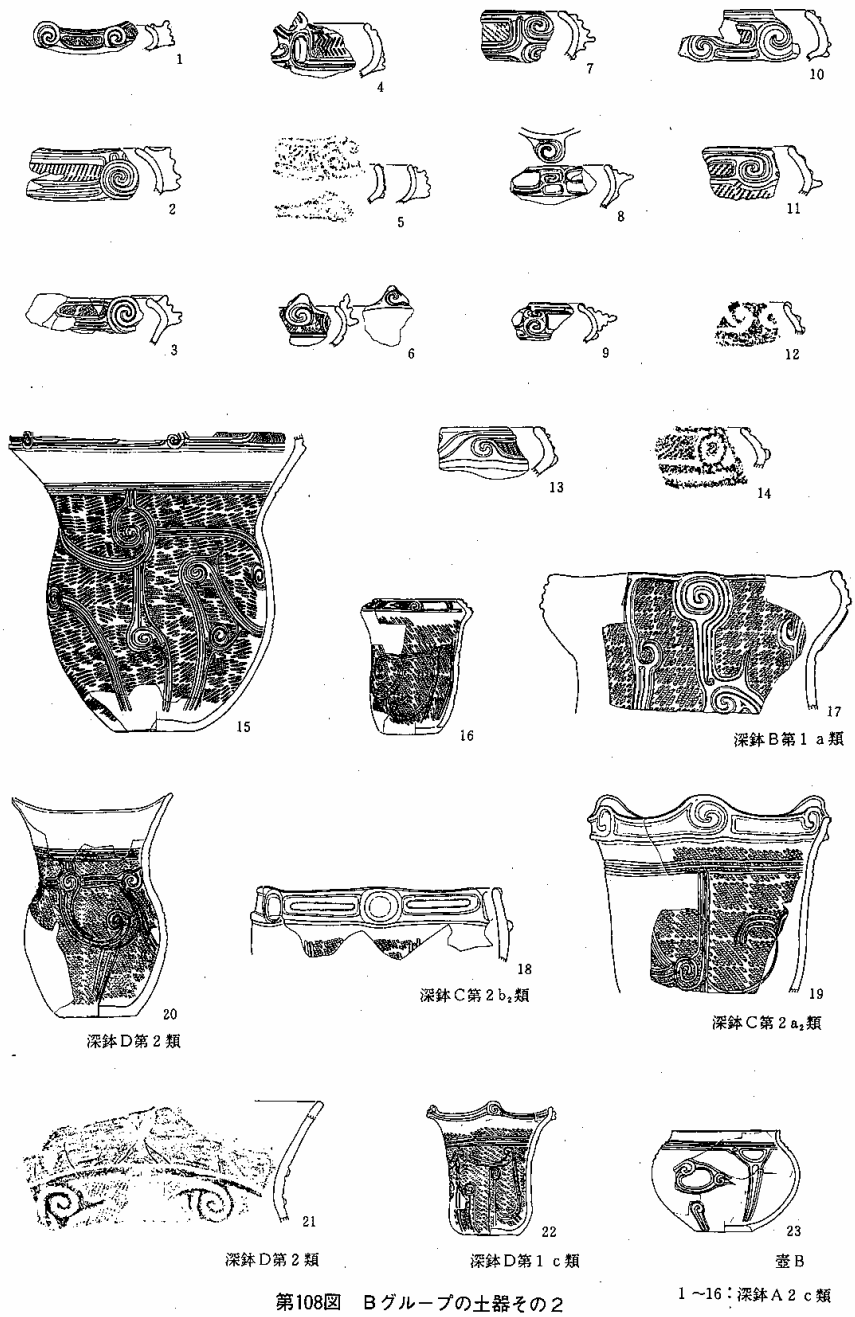


第106図　A_1（1～3）　A_2（4～18）グループの土器



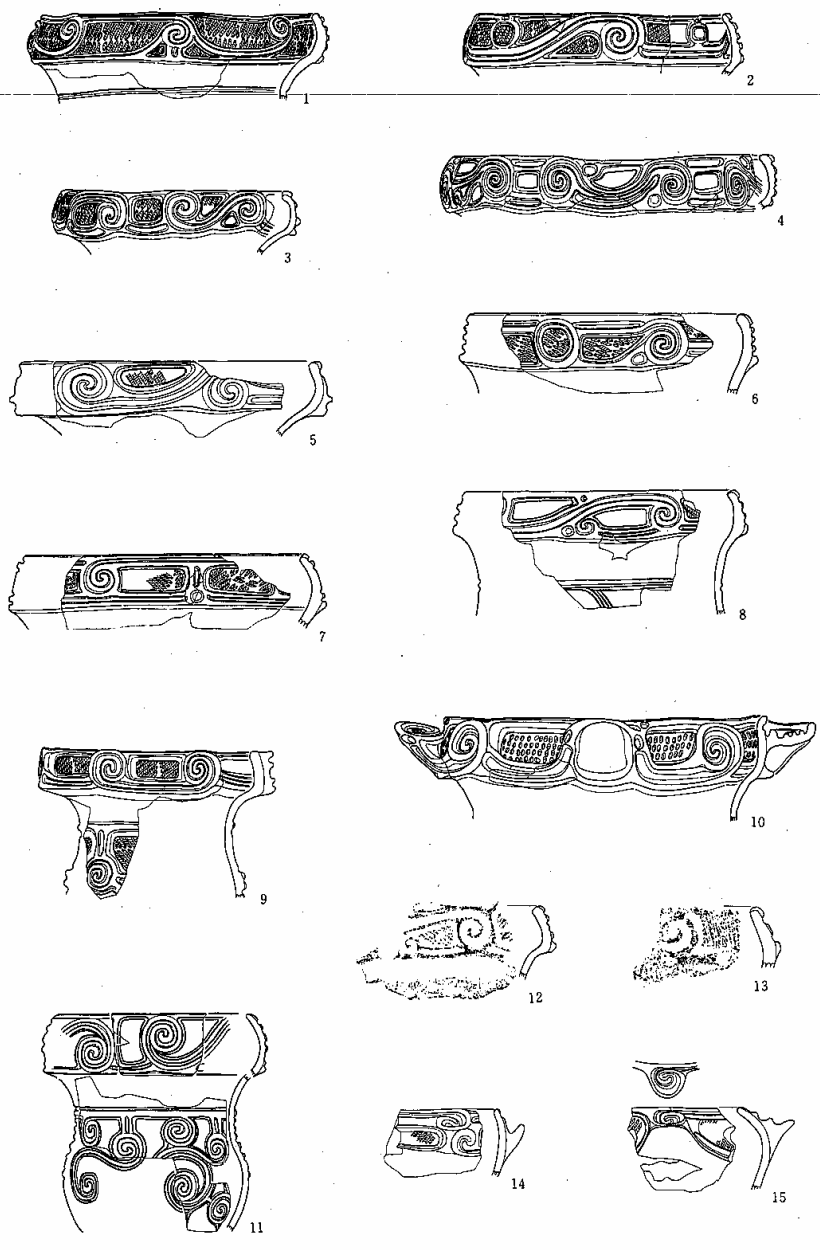
1～4・7：深鉢A第2b$_1$類
5・6・8：深鉢A第2b$_2$類
9～11：深鉢A第2b$_3$類

第107図　Bグループの土器その1



第108図　Bグループの土器その2

1～16：深鉢A2 c類



1～15：深鉢Ａ第３類

第109図　Ｃグループの土器その１

第110図　Cグループの土器その2

プに属する土器を分類ごとに示した。なお、この中で深鉢D第２類は胴部を破損した資料が多いため、Bグループに属することが明らかなものは、第43－K区第５層出土の２点に過ぎない。その他大部分の資料はA_1・B・Cいずれのグループに属するか不明のため、A_2グループに含めておくことにする。

第II群土器の出土状況

第Ⅱ群土器がまとまって出土したのは基本層位第Ⅲ層である。第Ⅲ層は部分的に木炭を含む。黒褐色土層で、その上層の第Ⅱ層（暗褐色土層）や下層の第Ⅳ層（極暗褐色土層）とは明らかに異なる層である。しかし、この第Ⅲ層は調査区全体において必ずしも一様ではなく、地区によっては途切れたり、また数層に細分される部分もある（A・B・C・D層）。この中で、遺物が集中して発見されたのは第ⅢB層で、限られた時期に廃棄された土器群のあり方を知ることができる。第ⅢD層は、あまり遺物量は多くないが、第ⅢB層との層位関係が明らか（下層）なので、第ⅢB層における土器群のあり方と比較することによって、細分された層における土器群の変化の有無を知る上で重要なものと考えられる。

調査区の中で、第ⅢB層に比定できるのは、第42－K・L区第７層と第43－J・K区第５層である。層名が第42区では第７層、第43区では第５層となっているが、これは発掘時の命名によるもので、実際には同一の連続した層である。図版２－上の写真は第42―K・L区第７層における遺物の出土状況を示したもので、土器を敷きならべたように面をなして出土している。第42－K区第７層では、それが特に顕著である。このような出土状況は、層の堆積した限られた時期に土器が連続して廃棄され、層の二次的な移動が行なわれず原位置のまま保存されてい

第６表　第Ⅱ群土器におけるA_1・A_2・B・Cグループ

A_1グループ	A_2グループ	Bグループ	Cグループ
深鉢A　第１類	深鉢B　第２類	深鉢A　第２b類	深鉢A　第３類
第２a類	深鉢C　第３類	第２c類	深鉢B　第１b類
深鉢C　第２a類	第４a類	深鉢B　第１a類	深鉢C　第１類
第２b_1類	第５a類	深鉢C　第２a_2類	第２a_3類
深鉢D　第１b類	深鉢D　第１a類	第２b_2類	第４b類
浅鉢A　第１a類	第２類	深鉢D　第１c類	第５b類
	の大部分	第２類	深鉢D　第３類
	深鉢E　第１類	の一部	浅鉢A　第１b類
	第２類	壺　B	第２類
	浅鉢B　第２類		浅鉢B　第１類
	第３類		壺　A
	樽		
	小把手付		
	脚　台		

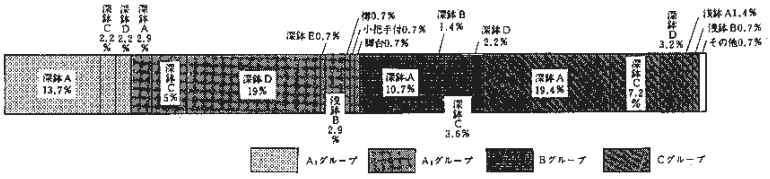
たことを示している。したがって、このような出土状況を示す土器群は大筋として共伴関係にあるとみなすことができる。大筋としての共伴関係としたのは、第ⅢＢ層から第Ⅱ群土器に混入して第Ⅰ群土器が少量出土しているからである。

次に第ⅢＢ層における第Ⅱ群土器のあり方を検討してみたい。第111図は各々の数量を示したものである。第111図を見ると、分類可能土器の総数は141点で、このうちA_1グループの土器は深鉢Aが19点、深鉢Cが３点、深鉢Dが３点である。A_2グループの土器は深鉢Aが４点、深鉢Cが７点、深鉢Dが27点、深鉢Eが１点、浅鉢Bが４点、壺・小把手付・脚台が各々１点である。Ｂグループの土器は深鉢Aが15点、深鉢Bが２点、深鉢Cが５点、深鉢Dが３点である。Ｃグループの土器は深鉢Aが25点、深鉢Cが10点、深鉢Dが３点、浅鉢Aが２点、浅鉢Bが１点である。この他、ＢグループかＣグループのいずれかはっきりしないものが２点ある。このように、A_1・Ｂ・Ｃグループではいずれも深鉢Aが主体で、深鉢Cがやや多く、その他の器形のものは少量となっている。A_2グループではそれに反し、深鉢Dが非常に多い。これは、深鉢D第１類・第２類の大部分が胴部を破損し、A_1・Ｂ・Ｃグループのいずれに属するか不明になったためと考えられる。本来は、いずれも深鉢Aを主体として、深鉢Ｂ・Ｃからなり、その他の器形を少量伴う土器群であったと推定される。

Ａ～Ｃ各グループの数量を比較すると、A_1グループが25点、A_2グループが46点、Ｂグループが25点、Ｃグループが43点で、各々18％・33％・18％・31％となり、その比はA_1：A_2：Ｂ：Ｃ≒１：1.8：１：1.7である。

以上のような点を第ⅢＤ層についても検討してみたい。第ⅢＤ層に比定できるのは、第42－Ｊ・Ｋ区第８層である。第42－Ｊ・Ｋ区第８層からは、合計13点出土しており、その内訳は深鉢A第2ａ類が２点、第2b_1類が２点、第2c_1・c_2類・第３類が各々１点、深鉢C第2ａ類が１点、

深鉢A	第１類	2	深鉢A	第３類	27	深鉢C	b_1類	0	深鉢D	c類	1	浅鉢B	第２類	3
	第1or２類	1	深鉢B	第１類	2		b_2類	1		第２類	15		第３類	1
	第２類	2		a類	2		第３類	2		第３類	3	壺	A	0
	a類	17		b類	0		第４a類	1	深鉢E	第1a類	1		B	0
	aorb類	1		第２類	0		b類	1		b類	0	樽		1
	b_1類	4	深鉢C	第１類	1		第５a類	3		第２類	0	小把手付		1
	b_2類	4		第２a類	1		b類	6	浅鉢A	第1a類	0	脚台		1
	b_3類	0		a_1類	3	深鉢D	第１類	13		第1b類	0			
	c_1類	4		a_2類	4		a類	1		第２類	2			
	c_2類	3		a_3類	2		b類	3	浅鉢B	第１類	1			

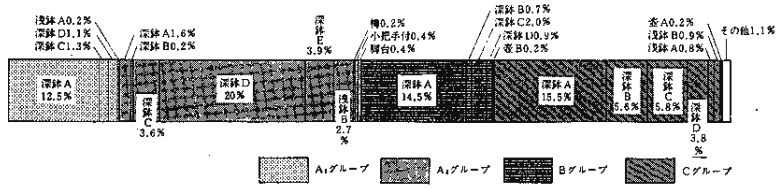


第111図　基本層位第ⅢＢ層における出土状況

深鉢D第１類が３点、第２・第３類が各々１点で、A_1グループが２点、A_2グループが５点、Bグループが４点、Cグループが２点となる。第ⅢD層の土器は全体量が少ないため、第ⅢB層の土器との比較の上でかならずしも正確と言えない面も含んでいるが、土器群の組成に大きなちがいはみられず、層位による時期的な変化は見い出し難い。

最後に、調査区全体における土器組成を検討してみたい。調査区全体における第Ⅲ群土器の出土状況を示したのが第112図である。第Ⅱ群土器の総数は441点で、このうちA_1グループの土器は深鉢Aが56点、深鉢Cが６点、深鉢Dが５点、浅鉢Aが２点である。A_2グループの土器は深鉢Aが７点、深鉢Bが１点、深鉢Cが17点、深鉢Dが87点、深鉢Eが19点、浅鉢Eが12点、壇が１点、小把手付が２点、脚台が２点である。Bグループの土器は深鉢Aが65点、深鉢Bが３点、深鉢Cが９点、深鉢Dが４点、壺Bが１点である。Cグループの土器は深鉢Aが69点、深鉢Bが25点、深鉢Cが26点、深鉢Dが17点、浅鉢Aが４点、浅鉢Bが４点、壺Aが１点である。この他、BグループかCグループのいずれかはっきりしないものが３点ある。これらを各グループごとにみると、A_1グループが68点、A_2グループが148点、Bグループが82点、Cグループが146点で、各々15%・33%・18%・33%となり、その比はA_1：A_2：B：C＝１：2.2：1.2：2.1である。このように、調査区全体における土器組成も基本層位第ⅢB層における土器組成と大きなちがいはない。この中で、調査区全体では存在するが、基本層位第ⅢB層では出土しなかった土器がある。それは深鉢B第１b類・深鉢E第１c類・第２類・浅鉢A第１a・b類・壺A・壺Bであるが、これらの土器は調査区全体でもそれぞれ25点・１点・７点・１点・２点・１点・１点で、総数441点の中でみれば極めて少数で、深鉢B第１b類の25点を除けば、それぞれ１%前後以下に過ぎない。したがって少数共伴であるため、基本層位第ⅢB層で発見されなかった可能性が大きい。深鉢B第１b類も約６%に過ぎず、少数共伴のためと考えられ

深鉢A	第１類	6	深鉢A	c₂類	19	深鉢C	b₁類	2	深鉢D	b類	5	浅鉢A	第２類	2
	第1or2類	1		第３類	69		b₂類	2		c類	2	浅鉢B	第１類	4
	第２類	3	深鉢B	第１類	5		第３類	3		第２類	31		第２類	9
	a類	50		a類	3		第４類	2		第３類	17		第３類	3
	aorb類	3		b類	25		a類	2	深鉢E	第1a類	1	壺A		1
	b類	2		第２類	1		b類	3		b類	9	壺B		1
	b₁類	13	深鉢C	第１類	2		第５類	2		c類	1	樽		1
	b₂類	10		第2a類	2		a類	6		第2a類	7	小把手付		2
	b₃類	4		a₁類	4		b類	18		b類	1	脚台		2
	c類	2		a₂類	7	深鉢D	第１類	55	浅鉢A	第1a類	2			
	c₁類	15		a₃類	3		a類	2		b類	2			



第112図　調査区全体における出土状況

第7表　調査区における第Ⅱ群土器の出土状況個体数

地区層位		29		31			32	35			36		37				38				39							40													41									42									43							46	47	48		49		50	51				X	第1埋土器	第2埋土器	計
		O		K		L	K	J	K		K		K			L	J	K			J			K			X	H	I	J						K					J				K					I	J		K				L	K・L	J			K			L	Q	Q	P	Q	Q		R	R		S	X	X			
分類		2	4	5	6	4	6	7	0	5	5	8	7	8	9	4	6	7	8	9	5	8	x	6	7	8	7	7	7	5	6	7	8	9	x	3	4	5	7	8	1	7	8	x	5	7	8	9	x	7	7	8	5	6	7	8	7	7	5	6	7	4	5	6	5	1~4	4	3	P_1	3	x	1	1	2	2	1	x			
深鉢A	第1類											1																												1			1				1										}1 1						1																	6 }+1
	第2類																																													1									1										1															3
	a類												1							1		3		2	2								1	1			}1		3			4				}1 4	1				1	1			6	2	}1 2						9	2						1	1						2			50 }+3
	b類																																													1		1																																2
	b_1類		2																																				1	1			1			1					1					2			1				3																	13
	b_2類			1																																				2											1	1			3								1	1																10
	b_3類																																													1	2				1																													4
	c類																											1																																																	1			2
	c_1類											1										1																				1						2			2	1				1		1					2		1									1			1			15
	c_2類				1			1			1							1														1										3	1			1					1			1	2	1	1					1							1										1	19
	第3類	1				1		1			1		1		1				1			2	1	1	3			1								1				1		1	1			7	1	5			1		3	1	4	1	2	1	4			1	15		1	1											2			69
深鉢B	第1類																																									2				1																	2																	5
	a類																																																						1								1														1			3
	b類							1																	2	1		1			1										1	1	3	1		1		3			1											1								1		1			2	1	1	1		25
	第2類																																																																												1			1
深鉢C	第1類																																													1																	1																	2
	第2類																																																																														
	a類																																																							1							1																	2
	a_1類													1																																									2								1																	4
	a_2類																															1			1							1															1						3																	7
	a_3類																																														1										1						1																	3
	b_1類																																									1				1																																				2
	b_2類																																						1																1																											2
	第3類																																																													1	2																		3
	第4類																																									1																																			1			2
	a類																																																		1											1																	2
	b類																			1									1																																		1																	3
	第5類																														1																				1																													2
	a類																							1																								1							2				1					1																6
	b類												1											1	2														1	1		1						1			3								1				5														1			18
深鉢D	第1類								1	1						1	2								1		1					2							4	1		3	1	1		3	3	1	1	1	3	2	2		1	3			1	1		1	10		1									1			1			55
	a類																																														1																1																	2
	b類																																														1								1								2	1																5
	c類																																														1																1																	2
	第2類					1	1						1								1																									1	1				5				1	1			2		1		12	1				1						1						31
	第3類																								1					1		1						1								2					5		1		1	1			1	1					1															17
深鉢E	第1類																																																																															
	a類																																																														1																	1
	b類																								1																	2	1				1															1					1						1	1						9
	c類																																																																								1							1
	第2類																									1																1																															2	2				1		7
浅鉢A	第1類																																																																															
	a類																															1																																																1
	b類																																									1										1																												2
	第2類																																																						1								1																	2
浅鉢B	第1類																								1																				1							1					1																							4
	第2類																															1	1						1												2				1				2																		1			9
	第3類																																																		2				1																										3
壺A																																																																												1			1
壺B																																																																1																1
樽																																																																	1															1
小把手付																																															1																1																	2
脚台																																																							1									1																2
計		1	2	1	1	2	1	3	1	1	2	2	4	1	1	1	2	1	1	2	1	6	1	5	13	2	1	3	1	1	2	7	2	1	1	1	1	1	11	7	1	23	9	2	1	27	15	14	1	1	31	7	6	2	30	13	11	2	13	2	1	6	79	8	6	1	1	1	1	2	1	1	4	6	2	1	14	2	1	447

る。ただ、この深鉢Ｂ第１ｂ類は出土地区をみると第41－Ｊ・Ｋ区にやや集中している傾向がみられることから、今後の検討課題としての含みをもたせておきたい。

第Ⅱ群土器の編年的位置－その１－

第Ⅱ群土器は、基本層位第ⅢＢ層における出土状況の検討によって、大筋として共伴関係にあることを指摘した。大筋として共伴関係にあるとしたのは、基本層位第ⅢＢ層には、第Ⅱ群土器の他に第Ⅰ群土器が少量含まれていたからである。出土状況だけから判断すれば、第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器は共伴関係にあり、同じ時期のものになってしまう。確かに、両者の土器群が基本層位第ⅢＢ層堆積時に廃棄もしくは流入したものであることにまちがいはない。しかし、第Ⅰ群土器の製作・使用された時期が、第Ⅱ群土器の時期よりも古い段階であることは、これまでの研究で明らかになっており、そのことは第Ⅰ群土器の項で述べた通りである。このような研究成果を踏えれば、基本層位第ⅢＢ層における土器の出土状況は、第Ⅱ群土器に第Ⅰ群土器が混入したに過ぎないことを示している。次に問題となるのは、第Ⅱ群土器として一括したものが、果して同じ時期のものなのかということである。

第Ⅱ群土器に含まれる問題：問題の所在において、「第Ⅱ群土器については、すべて同一時期のものなのか、それともその中に一部古い段階のものが混入しているのか、さらには時期の異なる土器群が混在しているのかという問題が含まれている。」と述べた。その点、基本層位第ⅢＢ層における土器の出土状況の検討によって、第三の場合（混在）の可能性は少なくなった。問題は第一の場合（同一時期）か、第二の場合（一部混入）なのかに絞られてくる。

第一の場合：第Ⅱ群土器はA_1・A_2・Ｂ・Ｃグループの土器からなっている。これを第一の立場で見れば、第Ⅱ群土器はすべて同一時期の土器群を構成するもので、A_1グループの土器と共通する大木囲貝塚・大松沢貝塚の資料は、偶然Ｂ・Ｃグループの土器が欠落したものに過ぎないという結論に到達してしまう。だが、既に検討したように、A_1グループ･大木囲貝塚・大松沢貝塚の土器には、深鉢Ａ・深鉢Ｃ・深鉢Ｄ・浅鉢など各種の器形のものがみられ、まとまりをもつ一群の土器として充分な内容を備えており、文様の相違するＢ・Ｃグループの土器が偶然欠落したものとはみなし難い。

第二の場合：第二の立場でみれば、第Ⅱ群土器の中で主体を占めるＢ・Ｃグループの土器に時期的に古いA_1グループの土器が少量混入したものという結論に到達する。このことは、Ｂ・Ｃグループの土器に、深鉢Ａ・深鉢Ｂ・深鉢Ｃ・深鉢Ｄ・浅鉢など各種の器形がみられるので、器形の組成という点で不備はない。A_1グループの土器が混入か否かについては、さらに出土量と文様変遷の二つの側面から検討を加えておきたい。

基本層位第ⅢＢ層で出土した第Ⅱ群土器は141点で、A_1グループが25点、A_2グループが46点、

Ｂグループが25点、Ｃグループが43点であった。ここでA_2グループは除き、A_1グループとＢ・Ｃグループの出土量を比較すると、A_1：Ｂ・Ｃ≒１：2.7で、Ｂ・Ｃグループが全体の3/4弱を占め、A_1グループは1/4強となる。A_1グループが1/4強というのは、混入としてやや多いようにも感じられるが、同じ基本層位第Ⅲ Ｂ層に混入していた大木8ａ式土器が14点あることを考えると、A_1グループはその２倍弱に過ぎない。また、調査区全体では既に述べたように大木8ａ式土器は108点あり、A_1グループの68点よりも多い。さらに、大木8ａ式土器も細分される可能性があり、その中で大木8b式直前に位置づけられる長者原貝塚第１号住居跡出土土器に対比されるものに限ってみても48点あり、この数量はA_1グループより僅かに少ないだけである。したがって、土器組成としてまとまりをもつA_1グループの土器群が大木囲貝塚・大松沢貝塚に存在することを考えると、基本層位第Ⅲ Ｂ層ではＢ・Ｃグループからなる土器群にA_1グループの土器群が混入したとする上で、さして大きな矛盾を感じさせるものではない。

次に文様を検討してみたい。A_1グループ・大木囲貝塚・大松沢貝塚の土器にみられる文様は口縁部が横位渦巻文、口縁～胴部と胴部が曲流渦巻文・縦位曲折状渦巻文を基本とするもので文様単位が非連結もしくは大単位連結である。この種の文様は、大木8ａ式土器でも新しい段階と考えられる長者原貝塚第１号住居跡下層出土土器（阿部・遊佐：1978・３　丹羽茂：1981・11）からの変遷がうかがわれるものである。すなわち、長者原貝塚第１号住居跡出土土器には、口縁部に横位曲折文・横位渦巻曲折文、胴部に曲折文・渦巻曲折文のみられる土器が存在する。これらの文様から、横位渦巻文・縦位曲折状渦巻文・曲流渦巻文への変遷を想定するのは容易である。また、文様表現技法についても長者原貝塚第１号住居跡下層出土土器には、粘土紐貼り付けによる隆線の他に、隆線を軽く研磨したり一部に沈線を沿わせているものがみられる。この点、A_1グループ・大木囲貝塚・大松沢貝塚の土器にも一部沈線の省略される隆沈線があり、両者の関係をうかがわせる。

Ｃグループの土器にみられる文様は、口縁部が横位渦巻文、口縁～胴部と胴部が曲流渦巻文であることはA_1グループの土器と同じであるが、文様が小単位および各部分で連結し、結果的に不規則ながら区画状の部分を生じさせている点で相違する。このような区画状部分の誕生は、大木９式土器に一般的にみられる渦巻楕円文・楕円文・「∩」文を主体とする区画（囲形）文様（芳賀良光：1968・12　加藤・後藤：1975・３　宮教委：1978・３　丹羽茂：1981・11）を成立させる前段階とも言うべきものであろう。文様表現技法においても、隆沈線の隆線部分の断面が隅丸方形状・隅丸台形状のものが主体を占める中に隅丸正三角形状のものも一部に見られる。この断面隅丸三角形状の隆沈線は大木9式において盛行する隆沈線と幾分似ている。また、Ｃグループの土器では一部に充填縄文が出現するが、これも大木9式土器において盛行するものである。

文様の検討によって、A_1グループ・大木囲貝塚・大松沢貝塚の土器は大木8ａ式土器からの変遷、Ｃグループの土器は大木９式への変遷がたどれる土器群であることが明らかとなった。その点、Ｂグループの土器は要素的には両者の間をつなぐ中間的なものである。

基本層位第ⅢB層出土の第Ⅱ群土器に対する結論：以上で述べた、出土状況・土器組成・文様の検討結果から、基本層位第ⅢＢ層における第Ⅱ群土器のあり方は、Ｂ・Ｃグループの土器に一部A_1グループの土器が混入したものと理解することができる。また、A_2グループにはＢ・Ｃグループに共伴したものと、混入したものの両名が含まれることになる。

第Ⅱ群土器の編年的位置－その２－

第Ⅱ群Ｂ・Ｃグループ（A_2グループの一部を含む）の土器が、大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器よりも新しい段階の土器群であることを指摘した。次に、このような土器群の存在が、一部の狭い地域に限られるのか、それとも一般的な大木式土器の分布範囲に共通してみられるものなのかを、宮城県桂島貝塚Ｂ地点・福島県塩沢上原第Ⅱ区第４号住居跡・山形県古道遺跡第２号住居跡・岩手県大舘町遺跡ＫＲ102号住居跡出土土器群をとりあげて検討してみたい。

桂島貝塚：宮城県塩釜市桂島字台囲に所在する縄文時代前・中期の遺跡で、松島湾に面した台地北斜面・東斜面・南西斜面に小貝塚が形成されている。昭和38年に南西斜面の貝塚（Ｂ地点）が発掘調査され、多量の土器が出土し、復元されたものだけで100点を越えている（加藤・後藤：1956・4）。器形には、各種の深鉢・浅鉢とそれらに注口部の付されたものなどがある。これらの土器は、調査者の後藤勝彦氏の教示によれば、貝層からその下の黒色土層にかけてまとまって出土しており、出土状況からみて一時期のものでないかという。第113図はその中の代表的な深鉢12点を写真で示したものである。

１・２は深鉢Ａ第２Ｃ類、４は深鉢Ａ第３類、５は深鉢Ｂ第１ｂ類、６～８は深鉢Ｄ第２類９は深鉢Ｃ第５類、10は深鉢Ｄ第１ｃ類、11・12は深鉢Ｄ第３類と共通した特徴をもっている。３は文様が単純であるため、深鉢Ａ第１・２・３類のいずれかはっきりしない。これらの文様は口縁部と口唇部が横位渦巻文（１～４・10）、口縁から胴部と胴部が曲流渦巻文（１・２・５～12）で、文様の小単位が一部（１・２・７・９・10）、もしくは各部で（４～６・８・11・12）連結している。３の胴部文様は単純な下垂渦巻文である。文様を描いている隆沈線は、隆線部分の断面が方形状（10）・台形状（６・11）・隅丸方形状（１～５）・隅丸台形状（12）である。沈線は深いが、大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器程の鋭さはない。地文の大部分はＬＲ縄文とＲＬ縄文で、文様の描かれる前段階に施文されている（１～11）。11はその後、口縁部の一部に刺突文を充填している。12は文様を描いた後、縄文を充填しているものである。

このような土器群は、それぞれA_2グループ（３）・Ｂグループ（１・２・７・９・10）・Ｃ

グループ（４～６・８・11・12）に属するものと考えられる。したがって、桂島貝塚Ｂ地点出土土器はＢ・Ｃグループを主体とした土器群である。また、写真で示した以外の資料も観察したが、同様な傾向がみられた。

塩沢上原遺跡：福島県二本松市大字塩沢字上原に所在する縄文時代中期の集落跡で、昭和46年に発掘調査が行なわれた（目黒・木本他：1972・３　目黒吉明他：1975・３）。第Ⅱ区第４号住居跡の堆積土と炉跡から土器がまとまって出土しており、そのうち４点が図示されている（第114図１～４）。

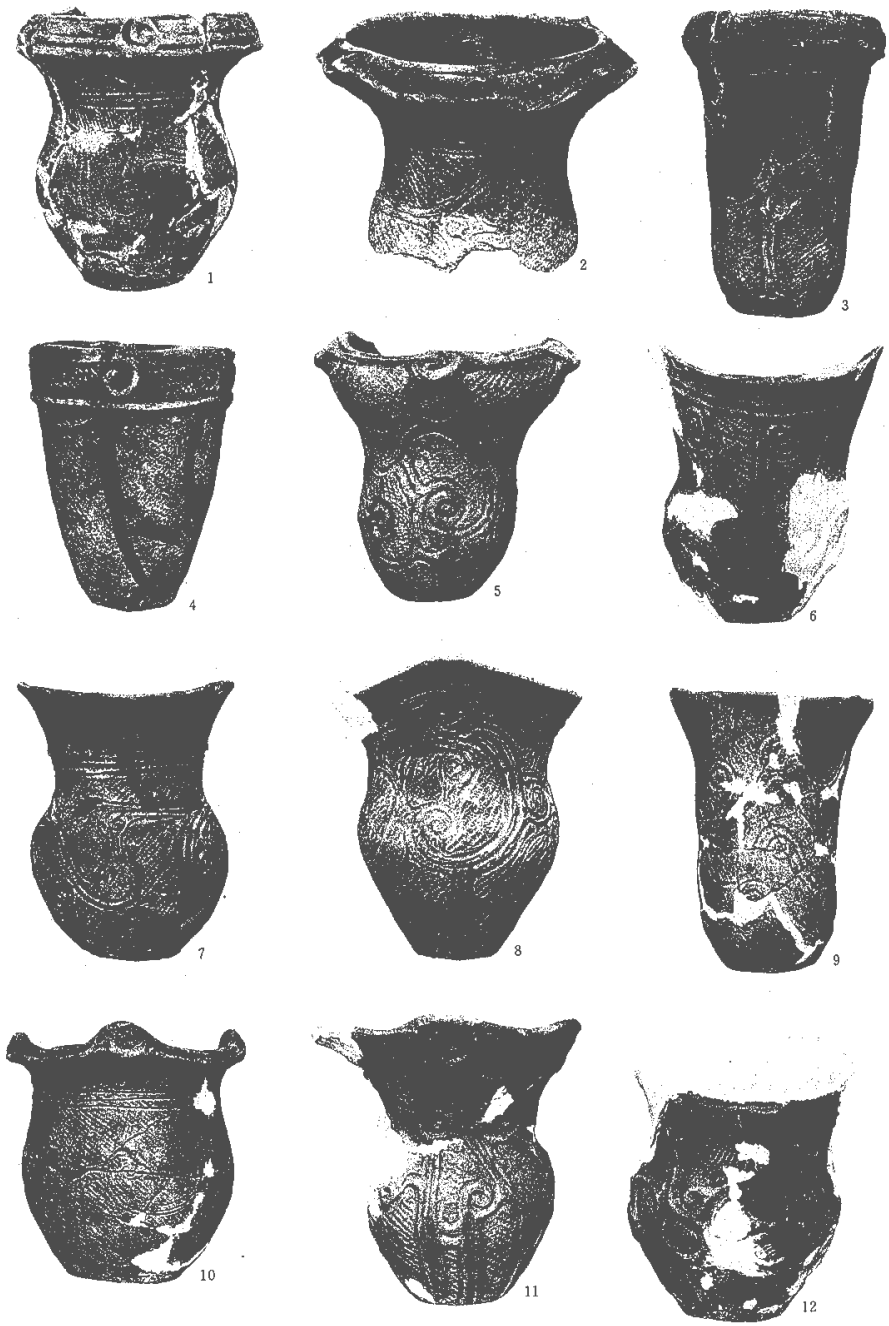
１・３は深鉢Ａ第３類、２は深鉢Ａ第２C_1類と共通する。４は口縁部を欠いているが、深鉢Ａ第２Ｃ類か、深鉢Ｄ第１Ｃ類もしくは深鉢Ｄ第２類と推定されるものである。１～３の口縁部文様は隆沈線による横位渦巻文で、各々の渦巻が口縁部の上・下端と接している。２～４の胴部文様は隆沈線・沈線による横位渦巻文で、文様の各小単位が２・４では連結していないが、３では各部分で連結している。文様を描いている隆沈線は、隆線部分の断面が１・３は隅丸方形状、２は方形状をしている。沈線は、深いが鋭さに欠ける。地文は１がＬＲＬ縄文、２がＲＬＲ縄文、３が刺突文、４がＬＲ縄文で、１・３が文様の描かれた後に充填、２・４が前段階に施文されている。

これらはそれぞれＢグループ（２・４）・Ｃグループ（１・３）に属するもので、塩沢上原遺跡第Ⅱ区第４号住居跡出土土器はＢ・Ｃグループを主体とする土器群と考えることができる。

古道遺跡：山形県村山市大字富並字中山に所在する縄文時代中期の集落跡で、昭和49年に発掘調査が行なわれた（名和・野尻：1977・３　阿部明彦：1978・５）。第２号住居跡の堆積土と床面から土器がまとまって出土しており、そのうち深鉢６点が図示されている（第114図５～10）。

５は深鉢Ａ第２C_1類、６・７は深鉢Ｄ第1c類、10は深鉢Ｃ第１類と共通する。８・９は口縁部を欠いているが、深鉢Ａ第２Ｃ類と推定されるものである。５～７の口縁部・口唇部文様は隆沈線による横位渦巻文で、５の渦巻は口縁部の上・下端と接している。10の口縁部は橋状把手が横に連結されたもので、把手上に隆沈線による渦巻文が描かれている。胴部文様はいずれも隆沈線・沈線による曲流渦巻文で、文様の小単位が一部で連結しているもの（５～９）と各部分で連結しているもの（10）がある。文様を描いている隆沈線・沈線と地文（縄文）は、資料を実見していないのではっきりしないが、写真と実測図から判断すると、次のように推定される。すなわち、隆沈線は隆線部分の断面が５～７は方形状、10は隅丸方形状である。沈線は深い。地文は５がＲＬＲ縄文、6～10がＬＲ縄文で、すべて文様が描かれる前段階に施文されている。

これらは、それぞれＢグループ（５～９）・Ｃグループ（10）に属するもので、古道遺跡第



第113図　宮城県桂島貝塚Ｂ地点出土土器

２号住居跡出土土器もＢ・Ｃグループからなる土器群と考えることができる。

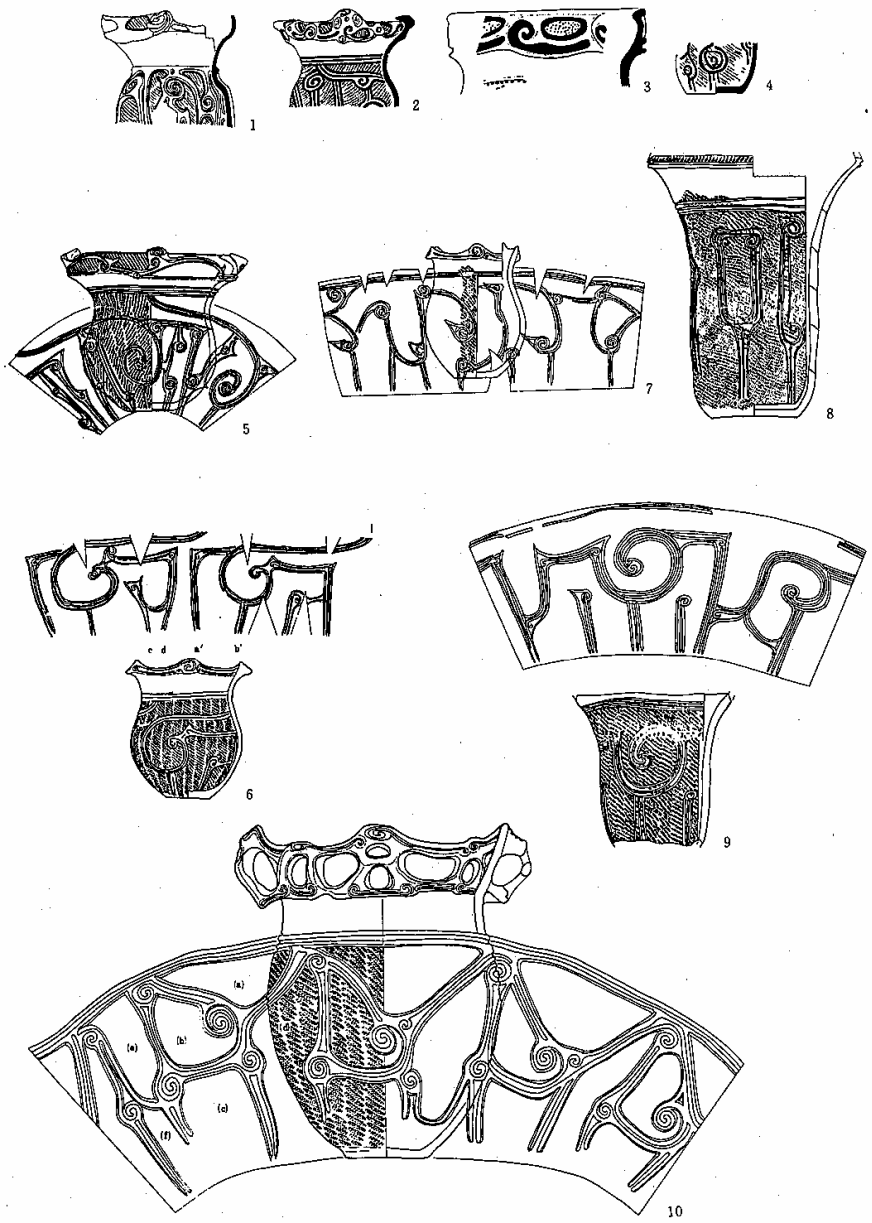
大館町遺跡：岩手県盛岡市大館町に所在する縄文時代中期を中心とした集落跡である。昭和55年に行なわれた発掘調査で、縄文時代中期の竪穴住居跡が11軒発見されている。（八木・千田他：1981・３）。その中で、ＲＡ102竪穴住居跡からまとまりをもつ多量の土器が層位的に出土している。すなわち、Ａ～Ｃ層（上層とする）から第115図に示した土器群、Ｄ層および床面（下層）からそれらより一段階古い土器群が層位的に出土している。この大館町ＲＡ102竪穴住居跡出土土器は、文様の形状や技法などの点で、宮城県のものとやや相違する面もみられるが、基本的な特徴において上層出土土器は勝負沢遺跡、下層出土土器は大松沢貝塚出土土器と共通性がみられる。ここでは上層出土土器について検討してみたい。

上層出土土器は、深鉢12点が全体実測図、破片資料10点が破片実測図および拓影図で示されている。１～３は深鉢Ａ第２ｂ類、８は深鉢Ｃ第2a_2類、９は深鉢Ｃ第2ｂ$_2$類、10・11は深鉢Ｃ第３類、13～15は深鉢Ｄ第２類、16は深鉢Ｄ第１ｃ類、17・18は深鉢Ｄ第1ａ類、20は深鉢Ｅ第1ａ類と共通点がみられる。この他、19～21・22は文様をもたない土器であるため、現段階での比較は困難である。これらの口縁部・口唇部文様は、隆線・隆沈線による横位渦巻文（１～３・８・16）と変形横位渦巻文（９）で、渦巻の各部分が口縁部上・下端と連結されるか（１～３）、接している（８・９・16～18）。胴部文様は下垂線文（２・10・17）・下垂渦巻文（13・18）・曲流渦巻文（１・３・８・９・11・14～16）である。曲流渦巻文は文様の小単位の一部で連結するもの（１・８）と各部分で連結するもの（９・11・16）がある。３・14・15は破損のため文様の全容は不明であるが、小単位一部連結と推定されるものである。曲流渦巻文には１・11などのように縦方向の流れを示すものや、16のように「∽」字状、「Ｃ」字状になるものがある。文様を描いている隆沈線は、隆線部分の断面が方形状か長方形状で、隅丸方形状のものはほとんどみられない。地文はＬＲ縄文・ＲＬ縄文・ＲＬＲ縄文・Ｒ撚糸文などであるが、いずれも文様が描かれる前段階に施文されている。

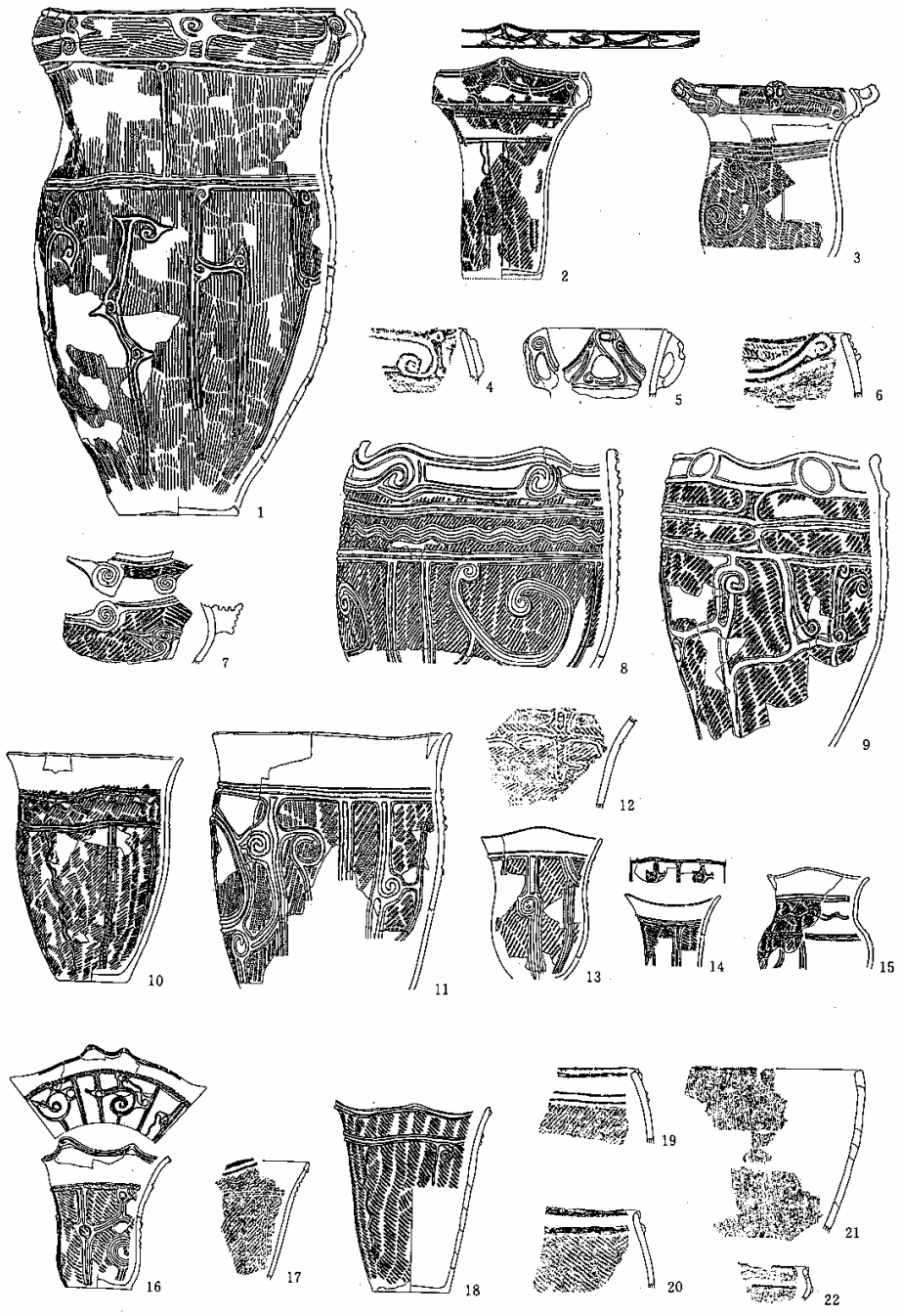
これらはそれぞれA_2グループ（10・13・17・18・19～22）・Ｂグループ（１～３・８・14・15）・Ｃグループ（９・11・16）に属し、特徴の小さいA_2グループを除けば、大館町ＲＡ102竪穴住居跡上層出土土器はＢ・Ｃグループを主体とする土器群と考えられる。また、深鉢Ａ以外の器形を示すものが豊富なこと、隆沈線の版面形態・地文の施文工程などの特徴に勝負沢遺跡と相違する面もみられるが、大筋としては共通するものである。

編年的位置・地域性についての結論と問題点

第Ⅱ群Ｂ・Ｃグループを主体とする土器群の類例を検討した。その結果、このような土器群は宮城県だけでなく、福島県・山形県などにもみられ、東北地方南部一帯に分布することが明らかとなった。したがって、時期的にも地域的にも一定のまとまりをもった土器群とすること



第114図　福島県塩沢上原遺跡第Ⅱ区第４号住居跡（１～４）
山形県古道遺跡第２号住居跡（５～10）出土土器



第115図　岩手県大舘町遺跡出土土器

ができる。また、時期的には、大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器よりも一段階新しい土器群であることは既に述べた。大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器は現段階で大木8b式土器の標式的な資料とも言うべきものである。それでは、この種の土器群は、大木8b式土器の第Ⅱ段階に位置づけるべきものなのであろうか、それとも別な土器型式と把えるべきなのであろうか。従来の研究では、Ｂグループを大木9b式に含める点ではほぼ一致しているが、Ｃグループについては大木8b式に含めるもの、大木９式とするもの、いずれか不明とするものなど各種の見解がみられたことは上深沢遺跡の報告で既に述べた通りである（宮教委：1978・３）。この点、勝負沢遺跡ではＢ・Ｃグループが共伴関係にあること、大松沢貝塚出土土器と区別しにくいA_2グループの土器を共有すること、さらに文様が渦巻などの線描文様を基本としていることから大木8b式土器に含めるべきものと考えられる。すなわち、大木8b式土器に第Ⅰ段階：大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器、第Ⅱ段階：勝負沢遺跡出土土器という二段階の変遷が存在したものと考えられる。

次に大木8b式土器内部の地域性について触れておきたい。岩手県大館町遺跡ＲＡ102竪穴住居跡上層出土土器は、東北地方南部に分布する第Ⅱ段階の土器群と基本的な点で共通するが、器形組成・文様表現技法・工程などに相違がみられることは既に述べた。また、岩手県下にはこれらよりもさらに新しいと考えられる土器群も存在する。すなわち、石鳥谷町大地渡遺跡では、Ｃグループと似た土器が主体となって、A_2グループと似た土器とともに出土している（相原康二：1981・３）。文様は線描文様を基本としているが、変形楕円状の固形文様に極めて近く、横方向への文様展開が強く制限されており、大木９式土器の前段階とも言うべきものである。ところが、文様を描いている隆沈線は隆線部分の断面が方形状で、地文は文様の描かれる前段階に施文されている。このような文様表現技法・工程にみられる特徴は、第Ⅰ段階の大館町遺跡ＲＡ102竪穴住居跡下層・ＲＡ104竪穴住居跡出土土器、第Ⅱ段階の大館町遺跡ＲＡ102竪穴住居跡上層出土土器にもみられるもので、第Ⅰ段階の文様表現技法・工程が最終段階まで踏襲されたものとみることができる。その中で、時期的な相違を見い出すとすれば、隆沈線が彫りの深い立体的なもの（隆線部分断面が正方形状）から、平板なもの（隆線部分断面が長方形状）になるという傾向的変化をあげうるに過ぎない。この点、東北地方南部の大木8b式土器は、第Ⅱ段階になると文様の変化に対応しながら、文様表現技法や工程に変化を生じさせている。すなわち、隆沈線は彫りの深い角張ったもの（隆線部分の断面が正方形状）から、丸味をもったもの（隆線部分の断面が隅丸方形状・隅丸台形状）へと変化する。また、工程においても、文様を描いた後に地文を充塡するものが一部に出現する。このような文様表現技法・工程にみられる変化は、大木９式土器に継承され、文様変化に伴ないつつ発展・盛行するものである。したがって、東北地方南部では大木８ｂ式土器の第Ⅱ段階において、次型式である大木９式

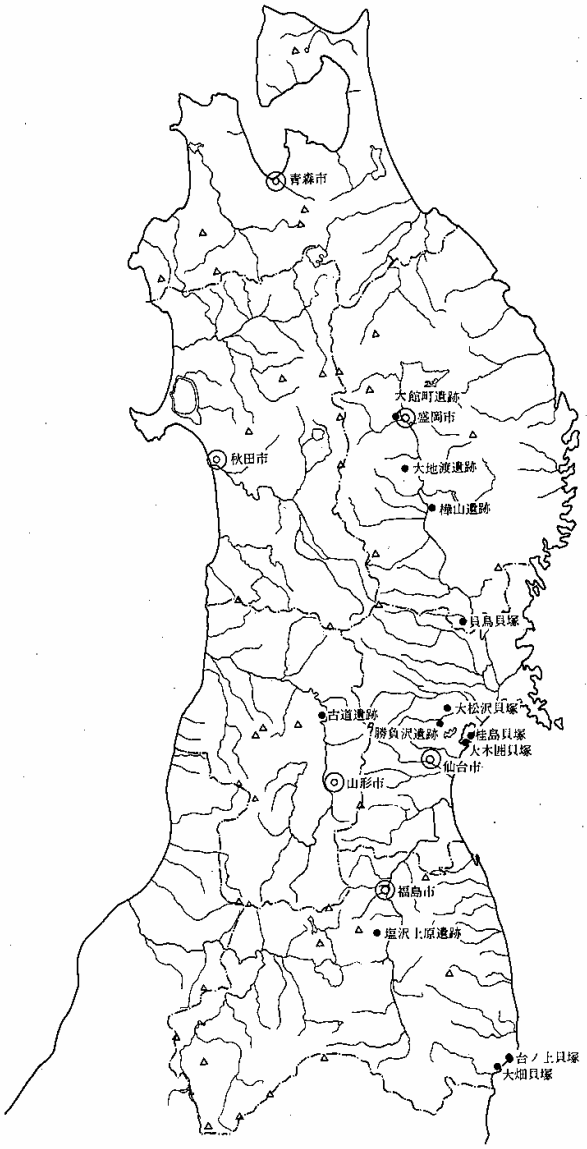
土器成立の技法的要素が誕生し、それらが序々に整えられつつあったものとみることができる。この点、岩手県と東北地方南部では際立った相違を示している。その後、東北地方南部では大木９式土器の成立をみるが、その段階の岩手県下では東北地方南部とは異なる地域色の強い大木９式土器を自立的に成立させるのか、それとも東北地方南部からの影響を受けることによって大木９式土器を成立させるのかについては、充分な資料がないため論及することができない。今後の課題としたい。

また、両者の地域的接点は、岩手県貝鳥貝塚や樺山遺跡におけるあり方（北上市教委：1968・３　1969・３　草間俊一：1971・12）からすると、北上市周辺ではないかと推定されるが、両遺跡とも断片的な資料なので、今後の資料の充実を待ちたい。いずれにしても、このような地域差は、かつて円筒土器が分布するか、それらと接していた地域と、安定した大木式土器の分布地域との間にみられる相違とみることができる。

大木8b式土器分布地域の北部における地域性は上述の通りである。このような点を南部についても検討してみたい。福島県いわき地方は東北地方の南端に位置し、大木7b式期から大木8ａ式初期に阿玉台式土器が分布するか、それらと接していた地域である。大木8b式期におけるいわき地方の地域性については馬目順一氏の論稿がある（馬目順一：1968・３）。馬目氏はいわき市台ノ上貝塚と宮城県大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器を比較して、器形組成・深鉢における主要文様・浅鉢についての相違を指摘し、その中の器形組成を重視することによっていわき地方の地域性を「関東に栄えた加曽利ＥⅠ式土器の分布圏に近いという空間的な理由に基くものであろう。」と結論づけている。その後、馬目氏等は大畑貝塚を調査し、再びいわき地方の大木8b式土器について報告している（馬目順一編：1975・３）が、その内容は台ノ上貝塚の報告で示された成果に沿ったものである。筆者はいわき地方の大木8b式土器を未だ実見していないので、馬目氏の提起した論点の妥当性については判断を控えたい。ここでは、報告書に掲載されている台ノ上貝塚・大畑貝塚の資料と、大木囲貝塚・大松沢貝塚・勝負沢遺跡の資料を比較し、地域性を示すものとして重要と思われる点について若干の検討を加えることにする。

器形組成は勝負沢遺跡の成果に基けば、深鉢Ａが主体で、それに深鉢Ｃ・Ｄが加わり、その他の器形が少量伴なうものと考えられる。その点、いわき地方も同様な傾向にある。ただ、台ノ上貝塚や大畑貝塚の報告に収録されている実測図・拓影図・写真をみると、さらに深鉢Ａの比率が高いように見うけられる。このような器形組成のあり方は、岩手県の状況と比較すると対象的で、深鉢Ａの比率が北部で少なく南部にいたるに従って多くなる傾向を示している。

大木8b式土器は、勝負沢遺跡と大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器の検討によって、少なくとも二段階の変遷がみられることは度々指摘した。その変遷は、口縁部の横位渦巻文・胴部の曲流渦巻文の変化に特徴的にあらわれている。口縁部文様の横位渦巻文の変化は深鉢Ａでは明瞭



第116図　勝負沢遺跡とその関連遺跡

であるが、他の器形ではあまりはっきりしない。それに対し、細部の曲流渦巻文は、ほとんどの器形にみられ、その特徴もとらえやすい。いずれにしても、これらが大木8b式土器の主要文様であり、それが自立的に変化・発展することによって大木９式の主要文様である横位渦巻楕円文・縦位渦巻楕円文を形成するものと考えられる。ところが、台ノ上貝塚・大畑貝塚の資料をみると口縁部の横位渦巻文は宮城県同様一般的に見られるが、胴部の主要文様は曲流渦巻文ではなく単純な縦位下垂線文である。そして、いわき地方の大木９式土器の主要文様は曲流渦巻文が変化したものではなく、縦位下垂線文の変化したものとなっている。この点、宮城県といわき地方では際立った地域差を示している。この他、各種の器形において地域差を示すと考えられるものも幾つか散見するが、現段階では資料的に充分な比較をなし難い。いわき地方において層位的まとまりをもつ資料によって大木8b式土器の変遷があとづけられ、その諸段階における器形組成が明らかになった時点で、再検討したい。

以上、大木8b式土器の地域差について、かつて異型式土器が分布していたか、それとも接していた地域と安定した大木式土器の分布地域との間にみられる相違について検討した。その中で見られた現象は深鉢Ａを中心とした器形組成の相違と、大木8b式土器の変遷過程にみられる大木９式土器成立に至る方向性の相違である。大木９式土器成立の方向性では、岩手県の場合文様表現技法に、いわき地方の場合主要文様に地域性が強くあらわれている。また、岩手県は大木８式期以降、円筒土器が衰退し、大木式土器の波及・影響を受ける地域である。そして、いわき地方は関東地方の阿玉台式・加曽利Ｅ式土器の分布地域と接し、常に交錯した歴史環境の中に存在した地域である。このように、両地域は大木8b式期において、大木式土器の分布地域に包括されているものの、各々歴史的環境・地域的環境に著しい相違があり、その中での地域的自立性・依存性に微妙なちがいがみられる。しかし、現段階ではこのような地域性を論じるには未だ資料が充分でない。今後の良好な資料の増加を待ってあらためて論じたい。また、安定した大木式土器分布地域と把握した東北地方南部（宮城県・山形県・福島県）にも、詳細にみれば種々の地域的相違がある。この点についても、資料の充実を待っていずれ機会があれば検討を加えたい。

土 製 品

土製品としては、基本層位第Ⅱ・Ⅲ層から土偶１点、特殊小形土器３点が発見された。

土偶（第117図１）

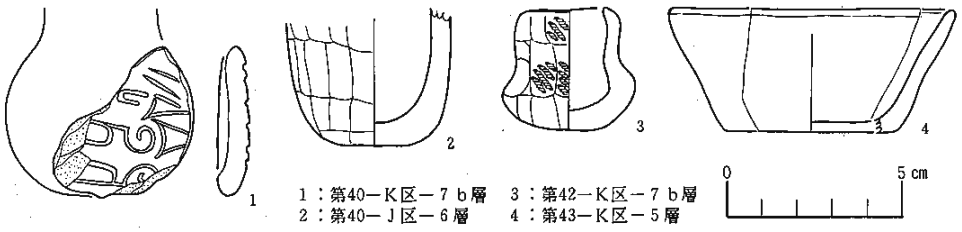
胴下部にふくらみをもつ扁平な板状土偶と思われるが、残存部分が少ないため平面形・乳房・正中線などは不明である。表面には幅１㎜前後の沈線で有棘渦巻文が描かれている。裏面は剥落しており、文様が描かれていたかどうかは不明である。

このような文様は、第Ⅱ群土器の有棘渦巻文と類似しており縄文時代中期(大木8b式期)のものと考えられる。

特殊小形土器（第117図２～４）

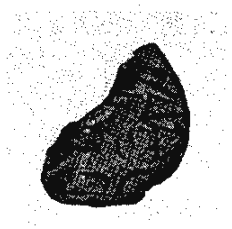
３点出土している。３は完形品であるが、それ以外は欠損品である。底部が丸底のもの（２・３）と平底のもの（４）がある。前者は指頭状のオサエ痕が認められ粗雑なつくりである。３は口縁から胴上部にＬＲ縄文が施文されている。後者は縦方向の丁寧なミガキが施され、前者に比してつくりは丁寧である。

次にこれらの土器の年代について考えてみると、いずれも基本層位第Ⅲ層から出土しており大木8b式期かそれ以前のものと推定される。



1：第40－Ｋ区－７ｂ層　3：第42－Ｋ区－７ｂ層
2：第40－Ｊ区－６層　4：第43－Ｋ区－５層

第117図　縄文時代の土製品（土偶・特殊小型土器）



剥 片 石 器

第Ⅰ群石器（第120図～122図）

鋭利な尖頭部と基部からなり、小形で扁平な石器を第Ⅰ群石器とした。合計44点出土している。

石器の観察

第Ⅰ群石器は合計44点出土しているが、このうち完形品が19点、ほぼ完形なものが１点（尖頭部先端が僅かに欠けている）、破損品が22点、未成品が２点である。なお、以下の観察において未成品は除外する。

基部形態

基部形態には大きく次の４種類が認められた。ⅠとⅣは細部の違いによって細分される。

Ⅰ：基部の中央に抉りを入れて凹状にしているもの（第120図、第121図１～６）

Ⅰａ：「U」状の凹みが深いもの（第120図１～７）

Ⅰｂ：「U」状の凹みが浅いもの（第120図８～15）

Ⅰｃ：凹みがゆるやかな弧を描くもの（第120図16、第121図１・２）

Ⅱ：基部をほぼ平坦にしているもの（第121図７～17、第121図１・２）

Ⅲ：基部を丸くふくらませているもの（第122図３・４）

Ⅳ：基部の側縁に抉りを入れて凸状の茎を作り出しているもの（第122図５～７）

Ⅳa：基部の抉りが深いもの（第122図５・６）

Ⅳb：基部の抉りが浅いもの（第122図７）

基部形態が判明するものは42点中40点である。このうちⅠのタイプに含まれるものが22点、Ⅱのタイプに含まれるもの13点、Ⅲのタイプに含まれるものが２点、Ⅳのタイプに含まれるものが３点であり、Ⅰ・Ⅱのタイプの占める割合が多く、Ⅲ・Ⅳのタイプは１割にも満たない。

尖頭部側縁形態

尖頭部側縁形態には大きく次の４種類が認められた。

Ａ：基部に近い部分が強くふくらんでいるもの（第120図１～３・５・８～13）

Ｂ：尖頭部中央または基部に近い部分が僅かにふくらんでいるもの（第120図４、第121図７～14、第122図３・４・７）

Ｃ：ほぼ直線になっているもの（第120図６、第122図５）

D：ほぼ直線になっており、基部端で僅かに外方に開くもの（第120図16、第121図１）。

尖頭部側縁形態が判明するものは、25点である。このうちAのタイプに含まれるものが10点、Bのタイプに含まれるものが12点、Cのタイプに含まれるものが２点、Dのタイプに含まれるものが２点である。A・Bのタイプの占める割合が多い。

大きさ

大きさは長さ1.75～3.55cm、幅は0.8～2.6cmの間であり、最大のものは最小のものの長さで約２倍、幅で約３倍である。第118図は基部形態別の長幅分布図である。基部形態がⅡのタイプやⅣのタイプのものに僅かであるが、長さが３cm以上の大型の石器が含まれている。

重量

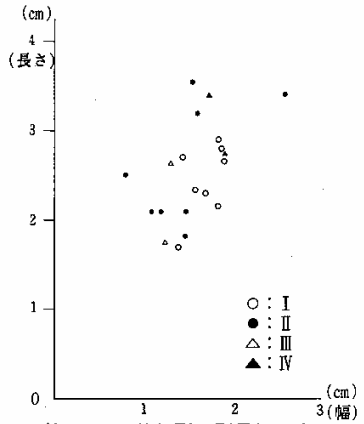
重量は最小のもので0.３g、最大のもので6.８gであり、最大のものは最小のものの約22.7倍である。第119図は基部形態別の重量分布図である。これによるとⅡのタイプのものには２g以上の重さをもつ石器が３点含まれており、他の基部形態を有するものとは若干様相を異にしている。特に、Ⅱのタイプのものには重量が6.８gもあるものも見られる。

製作技術Ⅰ（素材）

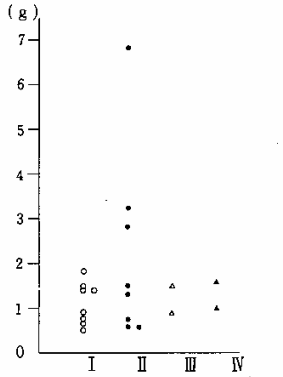
素材の判明するものは、完形品が15点、破損品が５点の合計20点である。縦長の剥片を使用しているものは15点、横長の剥片を使用しているものは５点であり、縦長の剥片を使用しているものが非常に多い。素材が判明するものから打面の方向を調べると、尖頭部側にあるものが５点、基部側にあるものが11点、横方向のものが４点である。以上のことから素材としては、縦長の剥片を用い、打面の位置する方向に基部を作り出して石器を製作しているものが多いことがわかる。

製作技術Ⅱ（調整剥離技術）

石器の素材には縦長・横長の違いこそあれ、細長い偏平なものを使用している。そして、その素材の縁辺に細かい調整剥離を施して整形している。調整剥離の順序については、石器の側辺ごとに剥離する方法を使用している。また、基部と側辺の調整の前後関係を検討すると、基部を調整してから側辺を調整する方法と側辺を調整してから基部を調整する方法の２種



第118図　基部形態別長幅分布図



第119図　基部形態別重量分布図

類が認められた。前後関係が確認されたものは22点である。基部を調整してから側辺を調整する方法を使用しているものは８点、側辺を調整してから基部を調整しているものは14点であり後者が多い。

石器の分類

石器の分類は「基部形態」と「尖頭部側縁形態」とから行ないたい。まず、基部形態からⅠ類(基部の中央の抉りを入れて凹状にしているもの)、Ⅱ類(基部をほぼ平坦にしているもの)、Ⅲ類(基部をふくらませているもの)、Ⅳ類(基部の側縁に抉りを入れて凸状の茎をつくり出しているもの)とに大別する。Ⅰ類・Ⅳ類は細部の違いからさらに細分される。これらを尖頭部側縁形態によってさらに細分すると第８表のようになる。分類毎に個体数は、ＩａＡ類が４点、ＩａＢ類が１点、ＩａＣ類が１点、ＩｂＡ類が６点、ＩｃＤ類が２点、ⅡＢ類が８点、ⅢＢ類が２点、ⅣａＣ類が１点、ⅣＢ類が１点である。ⅡＢ類が８点で最も多く、次いでＩｂＡ類が多い。

第８表　第Ⅰ群石器の分類

Ⅰ：基部が凹状のもの	Ⅰａ：「U」状の凹みが深いもの	Ａ：基部に近い部分が強くふくらんでいるもの
		Ｂ：尖頭部中央または基部に近い部分が僅かにふくらんでいるもの
		Ｃ：ほぼ直線になっているもの
	Ⅰｂ：「U」状の凹みが浅いもの	Ａ：基部に近い部分が強くふくらんでいるもの
	Ⅰｃ：凹みがゆるやかな弧を描くもの	Ｄ：ほぼ直線になっており、基部端で僅かに外方に開くもの
Ⅱ：基部をほぼ平坦にしているもの		Ｂ：尖頭部中央または基部に近い部分が僅かにふくらんでいるもの
Ⅲ：基部を丸くふくらませているもの		Ｂ：尖頭部中央または基部に近い部分が僅かにふくらんでいるもの
Ⅳ：基部が凸状のもの	Ⅳａ：抉りが深いもの	Ｃ：ほぼ直線になっているもの
	Ⅳｂ：抉りが浅いもの	Ｂ：尖頭部中央または基部に近い部分が僅かにふくらんでいるもの

第Ⅱ群石器 (第123図)

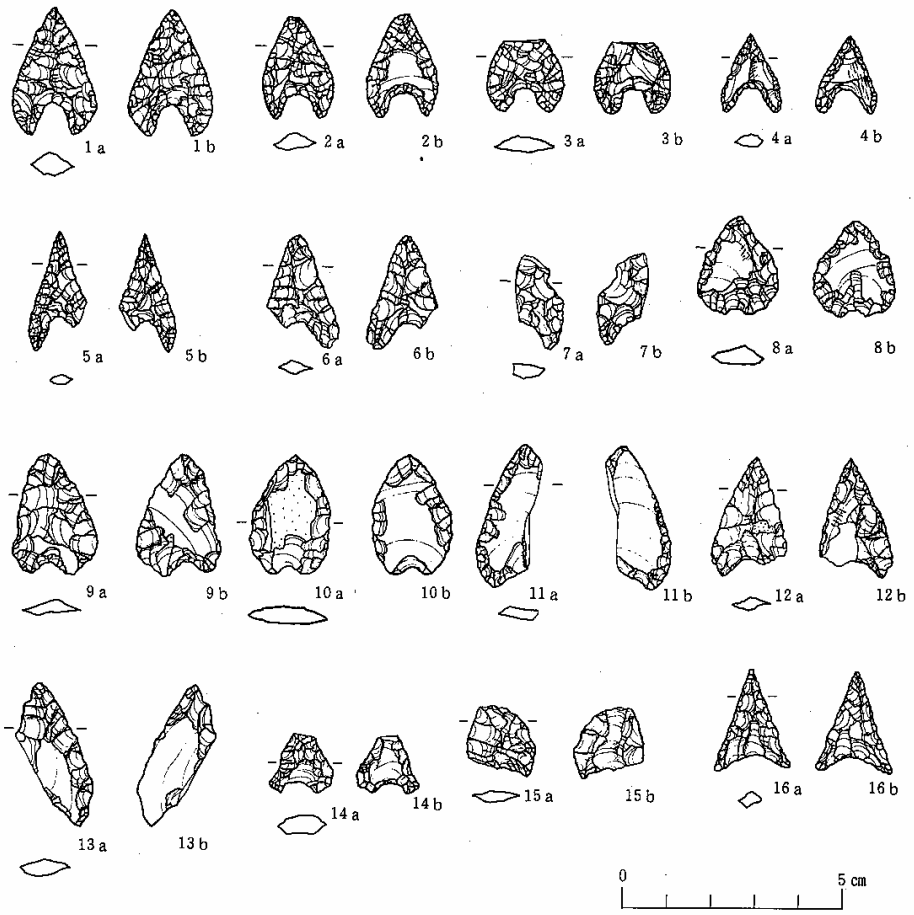
棒状の鋭い先頭部と基部とからなるものを第Ⅱ群石器とした。合計14点出土している。

石器の観察

第Ⅱ群石器は14点出土している。このうち完形品が７点、破損品が６点、破損品か未成品か判明できないものが１点である。以下、観察にあたっては破損品か未成品か判別できないものは除外する。

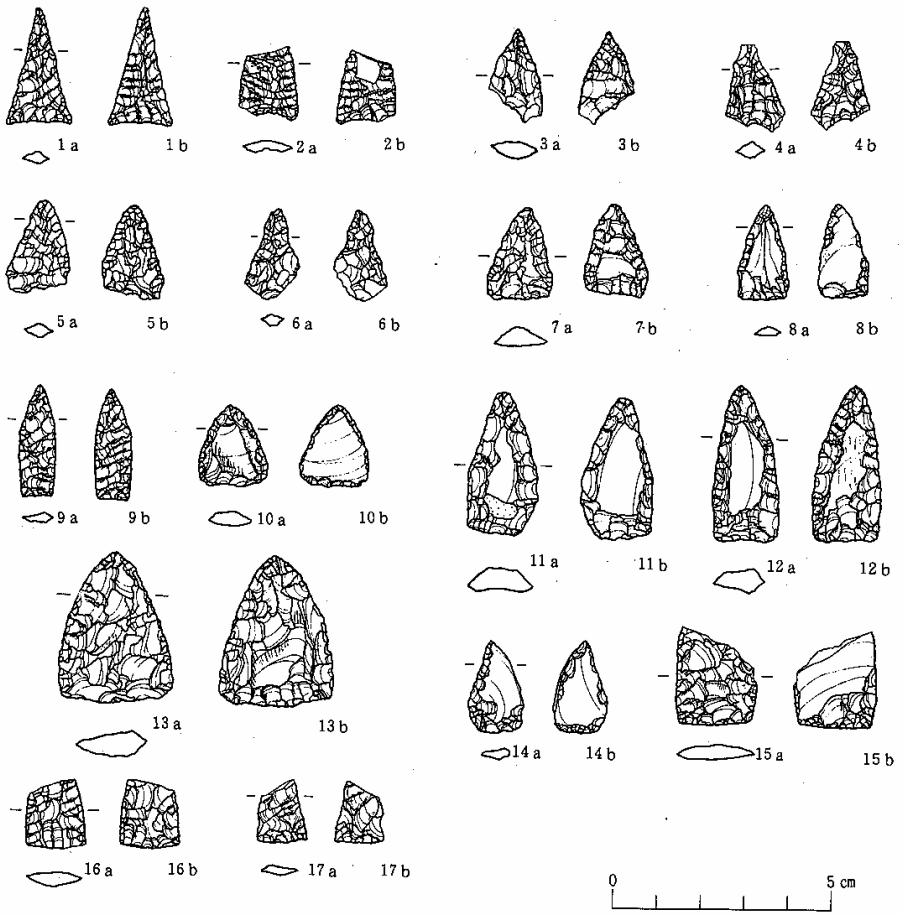
基部形態

基部形態の判明するものは12点である。縁辺に調整剥離が施され形を整えているものと、ほとんど調整剥離が施されておらず素材面を大きく残しているものとがある。前者に含まれるものが４点、後者に含まれるものが８点であり後者が多い。前者の基部の平面形を見ると楕円形のものが１点、棒状のものが２点、蒲鉾形のものが１点である。後者は、調整剥離が施されて



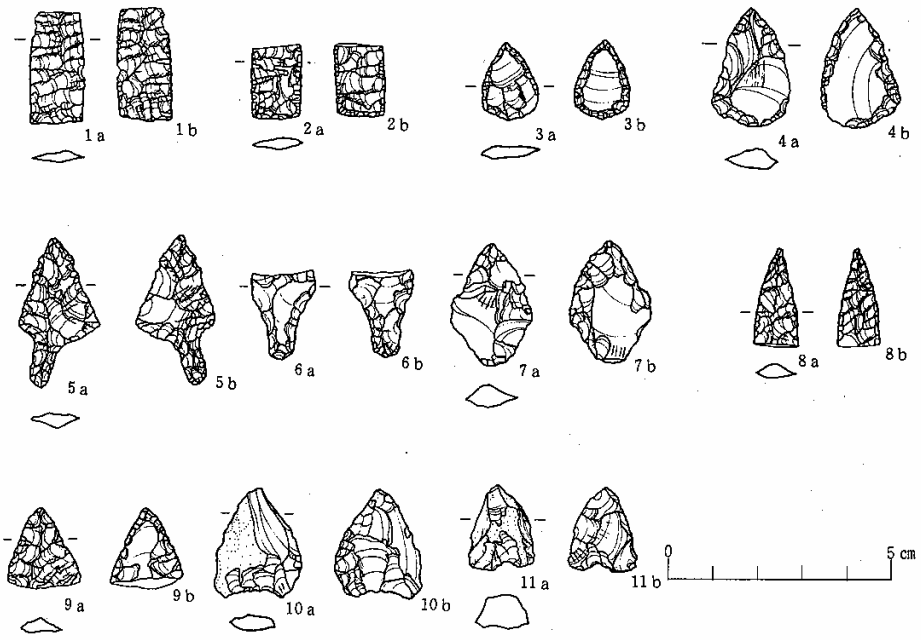
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	長幅指数(L/W)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	第42－K区 第4層	29.0	18.8	154.2	5.55	1.4	Ⅰa A	S.M.2225	45－1
2	第40－J区 第8層	23.4	16.0	146.25	5.25	0.9	Ⅰa A	S.M.2324	45－2
3	第42－K区 第5層	(16.2)	17.0	——	3.9	(0.6)	Ⅰa A	S.M.2291	45－3
4	第43－K区 第4層	17.3	14.0	123.57	2.9	0.5	Ⅰa B	S.M.1892	——
5	第43－K区 第6層	(27.0)	(13.0)	——	3.5	(0.3)	Ⅰa A	S.M.2318	45－4
6	第43－L区 第5層	(26.0)	(15.8)	——	5.0	(0.5)	Ⅰa C	S.M.2344	45－5
7	第33－O区 第1層	(20.4)	(11.5)	——	(3.4)	(0.3)	Ⅰa	S.M. 622	45－6
8	第47－Q区 第5層	21.5	18.5	116.2	5.85	1.5	Ⅰb A	S.M. 886	45－7
9	第43－K区 第5層	28.0	19.0	147.3	4.2	1.4	Ⅰb A	S.M. 761	45－8
10	第23－M区 第1層	26.9	18.1	148.6	4.35	1.8	Ⅰb A	S.M. 63	45－9
11	第42－K区 第8層	(32.1)	(14.8)	——	(2.9)	(1.1)	Ⅰb A	S.M. 564	45－10
12	第40－J区 第7層	(27.5)	(12.0)	——	(4.0)	(0.8)	Ⅰb A	S.M.1185	45－11
13	第35－K区 第5層	(33.0)	(17.5)	——	(4.4)	(1.0)	Ⅰb A	S.M. 980	45－12
14	第35－K区 第5層	(13.2)	14.2	——	4.6	(0.65)	Ⅰb	S.M. 18	45－13
15	第40－K区 第8層	(16.0)	(15.5)	——	3.5	(0.5)	Ⅰb	S.M.1088	45－14
16	X － X	23.0	17.0	135.2	5.4	0.7	Ⅰc D	S.M.2319	45－15

第120図 第Ⅰ群石器(1)



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	長幅指数(L/W)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	第40－K区 第 8 層	(27.0)	14.15	——	3.6	(0.6)	I c D	S.M.1071	45－16
2	第41－K区 第7A層	(17.0)	(13.2)	——	2.6	(0.35)	I C	S.M.2343	45－17
3	第43－K区 第 5 層	(21.0)	(12.5)	——	3.2	(0.4)	I	S.M. 20	45－18
4	第40－K区 第 5 層	(20.1)	(13.0)	——	3.85	(0.5)	I	S.M.1151	45－19
5	第42－K区 第 6 層	(21.2)	(14.0)	——	4.2	(0.6)	I	S.M. 465	45－20
6	第40－J区 第 6 層	(20.4)	(12.5)	——	4.6	(0.5)	I	S.M.1726	45－21
7	第43－J区 第 5 層	21.3	15.0	142.0	4.4	1.0	I	S.M. 41	45－22
8	第42－J区 第 8 層	21.4	11.2	191.0	2.75	0.3	II B	S.M.1091	45－23
9	第42－K区 第 8 層	25.0	8.0	312.5	2.4	0.3	II B	S.M. 563	45－24
10	X － X	18.4	14.75	124.7	3.2	0.8	II B	S.M.2188	45－25
11	第46－K区 第 3 層	32.0	16.0	200.0	7.0	2.8	II B	S.M. 10	45－26
12	第31－L区 第 7 層	35.5	15.4	230.5	6.5	3.25	II B	S.M. 214	45－27
13	第43－K区 第 5 層	34.3	26.0	131.9	7.4	6.8	II B	S.M. 708	45－28
14	第31－M区 第 1 層	21.2	12.3	172.3	3.4	0.5	II B	S.M. 810	45－30
15	第48－Q区 埋3	(22.0)	(18.0)	——	(2.8)	(0.8)	II	S.M.2107	45－31
16	第41－J区 第 8 層	(15.5)	(13.3)	——	(3.0)	(0.4)	II	S.M.1541	45－29
17	第30－O区 第 3 層	(14.0)	(11.2)	——	(2.7)	(0.3)	II	S.M. 816	——

第121図　第Ⅰ群石器(2)



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	長幅指数(L/W)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	第41－K区 第7層	(25.0)	(12.0)	——	3.2	(1.2)	Ⅱ	S.M. 942	45－32
2	第34－O区 埋3	(17.0)	(10.8)	——	(2.9)	(0.4)	Ⅱ	S.M.2309	45－33
3	第42－K区 第5層	17.5	12.5	140.0	2.5	0.4	ⅢB	S.M. 46	45－34
4	第43－K区 第5層	26.5	13.0	203.8	5.0	1.5	ⅢB	S.M.1173	45－35
5	第42－K区 第6層	34.0	17.5	194.2	4.0	1.0	ⅣaC	S.M. 464	45－36
6	第35－J区 第5層	(19.8)	(14.5)	——	6.0	0.8	Ⅳa	S.M.1396	45－37
7	第41－K区 第7層	27.4	18.1	151.38	6.45	1.8	ⅣbB	S.M.1611	45－38
8	第23－M区 第11層	(22.0)	(9.3)	——	(3.8)	(0.5)	——	S.M. 22	45－39
9	第43－J区 第3層	(18.0)	(16.0)	——	(5.2)	(0.8)	——	S.M. 688	45－40
10	第39－K区 第6層	(24.7)	(19.5)	——	(4.7)	(1.6)	——	S.M.1307	45－41
11	第42－K区 第4層	(19.0)	(15.0)	——	(7.2)	(1.2)	——	S.M.2223	——

第122図　第Ⅰ群石器(3)

いないために、基部形態は素材の形態のままとなっている。そのため平面形はバラエティに富んでおりそれぞれの石器をいくつかに類型化することは非常に困難である。基部の大きさを見ると長さは1.35～6.1cm、幅は1.15～2.4cmの間におさまり、長さに比べて幅は比較的小さい幅におさまっている。また、いずれの石器の場合も尖頭部幅よりも基部幅が広いという共通した特徴を持っている。

基部から尖頭部への移行部分の状況

基部から尖頭部への移行部分を観察すると次の２種類が認められる。

Ⅰ：基部と尖頭部の境界が明瞭なもの（１～11）

Ⅱ：基部と尖頭部の境界が不明瞭なもの（12・13）

Ⅰのタイプには基部から尖頭部に移行する部分には抉りが入れられている。抉りの状態には深く入れられているものと浅く入れられているものとがあり、前者は基部から尖頭部へ急角度で移行するが、後者は基部から尖頭部への移行は比較的緩やかである。

Ⅱのタイプは、基部と尖頭部の境には抉りが入れられておらず基部と尖頭部の境が不明瞭になっている。そのために、全体の形態が棒状になっている。

尖頭部の形態

尖頭部はいずれも基部よりも幅が狭くつくられている。尖頭部先端は鋭く尖っている。横断面形を見ると菱形のものがほとんどを占めており、僅かに１点だけ三角形のものにあるにすぎない。尖頭部の長さはバラエティに富んでいるが、大きく次の２種類に分けられる。

Ａ：尖頭部の長さが長いもの（１・２・７・10・12）

Ｂ：尖頭部の長さが短かいもの（６・11）

Ａのタイプは、尖頭部長が1.4㎝～2.9㎝であり長くつくられている。Ｂのタイプは、尖頭部が基部端に僅かに作り出されており、その長さ１㎝以下と短かい。

製作技術Ⅰ（素材）

第Ⅱ群石器は、基部に対して調整剥離が十分に行なわれていないものが多いことから石器の素材について観察することができた。素材が判明するものは10点である。このうち縦長の剥片を用いているのが７点、横長の剥片を用いているのが３点である。打面（打点）が残っているものも３点出土しており、いずれも基部側に位置している。打面が不明の石器の中には打面の方向がわかるものもいくつか存在している。打面の方向がわかるものは合計６点である。このうち打面の方向が尖頭部の方向にあるものが２点、基部方向にあるものが４点である。以上のことから第Ⅱ群石器は、素材として縦長の剥片が多く用いられ、特に打面のある方向を基部とし、反対側を尖頭部としているものが多いことがわかる。

製作技術Ⅱ（調整剥離技術）

基部の縁辺に調整剥離が施されているものは４点（１・６・12・13）である。このうち、側縁の全てに調整剥離が施されているものは２点（１・６）であり、他の２点（12・13）は縁辺の一部を残して調整剥離が施されている。

尖頭部には入念な調整剥離が施されている。尖頭部に対する調整剥離は縁辺を基部側から尖頭部先端に向けて連続的に剥離する方法をとっている。そして、これを４回繰り返して尖頭部の断面形を菱形につくり出している。なお、錯向剥離は観察されなかった。片面への調整が不十分なために尖頭部の断面が三角形の石器も１点（10）出土している。

石器の分類

第Ⅱ群石器を「基部から尖頭部への移行部分の形態」と「先端部の形態」とから分類を行ないたい。

まず、本群の石器は基部から尖頭部の移行部分の相違から、Ⅰ類（基部と尖頭部の境界が明瞭なもの）、Ⅱ類（基部と尖頭部の境界が不明瞭なもの）とに大別される。さらに、Ⅰ類は尖頭部形態の相違からＡ(長さの長いもの)、Ｂ(長さの短かいもの)とに細分される。分類毎に出土点数を見ると、ＩＡ類が４点、ＩＢ類が２点、Ⅱ類が２点でありＩＡが多い。

石器の機能

使用痕跡

出土点数（破損品か未成品か判別ができないものを除く）13点のうち、破損品が６点であり破損品が約半数を占める。６点の破損品のすべてが尖頭部の破損である。完成品について使用痕跡を観察した結果、基部と尖頭部に磨耗痕が観察されたものが２点、尖頭部に磨耗痕が観察されたものが４点で基部が磨耗している２点はいずれも両側縁に磨耗痕が観察された。

尖頭部の磨耗の位置を見ると次の２種類が認められた。

１：磨耗が尖頭部先端に認められるもの（６・11）

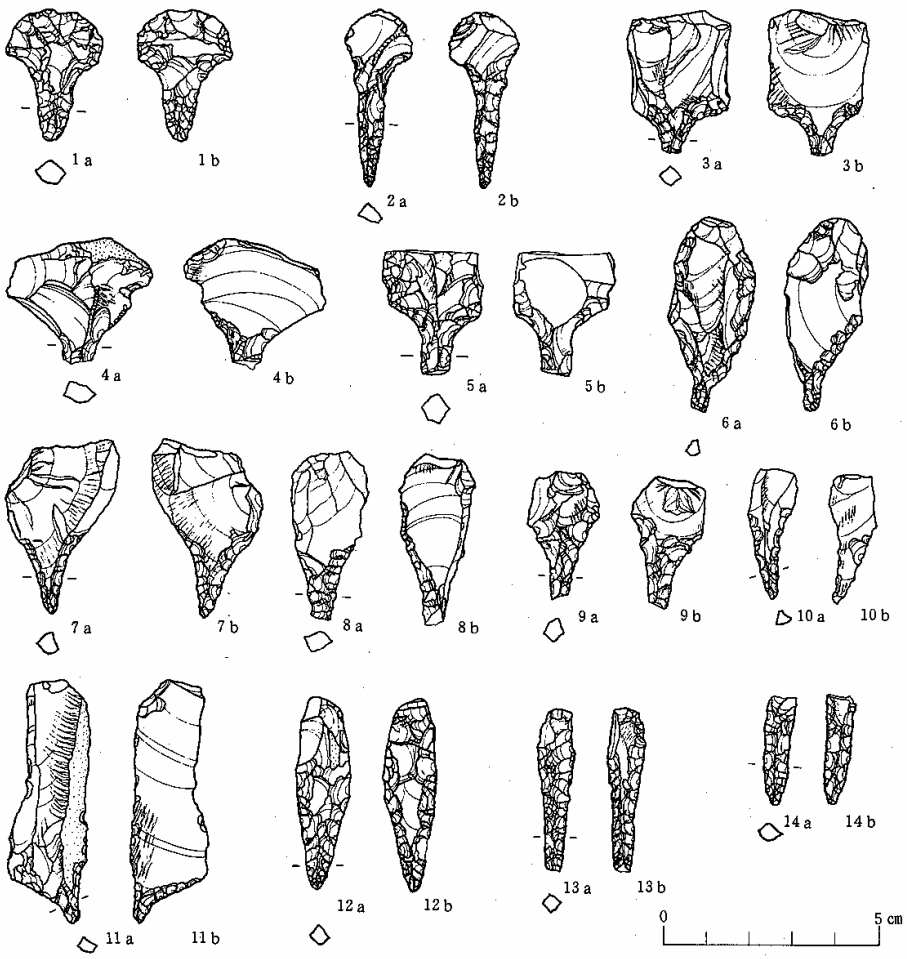
２：磨耗が尖頭部先端から尖頭部中央にかけて認められるもの（１・２・７・10）

１のタイプは２点、２のタイプは４点である。２のタイプにおいて左右の側縁の磨耗に偏りは認められなかった。

石器の機能

尖頭部に使用痕が観察されたものは7点中6点である。その使用痕はいずれも磨耗痕である。本遺跡出土の第Ⅰ群石器も尖頭部を有しているが、これらの尖頭部からは磨耗痕は観察されなかった。したがって、本群と前述した第Ⅰ群石器とは異なった機能を有していたものと考えられる。上深沢遺跡（宮城県教委:1978・３）出土の剥片石器第３群は本群と類似した形態をもつもので、尖頭部には本群同様磨耗痕が観察されている。同遺跡では尖頭部を使用した「穿孔具」を想定している。本遺跡においても、前述したように使用痕(磨耗痕)や形態などからほぼ同様の機能が想定される。

また、本遺跡の場合、尖頭部の磨耗痕は尖端に限定されるものと、先端から中央部におよぶものの二種類が認められ、その使用状況に相違があったものと推定される。今回観察した資料では、前者が第ＩＢに、後者が第ＩＡ類にみられれこのことは、第Ⅱ群石器の尖頭部形態と使用痕跡が密接な関連をもつことを示している。すなわち、第ＩＡは尖頭部が長くその使用痕跡が広範囲に及ぶことから深い孔の穿孔具、第ＩＢ類は尖頭部が短く、その使用痕跡が



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	尖頭部長(mm)	重量(g)	分　類	使用痕跡	登録No	図　版
1	第42－K区　第 6 層	30.7	22.1	5.8	17.0)	2.9	ⅠA	2	S.M. 463	46－1
2	X　－　X	42.0	15.9	7.1	29.0	2.6	ⅠA	2	S.M. 2180	46－2
3	第40－K区　第 6 層	(34.2)	23.5	6.55	(6.8)	(5.2)	Ⅰ	——	S.M. 1779	46－3
4	第40－J区　第 7 層	(30.0)	33.5	8.15	(6.0)	(5.6)	Ⅰ	——	S.M. 1180	46－4
5	第40－K区　第3層(?)	(29.5)	(22.5)	(8.85)	(9.0)	(5.5)	Ⅰ	——	S.M. 5	46－5
6	第47－Q区　第 5 層	45.25	19.0	9.65	7.0	9.5	ⅠB	1	S.M. 887	46－6
7	第41－K区　第 8 層	41.4	27.0	8.2	14.0	6.9	ⅠA	2	S.M. 2249	46－7
8	第34－O区　第 1 層	(40.0)	17.5	7.2	(12.3)	(4.25)	Ⅰ	——	S.M. 1191	46－8
9	第36－K区　第 8 層	(30.3)	17.2	6.8	(19.0)	(2.6)	Ⅰ	——	S.M. 1209	46－9
10	第40－K区　第 8 層	30.5	11.5	3.7	17.0	1.0	ⅠA	2	S.M. 1086	46－10
11	第42－J区　第 3 層	67.0	18.2	7.0	6.0	7.4	ⅠB	1	S.M. 778	46－11
12	第48－Q区　第 4 層	45.0	13.0	7.6	21.5	4.1	Ⅱ	——	S.M. 40	46－12
13	第41－K区　第 6 層	(38.5)	9.0	4.75	(21.0)	(1.8)	Ⅱ	——	S.M. 301	46－13
14	第41－K区　第 7 層	(26.0)	(6.5)	(4.1)	(26.0)	(0.85)	——	——	S.M. 1238	46－14

第123図　第Ⅱ群石器

先端にだけ限られることから浅い孔の穿孔具ではないかと推定される。また、第Ⅱ類は使用痕跡は明瞭でなかったが、尖頭部の形状から第ⅠA同様深い孔の穿孔具ではないかと考えられる。

以上の他に、基部に使用痕(磨耗痕)が観察されたものが２点（第123図６・11）あった。これらの基部は鋭い縁辺をもつか、部厚い刃部状の縁辺をもつもので、穿孔具以外の目的にも使用されたものと思われる。

第Ⅲ群石器（第124図～第128図）

抉りを入れることによって作り出されたつまみと刃部を有する石器を第Ⅲ群石器とした。計42点出土している。

石器の観察

第Ⅲ群石器は合計42点出土している。このうち完形品が21点、破損品21点である。

平面形（全体の形態）

つまみ部を上に据えた時の平面形(全体の形態)について検討すると次の３種類が認められる。

Ⅰ：縦長の形態のもの（第124図、第125図、第126図１～８）

Ⅱ：横長の形態のもの（第126図９～11、第127図１・３・６）

Ⅲ：縦長と横長の中間形態のもの（第127図２・４・５、第128図１・４・７）

Ⅰのタイプが26点、Ⅱのタイプが６点、Ⅲのタイプが５点でありⅠのタイプの占める割合が非常に多い。

刃部先端の状態

刃部先端の状態を検討すると次の３種類が認められた。

Ａ：先端が尖っているもの（第124図１～８、第126図６・９、第127図４・５）

Ｂ：先端が丸くふくらんでいるもの（第124図９、第125図１・２、第126図９･10、第127図１・２、第128図１）

B_1：先端の幅の狭いもの（第124図９、第125図１・２、第127図２、第128図１）

B_2：先端の幅の広いもの（第126図９・10、第127図１）

Ｃ:先端が平坦なもの（第125図３～６・８、第126図１・11、第128図４・７）

C_1：幅の狭いもの（第125図３～６・８、第126図１、第128図４・７）

C_2：幅の広いもの（第126図11）

製作技術Ⅰ（素材）

素材の判明しているのは42点中35点である。前述した３種類の形態(縦長の形態、横長の形態、縦長と横長の中間形態)についてそれぞれ素材の使われ方について検討して見たい。

「縦長の形態」のものは、素材に縦長の剥片を用いているものが22点、横長の剥片を用いているものが２点である。

「横長の形態」のものは、素材に横長の剥片を用いているものが４点、縦長の剥片を用いているものが２点である。

「縦長と横長の中間形態」のものは６点出土しており、いずれも素材に縦長の剥片を用いている。

縦長･横長の形態については素材と形態がほぼ一致しており､形態を考慮した素材の選定がなされていたものと考えられる。

石器に打面が残っているものは合計19点である。このうち、打面の位置がつまみ部にあるものが18点、打面の位置がつまみ部とは反対側の先端に位置しているものが１点である。

製作技術Ⅱ（調整剥離技術）

つまみ部の製作技法

つまみ部は、基本的には両側辺から抉りを入れて作り出す。第128図1のように側辺の１辺は素材の形態を利用し､他の側辺に抉りを入れてつまみ部を作り出しているものも見られる。

左右の抉り調整方法には、両側辺とも両面調整のもの（１)、片側が両面調整で、他方が片面調整のもの（２)、片側だけ片面調整のもの（３）の３種類が認められた。１のタイプは28点、２のタイプは９点、３のタイプが１点である。両側辺とも片面調整のものは1点も認められなかった。

1のタイプや２のタイプのもので､抉りに施された調整剥離の切り合い関係から調整剥離の順序が判明しているものが14点ある。これらはいずれも片側の両面（片面）を調整してから他の側辺の両面(片面)を調整しているものであった。

調整剥離の方法

調整剥離は、基本的には一縁辺を連続的に剥離していく方法をとっている。つまみ部と刃部とを区別している左右の抉りの調整は、石器製作の最終段階に行なっている。

第124図３は両面調整の石器であるがｂ面側を調整剥離した後ａ面側を行なっている。

第124図１の先端は両面調整が行なわれ､断面が菱形につくられている。この石器の場合は、右側辺の両面を調整した後左側辺の両面を調整している。

第124図５、第125図３･５は同一の製作技法によって調整されている。第125図７、第126図３・６・７・８も破損品ではあるが同様の製作技法で製作されているものと考えられる。この

ような製作技法を持つものは合計８点出土しており、全体の約20%を占める。

第125図３を例として製作技法を復元して見たい。

第１段階　素材（縦長の剥片）の腹面の右側辺及び先端の調整を行なう。

第２段階　背面の左側辺及び先端の調整を行なう。左側辺は剥離角が40°前後と緩斜度であり、長さの長い調整となる。

第３段階　背面の右側辺の調整を行なう。右側辺は剥離角が60°前後と急斜度であり長さの短い調整となる。

第４段階　最終段階として左右の側辺に抉りを入れてつまみ部を作る。調整剥離の順序は、左側辺の背面側→左側辺の腹面側→右側辺の腹面側→右側辺の背面側の順である。

以上が第125図3の石器の大まかな製作工程である[注1)]。他の７点の石器についても素材や先端及び抉りの調整方法に若干の相違が認められるもののほぼ同一の技法をもって製作されている。これらの石器群の特徴をまとめてみると以下のようになる。

１．背面側は素材の面をほとんど残さないほど調整が施されているのに対して、腹面側は素材面を大きく残している。

２．背面側を正面に据えると左側辺は緩斜度で長さの長い調整が施され、右側辺は急斜度で長さの短い調整が施されている。

３.腹面の右側辺への調整は急斜度で長さの短い細かな調整がなされている。そして、この腹面側への調整は背面の左側辺の剥離調整の際にしばしば大きく取り除かれることがある。このようなことから、腹面の右側辺への調整は刃部を作り出すための調整と考えるよりも、背面の左側辺の剥離作業(緩斜度で長さの長い調整をする目的を持つ)のための打面を作り出すことを目的とした調整と考えられる。

４.左側辺は、いずれの石器も外方にふくらみ、刃部の凹凸が激しい。これに対して右側辺は、直線的なものと凹状に弯曲しているものとがあり刃部の凹凸は少ない。

５.石器の形態を検討するといずれも縦長の形態に限定される。

注1）このような技法を持つものは既に松原遺跡（秦昭繁：1977・11）で確認されている。

注2）このように意識的に打面を作り出し調整剥離をする作業を松原遺跡（秦昭繁：1977･11）の報告では「打面調整剥離技法」と呼んでいる。

石器の分類

第Ⅲ群石器を「平面形(全体の形態)」と「刃部先端の状態」とから分類を行ないたい。まず、本群の石器をつまみ部を上に据えたときの平面形(全体の形態)からⅠ類（縦長の形態）、Ⅱ類(横長の形態)、Ⅲ類（縦長と横長の中間形態）の３つに大別する。そして、これらをさらに「刃

第９表　第Ⅲ群石器の分類

平面形(全体の形態)	先　端　の　状　態
Ⅰ：縦長の形態	A ：先端が尖っているもの
	B_1：先端が丸くふくらんでおり、幅の狭いもの
	C_1：先端が平坦であり、幅の狭いもの
Ⅱ：横長の形態	B_2：先端が丸くふくらんでおり、幅の広いもの
	C_2：先端が平坦であり、幅の広いもの
Ⅲ：縦長と横長の中間形態のもの	A ：先端が尖っているもの
	B_1：先端が丸くふくらんでおり、幅の狭いもの
	C_1：先端が平坦であり、幅の狭いもの

部先端の状態」から細分すると第９表のようになる。

分類毎の出土点数を見ると、A類が７点、ＩＢ$_1$類が3点、ＩＣ$_1$類が７点、ⅡＢ$_2$類が３点、ⅡＣ$_2$類が１点、ⅢA類が２点、ⅢＢ$_1$類が２点、ⅢＣ$_1$類が２点である。ＩＡ・ＩＣ$_1$類が多い。

石器の機能

使用痕跡

使用痕跡にはアスファルト状の付着物・磨耗痕・線条痕・微小剥離痕(刃こぼれ)等がある。

第124図1の抉りの部分にはアスファルト状の付着物が認められた。この付着物は、左右の抉りの部分に斑状に付着した状態で認められ、つまみの部分や刃部には認められなかった。このようなアスファルト状の付着物は、上深沢遺跡（宮城県教委：1978・３）出土剥片石器第２群(石器の形態的特徴が本群と類似している石器群)の抉りの部分にも認められている。上深沢遺跡の報告では、アスファルト状の付着物が着柄のためのものか、それとも紐を巻きつけるためのものなのか現段階では明らかでないとしている。本遺跡においても、アスフフルト状の付着物が認められたのは1点だけであり、これがどのような意味を持つのかは十分に検討できなかった。

刃部には、耗痕・線条痕・微小剥離痕(刃こぼれ)が認められる。これらの中で磨耗痕は単独で認められる場合があるが、線条痕や微小剥離痕は例外なく磨耗痕と組み合わさって認め

第10表　刃部における使用痕跡のあり方

	刃部の状況	使　用　痕　の　範　囲		線条痕の方向
A	無調整刃部	刃部側縁		A_1 刃部側縁に平行
				A_2 刃部側縁に直交
				A_3 刃部側縁に斜方向
B	片面調整刃部	調整面	B_1 刃部側縁	
			B_2 刃部側縁と調整剝離の稜線上	
C	片面調整刃部	調整面（刃部側縁と調整剝離の稜線上）		
		無調整面		C_1 刃部側縁に平行
				C_2 刃部側縁に直交
				C_3 刃部側縁に斜方向
D	両面調整刃部	刃部側縁と調整剝離の稜線上		

られる。刃部における使用痕跡のあり方を刃部の状況、使用痕の範囲、線条痕の方向とによって整理すると第10表のようになる。

以上のように、刃部における使用痕跡のあり方には大きくA～Dの4種類が認められた。

使用痕跡と各類型に見られる関係

第11表は、使用痕跡とそのあり方について各類型（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類）毎にまとめたものである。これをもとに石器に認められる使用痕跡と各類型に見られる関係について若干の検討を行ないたい。なお、検討は県完形品及びほぼ完形なものを中心として行った。

第11表　各類型における使用痕跡の位置とそのあり方

分類		図版番号	左側辺	右側辺	先端
Ⅰ	A	第124図8	C	C	C
		第124図3	D	D	D
		第124図2	A_2	A_2	A_2
		第124図4	A_1	A_2	A_1
		第124図1	C_2	C	D
		第124図5	D	C_2	—
		第124図6	—	C_1	—
	B_1	第124図9	C_2	C	C_2
		第125図1	C	C_1	—
		第125図2	—	C	—
	C_1	第125図6	B_2	B_2	A_2
		第125図3	D	C_2	—
		第125図5	D	B_1	—
		第126図1	C_1	B_1	—
		第125図8	—	C_1	—
		第125図4	—	C_1	—
Ⅱ	B_2	第127図1	C	—	C_2
		第126図9	—	—	C_2
	C_2	第126図11	—	—	B_2
Ⅲ	A	第127図5	C_2	C_2	C_1
	B_1	第127図2	B_2	B	B_2
		第128図1	—	C	B_2
	C_1	第128図7	B_2	B_2	—
		第128図4	C_2	—	—

Ⅰ類：Ⅰ類は縦長の形態のものである。検討資料は16点である。

使用痕跡は、左・右の側辺と刃部先端に認められる。量的関係を見ると、右側辺に認められるものが16点（すべて資料に認められる）、次いで左側辺に認められるものが12点、刃部先端に認められるものが７点である。使用痕跡は、左・右の側辺に認められるものが多く、刃部先端に認められるものは全資料の半数にも満たない。また、刃部先端のみに使用痕跡が認められるものは、１点もない。以上のことからⅠ類は側辺が主要な刃部であったものと考えられる。

次に、側辺における使用痕跡のあり方を検討してみたい。両側辺に使用痕跡が認められるものから側辺における使用痕跡のあり方を検討してみたい。両側に使用痕跡が認められるものから側辺における使用痕跡のあり方を検討すると次の２種類が認められる。

１：左・右の側辺に同じ使用痕跡が認められるもの（第124図２・３・８・、第125図６）

２：左・右の側辺のそれぞれ異なった使用痕跡が認められるもの（第124図１・４・５・９、第125図１・３・５、第126図１）

１のタイプは、左・右の側辺が同じような使われ方をされ、２のタイプは左・右の側辺でそれぞれ異なった使われ方をされたものと考えられる。量的関係を見ると１のタイプのものが４点、２のタイプのものが８点で２のタイプが多数を占める。次に、この２種類のタイプの存在がどのような意味を持つのかを刃部形態を中心として検討してみたい。

１のタイプのものは、左・右の刃部の形態が近似しているもの（第124図2・3・8）と左・右の刃部の形態が異なるもの（第125図６）との二者がある。前者は３点、後者は１点であり

前者が多い。そして、第124図２・３・８のように左・右の側辺の中心線を軸とするとほぼ対称になるものが多い（対称となるもの３点、非対称となるもの１点）。

２のタイプのものにも、１のタイプ同様左・右の刃部の形態が近似しているもの（第124図９、第126図１）と左・右の刃部の形態が異なるもの（第124図１・４・５、第125図１・３・５）との二者がある。前者が２点、後者が６点で後者が多い。また、２のタイプは１のタイプと異なり、左・右の側辺の中心線を軸とすると非対称になるもの（第124図１・４・５、第125図１・３・５）が多い（非対称となるもの６点、対称となるもの２点）。

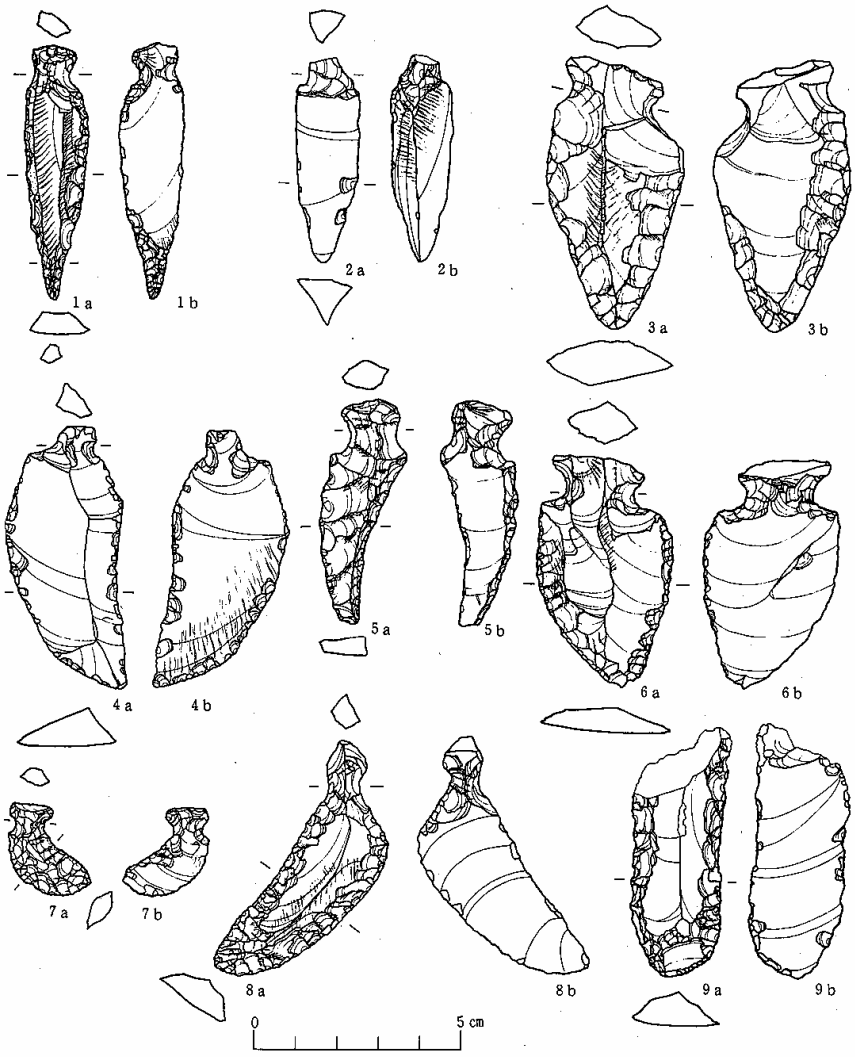
以上のことから、使用痕跡のあり方と刃部形態との関係を整理する。

１のタイプのように左・右の刃部に同じような使用痕跡が認められるものは、刃部の形態が近似するものや両側辺がほぼ対称になるものが多い。これに対して、２のタイプのように左・右の刃部にそれぞれ異なった使用痕跡が認められるものは、刃部の形態が異なっているものや両側辺が非対称になるものが多い。つまり、1のタイプでは第125図６、２のタイプでは第124図９・第126図１のような一部の例外を除くと刃部の形態と機能（使用痕跡）とは密接な関係があるものと考えられ、刃部形態によってそれぞれ使い分けがなされていたものと考えられる。Ⅰ類において、左・右の刃部形態が異なるものが多いということは注目される。第124図５・第125図３・５は、特徴的な同一の技法によって製作されている石器である。これらの石器は、製作技術の項で既に述べているように左・右の刃部形態が異なるように製作されており、使用痕跡は左・右で異なっている。ただし、これらの石器の場合緩斜度で凹凸の激しい左側辺の刃部の方が急斜度で凹凸の少ない右側辺の刃部よりも使用痕が顕著に観察されることが多く、主要な刃部は左側辺であった可能性が強い。

最後に、刃部先端における使用痕跡のあり方を検討して見たい。

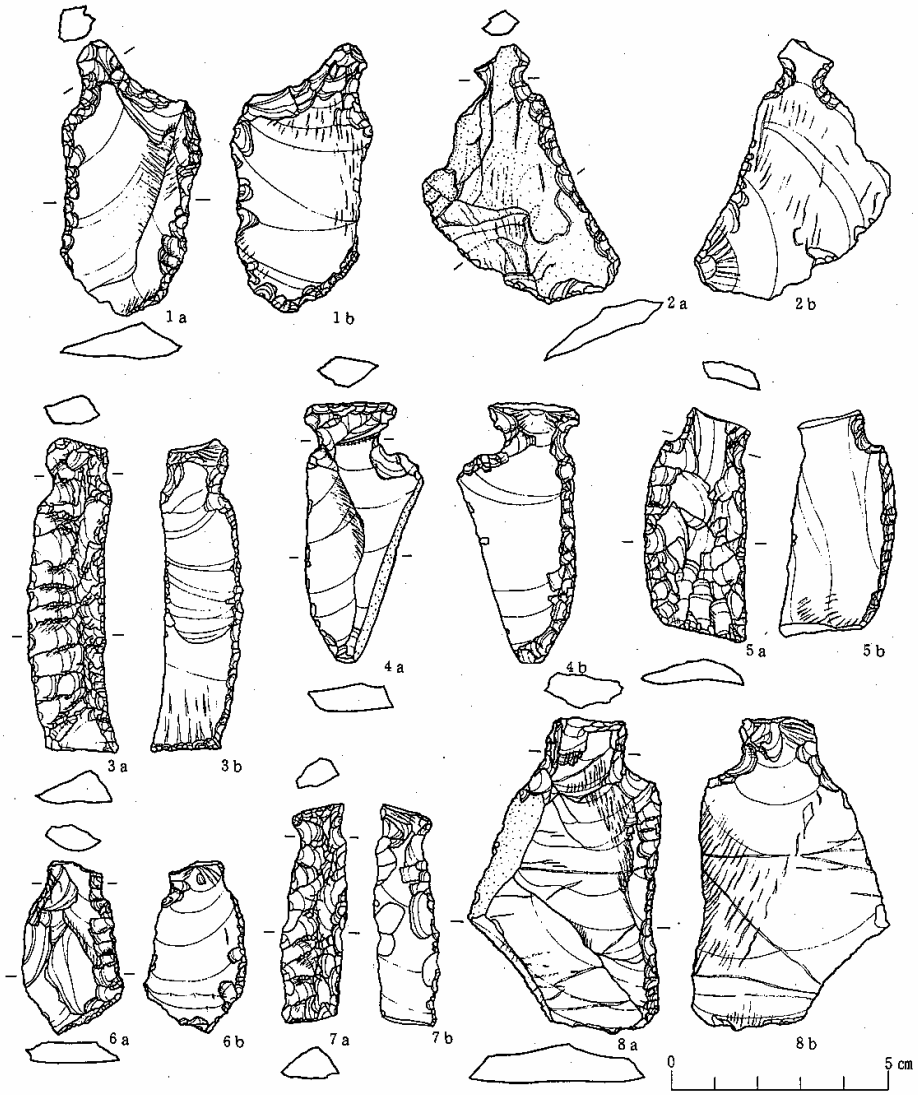
刃部先端に使用痕跡が認められるものは７点である。このうち、ＩＡ類に含まれるものが５点で最も多く、$ＩＢ_{1}$類、$ＩＣ_{1}$類に含まれるものが各々１点ずつで僅かである。つまり、刃部先端が尖っているものは刃部先端が使用されることが多く、刃部先端が丸くふくらんでいるものや刃部先端が平坦なものはほとんどの場合使用されなかったものと考えられる。このことは、Ⅰ類において主要な刃部が側辺であると考えられることからも当然の帰結である。しかし、刃部先端が尖っているものについては、刃部先端も側辺同様重要な意味を持っていたものと考えられる。

第124図１は、刃部先端に両面調整が施され、断面形が菱形になるように作られている。刃部全体（側縁と調整剥離面の稜線上）に微弱な磨耗痕が観察される。このような形態的特徴を持つものに第Ⅱ群石器の尖頭部がある。使用痕跡のあり方もほぼ共通しており、第Ⅱ群石器と同様な機能（穿孔具）が推定される。



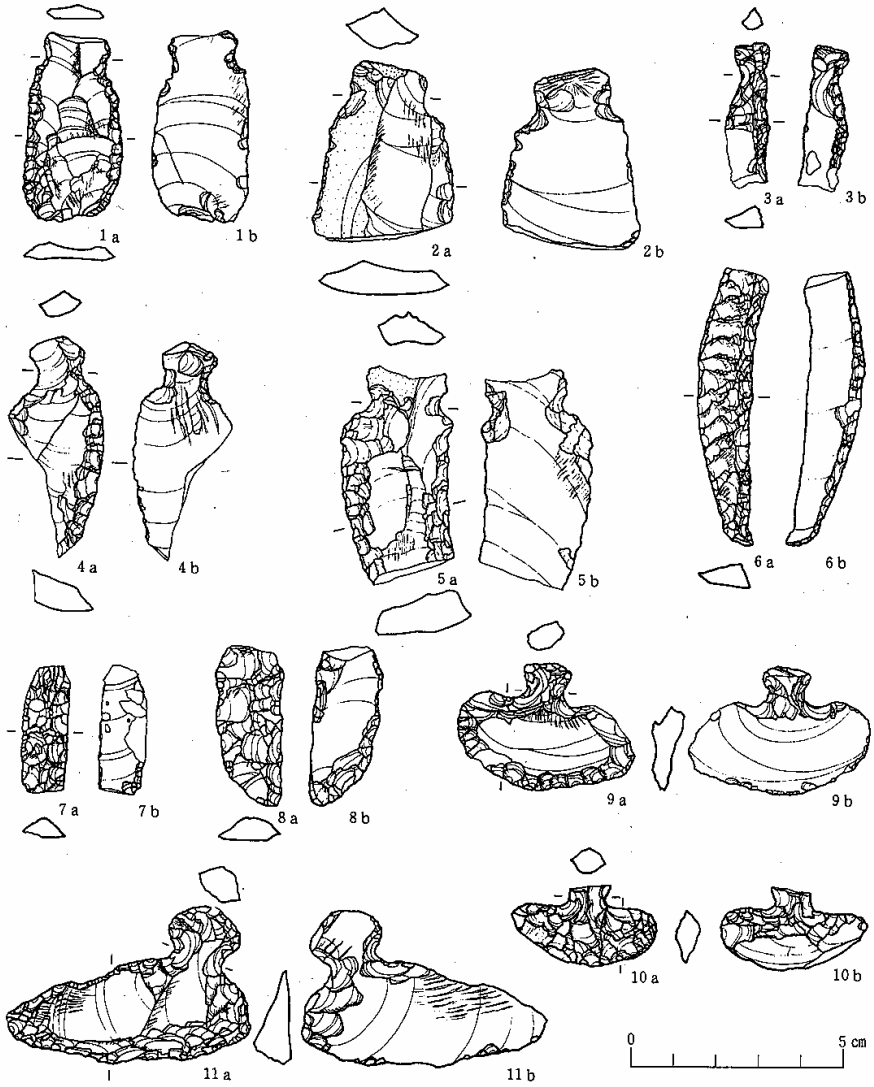
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	刃部角度(左・右・先)	重量(g)	分類	使用痕跡(左・右・先)	登録No	図版
1	第33－O区　第6層	61.25	16.5	4.5	70°　56°　——	5.1	IA	C_2　C　D	S.M. 626	46－15
2	第41－K区　第8層	(49.3)	18.0	1.3	55°　75°　——	(6.7)	IA	A_2　A_2　A_3	S.M.1229	46－16
3	第48－D区　第5層	66.5	34.0	11.2	69°　54°　——	22.2	IA	D　D　D	S.M. 36	46－17
4	第40－H区　第7層	65.0	29.0	10.2	47°　61°　——	14.5	IA	A_2　A_2　A_3	S.M.2167	46－18
5	第31－K区　第1層	54.0	21.7	6.5	47°　73°　——	4.7	IA	D　C_1　——	S.M. 70	46－19
6	第42－J区　第7層	52.5	34.0	10.3	49°　39°　——	4.3	IA	——　C_1　——	S.M. 27	46－20
7	第30－O区　第3層	26.0	18.5	3.85	41°　53°　——	1.2	IA	——　——　——	S.M. 811	46－24
8	第31－J区　第6層	58.25	36.7	9.3	56°　47°　——	12.0	IA	C　C　C	S.M. 34	46－23
9	第47－Q区　第3層	(61.0)	22.5	10.0	67°　51°　76°	13.1	IB_1	C_2　C　C_2	S.M.1846	46－21

第124図　第Ⅲ群石器(1)



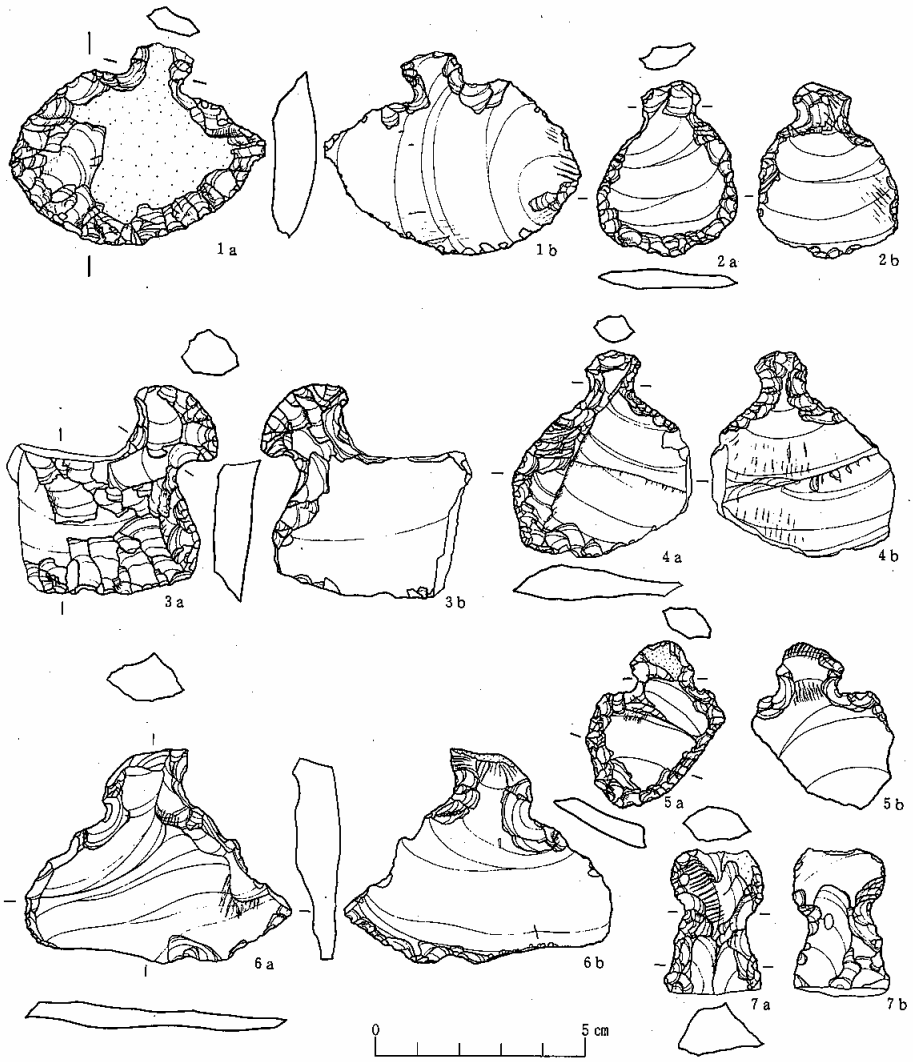
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	刃部角度(左・右・先)	重量(g)	分類	使用痕跡(左・右・先)	登録No	図版
1	第43－J区 第3層	64.5	32.5	8.7	36° 57° 60°	16.1	IB_1	C C_1 —	S.M.1887	46－22
2	第51－S区 第2層	61.5	36.0	8.5	— 51° —	15.2	IB_1	— C —	S.M.1216	—
3	第40－H区 第7層	74.2	20.5	7.2	55° 62° 66°	11.4	IC_1	D C_2 —	S.M. 106	47－1
4	第31－J区 第3層	60.7	31.0	7.0	60° ———	12.2	IC_1	— C_1 —	S.M. 153	47－2
5	第35－L区 第3層	(54.7)	24.0	5.8	60° 66° 57°	(8.3)	IC_1	D B_1 —	S.M. 43	47－3
6	第40－K区 第3層	40.5	23.0	6.5	73° 39° 85°	5.5	IC_1	B_2 B_2 A_2	S.M. 840	47－4
7	第23－L区 第1層	(51.5)	(15.5)	(7.7)	59° 57° —	(6.2)	I	D B_2 —	S.M. 21	47－5
8	第52－R区 第2層	74.5	43.0	10.0	— — 51°	28.9	IC_1	— C_1 —	S.M.1402	47－8

第125図　第Ⅲ群石器(2)



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	刃部角度(左・右・先)	重量(g)	分類	使用痕跡(左・右・先)	登録No	図版
1	第39－J区 第8層	45.0	23.0	4.3	46° 43° ——	4.5	IC₁	C₁ B₁ ——	S.M. 945	47－6
2	第41－K区 第8層	(43.0)	(33.4)	(8.7)	80° 68° ——	(11.8)	I	B₂ B₂ ——	S.M. 299	47－7
3	第42－J区 第8層	(34.0)	(10.0)	(4.0)	57° 63° ——	(1.6)	I	D —— ——	S.M. 2174	47－9
4	第35－K区 第5層	(52.0)	(22.5)	(7.65)	—— 48° ——	(6.1)	I	—— B₁ ——	S.M. 945	47－10
5	X － X	(50.5)	(28.6)	(8.4)	69° 65° ——	(13.9)	I	C C₂ ——	S.M. 2008	47－11
6	第40－J区 第5層	(65.0)	(16.0)	(5.8)	55° 70° ——	(10.0)	I	D —— D	S.M. 30	47－12
7	第31－J区 第6層	(30.5)	(10.8)	(5.0)	51° 59° ——	(1.8)	I	D B₁ ——	S.M. 35	47－13
8	第27－K区 第6層	(38.0)	(16.0)	(5.9)	36° 67° ——	(4.0)	I	D B₁ ——	S.M. 25	47－14
9	第35－J区 第7層	42.5	30.0	7.8	49° 61° 57°	6.8	IIB₁	—— —— C₂	S.M. 13	47－16
10	第31－J区 第5層	32.5	21.5	6.2	44° 65° 44°	3.3	IIB₂	—— —— ——	S.M. 16	47－17
11	第48－P区 第5層	58.0	39.0	10.3	67° 69° 70°	16.6°	IIC₂	—— —— B₂	S.M. 37	47－20

第126図　第Ⅲ群石器(3)



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	刃部角度(左・右・先)	重量(g)	分類	使用痕跡(左・右・先)	登録No	図版
1	第43－J区 第6層	61.0	49.0	11.5	46° 50° 47°	27.1	ⅡB₂	C —— C₂	S.M. 781	47－19
2	第38－J区 第8層	42.5	33.25	5.6	48° 53° 52°	7.1	ⅢB₁	B₂ B₂ B₂	S.M.1589	47－18
3	第41－K区 第7層	(50.7)	(50.0)	(11.4)	—— 72° 36°	(26.3)	——	—— —— B₁	S.M.1029	48－4
4	第27－L区 第4層	50.7	(43.0)	7.2	49° 44° ——	(12.7)	ⅢA	C₁ —— ——	S.M.1350	47－15
5	第49－Q区 第3層	37.0	29.0	5.7	56° 67° ——	7.2	ⅢA	C₂ C₂ C₁	S.M.1055	48－3
6	第35－K区 X 層	(63.5)	(51.4)	10.8	—— —— 56°	24.8	Ⅱ	—— —— B₂	S.M.1263	48－7
7	第41－K区 第7層	(34.8)	(23.0)	(10.75)	—— —— ——	(9.2)	——	—— —— ——	S.M. 319	48－6

第127図 第Ⅲ群石器(4)

番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	刃部角度(左・右・先)	重量(g)	分類	使用痕跡(左・右・先)	登録No	図版
1	第44－K区 第2層	54.0	36.0	9.0	―― 53° 85°	14.6	ⅢB₁	―― C B₂	S.M. 14	――
2	X － X	(13.5)	(18.6)	(6.0)	―― ―― ――	(1.3)	――	―― ―― ――	S.M.2301	――
3	第41－K区 第7A層	(25.3)	(25.0)	(5.0)	―― ―― ――	(4.3)	――	―― ―― ――	S.M.2336	――
4	第41－K区 第7層	42.5	32.7	7.7	70° ―― 75°	10.8	ⅢC₁	C₂ ―― ――	S.M. 318	48－1
5	第49－Q区 第3層	(77.0)	(54.4)	(17.0)	―― ―― ――	(46.0)	――	―― ―― ――	S.M.1054	48－8
6	第40－K区 第8層	(41.0)	(32.7)	(8.6)	―― ―― ――	(6.7)	Ⅱ	―― ―― ――	S.M.1381	48－5
7	第39－M区 第5層	37.25	29.0	8.9	82° 79° 89°	11.8	ⅢC₁	B₂ B₂ ――	S.M. 104	48－2

第128図　第Ⅲ群石器(5)

Ⅱ類：Ⅲ類は横長の形態のものである。検討資料は３点である。

使用痕跡は、左側辺と刃部先端に認められる。いずれの石器も刃部先端には使用痕跡が認められるが側辺に使用痕跡が認められたもの(左側辺に認められた)は１点のみである。

第127図１のように左側辺と刃部先端に使用痕跡が認められたものもあるが、刃部先端の方使用痕跡が顕著であった。以上のことから、Ⅱ類は刃部先端が主要な刃部であったものと考えられる。

Ⅲ類：Ⅲ類は縦長と横長の中間形態のものである。検討資料は５点である。

使用痕跡は、左・右の側辺と刃部先端に認められる。左側辺に認められるものが４点、右側辺に認められるものが４点、刃部先端に認められるものが３点であり使用痕跡の位置に特別な偏りは認められなかった。第128図４・７は一度刃部先端が欠損し、その後で刃部の再生を行なっている特別なものである。刃部先端には使用痕跡は観察されなかった。Ⅲ類については、Ⅰ・Ⅱ類と異なり使用痕跡のあり方と類型との関係を明らかにすることはできなかった。

第Ⅳ群石器（第129図）

平面形が三角形または楕円形を基本とし、最大幅のある位置に急斜度の刃部を作り出している。大きさは最大長で５～７cm前後である。刃部には幅の狭い細かい調整剥離が施されている。以上のような特徴をもつ石器を第Ⅳ群石器とした。

第Ⅳ群石器は合計４点出土している。このうち、完形品が3点、破損品が1点である。破損品は基部の一部が破損しているものである。

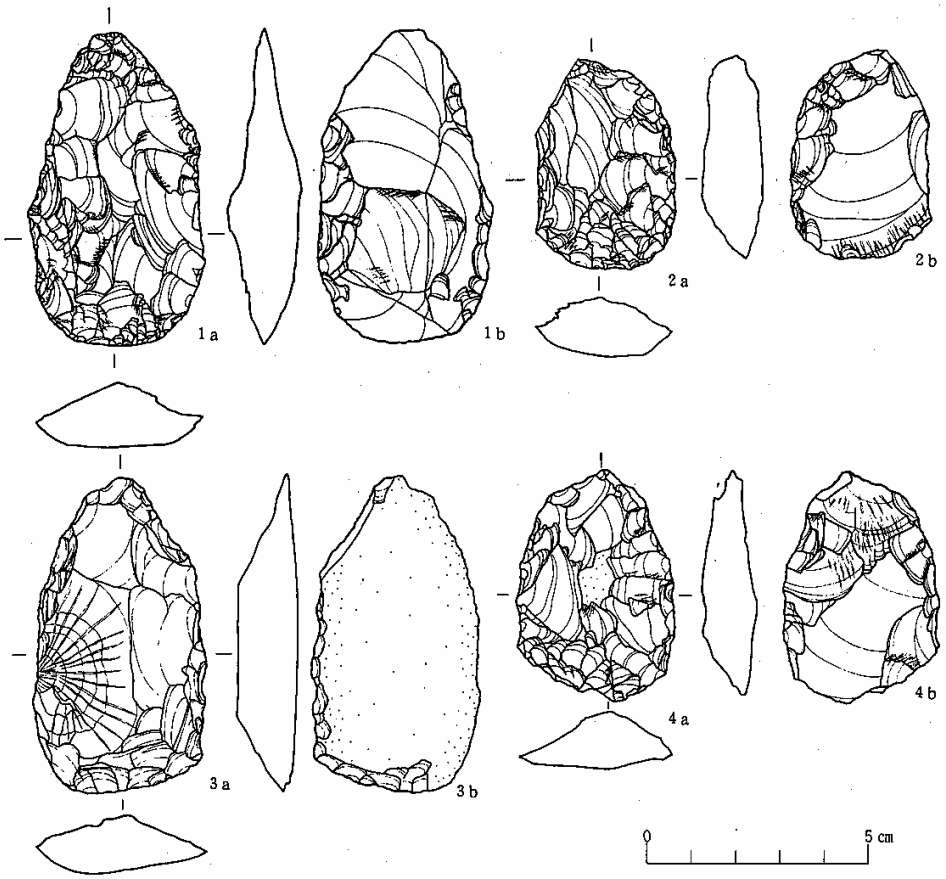
平面形には三角形を基本としているもの(１・３)と楕円形を基本としているもの(２・４)との２類が認められる。前者は基部の幅が狭く、基部から刃部へと広がる三角形のもので、後者は前者程刃部の開きが顕著ではなく、僅かに広がっているだけのものである。前者も後者も最大幅は刃部付近にある。

横断面形は、いずれも凸レンズ状を呈している。

大きさは最大長が5.25～7.15cm、最大幅が3.5～3.75cm、最大厚が1.22cm～1.5cmの間である。最大厚の位置は、いずれも刃部もしくは刃部に近い部分にある。最大長からみると第Ⅳ群石器の大きさには次の２種類が認められる。すなわち、最大長が7cm前後のものと最大長が5cm前後のものである。

第Ⅳ群石器はいずれも素材が判明している。素材には横長剥片を使用しているもの(１・３)と縦長剥片を使用しているもの（２・４）とがある。横長剥片を使用しているものも縦長剥片を使用しているものも２点ずつである。横長剥片のものはいずれも打面が刃部の左側縁の方向(腹面を正面に据えると)にある。縦長剥片のものは打面の方向がいずれも基部側にある。

４点とも片面にはほぼ全面に調整剥離(背面側に調整剥離が施されているもの３点、腹面側のものは１点)が施されているが、反対側の面には部分的に調整が施されているだけである。反対側の面に見られる部分調整は、刃部を作り出すものではなく、バルブを除去するためのものであったり、石器の形態を整えるためのものであったりするものと思われ、調整の位置や剥離の方法に規則性が見られない。なお、刃部は片面調整のものが主体を占めるが、僅かに１点だけ両面に調整が施されているものがある(３)。刃部に両面調整が施されているものについては片面の調整が極めて粗雑（刃部全体に及んでいない）であり、刃部を形成する意図をもって施されたものとは考え難く、基部の側縁に見られる調整と同様に石器の形態を整えるためのも



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	刃部角度(左・右・先)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	第37－K区　第７層	71.0	37.5	15.4	55°　43°　58°	36.6	――	S.M. 29	48－9
2	第42－J区　第８層	(47.25)	(31.0)	12.2	――　55°　65°	22.4	――	S.M. 109	48－11
3	第36－J区　第９層	71.5	37.0	15.0	――　57°　68°	45.0	――	S.M. 261	48－10
4	第40－J区　第７層	52.25	35.0	12.45	54°　51°　69°	22.5	――	S.M. 604	48－12

第129図　第Ⅳ群石器

のであると考えられる。つまり、本群の刃部は基本的には片面調整を意図して作られているものと考えられる。

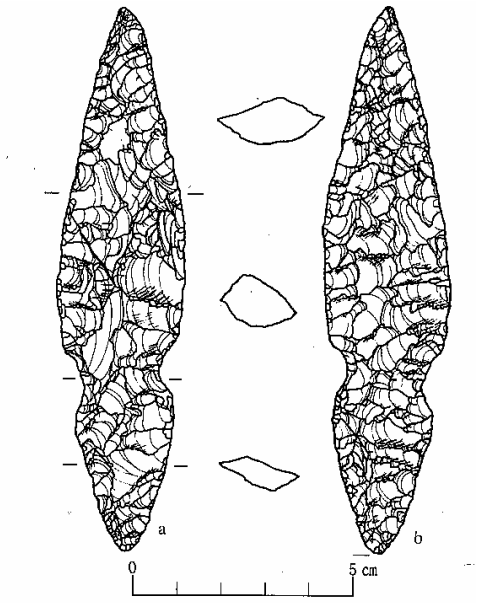
刃部への調整剥離はいずれも基部に施された調整剥離よりも幅の狭い細かな調整剥離が施されている。従って、刃縁は凹凸の少ない平坦な刃部となっている。

第Ⅳ群石器の刃部にはいずれも使用痕跡と考えられる磨耗痕が観察された。磨耗痕の位置には刃部側縁に認められるもの(１・３・４)と刃部全体(刃部の調整剥離面側と無調整面側)に認められるもの(２)とがある。２の刃部は肉眼で観察できる程磨耗している。磨耗は調整剥離面側よりも無調整面側に顕著に認められた。無調整面側には線条痕や微小剥離痕も観察された。線条痕は刃部側縁にほぼ直交するもので、刃部側縁と刃部側縁に近い部分に認められる。

その他の剥片石器 (第130図～第136図)

第130図は、全体の形態が柳葉形で横断面形が凸レンズ状を呈する鋭利な尖頭部を持つものである。尖頭部とは反対側には左右の側辺から抉りを入れて「つまみ状」の基部を作り出している。抉りから基部端までの長さを１とすると、抉りから尖頭部先端までの長さは、およそその2倍にあたる。

大きさは最大長が12.5cm、最大幅が2.35cm、最大厚約1.32cmである。最大幅と最大厚の位置は石器のほぼ中央である。重量は36.1gと重い。本石器と同様に鋭い尖頭部を持つものに第Ⅰ群石器があるが、これらの重量の平均は約1.5gであり、本石器はそのおよそ24倍にあたり重量の上ではるかに重い。



第130図　その他の剥片石器(1)

調整剥離は素材の形態が不明になるほど全面に入念に施されている。抉りは調整の最終段階に入れられており、左側辺ではａ面側を剥離した後ｂ面側を行ない、右側辺ではｂ面側を剥離した後ａ面側を行なっている。

第131図１～３は剥片の３辺(打面側を除いて)に平坦な細かい調整剥離が施されている。特に、石器の下端には急斜度な傾斜を有する刃部が作り出されており特徴的である。

調整剥離は、第131図１の下端と第131図３の右側辺は両面調整であるが、その他はいずれも片面調整である。

刃部の側縁や調整剥離面の稜線上には磨耗痕が観察される。第131図１の右側辺の無調整面には刃部側縁に対して平行な線条痕、第131図２・３の下端の無調整面には刃部側縁に対して斜方向の線条痕が観察される。

第131図４は、左右の側辺に両面調整の刃部を有する石器である。a面側には粗い調整剥離が全面に施されており、ｂ面側の左右の側辺には細かい調整剥離が施されている。従って、左右の側辺は両面調整となっており、下端は片面調整となっている。左右の両面調整剥離面の側縁と調整剥離面の稜線上には磨耗痕が観察される。下端には使用痕が認められなかった。

第131図５～９、第132図１～３は大きさが２～５㎝と小形の石器である。形態には三角形を基本とているものと楕円形を基本としているものがある。調整剥離には、縁辺に細かな調整剥離が施されているもの（第131図５・６・９、第132図１～３）と粗い調整剥離が施されてるもの（第131図７・８）とがある。第131図７・第132図１・２は上端及び左右の側辺、第131図８は上端、第131図９は下端に磨耗痕が観察される。

第132図４・５は石器の下端が鋭利に作り出されている。第132図４の左側辺は、平坦な細かな調整剥離が施されており、片面調整の急斜度な刃部となっている。第132図５は両面調整の石器である。刃部の凹凸は激しい。第132図４は左側辺及び右側辺の下部、第132図５は左・右の側に磨耗痕が観察される。下端の鋭く尖っている部分も比較的よく磨耗している。第132図４の左側辺の無調整面には斜方向の線条痕が観察される。

第132図６・７は全面に粗い調整剥離が施されており形態が楕円形のものである。第132図６は平面形が長楕円形の厚手の石器である。上端と下端は両側縁よりもやや細かな調整剥離が施されている。第132図６は側縁全体に磨耗痕が観察されるが特に上端と下端の磨耗が著しい。上端の両調整剥離面には刃部側縁に直交する線条痕が観察される。第132図７は偏平な楕円形の石器である。上端の刃部側縁にのみ磨耗痕が観察された。

第133図１は、上端を平坦に下端を丸くしている。この石器は左側辺と上端、右側辺の一部に刃部の再生が認められる。下端の両調整剥離面には磨耗痕や斜方向の線条痕が観察される。下端の磨耗は著しい。

第133図４は、左側辺に抉りを入れて「つまみ」状の部分を作り出している石器である。大きさは、最大長が14.0㎝、最大幅が4.4㎝、最大厚が1.4㎝と大形で、重さも64.8gと重いもので重量感のある石器である。刃部は左側辺にのみ認められ、両面調整の鋭角的な刃部である。右側辺には樋状の細長い剥離が施されている。抉りは、ｂ面側からの加撃によって入れられている。使用痕跡としては左側辺の刃部側縁に微弱な磨耗痕が観察された。

第133図３は、長楕円形の偏平な石器である。両面調整の刃部を有している。打面は除去されている。左右の刃部側縁には磨耗痕が観察された。

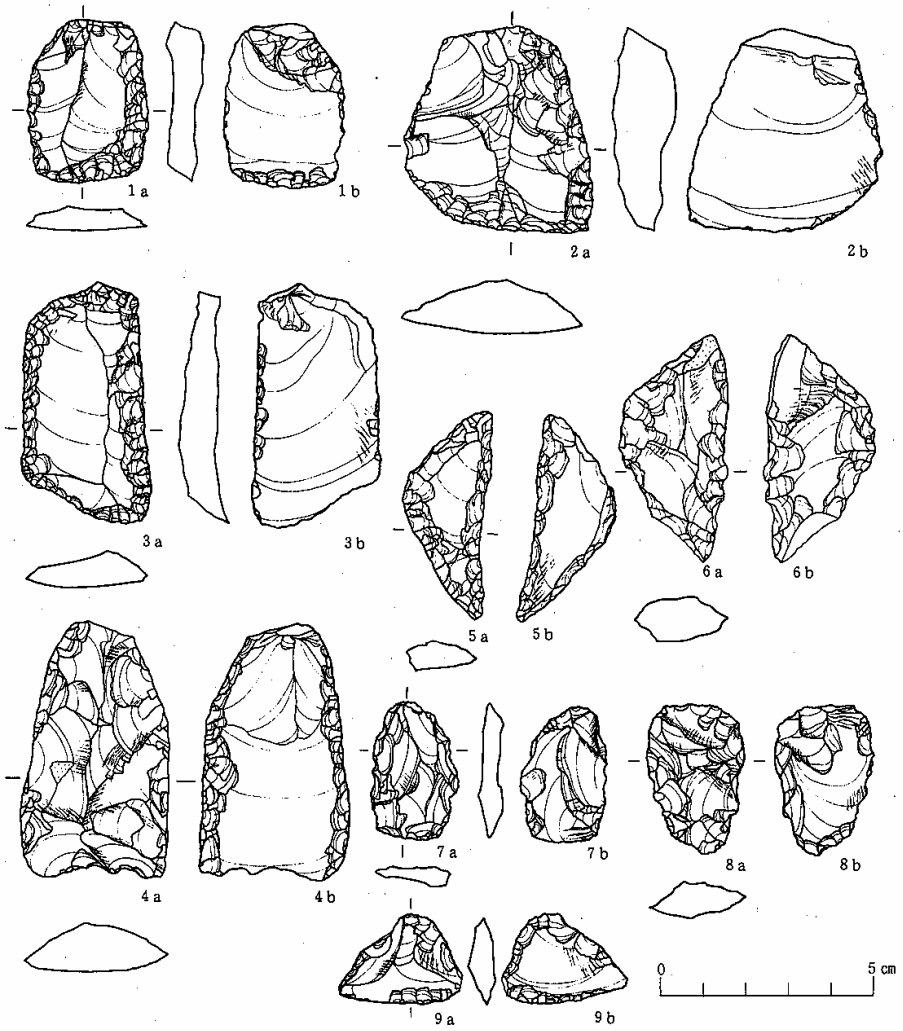
第133図５は、下端に平坦な刃部が作られている。下端の刃部の一部は両面調整となっている。

第133図２、第134図、第135図１～３、第136図２・３・５は平坦な細かい調整剥離が施された刃部角60°以下の緩斜度な傾斜の刃部を有している。刃部は片面調整のものがほとんどであるが第133図２、第134図２、第135図１・２、第136図３のように両面調整（縁辺の一部が両面調整のものも含む）の刃部を有しているものも認められる。調整剥離は、一辺に施されているもの（第133図２、第134図１～４・６、第135図２・５）、二辺に施されているもの（第134図５・７、第135図１・２、第136図３）、三辺に施されているもの（第135図３）の三者が認められる。

いずれの石器も調整剥離が施されている刃部の側縁や調整剥離面の稜線上に磨耗痕が観察される。また、刃部の無調整剥離面側に線条痕が観察されるものもある。線条痕には刃部側縁に対して平行なもの（第134図３の左側辺、第134図６の右側辺）、刃部側縁に対して斜方向なもの（第134図５の左右の側辺、第136図５の左側辺）、刃部側縁に対して直交するもの（第134図１の左側辺）の３種類が認められる。第134図２の右側辺、第134図４の左側辺、第134図６の左側辺と下端、第135図５の右側辺は無調整な刃部であるが、刃部側縁には磨耗痕が観察される。第136図５の右側辺の腹面側には刃部側縁に直交する線条痕が観察される。

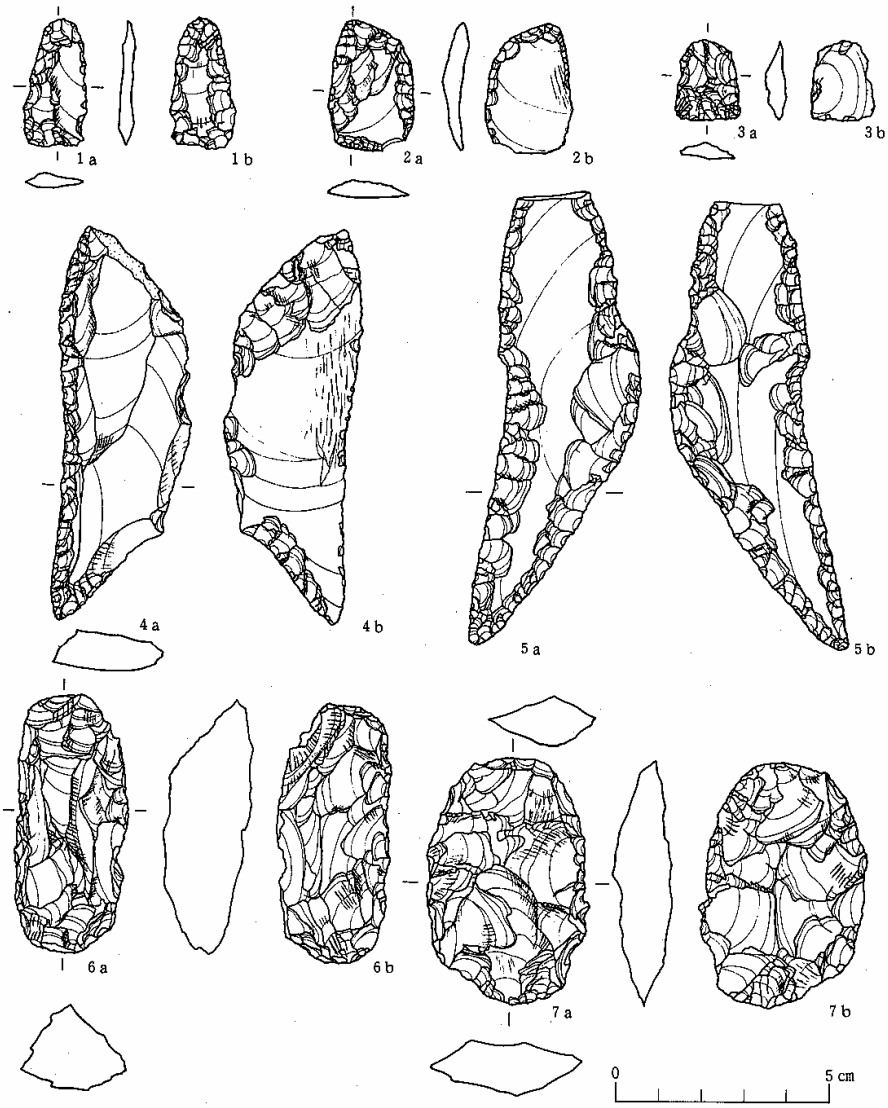
第133図６、第135図４～６、第136図４は、刃部角が60°以上の急斜度な調整剥離が施された片面調整の刃部を有するものである。調整剥離の範囲を見ると一辺を調整したもの（第135図５・６）と二辺を調整したもの（第133図６、第135図４、第136図４）との２種類がある。いずれの石器も刃部側縁や調整剥離面の稜線上には磨耗痕が観察される。第135図５・６、第136図４の左側辺は無調整の刃部であるが側縁には磨耗痕が観察される。第135図４・第136図４の右側辺の無調整西側には斜方向の線条痕が観察される。

第136図１は、石器の中央に抉りを入れているものである。刃部には粗い調整剥離が施されている。刃部の調整剥離面側に磨耗痕、無調整西側に刃部側縁に直交する線条痕が観察される。また右側辺の無調整な刃部の側縁にも磨耗痕が観察される。



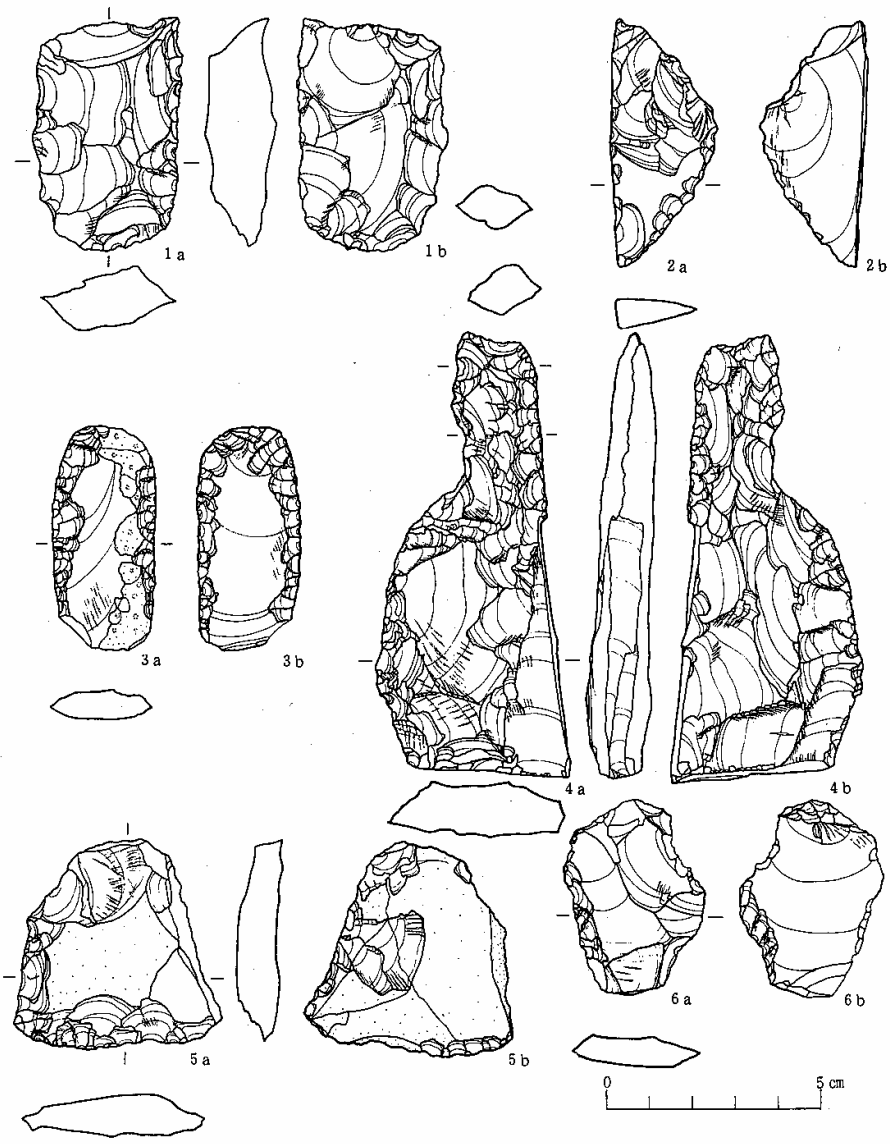
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	刃部角度(上・下・左・右)	重量(g)	登録No	図版
1	第37区－K区 第 5 層	39.0	28.5	8.4	— 63° 42° 47°	10.2	S.M. 23	49－1
2	第39区－K区 第 6 層	48.0	44.2	14.2	— 66° 44° 52°	28.4	S.M. 8	49－2
3	第41区－K区 第7A層	57.0	30.0	9.4	— 61° 52° 52°	18.5	S.M.2337	49－3
4	第23区－M区 第 9 層	60.6	35.0	13.0	— 56° 72° 68°	28.7	S.M. 15	49－4
5	第43区－K区 第 5 層	49.0	19.8	7.65	— — 101° 79°	10.3	S.M.2178	49－5
6	第43区－H区 第 4 層	53.0	35.8	10.7	— — 79° 84°	13.6	S.M.1032	49－6
7	X － X	32.4	20.8	5.9	— 73° 57° 68°	3.7	S.M.2150	49-7·11
8	第41区－K区 第7A層	35.5	23.0	9.6	58° — 45° 54°	6.7	S.M.2328	49－8
9	第27区－K区 第 6 層	29.0	21.0	6.5	— 61° 73° 63°	3.4	S.M.2054	49－9

第131図　その他の剝片石器(2)



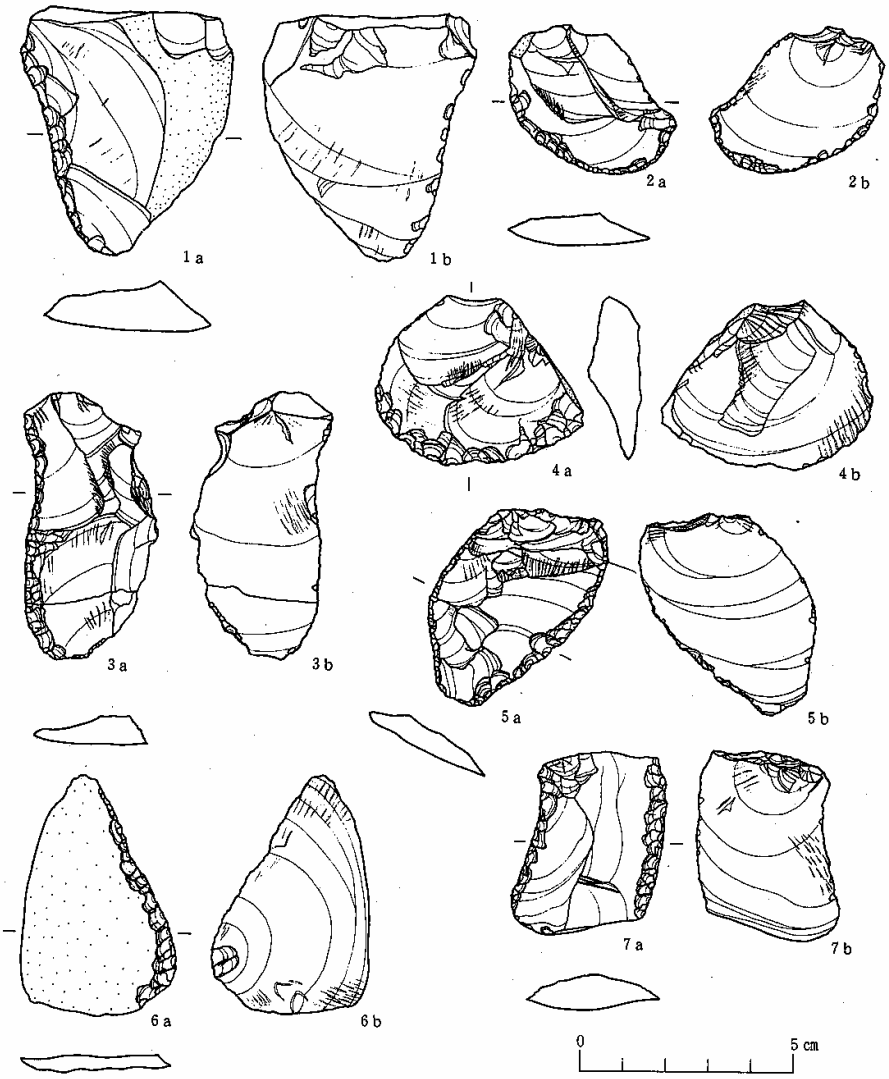
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	刃部角度(上・下・左・右)	重量(g)	登録No	図版
1	第31－J区 第5層	31.3	15.5	3.5	— 36° 49° 51°	1.8	S.M. 167	49—10
2	第40－J区 第5層	30.6	20.0	4.0	37° 32° 40° 29°	2.7	S.M. 901	——
3	第27－L区 第1層	19.0	15.0	4.3	25° 45° 36° 43°	1.4	S.M. 181	49—12
4	X － X	93.0	32.9	9.25	— — 63° 61°	32.3	S.M.2234	49—15
5	第41－J区 第7層	109.0	34.5	16.1	— — 69° 79°	43.3	S.M.1521	49—16
6	第37－K区 第7層	60.0	27.0	20.04	91° 82° 88° 88°	36.1	S.M.1036	49—13
7	第41－K区 第4層	58.0	38.2	13.8	84° 64° 72° 49°	31.8	S.M.1169	49—14

第132図　その他の剥片石器(3)



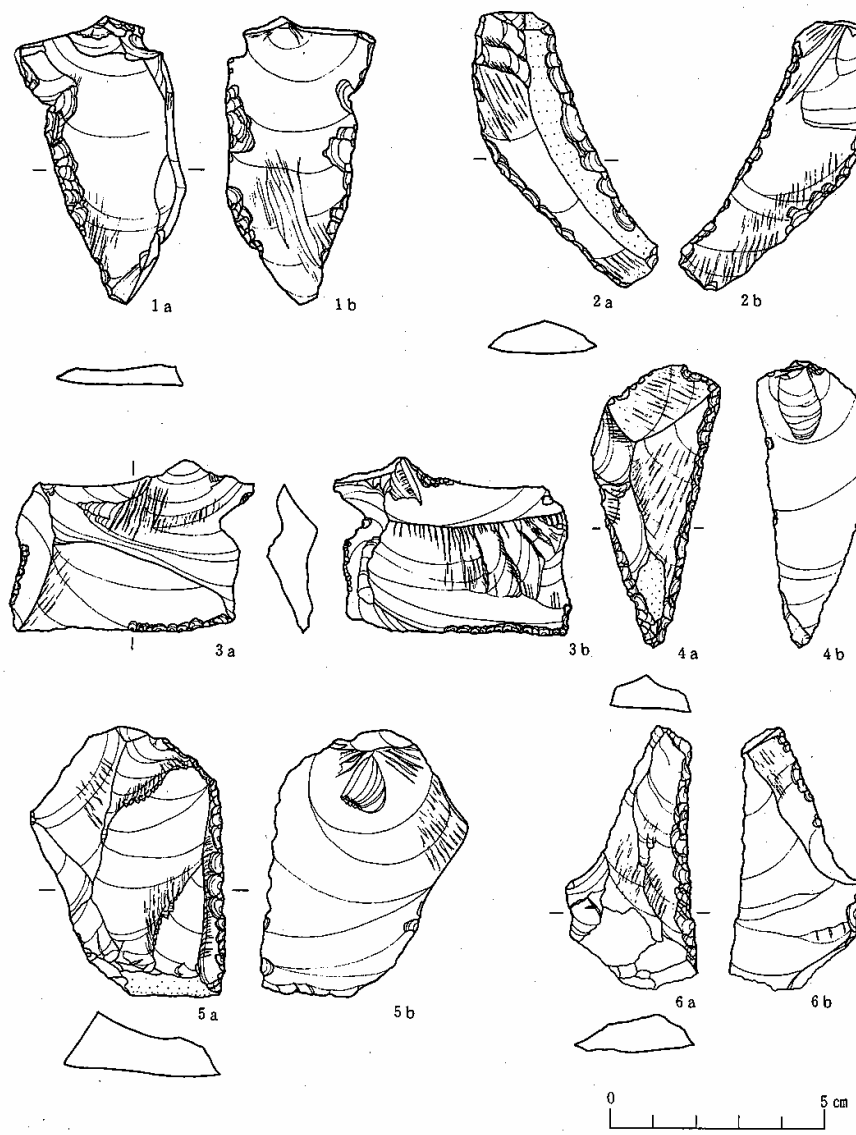
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	刃部角度(上・下・左・右)	重量(g)	登録No	図版
1	第40区－K区　第7b層	55.0	34.8	16.6	60°　59°　74°　72°	31.3	S.M. 774	——
2	第42区－K区　第7A層	58.0	25.0	9.25	—　—　—　42°	10.9	S.M. 184	49－17
3	第43区－J区　第 5 層	52.5	24.3	11.65	—　—　75°　77°	15.5	S.M. 65	49－18
4	第42区－K区　第 5 層	140.0	44.8	14.4	—　—　49°　—	64.8	S.M. 6	50－1
5	第37区－N区－1住埋1	49.0	48.6	1.0	—　55°　57°　—	26.3	S.M. 2142	50－2
6	第36区－L区　第 4 層	45.5	33.0	7.2	—　—　54°　71°	12 8	S.M. 19	50－3

第133図　その他の剝片石器(4)



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	刃部角度(上・下・左・右)	重量(g)	登録No	図版
1	X － X	57.4	49.5	18.2	— — 49° —	36.4	S.M.2020	——
2	第35－J区 第7層	39.5	35.1	8.0	— 49° 42° —	9.6	S.M. 12	50－4
3	第41－K区 第7層 第40－K区 第7B層	62.5	31.5	12.0	— — 56° —	17.7	S.M. 327 S.M. 773	51－5
4	第42－K区 第7層	49.2	40.0	12.9	— 48° — —	17.5	S.M.2145	50－5
5	第42－K区 第6層	53.8	33.8	7.2	— — 55° 44°	11.8	S.M. 470	50－6
6	第45－K区 第2層	56.0	36.2	4.2	— — — 42	8.7	S.M. 227	50－7
7	第40－K区 第8層	43.0	36.0	9.65	— — 49° 47°	14.4	S.M.1072	——

第134図　その他の剝片石器(5)



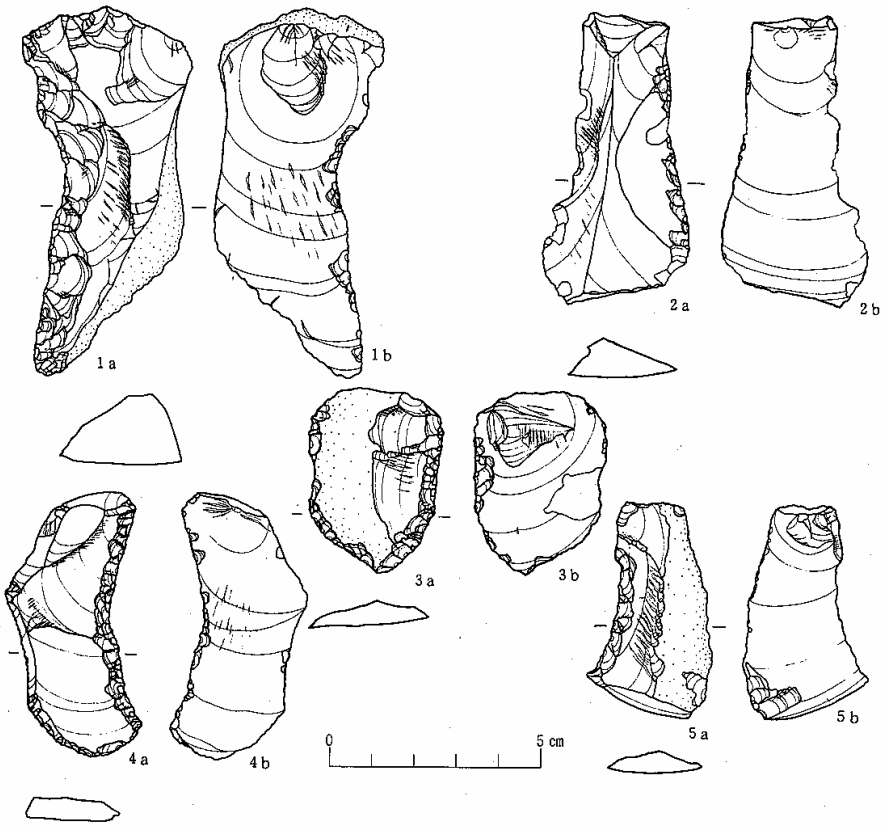
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	刃部角度(上・下・左・右)	重量(g)	登録No	図版
1	第40－J区 第5層	67.4	39.5	7.0	— — 38° —	15.1	S.M. 31	50－8
2	第48－P区 第5層	64.3	43.0	8.0	— — 59° 60°	14.0	S.M. 37	50－9
3	第43－H区 第4層	59.0	38.5	10.0	— 75° 80° 67°	23.8	S.M.1029	50－10
4	第38－J区 第4層	79.8	30.0	15.7	71° — 66° 74°	18.0	S.M.2351	50－11
5	第51－R区 第2層	63.0	45.5	13.0	— — — 72°	40.7	S.M.1132	51－1
6	第51－R区 第2層	61.5	30.0	9.2	— — — 67.3°	13.4	S.M.2327	51－2

第135図　その他の剝片石器(6)

磨製石斧（第137図）

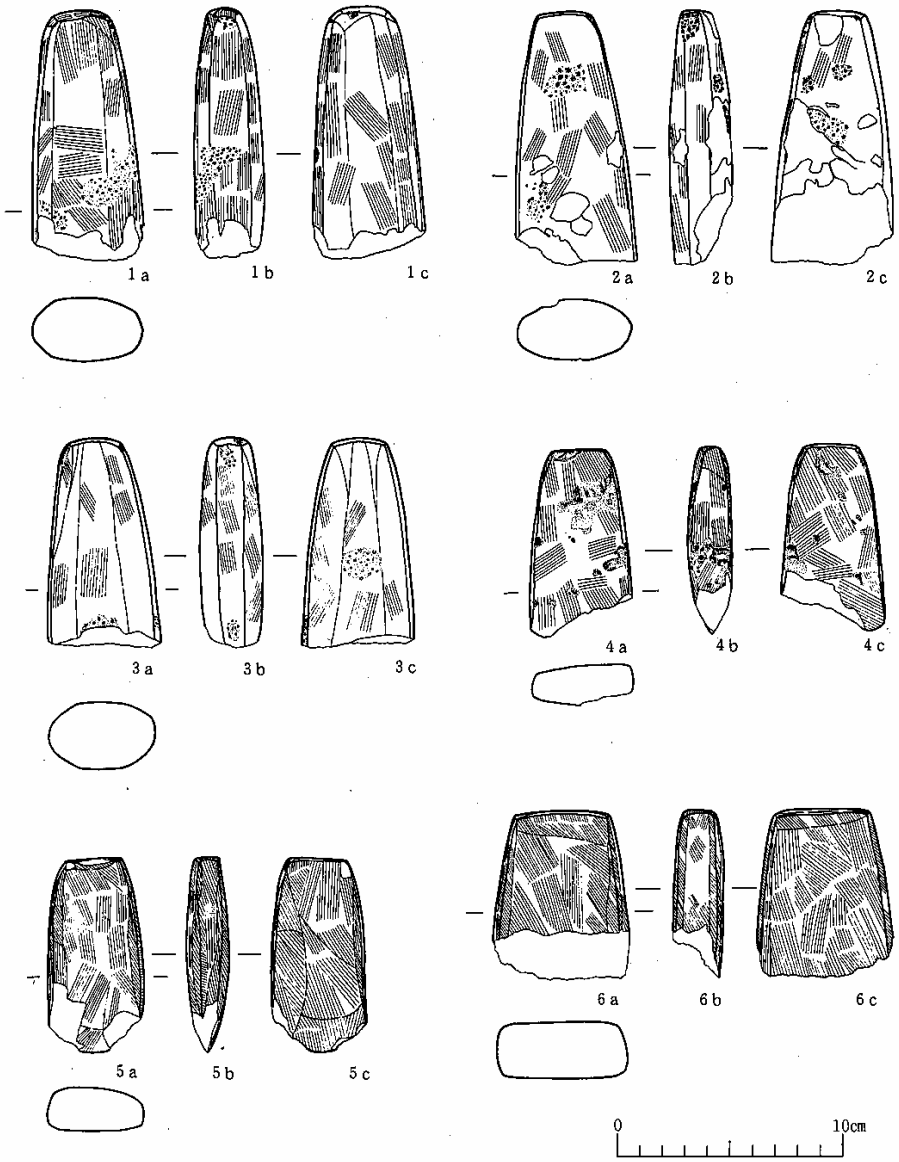
形態が斧状のもので基部と刃部とからなる磨製石器を磨製石斧とした。合計６点出土しており、すべて破損品である。いずれも基部上半よりも下半が広くなっているが細部の違いから大きく次の２類に分けることができる。

Ⅰ類：基部端がわずかな丸味を持ち側縁との境が不明瞭で、胴部の断面形が楕円形のもの（１～３）



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	刃部角度(上・下・左・右)	重量(g)	登録No	図版
1	X － X	88.0	40.0	15.5	— — 57° —	53.4	S.M.2350	51－4
2	第40－K区 第３層	69.1	34.5	10.0	— — — 44°	20.9	S.M. 7	51－3
3	第45－Q区 第５層	43.7	31.6	10.6	— — 56° 62°	13.0	S.M. 512	51－8
4	X － X	63.3	33.0	7.7	— — 61° 61°	13.6	S.M.2352	51－6
5	第31－J区 第５層	50.0	29.9	7.0	— — 49° —	9.2	S.M. 992	51－7

第136図　その他の剝片石器(7)



番号	地区・層位	長さ(mm)	基部幅(mm)	刃部幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	X － X	(112.0)	32.0	――	(31.0)	(310)	I	S.M. 47	51－9
2	第43－J区 第3層	(113.5)	24.5	――	(27.0)	(368)	I	S.M. 685	51－10
3	第39－K区 第7層	(94.0)	23.0	――	(27.5)	(220)	I	S.M. 252	51－11
4	X － X	(84.0)	23.0	――	20.0	(112)	II	S.M. 42	51－12
5	第45－K区 第2層	87.0	11.0	――	19.0	(120)	II	S.M. 230	51－13
6	第40－J区 第8層	(75.0)	42.0	――	(22.0)	(195)	II	S.M. 76	51－14

第137図　磨製石斧

Ⅱ類：基部端が平坦で側縁との境に明瞭な稜を持ち、胴部の断面形が隅の角張った長方形もの（４～６）

Ⅰ類はいずれも刃部を欠損している。Ⅰ類と比較すると厚手で、基部から丸味への開きが少ない棒状の石斧である。最大長10cm以上でやや大形のものである。

Ⅱ類は、いずれも刃部を欠損している。４・５は刃部の一部が残っており、側面の中心線が刃縁を通る両刃の刃部を有している。大きさは刃部の一部が残っているもので最大長が８cm程であり、Ⅰ類よりもやや小形である。刃部の破損状況を見ると刃部が全くないもの（６）、刃部の中央を残し両端が欠損しているもの（５）、刃部の片側が欠損しているもの（４）の三者が認められる。後二者は、いずれも刃線と側縁とでできる角を中心に破損しており、刃部の破損箇所に若干の相違があるが破損状況に共通性が見られた。また、これらの石器の刃部には刃縁に対して斜方向の線条痕が観察された。ところで、このような使用痕が生ずる成因には刃部による被加工物に対する斜方向の運動が考えられる。以上のことから、４・５は縦斧（ＡＸＥ）として使用された可能性がある。

１～５の基端には敲打痕が認められる。１～４には基部の上・下両面、左・右両側面の一部に斑点状の凹みが観察される。この斑点状の凹みは1つの面に１ケ所、多い所では２ケ所以上に集中して見られる。４のａ面には深い不整形な凹みが観察される。これらの敲打痕や斑点状の凹みの成因については不明な点が多い。

打製石斧（第138図）

形態が斧状のもので、基部と刃部とからなる打製石器を打製石斧とした。合計４点出土している。このうち、ほぼ完形なものは１点で、その他はいずれも大きく破損している。

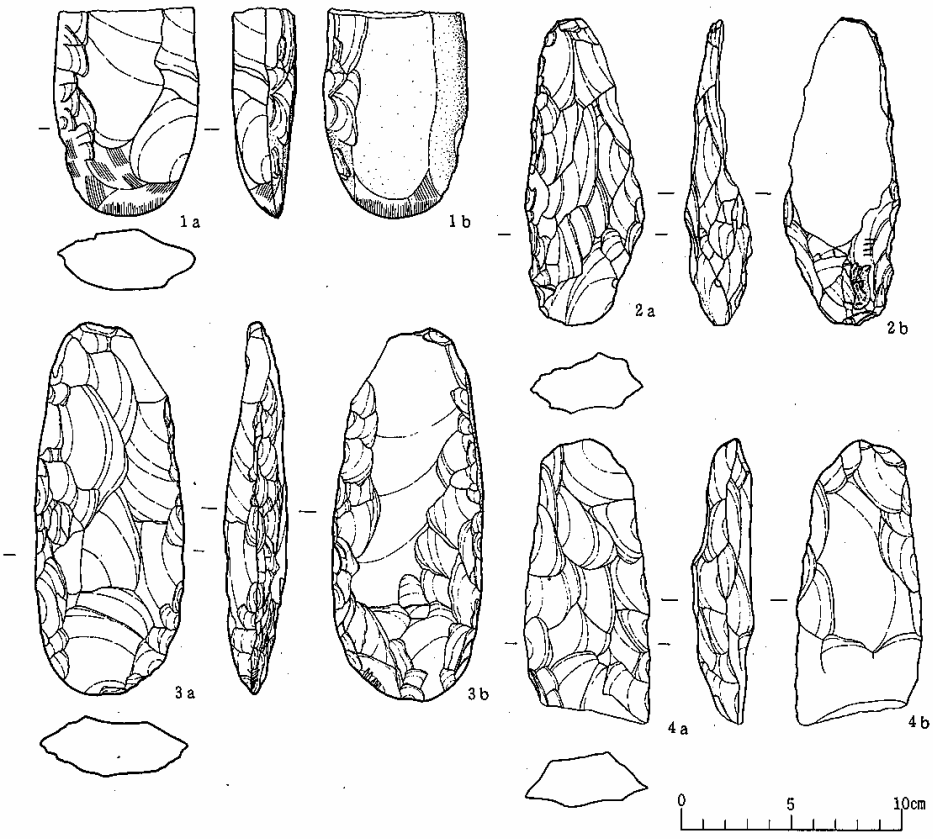
２～４は、素材に粗い調整剥離を施して成形しているものである。Ｓは側縁の一部が破損しているがほぼ完形なものである。２は基部、４は刃部を破損している。３は刃部が基部よりも僅かに幅が広くつくられているが全体としては短冊形に近い形態である。刃部は刃縁が丸くつくられている円刃である。側面形で見ると中心線が刃縁を通っており、刃部はほぼ左右対称である。２・４も残存部分から推定して同様の形態を示すものと考えられる。

大きさは３は最大長が17.1cm、最大幅が6.9cm、最大厚が2.9cmである。重量は450gである。２・４はこれよりもやや小形のものと思われる。１・３・４は素材が判明している。１・３は縦長の剥片、４は横長の剥片を素材として使用している。３は素材の周縁に粗い調整剥離が施されて短冊形に仕上げられている。刃部への調整は粗い。

１は、素材に粗い調整剥離を施して成形した後一部を研磨しているものである。ｂ面には自然面が残っている。研磨は刃部を中心に施されたものであり、基部に対する研磨は不十分なも

のである。そのために基部には前段階の調整剥離痕が残っている。破損品のため全体の形態や大きさについては全く不明である。刃部は刃縁が丸くつくられている円刃である。

側面形を見ると中心線が刃縁を通っておらず、刃部はいわゆる片刃の形態を示している。刃部には磨耗痕や線条痕が観察された。磨耗痕は刃部側縁に認められた。線条痕は刃部側縁に対して直行するものである。このような線条痕が生ずる成因には刃部による被加工物に対する直角な運動が考えられる。つまり、１は横斧（ＡＤＺＥ）として使用されたものと考えられる。



番号	地区・層位	長さ(mm)	基部幅(mm)	刃部幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	第39－Ｊ区　第６層	(91.0)	(61.0)	61.0	(27.0)	(320)	——	Ｓ.Ｍ. 373	51－15
2	第41－Ｊ区　第10層	139.0	(12.0)	(54.0)	(29.0)	(180)	——	Ｓ.Ｍ. 609	——
3	Ｘ　－　Ｘ	171.0	(30.0)	63.5	29.0	(450)	——	Ｓ.Ｍ.　44	51－16
4	Ｘ　－　Ｘ	(130.0)	41.0	——	(26.5)	(350)	——	Ｓ.Ｍ.　45	——

第138図　打製石斧

片刃礫器（第139図１）

礫の一部に一定方向から連続的な剥離によって刃部を作り出している石器を片刃礫器とした。完形品が１点出土している。平面形は基部側が狭く刃部側がやや幅が広い卵形をしている。断面形はやや偏平な蒲鉾形をしている。大きさは、最大長が8.35cm、最大幅が6.1cmで、最大厚は石器の中心よりやや基部側にあり、2.8cmを計る。重量は150ｇであり比較的軽い。刃部は卵形の礫の幅が広くなっている一端に急角度（刃角左－74°、右－80°）の加撃によって作られている。刃部の作りは簡単である。

刃部には、使用痕跡は認められなかった。また、基部にも使用痕跡は認められなかった。

磨石（第139図２～５、第142図１）

自然礫の一部に磨面がある石器を磨石とした。

磨石は５点出土しており、そのうち完形品が２点、破損品が３点である。完形品から平面形について観察してみると、楕円形のもの（３）と、棒状のもの（５）の２種類が認められた。
断面形は楕円形を基本としている。破損品の中には三角形のものが１点（４）含まれている。大きさは、平面形が楕円形のものは最大長が12.15cm、最大幅が8.4cm、最大厚が5.15cm、重量が750ｇであり、平面形が棒状のものは最大長が13.4cm、最大幅が5.4cm、最大厚が5.16cm、重量が548ｇである。

使用痕跡としては研磨痕や磨面がある。研磨痕や磨面にはほとんどの場合擦痕が観察される。研磨痕は全面に認められるものと、一部に限定して認められるものとがある。これらの使用の他に磨石の一端に敲打痕が観察されるものも（５）あり、敲石としての機能も有していたものと思われる。

凹石（第140図）

自然礫の一部に小さな凹みがある石器を凹石とした。合計３点出土しており、このうち完形品が２点、破損品が１点である。

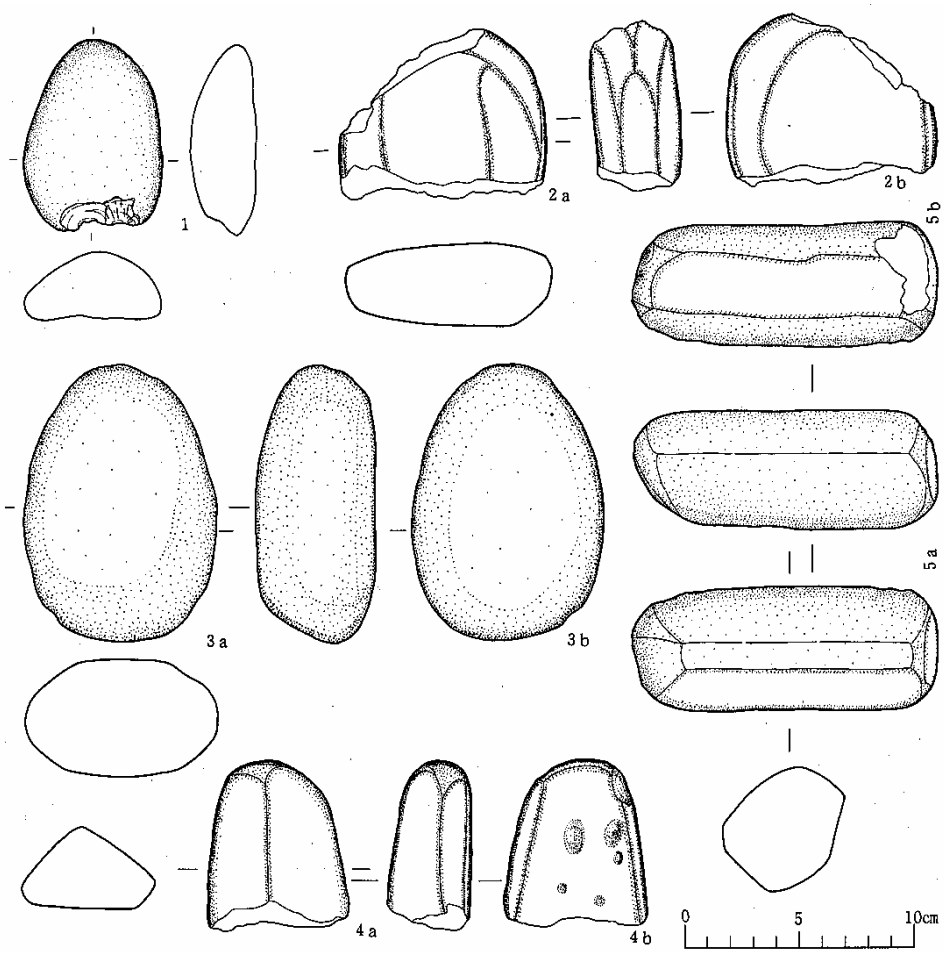
平面形には楕円形を基本とし、平面形の一部がほぼ直線的になるもの（２）と、不整のもの（３）とがある。横断面形について見ると、前者は楕円形であり、後者は長方形である。

大きさ及び重量についてみると、２は最大長が12.65cm、最大幅が7.69cm、最大厚が11.8cm、重量が590gである。３は最大長が11.6cm、最大幅が10.6cm、最大厚が2.7cm、重量が412gである。大きさや重量にさほど違いはみられない。

凹部は、２が上・下両面と両側面に、３は上面にのみ認められる。凹部の形態には、平面形

が「U」字状のもの、小孔の集合による楕円形や不定形なものとの二者がある。前者の断面形には「V」字状のもの、「U」字状のものが認められ、後者の断面形には「皿」状のものと不規則な凹み状のものとが認められる。

２には、磨面や研磨痕・擦痕が観察された。磨面は上・下両面及び右側辺に認められ、平坦な面となっている。研磨痕はほぼ全体に観察される。擦痕もほぼ全体に観察される。擦痕の方



片刃礫器観察表

番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	刃部幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	第43－K区　第５層	83.5	61.0	35.5	28.0	150	——	S.M.1904	52－1

磨石観察表

番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
2	第39－K区　第８層	(90.7)	(74.0)	(38.0)	(361)	——	S.M.1843	52－7
3	X　－　X	121.5	84.0	51.5	750	——	S.M.　49	52－3
4	第27－L区　第５層	(73.0)	(63.0)	(37.3)	(220)	——	S.M.1840	——
5	第40－J区　第７層	134.0	54.0	51.6	584	——	S.M.1844	——

第139図　片刃礫器・磨石

向は上面・下面及び右側辺では最大長のある方向とほぼ平行であり、周縁では不定方向となる。

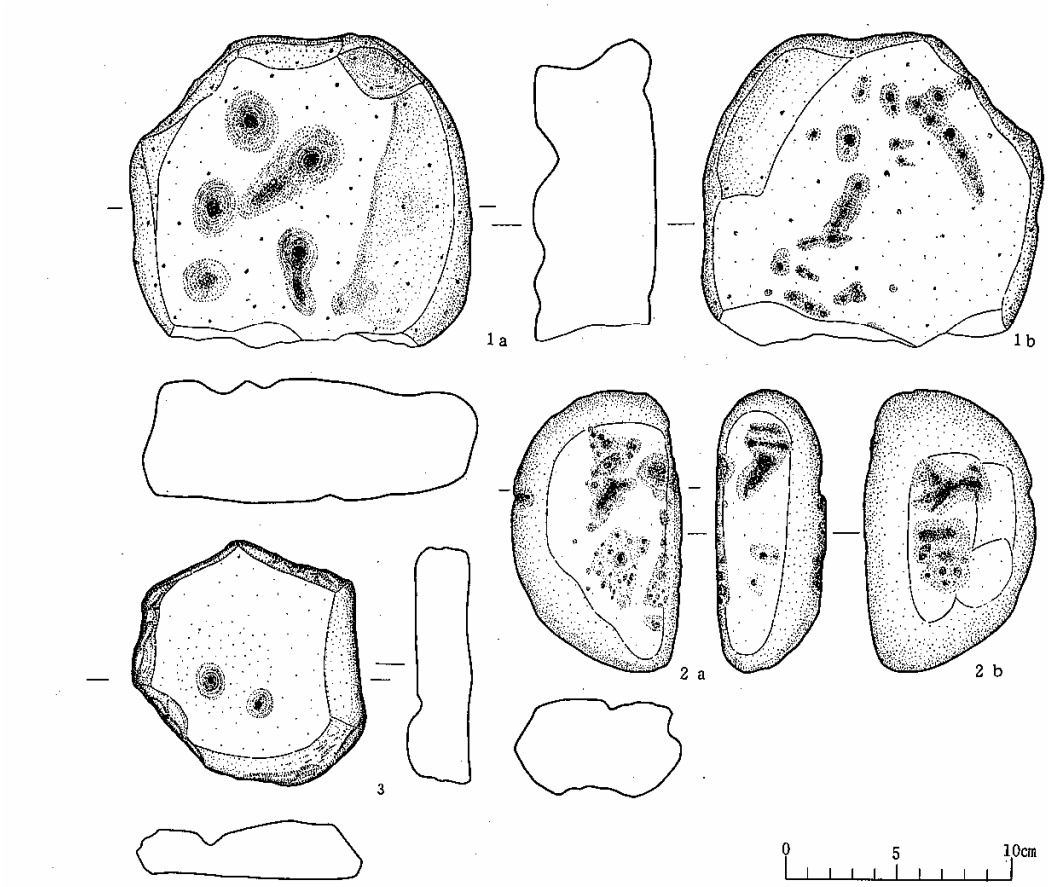
磨面や研磨痕・擦痕の存在は、凹石が磨石としても使用されたことを示している。

石皿（第142・143図）

自然礫の一部を皿状に整えた石器を石皿とした。合計5点出土している。

石皿は合計５点出土しているがいずれも破損品であるために全体の形態が判明するものは１点もない。

上面：平面形が判明するものは１点もないが石器の隅が残っているものは、いずれも隅が丸



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	第42－K区 第74層	(153.0)	(141.0)	(55.0)	(1160)	――	S.M.2301	52－2
2	X － X	126.5	76.9	48.0	590	――	S.M. 54	――
3	第27－L区 第５層	116.0	106.0	27.0	912	――	S.M.1838	52－4

第140図　凹　石

くなっている。石器の周縁には中心の皿状の部分（以下底面と呼ぶ）を取り囲むように高い縁が形づくられている。底面から線への移行状態を見ると、底面から縁へ急角度に移行しているもの（第142図２）と底面から縁へ比較的緩やかな角度で（傾斜）移行しているもの（第142図３～５・第143図）の２種類が認められる。

下面：下面に脚がつけられているものが４点ある。各々の石皿には１個の脚だけが残っている。２には破片のために脚の有無については不明である。有脚のもののうち脚の形態が判明するものが２点ある。いずれも楕円形を呈している。脚の数や脚の位置については不明なものが多い。

大きさについては全てが破損品であり不明である。しかし、残存部分から石皿の種類には大形のもの（第142図３・第143図）と小形のもの（第142図２・４・５）の２種類がありそうである。

４点の石皿からは製作時のものと考えられる敲打痕が観察された。

石器の底面を観察すると表面が滑らかになっており使用によるものと考えられる。石皿の中には底面が凹んでいるものも見られ、これらは使用頻度が高かったものと考えられる。なお、底面からは植物等の付着物は観察されなかった。第142図３の下面には脚部分を中心に多数の凹凸が観察された。この凹みは平面形が円形で断面形が「V」字状を呈しており、大小さまざまである。この凹みは脚の部分にも認められる事から石皿としての本来の機能（磨る）を失った後に凹石として再利用されたために生じたものと考えられる。

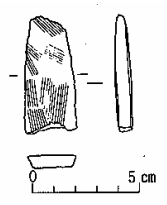
砥石（第141図）

砥石の一端は破損して失われているが、残存形態を見ると比較的整えられた小形で細長い形をしている。断面形は研磨面を正面に置いた場合「逆台形」となる。大きさは、現存する大きさで最大長が5.4cm、最大幅が2.4cm、最大厚が0.7cmである。重量は60ｇで軽い。石材粒子は均質なシルト状のものである。砥磨面は、手ざわりが比較的すべすべした感じがする。

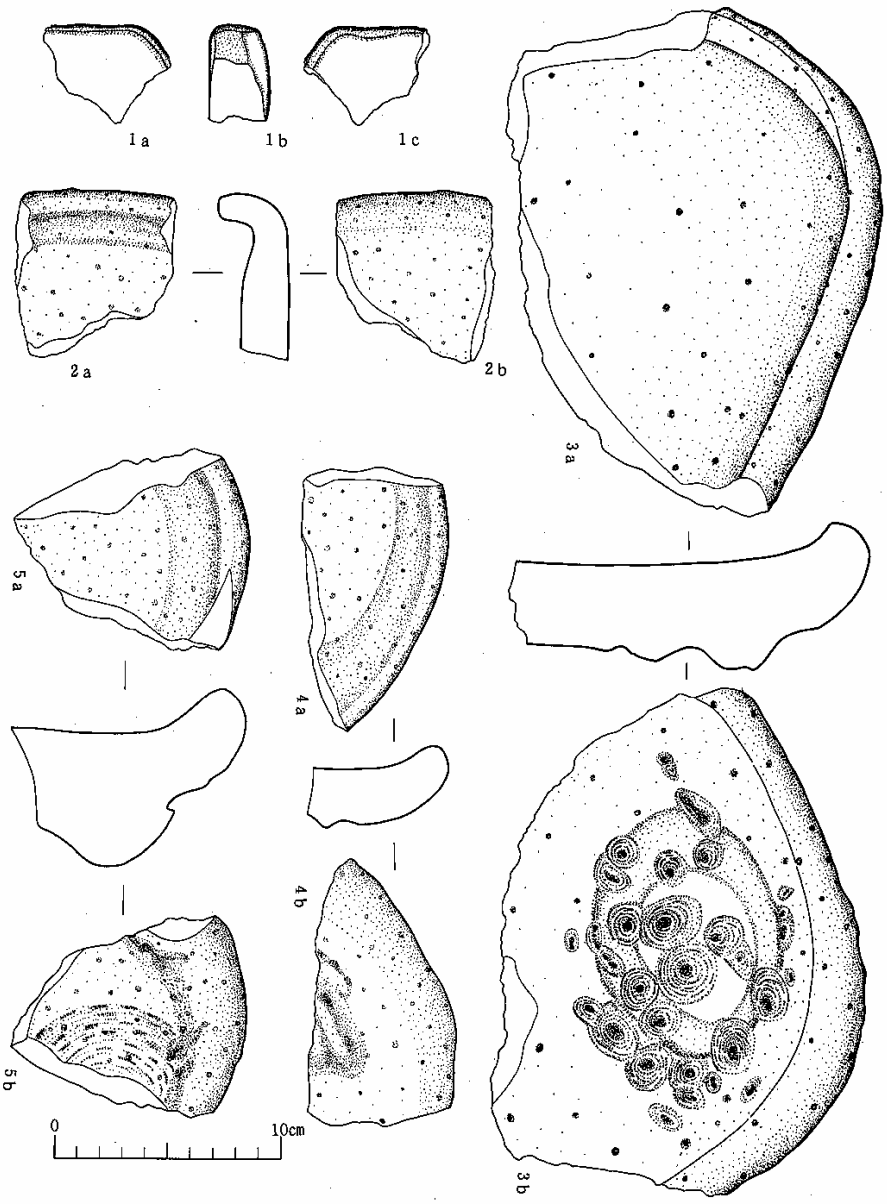
石器には使用面である研磨面（上面）とは別に製作痕跡と考えられる擦痕を伴なう平坦な面が下面及び両側面に見られる。表面には凹凸が見られ、使用面と考えられる上面とは明瞭に区別される。

石器群とその年代

本遺跡から出土した石器には、剥片石器・磨製石斧・打製石斧・片刃礫器・磨石・凹石・砥石等がある。剥片石器のうち、第Ⅰ群～第Ⅳ群石器としたものは従来石鏃・石錐・石匙・石篦（篦状石器）と呼ばれてきたものである。また、その他の石器としたもののうち、第130図は石槍、残りの剥片石器は不定形石器として一括されてきたものである。



第141図　砥　　石



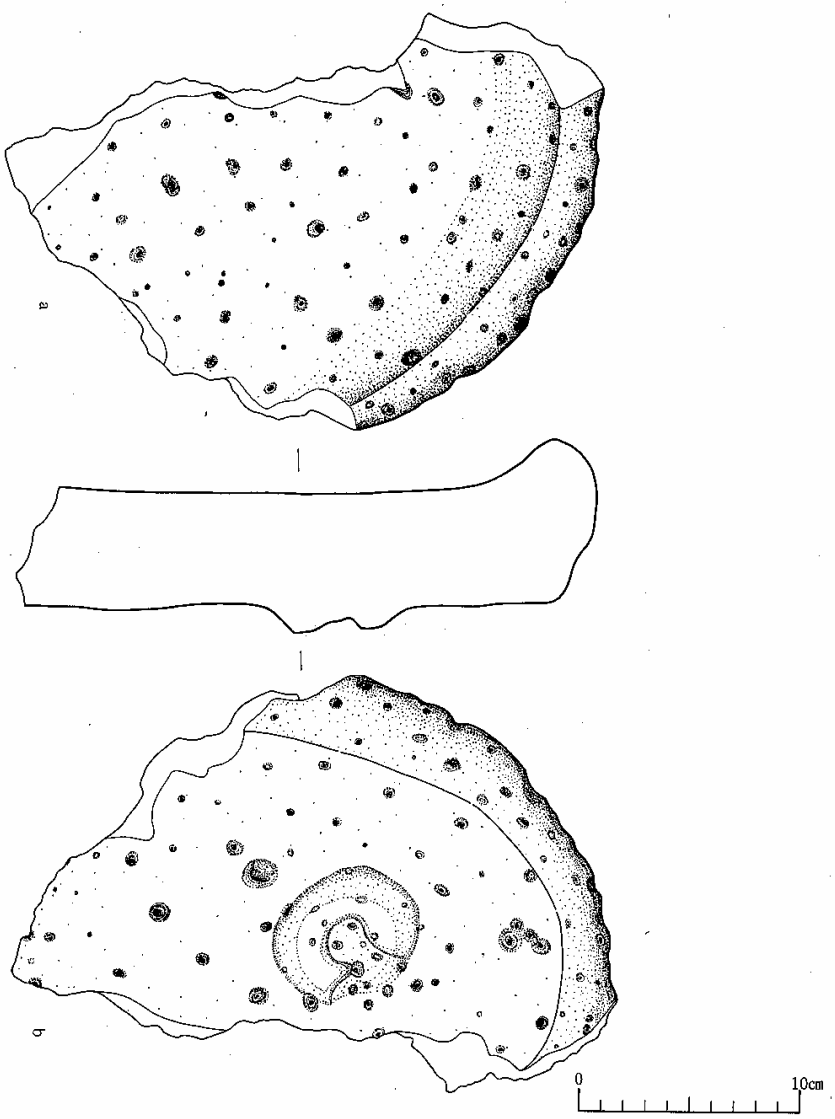
磨石観察表

番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	第27－K区　第5層	(55.5)	(44)	(27)	(780)	――	S.M.1916	――

石皿観察表

番号	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	高さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
2	第42－K区　第5層	(75.0)	(70.5)	(21.4)	(32.0)	(121)	――	S.M.1890	52－8
3	X　－　X	(226.5)	(166.0)	(46.57)	(66.0)	(2900)	――	S.M.2300	52－9a･b
4	第39－K区　第6層	(118.6)	(66.7)	(26.6)	(36.0)	(140)	――	S.M.1561	52－6
5	第41－K区　第9層	(105.0)	(90.0)	(59.5)	(79.5)	(400)	――	S.M.1868	52－5

第142図　磨石・石皿(1)


a
b
0
10cm

次に、これらの所属時期について考えてみたい。本遺跡出土土器の大半は、その所属時期が縄文前期初頭及び縄文時代中期中葉(大木7ａ～大木8b式期)のものである。縄文時代の遺物の中でその大部分を占めるものは大木8b式土器であり、それ以外の時期の土器の出土は僅かである。このことから、本遺跡出土の石器の大部分は大木8b式期に包括されるものと考えられる。

ところで、砥石についてはその形態的特徴から縄文時代のものとは考え難い。本遺跡において、平安時代の遺構や遺物も出土していることからむしろ平安時代のものである可能性が強い。

剥片石器第Ⅰ群（石鏃）：大木8b式期の石鏃には種々のタイプがあるが、その主体を占めているものはⅡＢ類(基部が平坦で、尖頭部中央または基部に近い部分が僅かにふくらんでいるもの)やＩｂＡ類（基部の中央が「U」状の浅い凹みとなっており、基部に近い部分が強くふくらんでいるもの）である。

剥片石器第Ⅱ群（石錐）：石錐には、基部と尖頭部の境が明瞭なもの（Ｉ類）と不明瞭なもの（Ⅱ類）とがある。前者は、尖頭部の長さによって、長いもの（ＩＡ類）と短いもの（ＩＢ類）とに細分された。そして、ＩＡ類はその使用痕跡が広範囲に及ぶことから深い孔の穿孔具、ＩＢ類はその使用痕跡が先端に限られることから浅い孔の穿孔具であろうと推定された。

剥片石器第Ⅲ群（石匙）：石匙は、その形態的特徴から、Ｉ類：縦長の形態のもの、Ⅱ類：横長の形態のもの、Ⅲ類：縦長と横長の中間形態のものとに大きく分けられた。使用痕跡のあり方からＩ類は側辺が主要な刃部であり、Ⅱ類は刃部先端が主要な刃部であることが明らかになった。さらに、Ｉ類の中で刃部先端が尖っているもの（ＩＡ類）は刃部先端に使用痕が認められるものも多く側辺同様に刃部先端も重要な機能を果したものと考えられた。Ⅲ類については、使用痕跡と類型との関係を明らかにすることはできなかった。

第Ⅲ群に認められた特徴的な技法によって製作された石器については、松原遺跡（秦昭繁：1977・11）において、「生産時期は早期～前期初頭に集中して認められる傾向にあるようだ。」としているが、本遺跡での検討により大木8b式期にも比較的高い出現率（第Ⅲ群全体の約20％）で存在していることが判明した。

この他の石器については、出土量が少なく十分に検討することができなかった。

その他の遺物

その他の遺物としては、基本層位第Ⅰ・Ⅱ層から青磁碗・中世陶器・鞴の羽口が出土している。

青磁碗（第144図１）

削り出し高台を有する青磁碗の破片が１点出土している。高台部は厚く、短い台がついてい

る。内外面に暗オリーブ色をした釉がかけられており、貫入が認められる。内面（見込み部）には草花文がみられる。胎土は灰白色をしており均質である。

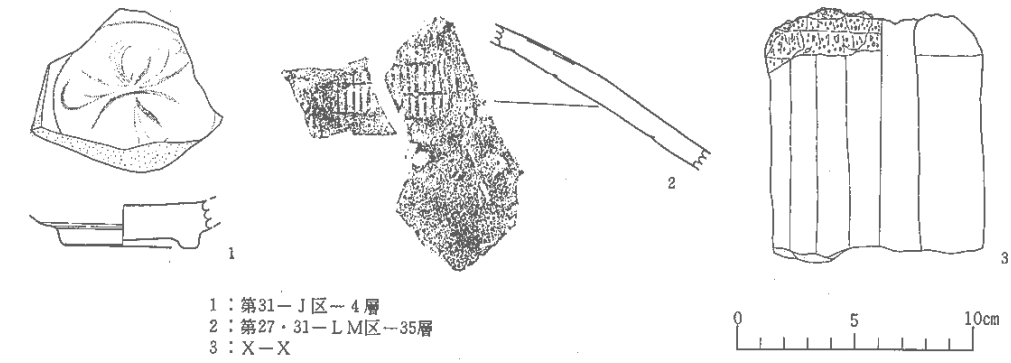
全体の器形が判明しないため、詳しい年代については不明であるが、中世のものと思われる。

中世陶器（第144図２）

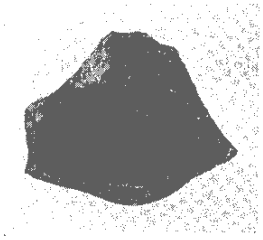
甕の胴部破片（同一個体３点）が出土している。外面は暗褐色で格手状の押印が認められる。器面調整は外面が粗雑なナデである。内面は積み上げ痕が認められる。内外面に自然釉がかかっている。

鞴の羽口（第144図３）

下部を欠損しているが径8.5cmの円筒形をしている。先端部は火熱のためやけただれている。器面調整は火熱を受けているため不明である。



1：第31－Ｊ区～４層
2：第27・31－ＬＭ区～35層
3：Ｘ－Ｘ



第144図　その他の遺物

Ⅴ．遺構の特徴と年代

今回の調査によって検出された遺構には縄文時代の竪穴住居跡２軒、遺物包含層、埋設土器遺構２基、平安時代の竪穴住居跡１軒がある。

縄文時代の竪穴住居跡

２軒の竪穴住居跡を検出した。いずれの住居跡も石組炉だけ確認された。第２号住居跡の石組炉には掘り方が認められ、その掘り方に沿って礫が配置されている。攪乱や削平がおよんでいるため原位置のまま残存している礫は４個だけである。礫の配置と掘り方の形状から平面形は90×60㎝の隅丸長方形と推定される。

第３号住居跡の石組炉は調査の際破壊してしまったが「コ」字状に礫が配置されている。礫の配置から石組炉の平面形は方形（南北軸90㎝）と推定される。

第２・３号住居跡の年代を直接決めうる資料はないが、周辺から出土している土器の大部分が縄文時代中期大木8b式土器であることから、これらの土器とほぼ同じ時期のものと推定される。

埋設土器遺構

埋設土器遺構は２基検出されたが、掘り方が確認されたものと確認されないもの（埋設土器と掘り方が接していたため確認できなかったものと推定される）とがある。土器は底部を欠くもの、底部が残存しているものがある。これらの土器内からは骨片・木炭・焼土等も発見されず、その性格を推定することができなかったが、南方町青島貝塚（加藤・後藤他：1975・３）のように埋設施設であった可能性がある。

埋設されていた土器は第Ⅱ群Ｂグループとグループの土器であり、両者とも大木8b式土器の第Ⅱ段階のものである。

平安時代の竪穴住居跡

１軒検出された。削平のため残っていたのは全体の半分程であるが、県内で発見されている平安時代の一般的な竪穴住居跡と同様なものである。

〈引用・参考文献〉

相原　康二（1981・３）：「大地渡遺跡」『岩手県文化財調査報告書』第56集　Ｐ．１～317

町子島　香（1981・３）：「マイクロフレイキングの実験研究－東北大学使用痕研究チームによる研究報告その１－」考古学雑誌第66巻　第４号　Ｐ．１～27

阿部　明彦（1978・５）：「村山市古道遺跡第２号住居出土の土器」『さあべい』第３巻第１号　Ｐ．９～15

阿部・遊佐（1978・３）：「長者原貝塚」『南方町文化財調査報告書』第１集　Ｐ．１～78　南方町教育委員会

阿部　　恵（1980・３）：「宇賀崎貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第67集　Ｐ.55～182　宮城県教育委員会

氏家　和典（1957・３）：「東北土師器の型式分類と編年」『歴史』第14輯　Ｐ．１～14　東北史学会

小野寺祥一郎（1980・３）：「金取遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第70集　Ｐ．１～61宮城県教育委員会

鹿島台町教育委員会（1977・３）：「大迫横穴群」『鹿島台町文化財報告書』第１集　Ｐ．１～76　鹿島台町教育委員会

加藤　　孝（1956・６）：「陸奥国大松澤貝殻塚の研究」その(一)『宮城学院女子大学研究論文集』９　　Ｐ.63～72

加藤　　孝（1956・12）：「陸奥国大松澤貝殻塚の研究」その(二)『宮城学院女子大学研究論文集』10　　Ｐ.139～156

加藤・後藤（1966・４）：「宮城県塩釜市桂島貝塚の調査」『日本考古学協会　第32回総会発表要旨』Ｐ．４～５

加藤・後藤（1975・３）：「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史史料編』Ｐ．１～274

加藤晋平・鶴丸俊明（1980・８）：『図録石器の基礎知識Ⅰ先土器（上）』柏書房　Ｐ.13～139

加藤晋平・鶴丸俊明（1980・11）：『図録石器の基礎知識Ⅱ先土器（下）』柏書房　Ｐ．７～154

加藤・阿部（1980・９）：「観音沢遺跡－東北新幹線関係調査報告書Ⅳ」「宮城県文化財調査報告書」第72集　Ｐ.131～349　宮城県教育委員会

梶原　洋・阿子島香（1981・６）：「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み（東北大学使用痕研究チームによる研究報告　その２）」考古学雑誌第67巻第１号Ｐ．１～36　日本考古学会

北上市教委（1968・３）：「北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査報告（昭和42年度）」『文化財報告』第３集　Ｐ．１～30　挿図１～６　図版一～二十

北上市教委（1969・３）：「北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査報告（昭和43年度）」『文化財報告』第７集　Ｐ．１～35　挿図１～８　図版一～二十八

小牛田町教委（1977・３）：「山前遺跡」

斉藤吉弘（1981・９）：「日光山遺跡－東北自動車道調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集　Ｐ.281～351　宮城県教育委員会

佐藤信行（1973・３）：「築館町嘉倉貝塚調査概報」『築館町史資料』Ｐ．１～41　築館町文化財保護委員会

仙台市教育委員会（1980・12）：「三神峯遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書　第25集　Ｐ．１～147　仙台市教育委員会

高橋富雄他（1975・11）：「大和町史」上巻　Ｐ.30～500　大和町

東北学院大学考古学研究部（1972・３）：「諏訪古墳・島矢崎古墳群発掘調査概報」『温故』第７号　Ｐ．４～22
東北学院大学考古学研究部（1975・３）：「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告」『温故』第12号　Ｐ．１～123
東北学院大学考古学研究部（1978・10）：「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故』第12号　Ｐ．１～123
東北大学文学部考古学研究会（1979・９）：「聖山」『東北大学文学部考古学研究会考古学資料集』別冊２　Ｐ．１～339
東京国立博物館（1979・５）：『日本出土の中国陶磁』Ｐ．１～205　東京美術
名和・野尻（1977・３）：「古道遺跡」『山形県文化財調査報告書』第９集　Ｐ．７～47　山形県教育委員会
丹羽　茂（1981・11）：「大木式土器」「縄文文化の研究」Ⅱ　雄山閣
泰　昭繁（1968・12）：「宮城県宮戸島貝塚梨木囲遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』　Ｐ.45～53
藤沼　邦彦（1975・３）：「宮城県の経塚について」『東北歴史資料館研究紀要』第１巻　Ｐ．５～33　東北歴史資料館
宮城県教育委員会（1973・３）：「八谷館－東北自動車道関係遺跡調査略報」『宮城県文化財調査報告書』第31集　Ｐ.22～24　宮城県教育委員会
宮城県教育委員会（1975・３）：「御所館－東北自動車道・一般関係遺跡発掘調査略報」『宮城県文化財調査報告書』第40集　Ｐ．５～12　宮城県教育委員会
宮城県教育委員会（1978・３）：「上深沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第52集　Ｐ．１～594　図版１～51
宮城県教育委員会（1981・２）：「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第73集　宮城県教育委員会
宮城県教育委員会（1981・２）：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第74集　宮城県教育委員会
馬目　順一（1968・５）：「台の上貝塚における土器意匠文の研究」『小名浜』Ｐ.25～52　福島県いわき市教育委員会磐城出張所
目黒・木本他（1972・３）：「塩沢上原Ａ遺跡」『福島県文化財調査報告書』第36集　Ｐ.33～73　福島県教育委員会
目黒吉明他（1975・３）：「塩沢上原Ａ遺跡」『福島県文化財調査報告書』第47集　Ｐ.79～116図版111～150　福島県教育委員会
馬目順一編（1975・３）：『大畑貝塚調査報告』Ｐ．１～549　図版１～81　　福島県いわき市教育委員会
八木・千田他（1981・３）：『大館遺跡群』Ｐ．１～89　盛岡市教育委員会

東北自動車道遺跡調査報告書刊行目録（昭和57年３月現在）

○東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ「宮城県文化財調査報告書」第52集　昭和53年３月刊行

上深沢遺跡（大衡村）

○東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ「宮城県文化財調査報告書」第63集　昭和55年３月刊行

御所内遺跡（白石市）　赤鬼上遺跡（蔵王町）　宮下遺跡（泉市）　藤屋敷遺跡（古川市）　西手取遺跡（高清水町）　手取遺跡（高清水町）　原田遺跡（築館町）　佐野遺跡（金成町）　以上８遺跡

○東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ「宮城県文化財調査報告書」第69集　昭和55年３月刊行

宮沢遺跡（古川市）　権現山遺跡（白石市）　塩沢北遺跡（蔵王町）　西原遺跡（村田町）　一本杉遺跡（古川市）　宮ノ脇遺跡（高清水町）　山ノ上遺跡（志波姫町）　木戸遺跡（築館町）　宇南遺跡（志波姫町）　有賀峰遺跡（若柳町）　以上10遺跡

○東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ「宮城県文化財調査報告書」第71集　昭和55年９月刊行

湯ノ倉館跡・青木遺跡・引桜遺跡・明神脇遺跡（以上白石市）　欠遺跡・持長地遺跡・大橋遺跡・大山遺跡・伊原沢下遺跡（以上蔵王町）　佐保山東遺跡（仙台市）　権現森遺跡（宮城町）　混内山遺跡・舟場遺跡（以上三本木町）　大蛸遺跡（大衡村）　以上14遺跡

○東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ「宮城県文化財調査報告書」第81集　昭和56年９月刊行

植田前遺跡・家老内遺跡（以上白石市）　宮城館跡・下原田遺跡・東山遺跡（以上蔵王町）　東足立遺跡（村田町）　日光山遺跡（大和町）　鶴の丸遺跡（志波姫町）以上８遺跡

○本書　東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ「宮城県文化財調査報告書」第83集

菅の沢遺跡・原前南遺跡（以上富谷町）　勝負沢遺跡（大和町）　御駒堂遺跡（志波姫町）以上４遺跡

※引続き、第Ⅶ～Ⅹを刊行予定。所収遺跡は次のとおりである。

菅生田遺跡・松田遺跡（以上白石市）　二屋敷遺跡（蔵王町）　八谷館跡・御所館跡（以上大和町）　駒場館跡（大衡村）　佐内屋敷遺跡（築館町）

総数52遺跡